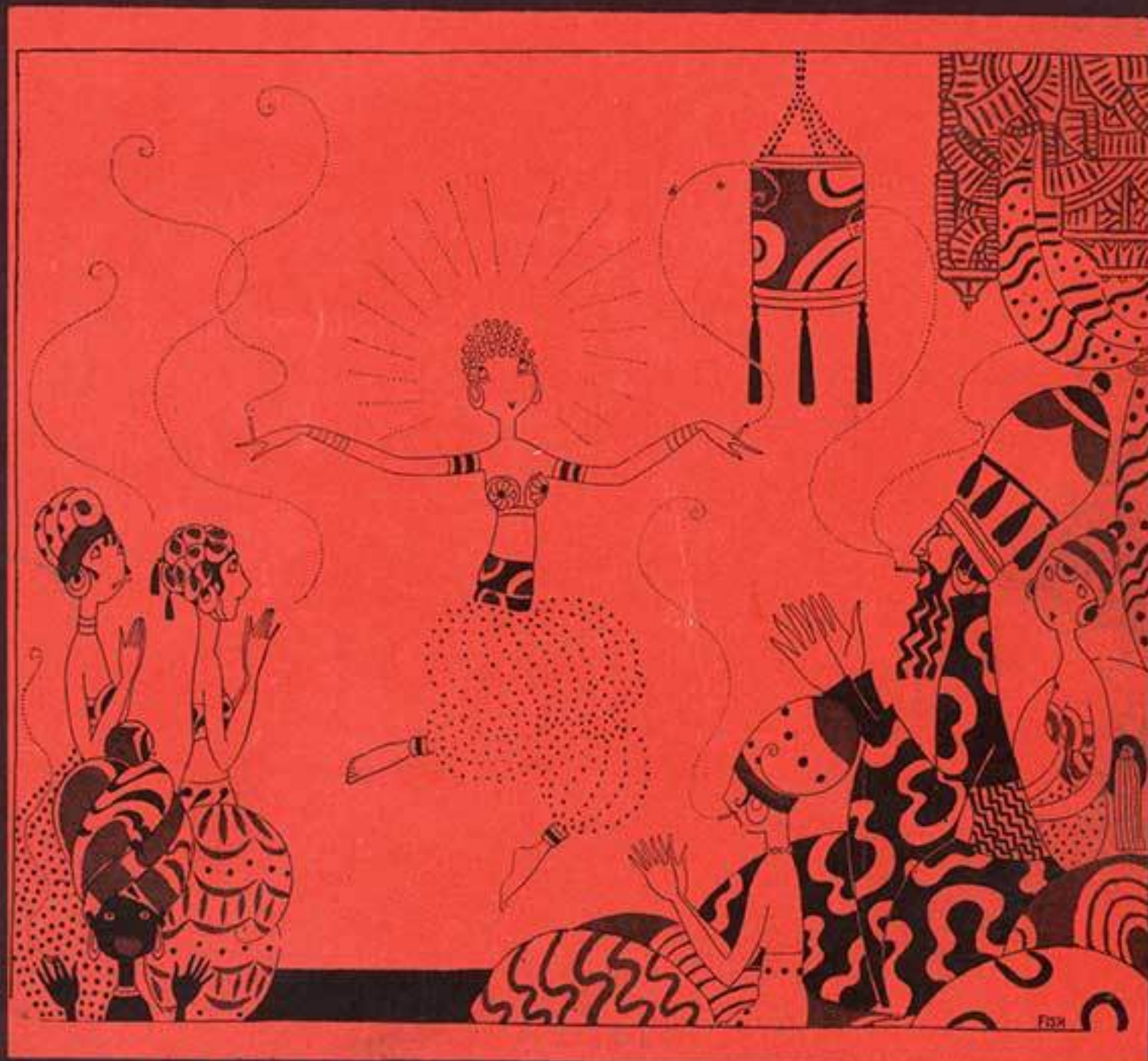


奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

10月号



1963・10

奇譚クラス

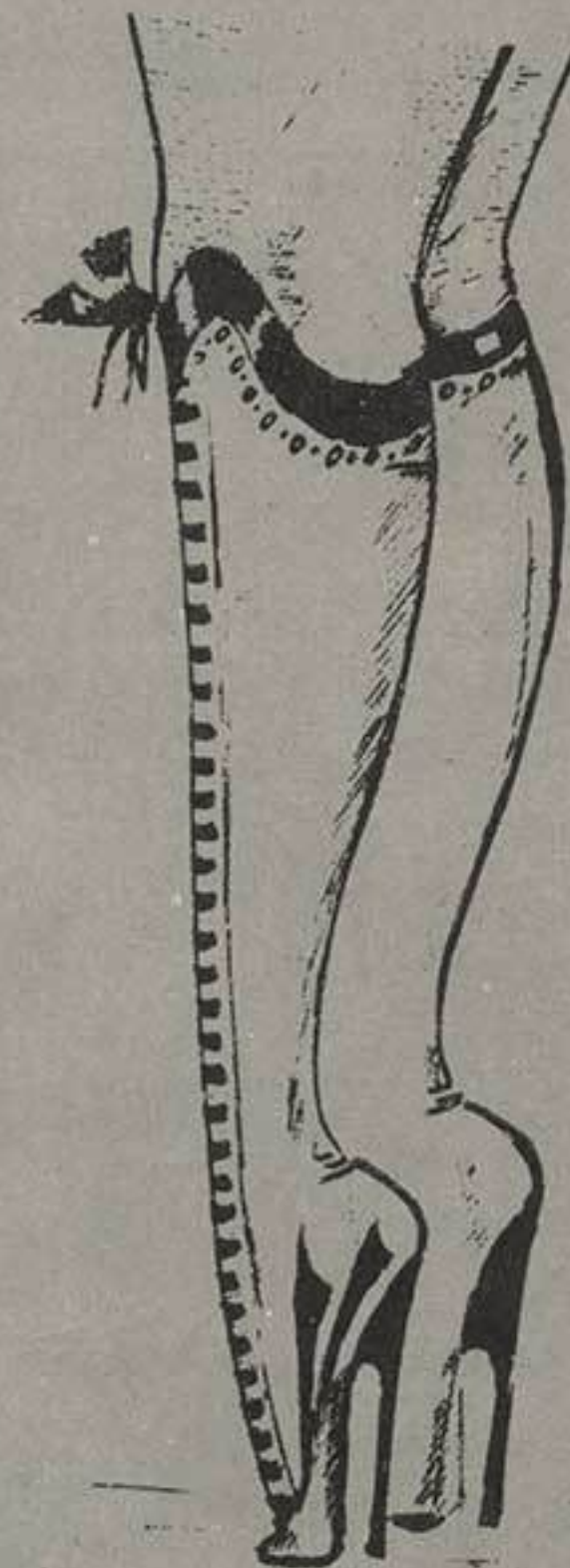
10月号

定価二四円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



四馬孝画
浣腸實録

女体浣腸図絵

原画原寸大複写

B4判
各一枚 二〇〇円

先般、四馬孝画伯を煩して「女体浣腸場面」(かき6)を發表しましたところ、幸いにマニヤの方々の共感を得まして相当数の申込みを頂きました。ここに更に趣向を変えて八枚の場面を腕を揮って頂き、華麗にして嗜虐味たっぷりの女体浣腸図をお届けすることが出来ました。原画の味をそのままに迫力を以て皆様のお手元へお届けするため、原画と大じ大きな複製に複製しました。八枚一組全部まとめてお求めの際は、特に送料共に一五〇〇円に割引させていただきます。

一、女学生

略号「かき1」

セーラー服の可憐な少女、嗜虐的な養護教師二人に便器を直すためだといって、太いガラス製浣腸器で無理矢理に浣腸される。上半身と足首とを縛られた少女は、今や治療という域を超えて、二人の男女の教師によって、激しい浣腸責めを加えられることになるのだ。

二、看護婦

略号「かき2」

美しい見習看護婦が若き医師の実験台となって、医院の一室

で浣腸を施される。部屋の柱に両手を縛られて抱えさせられ、右足は柱に、左足は挙げて壁に括られ、真白く可愛いヒッチを晒したまま、強烈な浣腸液をガラス製浣腸器によって、次々と注入されるのである。

三、ヒマシ油

略号「かき3」

数度にわたる浣腸によって、女が飲み込んだダイオキシンは出て来なかった。今は最後の手段だと押さえつけた口の中へ、ドロドロとしたヒマシ油を浣腸器の先へととりつけたゴムの管によって注ぎ込む。嘔吐を催しそうにな

る油剤は、彼女の意志に反して腹の中へ流れ込んでゆく。

四、空気ポンプ

略号「かき4」

清純な乙女が捕われの身となつて、ズベ公の手によって腸の中に空気ポンプから空気を強制注入されようとしている。自動車のタイヤに空気を入れるそのポンプは、強い力で乙女の腸内にシュッシュッと激しい勢で空気を送り込む。やがて腹部は張りきるばかりに膨満することだろ。

五、逆吊り浣腸

略号「かき5」

両手と両膝を開いて竹に括られ、両足首を吊るという逆吊りのポーズで釣り下った美しい女体。嘴管を受け入れる臀部が丁度目の高さで待っている。老人は、恐怖の浣腸器を手にして、負圧の腹部に対して強制的な注入を行おうとする。口を開けてこの酷い仕打ちに耐えようとする八等身の娘。

六、大の字浣腸

略号「かき6」

二本の棒の棒に、両手と両足を文字通り大の字に縛り上げられて高々と空間に吊り上げられ

た女体。今や彼女の腹の中のもの余すまじく便器の中へ排出させてしまおうと、太い浣腸器の中へ、たっぷりと薬液を吸い込ませて、サジスチックな楽しみを噛みしめながら、菊花の中へ注入してゆく。

七、強制洗腸

略号「かき7」

これから、お前のお腹の中をすっかりきれいに洗滌してやろうと、若い女は処置台の黒いレザーの上に坐らせられ、両足首は高々と天井から下った縄に釣られた。イルリガイトルから流れてくる薬液は、彼女の口から腹の中へ注ぎ込まれる。胃と腸に充滿した液体は、洗面器の中へ吐き出させられ、再び注入されるのである。

八、リスリン浣腸

略号「かき8」

三日間の排便を禁止させられた女の腹部は、ぶくくりと大きくふくらみ、革のベルトで胸から腰を縛られ、片足を宙に吊られて、恥しいリスリン浣腸を拒む術とでない。溜りに溜った彼女の便は、激しい勢いで体外に噴出するもの、今や時間の問題となった。ああ、その目まじしい光景よ。

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

| | |
|--------|-------|
| 一組一枚 | 一五〇円 |
| 五組五枚 | 五〇〇円 |
| 十組十枚 | 九〇〇円 |
| 二十組二十枚 | 一七〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 二五〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 三二〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 四〇〇〇円 |
| 六十組六十枚 | 四七〇〇円 |
| 七十組七十枚 | 五四〇〇円 |
| 八十組八十枚 | 六〇〇〇円 |
| 九十組九十枚 | 六五〇〇円 |
| 百組百枚 | 七〇〇〇円 |

| | |
|-----|--------------|
| E1 | 全裸の悦虐プレイ(愛川) |
| E2 | 仕置を受ける裸身(大塚) |
| E3 | 荒縄に苦悶する肌(愛川) |
| E4 | ムチに耐える美肌(関谷) |
| E5 | 豊胸と豊胸しぼり(愛川) |
| E6 | 捨身の後手観念像(大塚) |
| E7 | 足から眺めた裸身(水本) |
| E8 | 全裸エビ責尻強調(関谷) |
| E9 | ハリツケられた娘(大塚) |
| E10 | 強烈後手高小手(愛川) |
| E11 | 責め抜かれた疲勞(梨花) |
| E12 | 逆エビにもたえる(大塚) |

| | |
|-----|--------------|
| E13 | 拘禁された美囚女(大塚) |
| E14 | 浴室に覗く股間縛(愛川) |
| E15 | 海老責に泣く足首(大塚) |
| E16 | 乳房強烈締めつけ(愛川) |
| E17 | 牢獄で泣く縛り娘(大塚) |
| E18 | 美しき全裸股間縛(大塚) |
| E19 | 全身に溢れるマゾ(関谷) |
| E20 | ベッドにもたえる(関谷) |
| E21 | 身体中に強烈な縄(愛川) |
| E22 | 放置された海老責(東浦) |
| E23 | ゴム衣で縛られる(東浦) |
| E24 | ローソクで責める(大塚) |
| E25 | 寝台の排便ポーズ(絹川) |
| E26 | 足指先に漂う媚態(関谷) |
| E27 | 後手吊り正面裸像(関谷) |
| E28 | 嚴重な高小手縛(東浦) |
| E29 | 女体の全部を晒す(愛川) |
| E30 | 激しいムチ打の果(関谷) |
| E31 | 若肌も縄にくびれ(東浦) |
| E32 | 投げ出した脚線美(絹川) |
| E33 | 膣中心の腹部緊縛(梨花) |
| E34 | セーラー服の哀歎(梨花) |
| E35 | 赤いムチ痕の臀部(関谷) |
| E36 | 仰向けの囚女の女(梨花) |
| E37 | 制服の女学生縛り(梨花) |
| E38 | 悦虐にむせぶ若妻(関谷) |

| | |
|-----|---------------|
| E39 | 痛打にくねる裸身(関谷) |
| E40 | 乳房に加える金具(大塚) |
| E41 | 鼻責めにあぐら顔(大塚) |
| E42 | あぐら縛りを拒む(大塚) |
| E43 | 浣腸ポーズの裸身(梨花) |
| E44 | 羞恥なエビ責苦悶(大塚) |
| E45 | 敷布の上のひび(絹川) |
| E46 | 鼻いじめのアツプ(梨花) |
| E47 | 柔肌に喰ひ込む麻縄(東浦) |
| E48 | 縄にくびれる裸身(東浦) |
| E49 | 椅子に晒された女(大塚) |
| E50 | 膝そうじをされる(大塚) |
| E51 | 荒縄のトゲに狂う(絹川) |
| E52 | 火のついた煙草責(四方) |
| E53 | 踏みつけたれた胸(梨花) |
| E54 | 裸身をゆだねた娘(大塚) |
| E55 | 手足猪りりの美態(絹川) |
| E56 | 囚女の美しき緊縛(絹川) |
| E57 | 諦めた観念全裸像(水本) |
| E58 | 縄にもたえぬく姿(絹川) |
| E59 | 黒髪を吊られた女(大塚) |
| E60 | 女奴隷美しく悶(絹川) |
| E61 | 袋の中の緊縛裸身(竹本) |
| E62 | ビニール袋に蒸す(竹本) |
| E63 | 亀甲型の雁字揃目(大塚) |
| E64 | 緊縛裸像の舞踏会(絹川) |
| E65 | 野外的後手宙吊り(梨花) |
| E66 | 足首に鎖錠実施中(四方) |
| E67 | 室内の後手宙吊り(梨花) |
| E68 | 雨装束の悦虐姿態(梨花) |
| E69 | 乳房いじめ踏つけ(大塚) |

| | |
|------|--------------|
| E70 | 足の裏ハネ操り責(梨花) |
| E71 | 乳首プライヤ挟み(竹本) |
| E72 | 野外的逆さ吊り責(梨花) |
| E73 | 梯子責にあう美女(梨花) |
| E74 | 逆さ吊りに揺れる(梨花) |
| E75 | 娘十六縛り加減(花坂) |
| E76 | 踏みしめられた顔(大塚) |
| E77 | 逆エビに反る足先(大塚) |
| E78 | 両手吊りのお仕置(絹川) |
| E79 | 責折檻に呻く若妻(梨花) |
| E80 | 食卓上の縛り人形(大塚) |
| E81 | 食卓上の縛り人形(大塚) |
| E82 | むしられる下着(大塚) |
| E83 | 月経帯の羞恥縛り(梨花) |
| E84 | 寝台上的若妻狂態(関谷) |
| E85 | 強烈全裸エビ縛り(東浦) |
| E86 | 縦姿後手縛り吊り(東浦) |
| E87 | 後手縛豊満臀部晒(関谷) |
| E88 | 黒髪いじめ凌辱図(大塚) |
| E89 | 令嬢後手高小手(絹川) |
| E90 | 膣部乳房強調緊縛(東浦) |
| E91 | 責衣にくるまれて(東浦) |
| E92 | 全裸逆エビ責め(水本) |
| E93 | ローソク乳首責め(梨花) |
| E94 | 全裸後手縛り悶晒(関谷) |
| E95 | 強打全裸のあえぎ(関谷) |
| E96 | 肉体美の責衣ゼメ(東浦) |
| E97 | バンド二ツ折縛り(梨花) |
| E98 | 全裸正坐縛り狼狽(関谷) |
| E99 | 豆しぼりの狼狽(絹川) |
| E100 | 強烈縛り脛いじめ(東浦) |

今月の新版

代理部分譲品案内

△新人、遠藤百合子の巻▽

今回、特に遠藤百合子さんの御希望により次の通り、分譲品として発表しました。グラビヤにない迫真的で身近かな彼女の数々のポーズを手にとってごらん下さい。

全裸緊縛姿態開陳

略号 (ゆり)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

汚れを知らぬ美しい百合子の全裸の姿態が乳房もゆがむ、きびしい縄目に、くねくねとしなをつくって、曲りくねる。グラビヤに出せなかった百合子さんの良さを、マニヤの方だけに見て頂きたいと願うばかり。

鼻をいたぶる

略号 (ゆは)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

この写真は、いじめられる鼻を中心として余りにも刻明に、はっきりと顔が出てしまうので、口絵には出さないという百合子さんの願いで、特に分譲品としました。

白晒六尺褌

略号 (しは)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

真白い六尺褌を脛まるだしに、きりりと、いなせに締めた姿。可愛いお脛、くびれたウ

エスト、正面の六尺褌姿、恥らいに、身をくねらし、両手を挙げたポーズの数々。

白晒六尺褌

略号 (しろ)

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

双丘の間にぐっと喰い込んだ晒木綿、禪堂にとっては、まことに魅惑的な六尺褌のバックスタイルを、ぐいとはかりお尻を持ち上げて、たっぷりと見て頂けるフोट。

黒フンドシの女

略号 (くま)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

前袋も前を僅かに覆うばかりのぎりぎりにきゅっと締め上げた黒フンドシの魅力。女のフンドシは黒に限るといわれる方へのプレゼント。百合子の美しいポーズでどうぞ。

黒フンドシの女

略号 (くう)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

黒シユスのフンドシが尻の割目に捻じるように喰込んで、むっくりと二つの双丘が右に左に盛り上り、くねる。肌が白いだけに細い黒フンとの間にもかし出す奇妙なコントラストが、黒フンマニヤの目を奪う。

相撲褌締め込む

略号 (すい)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

雲斎の白の相撲フンドシを、正式に締め込

だん百合子さんが、そのポリウムのある裸身で、前面、背面、側面と、さまざまな姿態をごらんにいます。肉体が素晴らしいだけに、堂々と相撲フンドシを締めた姿は前袋もはりきって見事なものです。

浣腸をする女

略号 (ゆか)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

百合子さんに浣腸器を持たしたら、彼女はぱっと顔を真赤に染めて、「あら、こんな大きなので浣腸しますの」と、あとは声もなかった。若い女の人の口から、直接、浣腸とか猿ぐつわという言葉を聞くと、妙になまめかしい。結局、彼女は初めから終りまで、浣腸については恥しがり通しだった。

バンドを脱ぐ女

略号 (ゆお)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

月経帯の替ゴムの生ゴムのむちむちした感触を楽しみながら、ゴムもあらわにバンドを脱いでゆく百合子さん。その中で、ゴムのよく見えたのはばかり三葉を選びました。

月経帯のまま縛り

略号 (ゆす)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

後手の高小手に縛られて、今は両手の自由のきかない百合子さんは、黒の月経帯をはかされて、蒲団の上にくるがされる。起き上ろうとして身体を起せば、思わず両足が開いて、月経帯がすっかり見えてしまう。



第一 グラビヤ

| | |
|----------------|---------|
| SMプレイ・ガール | 辻村 隆 構成 |
| 羞らいの初登場 | 遠藤 百合子 |
| 禪の魅惑とバックスタイル | 遠藤 百合子 |
| 縄と豊かさの美意識 | 遠藤 百合子 |
| 愛読者夫婦のSMプレイ | 新宮明夫 提供 |
| 斬首 | 処刑を待つ |
| さらし首 | 女めしうど |
| ベテラン・モデルの傑出ポーズ | |
| 引き廻される乙女 | 梨花悠紀子 |
| 顔面に対する汚辱と弄戯 | 梨花悠紀子 |
| 脱がされた青い囚衣 | 梨花悠紀子 |
| 鼻を足にて踏みこむ | 網川 文代 |

巻頭口絵

| | |
|-------------------|----------|
| 〈浣腸〉高圧浣腸ポンプ | 四馬 孝子 画 |
| 溺死体の幻想 | 滝 れい子 画 |
| ボートの中のいけにえ | 滝 れい子 画 |
| 〈女体切腹〉ズベ公の仁義 | 雪 崎 京子 画 |
| 「女相撲」肉弾相打つ豊麗美女 | 滝 馬 孝子 画 |
| マソ画 美女と川人足 | |
| アイデア画 「革製オシメ・カバー」 | |

第二 グラビヤ

| | |
|-------------------|--------|
| 雁字搦目の陶酔境 | 網川 文代 |
| 縄目にあえぐ美貌のモデル | 大塚 啓子 |
| 「顔面なぶり、踏みつけ」 | |
| 「押し倒し、強烈亀甲しぼり」 | |
| 煙草責めの構想 | 梨花悠紀子 |
| 縛り過程の分解 | 愛川 悦子 |
| （後手しぼりについて） | |
| 〈逆さ吊りの第一歩〉 | 梨花悠紀子 |
| ムチ打ちの態勢とその後 | 関谷 富佐子 |
| 巻頭雑文 あなたまかせのよせがき帖 | 編集 同人 |



サジスチック・ストーリー・シリーズ

| | |
|-------------------|-------|
| 残酷ごっこ（続女家庭教師） | 大中 忠 |
| ある女の手記 まりも譚 | 楠 佐和子 |
| 変身記 | 万田 不仁 |
| 「告白」被虐愛さんげー | 小池 一郎 |
| 「告白」無花果の幻想 | |
| 特高の調室にて（下着泥棒） | 庄田美起夫 |
| 「手記」冥府の広場 | 大塚 啓子 |
| 「長浜良一さんのお求めに」 | |
| ゴムマニヤの空想 | 斎藤 七郎 |
| 或る理髪店にて | 花房 孝子 |
| △体験小説△華鼻受難 | 桐原 紫門 |
| 女体切腹の構想 | |
| 若妻のサド夢 | 沖田小五郎 |
| 湯上り偶談 | 梶 孫一 |
| 胸毛ある男優たち | 野本 大蔵 |
| 異色推理小説炎の殺し | 越原 秀美 |
| 風俗回想談劣氏の残酷責 | 栗瀬 長 |
| 告白手記に解説を | 辻村 隆 |
| S・Mプレイ・ガール | |
| （被虐モデル遠藤百合子さんの登場） | |
| 「絵と写真」アイデア提供 | 正岡ツトム |
| 長篇SM小説宇宙のどこかで | 佐治 麻造 |
| コルセットの歴史 | 成田 一郎 |
| 緊縛研究講座絹川さんとマソヒズム | 牧野 純一 |
| 私の特写フォトアクロバットと白足袋 | 阿部 能丸 |
| 或る新婚旅行の思い出 | 幌泉 里子 |
| アブ随筆 思い出の記 | 南方 佳男 |
| 病院惨酷物語 | 辻村 隆 |
| 「臨月腹」妊婦フォト | |
| 女体浣腸羞恥場面図絵決定版 | |

鼻の穴責め

三枚一組
三〇〇円
モデル大塚啓子

にいたよ
込たふ
みぶ
鼻む
のく
穴くり
に上
対し
マて
ニヤ
の
アイ
デ
ア

っ
か
り
の
開
いた
二
つ
の
穴
、
器
具
を
挿
し

ぐ
い
と
上
向
いた
顔
の
中
央
に
、
の
ほ

鼻なぶり

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

せて、鼻の穴をいたぶると、鼻は
 あぐらをかいて、奇妙な形に変形
 してくる。顔の中心を占める貴重
 な鼻であるだけに、この大切なも
 のをなぶられるのには、M的な刺
 戟を感じるのだろうか。

鼻責の陶醉

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

さあ、私の鼻はどうでもして頂戴と観念のホゾを固めた若い女性
の鼻に対して、恍惚境の表情を求
めて鼻を弄ぶ触手、鼻を男の手に
ゆだねて、うっとり、の被虐の味を
かみしめる女の顔。

全裸股間縛

四枚一組 四〇〇円
モデル 関谷富佐子

豊かな白い肌、典型的なマゾヒ
スティンである。自称するだけあつ
て、責められる時の表情はマニヤ
の琴線をゆるめるものがある。こ
れは関谷夫人の緊縛フオトとして
は、とっておきの傑作で、皆さま
の尽きせぬSの泉をこんこんと溢
れさせる魅力を持つております。
縄とムチに喘ぐ夫人の姿態にSム
ドの感激を新たにしてお下さい。

強烈エビ責

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

最近一層の柔軟さを増して、グラ
マ―ぶりを發揮する彼女を、二つ
折りに折り曲げて、強烈なエビ縛
りにして放置すれば、膝小僧を顎
につけて悶えながら、この苦痛か
ら逃れようと全身をうねらす、そ
の動きをキャッチして皆さまの
ムードにマッチしようとする狙
いがある。

浣腸器と女

三枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

手ベ
にき
汚れた
とび
豆し
くの
いほ
縛り
。り
下の上
げ手
ら拭
れた
たが
びの
パっ
ンた
に

裸身の晒し

三枚一組 三〇〇円
モデル 関谷富佐子

裸の姿をさらして後手に吊られ、全
た魅力的な臀部を、ぷりぷりと固
肥りに引き締ったヒップを皮のム
チで思いきり引っぱたくと、肌を
真赤に染めて、全身をくねくねと
くねらせて身悶えぬく整のとれ
た美しさが、ぐっとしびれる。

白
フ
ン
ド
シ

四枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

きりりと尻の割れ目に喰い込んだ晒、二つの丘がぐっと盛り上った見事さは、禪マニヤの胸を高鳴らせることでしよう。女性禪マニヤの方々からの要望を十分にとり入れて作成した新しいセンスの禪フォトですから、必ずや今までは違った迫力があることと信じます。

黒
フ
ン
ド
シ

四枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

清潔な白の晒褌に対して、前袋

苦悶の裸身

四枚一組 四〇〇円
モデル 関谷富佐子

色気の漂う肉づきのよい若妻が両手を鴨居に釣られて逃げることに出来ない裸身をさらしている。張り切った肌に炸烈する激しいムチに全身を縄をねじるように悶えさす関谷夫人、苦痛に耐えかねたその甘い表情は、悦虐にむせび泣く感極ったエクスタシーか。

イルリガートル

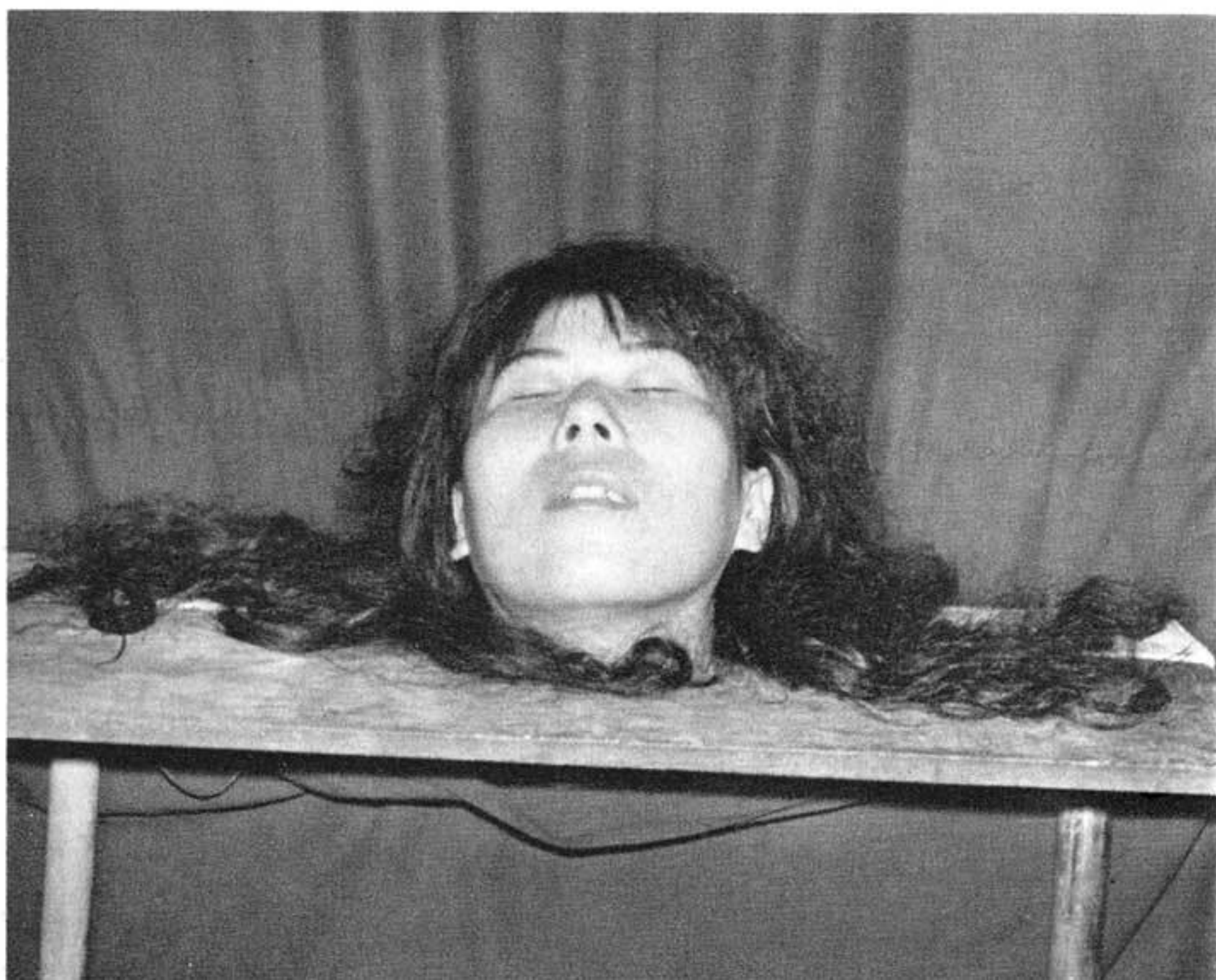
一枚組 一〇〇〇円
モデル 梨花悠紀子

一〇〇〇C入りのイルリガール、挿入便器、オシメ、オシメカバー等にとりかこまれて、自らの手でイルリガールの嘴管から多量の薬液を注入し、激しい便意にもだえ苦しみながらオシメを当てる。オシメを着用するに至る連続場面をキャッチしました。

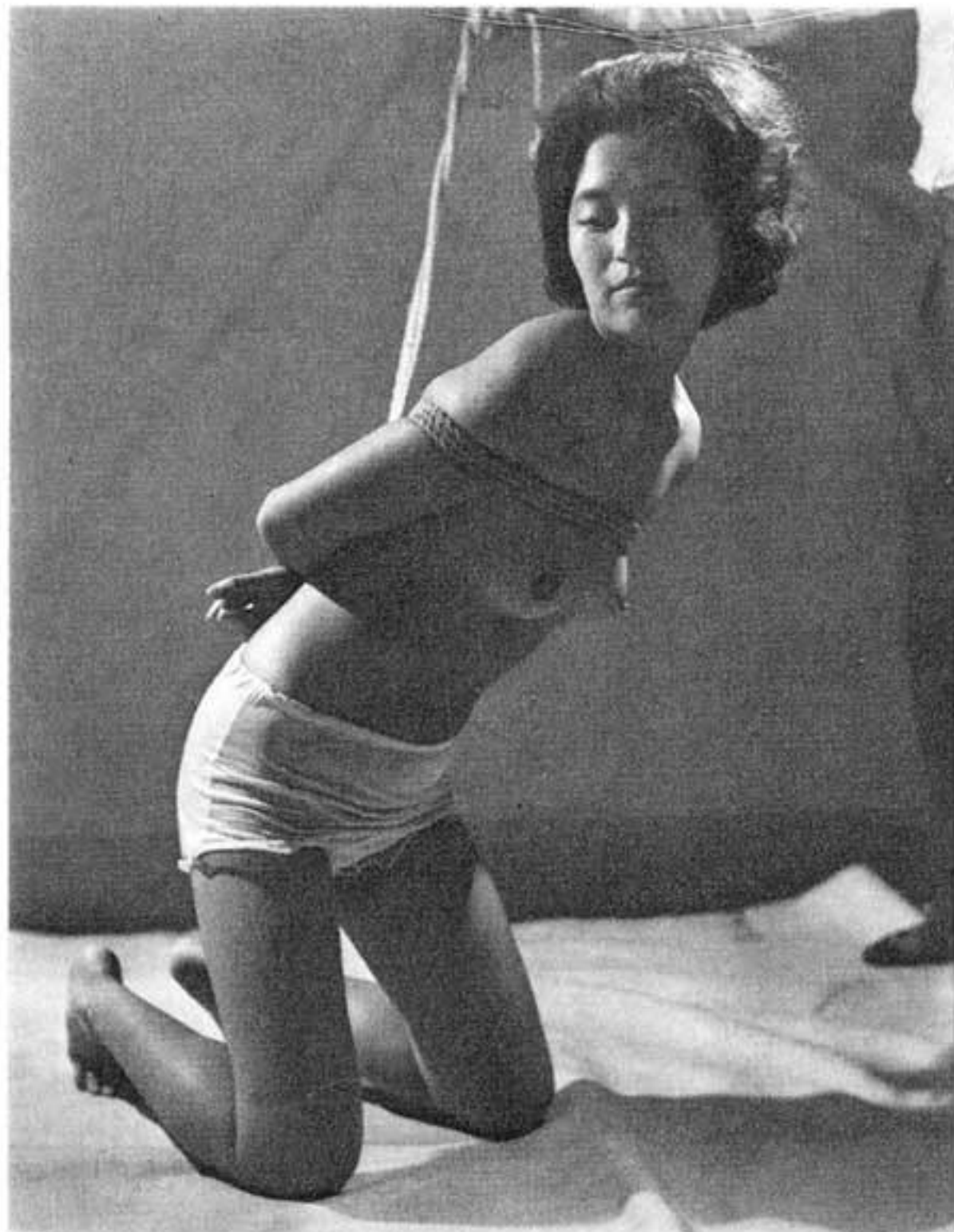






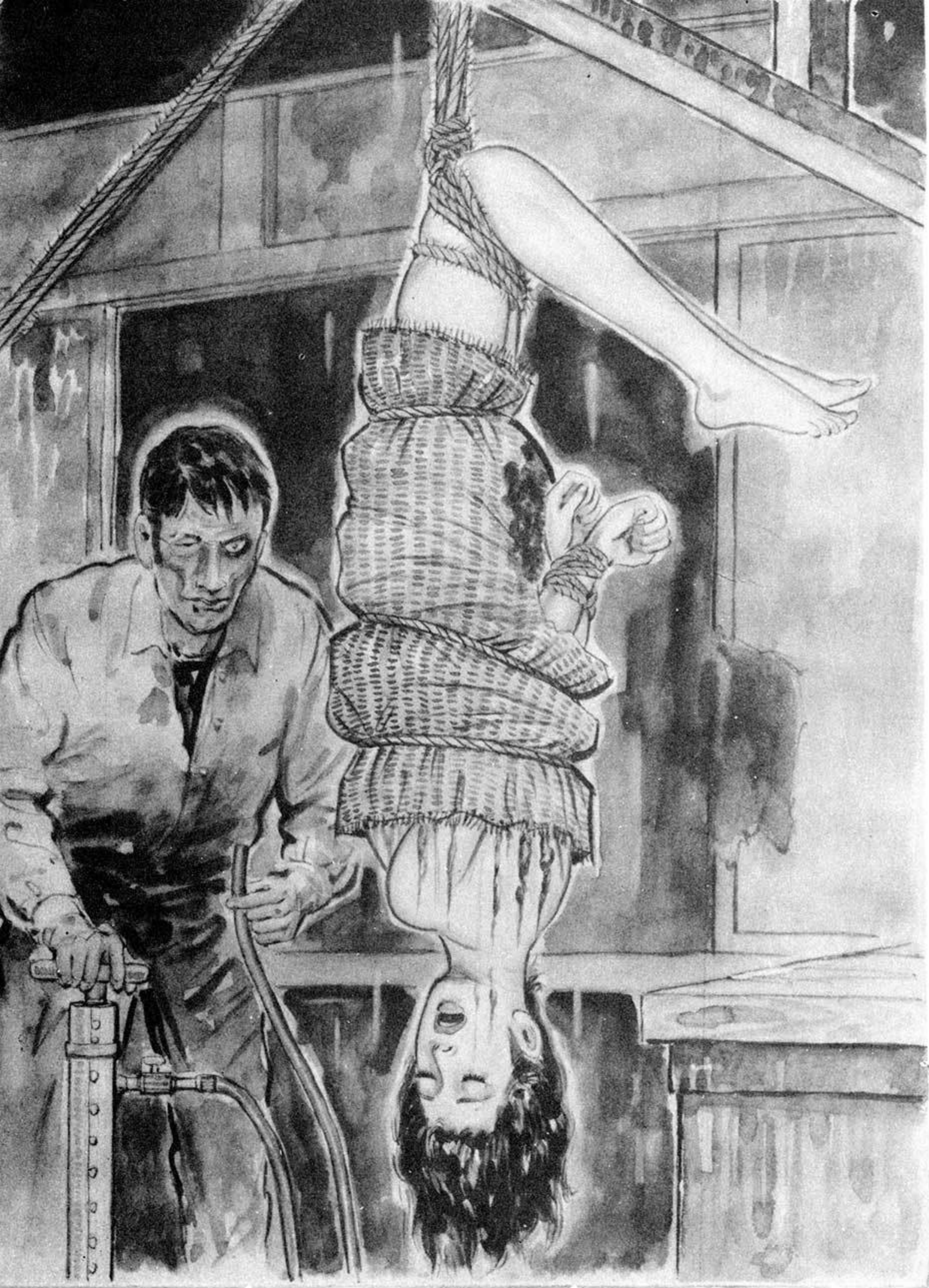












高圧浣腸ポンプ



溺死体の幻想

瀧 れ い 子 ・ 画

ボートの中のいけにえ

瀧れい子・画



女体切腹

「ズベ公の仁義」

瀧 れ い 子 ・ 画



ズベ公の

仁義はこれと

下腹染むる

白妙の

血の花牡丹

S.E.



肉弾相打つ豊麗美女

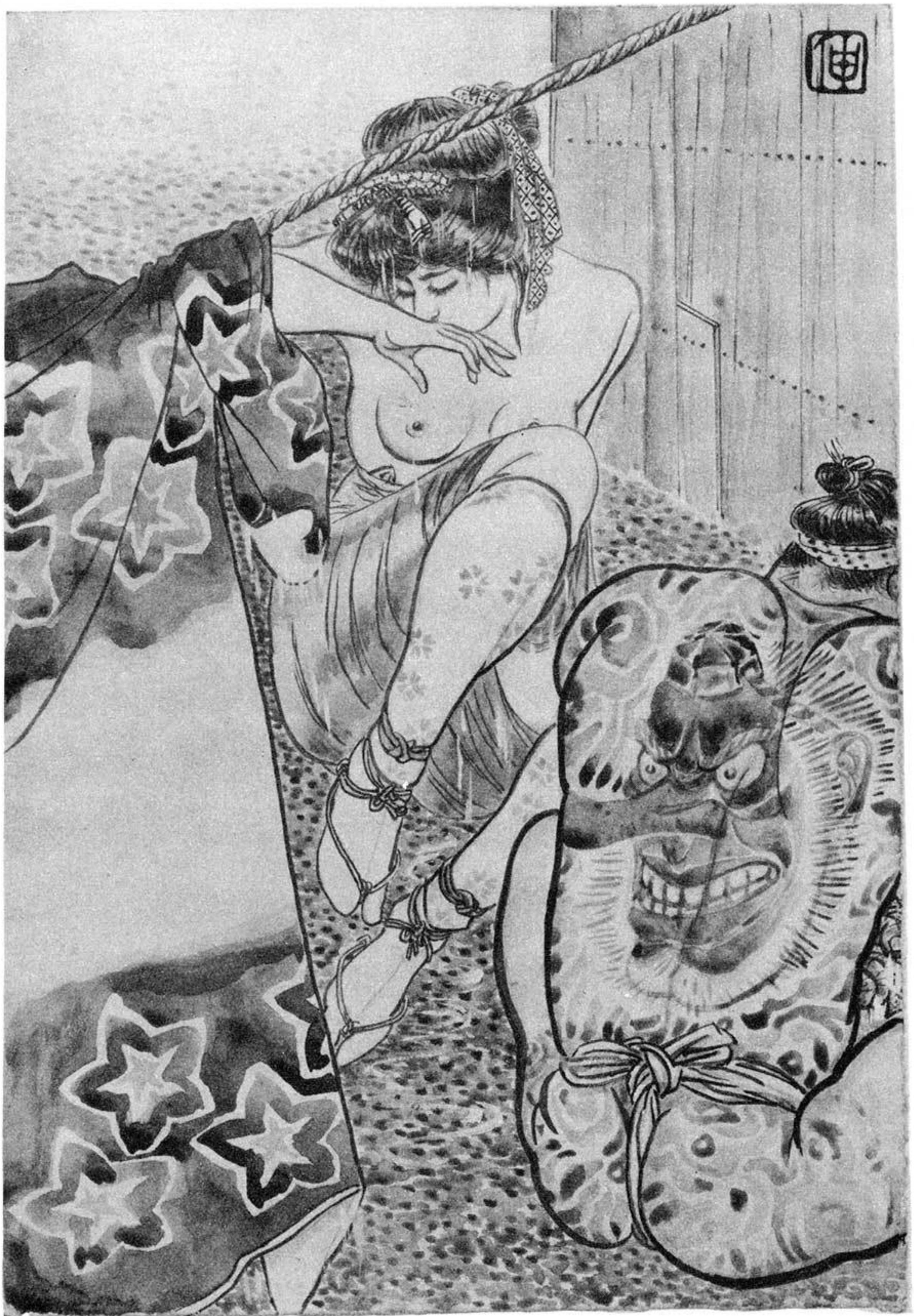
提供・雪崎京人

女体浣腸

「浣腸された若妻」

四馬孝・画

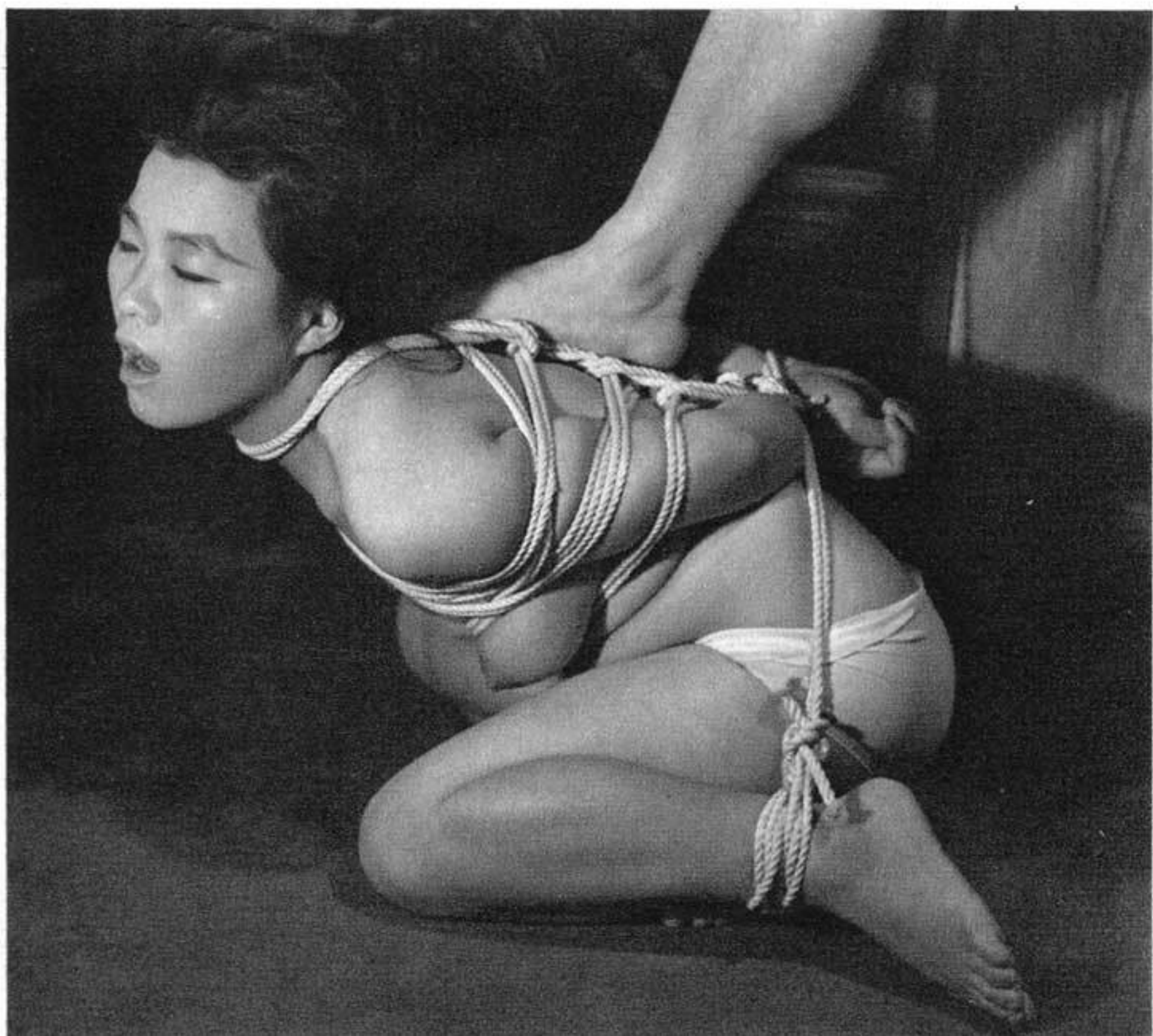


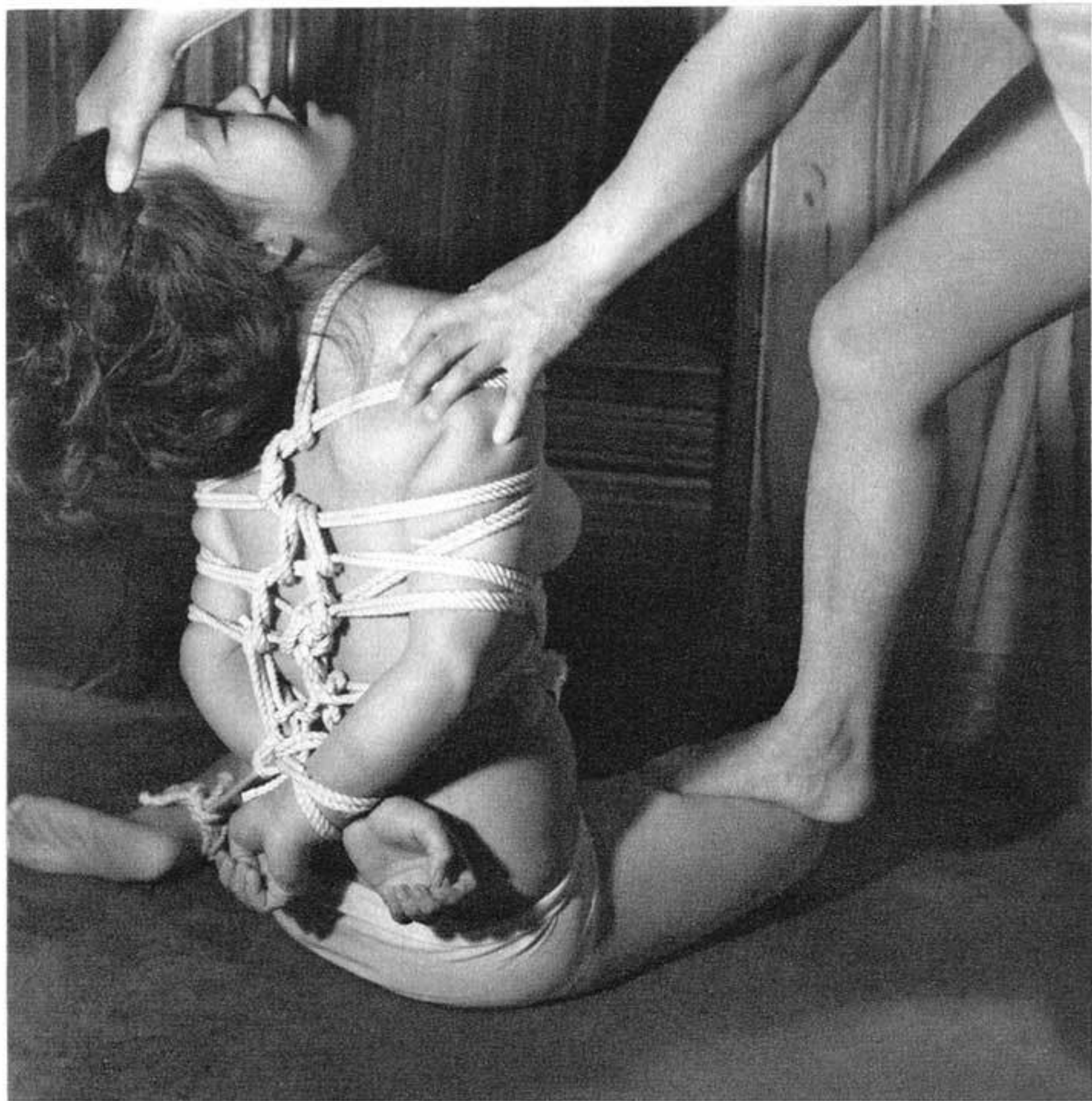


美女と川人足（マゾ画）

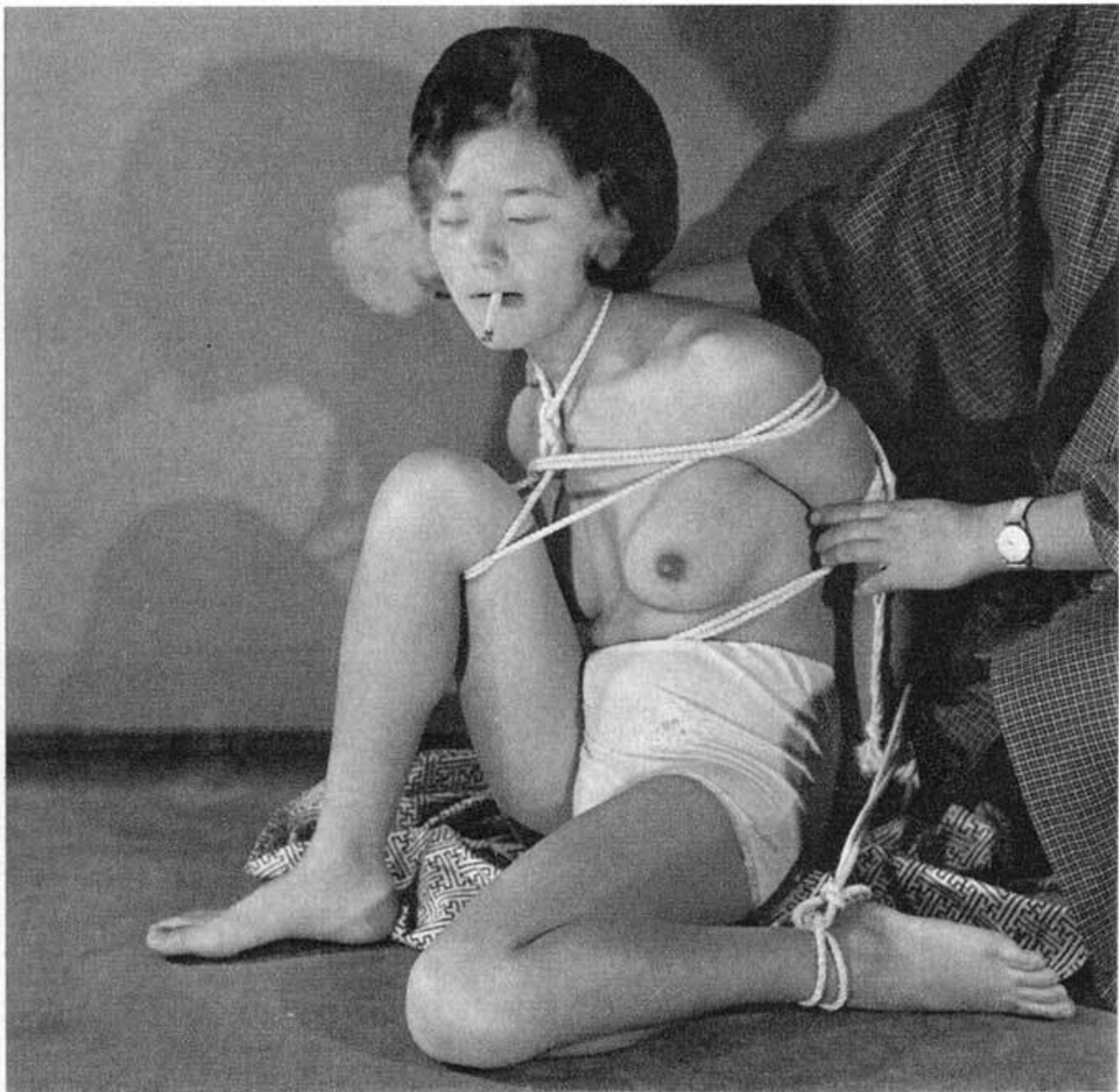


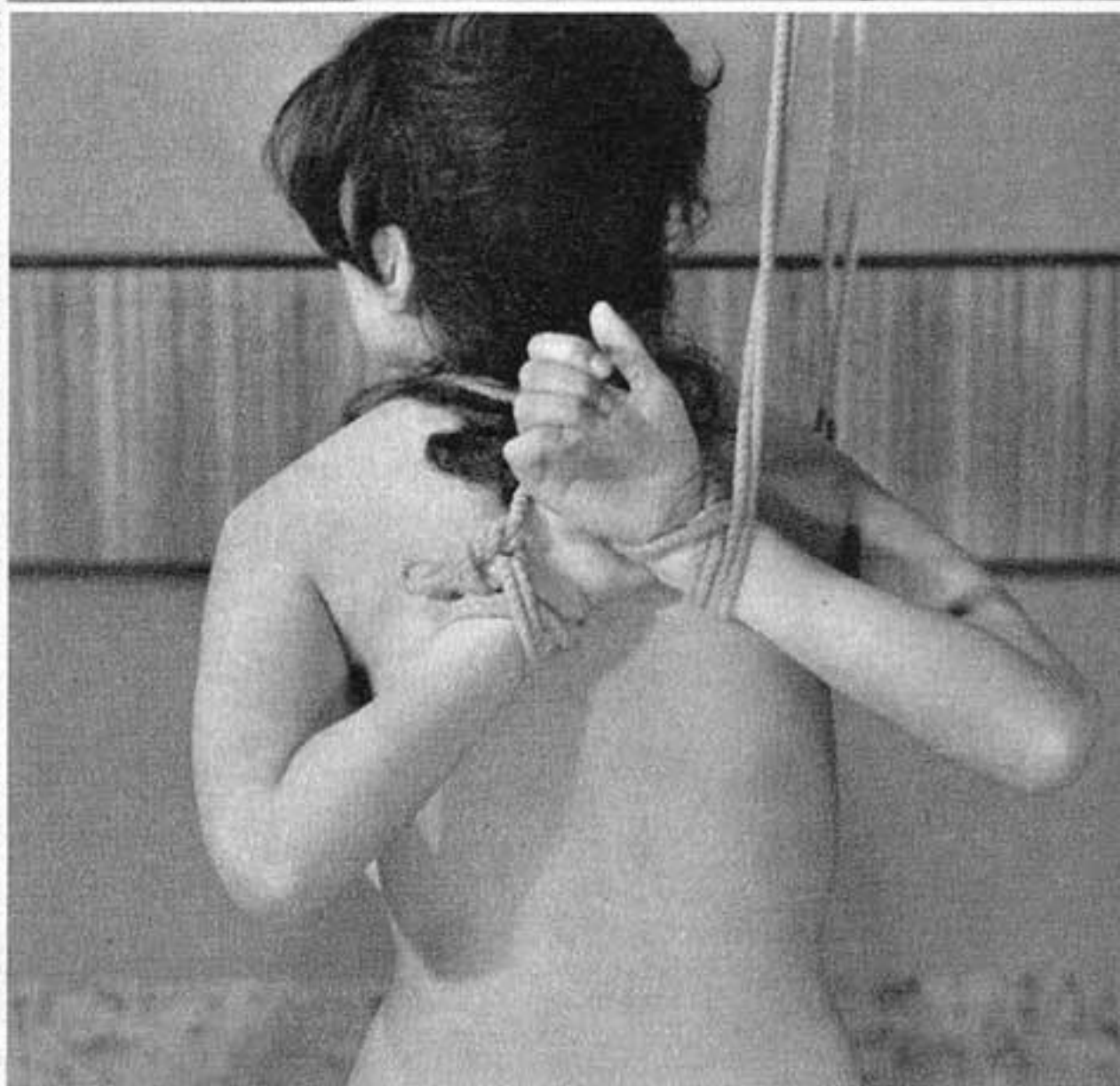
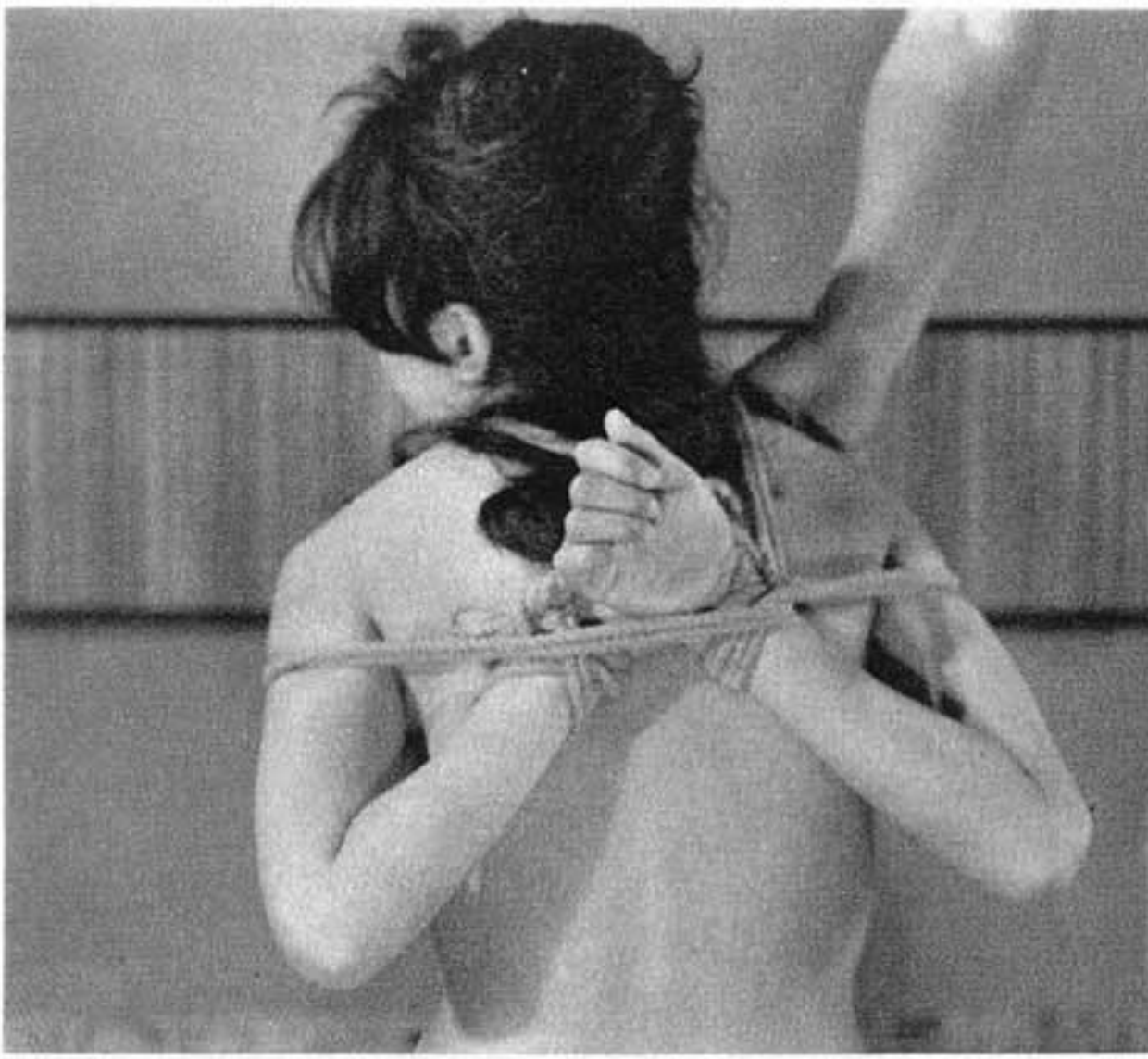


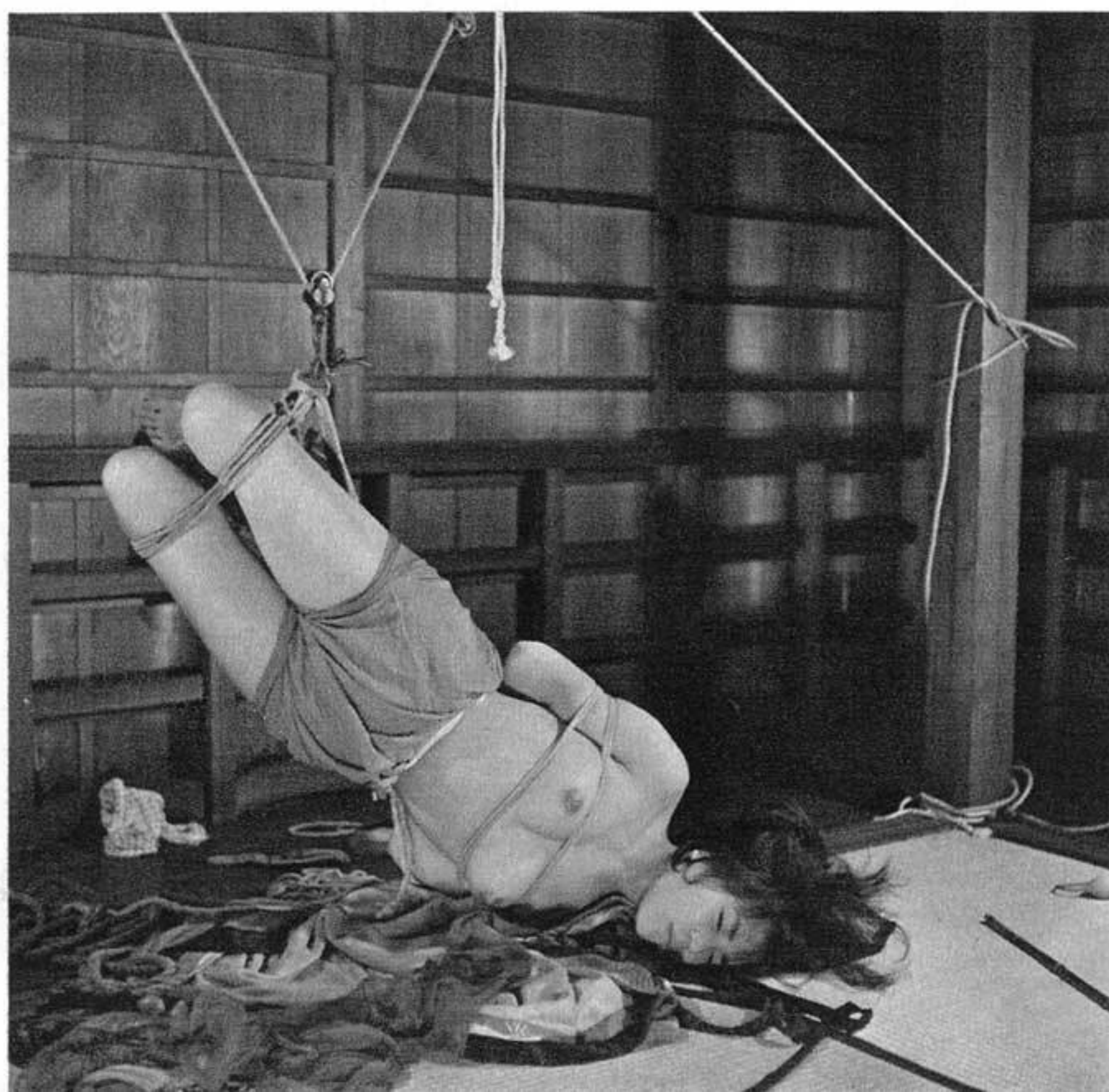
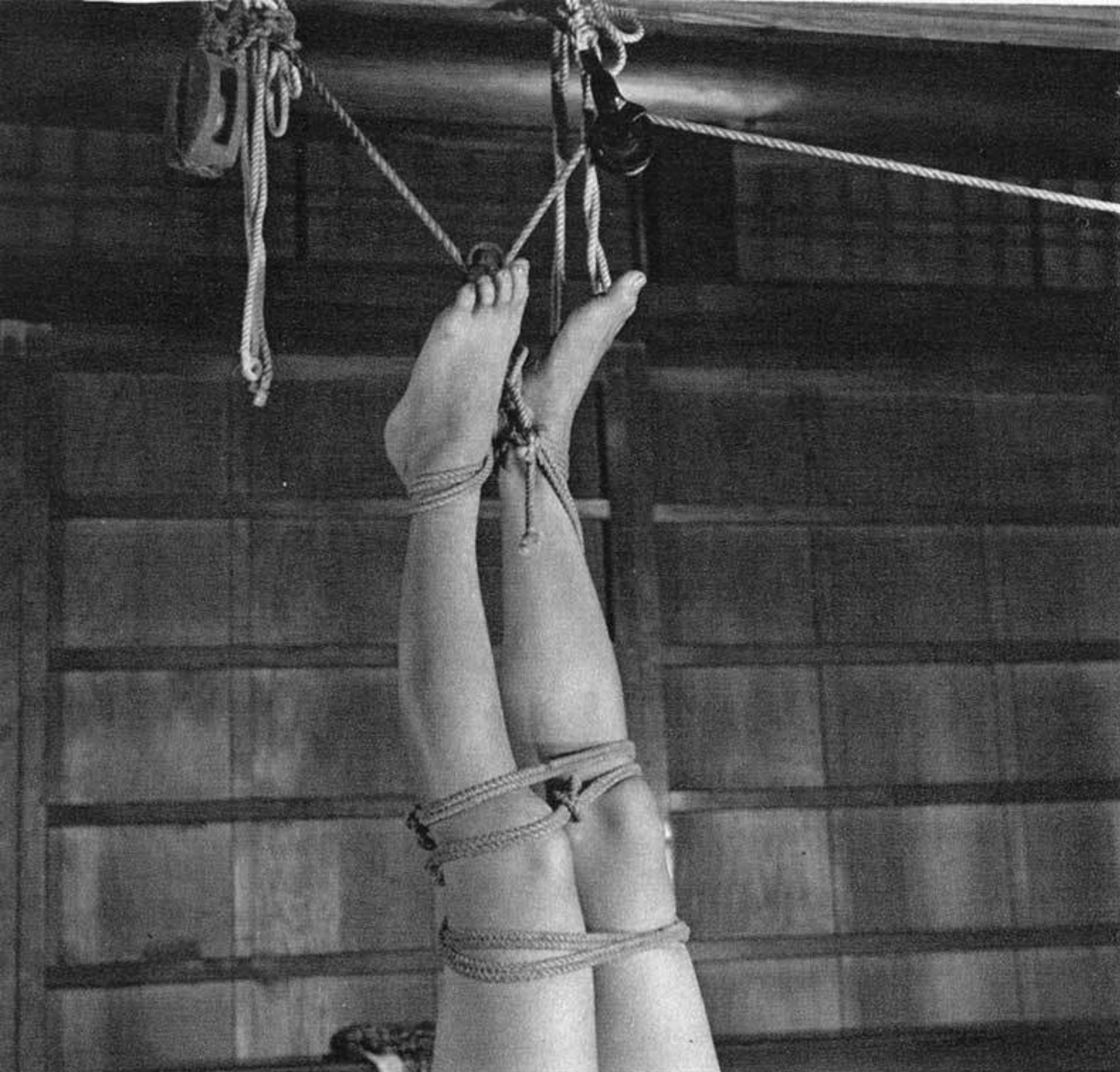














新しい風俗文献研究誌

奇譚クラブ

1963年 10月号

(第17巻 第10号 通刊 第181号)



＜貴婦人のお支度＞



〔巻頭雑文〕

あなたまかせの

よせがき帖

編集同人

M女性とS女性

読者からの便りの中に、よくこういうことが書かれていることがある。「この世の中に、果してM女性というものが、いるのだろうか。」という一語である。これは同様に、「この世の中に、果してS女性というものが、いるだろうか?」という咏嘆にも通ずる。

又、こういう嘆きとは反対に、

見る人、逢う人、みなM女性と見えたりS女性に見えたり、強いて自分の抱く、そういった固定観念で律しようとする人がある。

これは、いずれも両極端であつて、徒らな悲観も行き過ぎであれば、野放図な楽観も、ひとりよがりになってしまう。

極く最近、編集部宛に通信を寄こした一人の女性と、両三度逢つてみて、先の「果してM女性S女

性が存在するだろうか?」という疑問に一つの解決を与えてくれたので、書いてみることにしたい。もっとも、読者の女性の中で「話をきいてほしい」とか、「プレイをしてほしい」とか、いった申出で、直接逢つた方々も少くないがそれは、殆ど御本人の希望で誌上にも載せなかったし、写真なんかも、御本人に渡したつきりで、未発表のものが多し。余談になる

が、自分のプレイの写真をほしいという希望が多い。或は、それが大きな目的かもしれないが。

いずれ、支障のない範囲内で御紹介してみたい。以前、たしか、昭和二十九年ごろの本誌の読者通信に載つた女性と、南海本線の浜寺公園駅前で待合せたことがあつたが、この人なんか、最後まで住所を明らかにされなかったので、惜しいことに、途中で連絡が切れ

てしまったが、先に申した疑問の解決の緒になるかもしれない。

浜寺といえば、夏は海水浴場で賑わい、白砂青松の別荘地帯として有名であったし、その頃は、ビキニ・スタイルの白人の若い女性達が駅から海岸までの通りをハダカで三々伍々に歩きまわるといった風景もあった。もっとも、今では海岸は埋立てられているが。

さて、その女性のことは、いずれ述べるとして、最近、通信を貰ったS女性、A女のことを述べてみよう。

最初、A女から手紙を貰ったとき、私は、これが女性の手紙文であろうかと疑った。今迄も若い女性ほど露骨で生の文章をよく書くということは、よく体験させられていたが、A女の便りも、そういう類のものだった。モデルの東浦ひかる嬢の便りも、齒に衣をきせず、ぶっつけに書いてくるし、掲載を予想する原稿や、ハガキにまで、そのデンでやられると辟易

する。

逢って話をしているときは、口数も少くお上品なのに、文章となると、途端にあげすけになってしまう。中には、その逆の女性もあることは、あるが……。

さて、このA女からの便り、告白とも空想とも、希望ともつかぬものだったが、とにかく、非常に多種多様の傾向を併せ持っているということが、(その便りによって知った範囲では)女性では殊に珍しく、これも、果して女性であるのかと、疑問を抱く一つの原因となった。

住所は、大阪を中心として、その周辺の府県、即ち、奈良、和歌山、京都、兵庫、の中としておこる。郊外電車で一時間半ぐらいで大阪市内へ出れる距離である。家の職業は医師、父が開業医で、兄も医者で病院に勤めている。二人兄妹で、彼女は洋裁学校に通っている。年齢は二十二才。

傾向は、四十代から五十代ぐら

いの恰幅のいい異性から、いじめられ、辱められたという。具體的にいろいろと書いてあったが公開を憚るので割愛する。次に一寸変っているのは、同年輩ぐらい又はその前後の男性(場合によっては女性)をいじめてみたいという希望である。

尚、その上、フェティッシュとしては、メンスバンドに対しての関心と浣腸による生理的变化への興味、というようなせいで沢なものである。

編集部からの返事に対して、早速彼女から、日時と場所を指定してきた。そういったやり方も、てきぱきとしていて、いかにも近代的女性らしい。たしか、雨の降っている、というより、連日長雨にうんざりしていた五月中旬頃だったろう、車軸を流すような豪雨の中で彼女を車に拾ったことを覚えている。

直接逢って話してみても、わかったのだが、彼女の知識はすべて書

物や雑誌から得たもので、まだ実際には一回も経験はしていないということである。生れつきのマゾヒスチン、サジスチンとして、いろいろと話をきいてみたが、文章と違って、喋る方は、こちらの質問に思うように答えてくれなかった。後日文章で回答してもらうよう頼んだ。

彼女の希望しているプレイの方は、そういった経験がないといっているにしては?と思われるくらい、手紙の文章の内容を上まわることの出来ばえであった。

いずれ、彼女の手記として誌上に発表されると思うが、目下のところ、現在進行形の形なので、簡単に御紹介しておく。

描写の限界

先日雑誌倫理協議会の会合が行われたときに、次のような申し合せ事項の再確認が行われ、描写の限界について、種々と論議がつくされました。そして、具体的な個



々の事項についても、こうした点はこうしよう、という風に打合せをしました。次に、その時の申し合せ事項を掲げてみます。

〔記〕

われわれは昭和三十七年五月四日「雑誌倫理協議会」を組織し、世情に即することを期し、お互いの雑誌を自粛刷新するため毎月研究会を催し努力を続けて来ましたが、最近青少年の保護育成の問題等の論議が高まりつつありますので、この際一段と当該協議会の成果を挙げる為更に左記申し合わせ事項を決め、昭和三十八年六月一日より実施することにしました。

なお、其の目的の徹底を計る為同調を認め難い会員は脱会、あるいは除名等の方法によって同会の運営の万全を期することを確認しました。

申し合せ事項

一、表紙の構成

(1)、オールヌードはもちろん、乳房や臀部をデフォルメし強調したものは避ける。

(2)、着衣の構図であっても、挑発的及び卑わいであってはならない。

(3)、表示するタイトルは、性行為及び性器管関係に関する不真面目と見られるような字句はこれを避ける。

(4)、書体は格調ある文字を用いことさらに大きくしない。

(5)、色彩についても、図柄、文字等、一見して低俗雑誌とみなされぬよう十分注意する。

一、グラビヤ・口絵の構成

(1)、一見卑わいとみられるヌードは掲載しない。

(2)、セミヌードでもみだらなポーズは避け、カメラアングルに十分注意する。

(3)、着衣してあっても、極端に煽情的なものは避ける。

(4)、男女の性行為を想像させるものは一切避ける。

(5)、タイトル並に写真や絵の説明文は煽情的とならないよう注意する。

(9)、映画に紹介された写真であっても、極端な煽情的なものは掲載しない。

三、目次、本文のタイトル、サブタイトル、キャッチフレーズ（引文句）の表現方法。

(1)、表紙、グラビヤと同じく、煽情的かつみだらな表現とみられるものは避ける。

四、本文編集上の留意点

(1)、性行為の描写を直接表現する小説、読物等は絶対に掲載しない。

(2)、挿絵、まんが等についても煽情的なものは避け卑わいとみられるものは使用しない。

(3)、記事中に使用する写真も、男女の性行為を連想させるようなものは避け、グラビヤの場合に準ずる。

(4)、青少年に凶暴性を助長せしむるような文章、さし絵、写真は避ける。

(5)、青少年をテーマにした読物で、桃色遊戯、睡眠薬遊び、暴力及び性犯罪を挑発するようなものは掲載しない。

(6)、読者からの告白記事等の投書も、掲載にあたり右の基本方針に従い十分検討する。

(7)、雑誌全体の内容が、とくにセックスの興味的な面を強調する記事のみに偏せず、建設的な要素

を含めた、バラエティに富んだ編集に心がけること。

雑誌倫理協議会

○

この会合の際にも、話題に上ったことですが、特に青少年をテーマにしたものについては深甚の注意を払ってゆこうということ。これについては、どなたも異存のないところと思われますが、もう一つ、映画などで上映されたシーンや、或はスチール写真なんかでも煽情的な場面ばかりを集録するようなことはやめよう、ということです。

読者のお便りや寄稿家からの通信などで、何々という映画には、こんな凄い場面があった、テレビの何々には、こんなひどいシーンがあった。それに奇クだけ、何故そのようにビクビクして遠慮しなければいけないのだ。という御意見に接することが多々あります。特に、責めの場面、これはSにもMにも共通したのですが、一

体限界をどこにおいたら、よいのだろうか。勿論、男女の性行為の描写やそれを連想させるようなものはタブーであります。刑法第百七十五条のわいせつ文書の項に抵触しないという線を限界にするのではなくて、更に一步も二歩も後退して、青少年の健全なる育成に支障をきたさないという線を限界にすべきだと思います。

従って、小誌の編集方針も、この線に沿って樹立しています。個々の具体的な事項については、いろいろと意見もあり、大変むづかしいのですが、根本的な態度は以上の通りなのです。

この限界の範囲内に於て、愛読者の方々の御満足を得るため、私達は最大の努力を尽くそうと思っています。

もっとも、この頃は残酷ムードといえますか、映画でもテレビでも、責めとか縛りとかったシーンが多くなっているので、一部の読者の方からは、本誌のお株を奪わ

れているのではないか、という批評さえ頂くことがあります。

私も途中から見たので、配役なんかは、はっきりしなかったのですが、七月三日の午後十時から始まるテレビ番組の「特別機動捜査隊」という刑事物で、相当きつい責場面がありました。題は「追いつめられた狼」というので、麻薬犯罪の捕物なのですが、若い女が安宿の二階へ連れ込まれ、三人のやくざから猿ぐつわをされて、麻薬をうたれるというシーンは、動く画面の上に、女の悲鳴や呻めき声が流されるといったわけで、ショックな場面でした。

結局、女がそこで殺されて殺人事件に展開するのですが、麻薬、やくざ、安宿、と道具立の揃った犯罪現場のシーンで、全体のストーリーから見ると、何か殊更に残酷な殺しの場面を売り物にしたような印象を受けました。

直接家庭の茶の間へ持ち込まれるテレビであるという反面、児福

委の方々なんかは、丁度その時間に見ていないことには、結局わからないということから、見逃されているのだと思います。やはりテレビドラマも商品である以上、或る程度の見せ場を作る必要があるし、この限界というものは、中々むずかしいものだと考えました。しかし、あの「追いつめられた狼」の責め場シーンは、私達としても大いに参考になりました。

プライバシーの問題

京大教授の重松俊明氏が、産経紙上にて、プライバシーの問題について、次のように述べている。

人間はだれでも人に知られたくない秘奥(ひおう)の領域をもっているものである。これがプライバシーといわれるものであるが、この領域は固定しているものではなくて、場所や相手しだい、ひろがりもすれば、せばまりもするのである。親密な間柄になると、プライバシーは、だんだん縮小し

ていって、人格は開放的になり、互いに遠慮のないところで、つきあうことができるようになる。これに反して、疎遠な間柄では、プライバシーが人格の周辺にかくまで張りだしてきて、内閉的になり表層から内へは人をいれようとなない。

と、いうのであるが、私は多くの本誌の読者の方々、寄稿家、執筆家の方々、或はモデル嬢なんかに接してみて、重松氏の述べられたことが、非常に興味深く感じられたのである。

「人間はだれでも人に知られたくない秘奥の領域を持っている。」

これは、たしかに、どんな人間でも必ず持っているに違いない。生きている限りは、人という人は皆、それぞれに、この秘奥の領域を持っている。

本誌の読者にしても、いろいろの傾向の差はあっても、又、強弱多少の別はあっても、一様にこの秘奥の領域を持っている。

そして、この秘奥の領域というのは、場所や相手しだいで、ひろがりもすれば、せばまりもするものである。私が興味を持ったのは、私が接した人々に、極端な開放的な人と内閉的な人とが、あるということである。大体、私は他人のプライバシーに対しては、至って、関心を示さない方である。

従って、お名前は？ お齡は？ お仕事は？ 御家族は？ というようなことに、一向に興味を抱かないし訊ねてみようともしない。

然し、こちらから、何んにも聞かないのに、恰かも百年の知己のようにベラベラと何んでも話してくれる人がある。例えば、モデルの絹川文代さん、大塚啓子さん、梨花悠紀子さんなどは、この開放型の方である。聞きもしないのに家族のこと、仕事のこと、身体のこと、調子のこと、友達のこと、趣味のこと、映画の感想、流行のことなど、次々と話してくれる。

それにひきかえ、例えば東浦ひ

かるさん、関谷富佐子さんなんかは、内閉型の方である。こちらから聞かない限り、何にも喋ってくれない。私が人一倍プライバシーに関心を示さないのだから、これでは聞き出せる筈がない。

執筆や寄稿家の方にしても、堂々と本名で原稿を発表している人や、ペンネームであっても、その表札を門前に出している人もある反面、住所も郵便局留を使用するのは勿論だが、その指定局も月毎に変え、原稿も掲載後は焼却してくれという用心深い人もある。

先日岡山から用件で上阪したという寄稿家の方と一緒にミナミのバーを回ったのだが、その先生はお酒は余り飲まないのだが、全くの開放型で来る女、来る女、来るホステスに、私を紹介してくれるのには辟易してしまった。しかし、そのお蔭で大分共鳴者も出来て、中には協力してくれることを約束した相手も出来ることには出来たが。

若い女の顔を見たら、相手構わずモデルの勧誘をやらかす男もいる。断られても、当り前といった風に平気なのだから始末がよい。ここで、更に重松氏の言を引用してみよう。

常に警戒網を自己の周囲にはりめぐらして、なかなか人をよせつけない内閉的な人は、人と妥協することがなく、同じることがなく外見上は、いかにも強い人格のように見えるが、実際は、そうではないのである。むしろ、自己のうちに、しっかりした支柱をもっていないので、ちょっとした妥協によっても、すぐにがたがたと、おのれの人格そのものまで、くずれてしまうことを恐れているのである。これとちがって自己のもっている人格の中核は、めったなことにくずれるものでないという自信をもっている人は、かえって開放的になり、人にたいして寛容となり、人格の周辺において人と妥協することをあまり気にしない。

と、いつている。この意味で開放的な人は、収縮しているプライバシーということが出来る。プライバシーが収縮すればするほど、気安く人をいれることのできる範囲が拡大されることになる。

本誌の読者に関係したことでは、各々抱いているプライバシーは、相手次第、場所次第でひろがりもすれば、せばまりもするという点をよく考えて頂きたい。少くとも

私達のグループの間柄、そして、私達の共通の広場に於ては、お互いに胸襟をひらいて、その各々の秘奥を公開し合おうではないか。実に、本誌の存在価値もここにあるのではないかと考える。

妊婦ブーム

嘗て、若かりし頃の伊藤晴雨氏が、臨月の妻を逆さ吊りにした写

真を当時発行していた雑誌「変態資料」の口絵に発表したことは、人口に膾炙されているが、その頃としては、一大英断であったに違いない。もつとも、説明によると晴雨氏の知らない間に、口絵に載ったとのことだが、とにかく、それにしても、妊婦を逆さ吊りにするということは、一寸出来ない芸当である。

本誌でも、児玉昌子さんの登場から、更に引き続いて安原さゆりさんの登場と、このところ、ちよつとした妊婦ブームのきざしを見せている。いずれも本誌読者の御厚意による提供であるが、写真部独自の妊婦モデル探求というところになると、これは中々困難な問題である。

大塚啓子さんに、この事を話したら、私が結婚して妊娠したら、

第一番に妊婦のモデルになってあげるわ、と予約してくれた。しかし、今のところ彼女は未婚なので大塚啓子さんの素晴らしい妊婦モデルが出現するのは、いつのことかわからない。

現在、妊娠中の方で、見込みのありそうな人に交渉中なのだが、簡単にOKが得られそうにないの

で困っている。同一モデルの妊娠中の腹部を日を追うて、大きな有様を記録できたら、又、責めや切腹、浣腸といった趣向のものも撮影できたら、どんなに素晴らしいだろうかと思っている。写真部に於ても、努力しているが、更に読者の方々の御理解と御協力を得ることが出来たら幸いである。

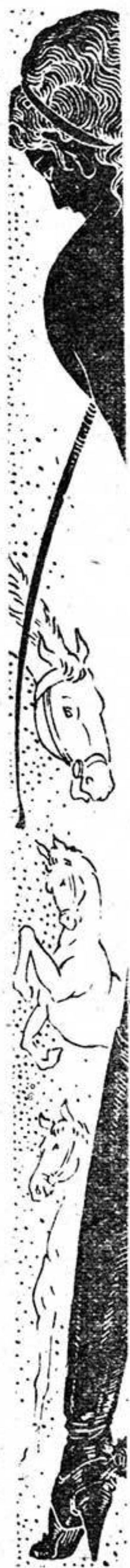
最近、一頃と比べて、街を歩いている妊婦を見かけることが比較的多くなっている。しかし、す

べて家庭を持っている人なので、これが妊娠中という特別な状態に加えて困難さを倍加させている。関谷富佐子夫人なんか、妊娠されてモデル壇上に立ってくれたとしたら、或は伊藤晴雨の向うを張って、妊婦の逆さ吊りも、あながち夢でないかもしれない。

しかし、これも大塚啓子さんと同じように、現在のところでは、海のものとも山のものともわからない有様だ。

今日も写真部員は、妊婦モデルを求めて街へ出てゆく。パチンコ屋で偶然隣りあわした年若き妊婦と意気投合して、モデルになることを承諾させた、というような僥倖にめぐり合ったら、或は、写真部撮影の妊婦フォトが、誌上を飾ることになるかもしれない。

(おわり)



サジスチック・ストーリー・シリーズ

残酷ごっこ

大 中 忠

(続・女家庭教師)

肌を焼く夏の陽もようやく弱まり、山の木も美しく色づき始めた。由紀も山路を登るのに、さ程苦勞はしなくなった。それどころか、澄んだ山の空気と美しい木の葉で、むしろ待ちこがれる位だ。

プールで教え子の清子を縛ってから、事ある毎に軽く縛ったり、縛る話をして来た由紀だった。時々、自分は何故こんなことに興味を持つのだろうか。こんな女が、例え家庭教師にしる人の子を教えて良いものだろうかと迷うこともあったが、可愛らしい清子を見ると、又、いじめてみたくなるのだった。清子を縛るだけではない、由紀は自分からも縛ら

れてみたいのだ。そしてどちらにも喜びを感じる自分に驚くのがあった。

ブザーを押すと、すぐドアが開いた。清子だった。いつもはお手伝いさんのシーちゃんなのにと不思議に思った由紀は

「あら、シーちゃんは留守？」

ときいてみた。

「昨日からく(郷里)に帰ってるの。半月位居ないわ。」

「じゃあ、セーちゃん一人？」

「そうなの、だから先生、遊んでってね。」

「ええ、良いわよ。」

勉強はいつになくはかどった。理科の星座

の話に一寸ふれた所で予定は終わった。

「アンドロメダって知ってる？」

由紀は一つの計画を心に抱きながら、さりげなく聞いた。

「ええ知ってるわ。北の方にあるんでしょ。」

「どんな恰好してる？」

「恰好って……」

「星座は、ギリシャ神話からとった人物や動物の形をしてるのよ。大熊座は熊でしょう。」

「知らないわ。」

「アンドロメダって、王女様の名前よ。あれはね。裸にされて、岩に縛られている姿よ。」

「本当。」

「本当よ、こんなにして……」

由紀は持って来た一枚の絵を見せた。雑誌の二頁を切り抜いたものだが、海岸にさらされるアンドロメダの姿が描かれてあった。

「本当は素っ裸だったんですって、こんな風……」

由紀の手は数枚の写真を取り出して、その中の一枚を示した。着々と自分のたくらみが進められて行くのに胸が高鳴り、息も荒く、手がふるえるのを陰す為に彼女は手を机で支えなければいけなかった。その写真には、一人の娘が大の字にさらされている。うつむいている為、顔はよく判らないが、若い肢体だ。

「これ、アンドロメダ？」

清子の目は、その数枚の写真に興味深く、大きく見開かれた。

「勿論違うわ。アンドロメダは神話の人物でしょう。これは本当の人間よ。」

「先生なの？」

「ち、ちがうわ。」

しかし声はふるえていた。顔こそ写っていないが、この写真は皆、由紀の姿だったのだ。数枚の写真に見とれている清子に、由紀は自分の気をまぎらわすように。

「昔から、色々ひどい拷問の話があるわ。文学作品にもあるし。」

「ひどいって、どんなの？」

清子は無邪気だった。

「鞭で打たれたり、膝の上に石を載せられたり、上から吊されたり、色々よ。」

「裸で？」

「そう、女の人は大概裸ね。」

「私も本で読んだことあるけど……」

清子は本棚から雑誌を一冊抜き出すと頁をくった。由紀の前に開かれた頁には一人の少女が、両手を挙げて縛られ、背中を鞭で打たれていた。服は破れ、背中はずっかりむき出しになっていた。

「こんなのでしょうか。」

「そうよ。」

「苦しいでしょう。」

「セーちゃん、やってみない？」

「だけど痛いでしょう。」

「軽くしたげるわ。さあ、ぬいで。」

由紀は、心を決めかねている清子に押しつけるように立ち上った。

「裸になるの？」

「そうよ。そうしなけりゃ本当に判らないでしょう。」

水着姿は度々見たが、清子の素肌を見たのはこれが初めてだった。由紀は清子の両手を前で縛ると、椅子の上に乗って天井の釘に結びつけた。清子の胸のふくらみは、小さかったが丸く可愛かった。一杯に伸ばされた腋の下には薄い蔭翳が可愛い。

「さあ打つわよ。」

スカートのベルトをはずした由紀は、清子の白く丸い背に軽く打ち下ろすと体を縮める。続いて肩に腰にも小さな音を立てた。白い背中中、ほんのりと赤くなった。

「どう、痛かった？」

「ううん、そうでもなかったわ。」

清子は解かれた手首を撫でながら答えた。

「本当に打ってないからよ。本当だと、血が流れるし、背中が腫れ上るわよ。」

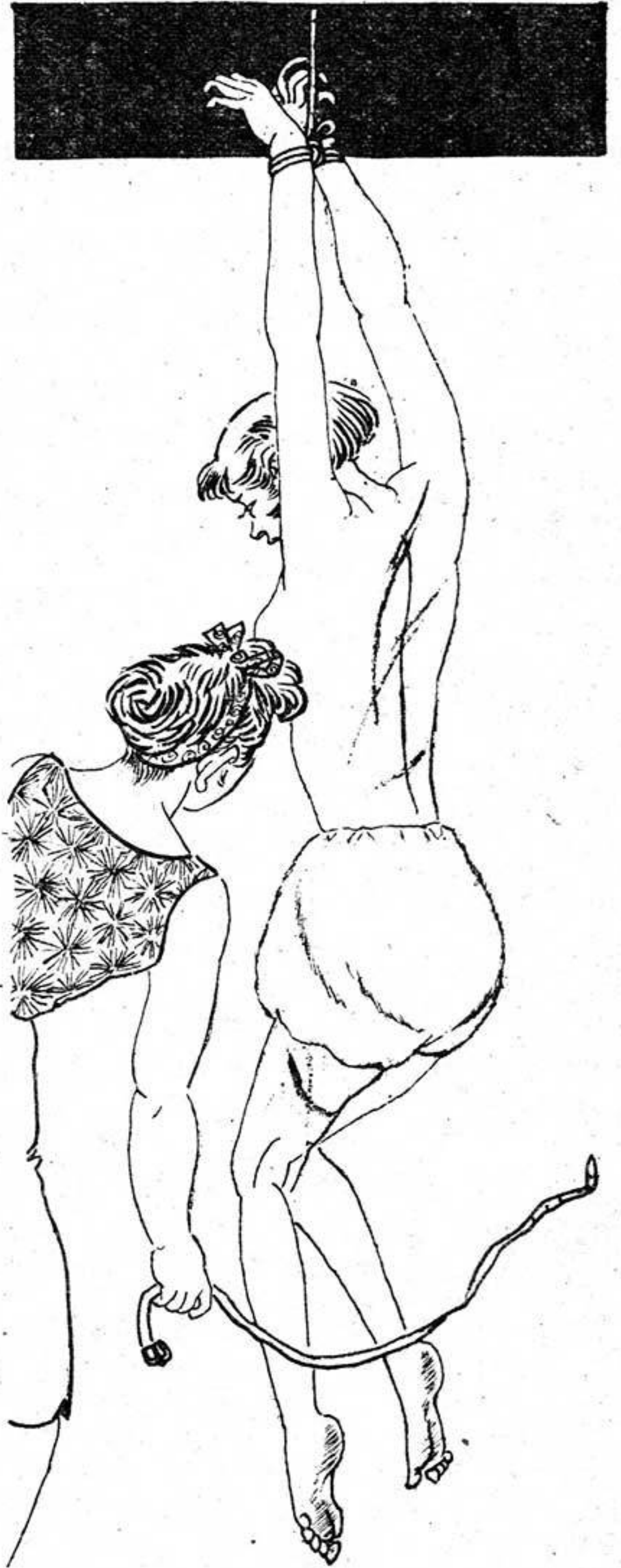
「学校で時々縛られるんだけど、私、打たれたことはないわ。」

「学校で、どうして？」

清子は同性の気易さか、由紀の前に裸体をさらしても恥しがる様子は見えなかった。

「遊びでよ。男の子に木に縛りつけられることなんかあるの。」

自分以外の者に縛られる清子を想像して、由紀は一寸ねたましくなった。



「今度は私を縛ってみない。」

「いいわ。」

「だけど普通に縛っちゃ面白くないわ。私は宝物を隠しているのよ。それをセーちゃんが私の口から聞き出そうとするの。私は外からこの部屋に入ってくるから、セーちゃんは私の後からナイフをつきつけて、私を裸にして責めるのよ。」

「どうして？」

「どうしても良いわ。鞭で打っても、吊しても。」

「思い切り打っても。」

「勿論よ。降参っていう迄。…良いわね。」

由紀は期待に胸をはずませて外へ出た。清子が服を着る間を置くつもりで、一寸裏で時間を過ぎて、再び部屋の前に立った。

「良い？」

「良いわよ。」

ドアの蔭に身をひそめている清子の声が聞えた。由紀はドアを開け、清子に気づかないふりをして真直ぐ進んだ。と、すぐに清子が由紀の背にナイフをつきつけた。由紀は両手

を挙げた。

「誰？」

「誰でも良い、裸になれ」

清子は中々の演技者だった。由紀は進んで服をぬぎ、シュミーズもぬいだ。

「両手を揃えて。」

清子は前にまわった。パンティとシャツ一枚の姿だった。由紀の手は縛られ、先程の清子の姿と同じ様に手首を上から吊られた。濃い蔭を作る腋の下が身内から湧き出る喜びにふるえている。清子の薄いシャツを通して、

薄紅の乳首が可愛いく見えた。

「宝物は何処に隠した。」

「宝物？ そんなもの知りません。」

「では、体にきくぞ。」

「何といわれても知らないものは、知りません。」

その言葉が終らないうちに、肩の付け根辺りに痛みを感じて由紀はのけぞった。豊かな乳房が上を向く。

「これでもか。」

「知りません。」

次は背中に、腰に。ベルトにしては激しい痛みだと思ってちらと見た由紀は、はっと驚いた。清子の手には本物の乗馬鞭がにぎられているのだ。清子の父が乗馬をすることは聞いていたが、その鞭が自分の身を責めるようになろうとは思ってもよらなかった。鞭を振り上げる度に露わになる清子の淡い腋の下を可愛いと思う余裕は、もう由紀になかった。振り下ろされる鞭に身をよじると手首に縄は喰い込み、体中の汗線から汗が吹き出した。やがて、腕が疲れたのか、清子は手を止め、由紀の手を解いた。由紀は床にくずれ伏した。皆い背中にみみず腫れの跡が痛々しい。

「先生、大丈夫？」

演技を忘れた清子がのぞき込んだ。

「大丈夫よ。まだ白状しないわ。」

由紀は背中の痛みを耐えて、ほほえんでみせた。この嵐を、このまま終らせたくはなかったのだ。

「まだ白状しないか。」

再び演技者に戻った清子は、由紀の手を取って後手に縛り上げた。

プールで縛った時の、ぎこち無さは取れ、大分慣れた手付だった。それだけに急所急所はしっかりと締められていた。間もなく由紀の両腕は全く動かなくなった。由紀は縄が上下に喰い込んで奇妙に歪んだ自分の乳房が妙にいとおしくなった。

「さあ歩いて。」

清子は縄尻をひいた。由紀は示されるままに二階への階段を踏んだ。一人でいる時、自分の手で自分に縄を打ち、歩いてみたことはあったが、こうして他人に縄尻を取られ、捕われの姿で歩んでいると、由紀は自分がひどく小さなものに思われた。

二階の部屋は二間続きの和室だった。清子は境のふすまを開けると椅子を持って来て、置いた。

「ここに乗って。」

哀れな姿を台の上に乗せた由紀に、清子は

さらに縄をかけ、欄間と結びつけた。由紀の胴には幾筋もの縄がからみついた。充分に結ぶと清子は椅子をどけた。欄間が悲鳴を挙げ、由紀もうめいた。後手のまま宙吊りとなったのだ。縄目がたちまち柔い肌を喰い込み始めた。腕の血の流れは止められ、乳房がちぎれる位縄は肌に没した。縄と縄に噛まれた肌が焼けるようだ。由紀は被虐の快感等通り越してしまい、苦痛にうめき、露わな体をよじった。欄間がギシギシと鳴る。

「まだ言わないか。」

清子の声が由紀を現実に戻した。

「し、知らない。」

由紀はこの苦痛から逃れたかったが、清子の責めがどんなものか、もっと知りたかったし、自分の無惨な姿を、もっと良く見てもらいたい気持ちもあった。

ズロース一枚の女体が宙吊りにされているのは、痛々しかった。しかし元気の溢れる、均整のとれた若々しい体だけに美しくもあった。清子はしばらく由紀のものがく姿を眺めていたが、やがて、椅子をふたたび由紀の足下にやった。由紀はやっと息をついた。しかし両手は括れたままだ。清子は由紀を欄間から

解放はしたが、後手の縄は解かなかった。そして再び、恥辱の歩みが階下に向けられた。元の部屋に入ると、清子は由紀を床に横たえ、足首と太ももを縛り合わせた。これで由紀の体は全く動かなくなってしまった。縛られた腕は勿論動かないし、脚も膝を曲げることも出来ない。それも動かせば太ももの縄が喰い込んでとても痛い。結局、由紀は白い一本の棒のように体を伸ばしたままだった。

清子は、辺りを見まわしたあげく、由紀のぬいだ下着をとりあげ、由紀の口に無理矢理押し込み、手拭で頭の後で縛ってしまった。もうこれで、由紀にとって、殆どの自由が奪われてしまったわけだ。

「宝物の場所を言いたくなったら、首を縦にふりなさい。」

そう言うと、清子は物差しを出して胸の縄目に差し込んでねじり上げた。由紀は思わず悲鳴を挙げたが、その声も空しく口の中の布に吸い込まれてしまった。先程の吊り責めで痛めつけられた肌が再び苦痛にあえいだ。乳房に縄は深々と喰い込んだ。

「む…む…」

「白状するか」

由紀は思わずうなずいた。この可愛い少女

が一瞬、サディストの権化のように見えた。すぐに縄は解かれ、猿轡は、はずされた。由紀は痛めつけられた身体を投げ出したまま息を整えた。素肌の恥しさなどは、とっくに何処かへ行ってしまっていた。

「先生、大丈夫？」

「大丈夫よ、だけど、セーちゃん、随分苦しかったわ。」

「だって、思い切っても良いって言ったんだもの。」

「それにしても、こんな責め方、知ってるなんて思わなかったわ。縛り方もなかなか上手になったわね。」

「そう、シーちゃん相手に、練習したんだもの。」

「シーちゃんを縛ったの？」

「そうよ。」

「裸にして？」

「全部はぬがなかったけど。」

「私と、どっちが縛り易い。」

「そりや先生の方が縛り易いわ。シーちゃん肥ってるんだもの。」

「セーちゃんは縛るのと縛られるのと、どちらが好き？」

由紀の体の痛みはまだ取れない。床に横た

わったままだ。柔肌の所々が痛々しく腫れ上がり、縄目の跡もくっきりと残っている。

「そうね。縛る時は自分が強くなったみたいだし、縛られる時は一寸苦しいけど、何だか体がぎゅっと引き締められてるみたいで気持ちが良いの。」

矢張り自分だけではなかった、と由紀は思った。一見相反するようなものだが、この二つは、表裏一体になっているのだ。

外はもうすっかり暗くなっている。家の者はまだまだ帰らないらしい。

「もう一度縛ったげようか。」

由紀は痛みが少し柔らいだ時言った。

庭は、ほのかな闇に包まれていた。家の中から二つの白い影が出て来た。再び裸にされて後手に縛り上げられた清子と、その縄尻を取る由紀だ。二人の素肌に秋の夜風がしみた。清子を松の木の前に立たせると、幹に縛りつけた。白く肌理の細い少女の素肌と、ごつごつした黒っぽい松の幹とが対照的だ。清子の形の良い脚も、しっかりと縛り合わされた。

「背中が痛い。それに外で縛られてると、沢山の人の見られているようだよ。」
「昼間で、皆に見られたらどう。」

ある女の手記

まりも譚

(ものがたり)

楠 佐 和 子

ま り も 譚

私はいま、神秘的まりもの住むという神様の湖阿寒湖の畔に佇んでいます。

東京から、この北の果てなむ国までは随分永い旅でございました。いえ、それは汽車に乗れば四十時間の車中ですけど、でも狂燥の都会を遁れ、汚濁の空気の中に疲労した私には本当に長い長い旅だったのです。

北海道……ただそんな自然のおおらかさのみに憧れて東京を離れた事は、余りに多感な乙女らしいロマンチストだったかもしれません……。私はもうそんな年令ではない筈なのです。小さいながらも、一軒のお店を持

ち、バーのマダムとして男心のすべても知りつくし、女体の悲しさを充分に思い知らされて来たのですもの……。

しかし、旅立つ決心は変わりません。お店の女の子にさえ黙って私は汽車に乗りました。暗い津軽海峡の旅情、青黒い海に散る白い波頭、音もなく遠くすれ違う漁船の灯。ケビンから甲板に流れる灯、そして遠くのぞむ函館港の灯……夜明けの北海道の港。

朝霧漂よう函館の駅もとに網走行急行列車「大雪」号は発車致しました。どこでもよい、行くところまで行こう。行けるところま

で、さい果ての地へ、乙女らしい冒険心と虚無的な逃避行……。

大平洋上はるかにそびえ立つ羊蹄山の長万部（おしゃまんべ）も、拡々とした牧草地に遊ぶホルスタインの牛の群れ、札幌の郊外も、野口雨情や石川啄木が愛した坂の港小樽の銭函海岸も、大雪山の旭川、清らかな溪谷上川峡もたしかに素晴らしいものでした。スケールの大きい広漠たる北海道の原野は、私の心をひどく魅了してしまいました。でも列車が北辺の小さな町、遠軽（えんがる）に到着した時、私はそこに晩夏の夕陽にくっきり

と浮き出された、小高い奇妙な山をみたのです。いわくあり気なその山は大古のアイヌ古戦場だったそうです。……その話は一層私の心をゆり動かしてしまったのです。私はひきつけられたように次の停車駅、開拓都市北見へおりました。大和民族との斗いに敗た、はじめな敗走の被征服民族。追われ追われて阿寒の一隅に貧しく命をつなぐ弱少民族を訪ねてみようと思ひ立ったからなのです。

でも阿寒地方に住むアイヌ人はすでに日本人と混血し、観光客の観せ物的存在として必要以上にアイヌ風俗をみせつけているように思ひました。自らを見物客のなぶりものにし、被虐の生活に甘んじている彼等……そのもだえるような美しさは途々の美幌峠の大観、摩周湖の澄み切った美しさ、硫黄山の壮観などよりも、はるかに美しく私の心を奪ったのです。

ペンケトウ・パンケトウ(神の住む沼の意)があくまでも神秘的針葉樹の原生林におおわれ、はるかに雌阿寒岳の麗姿を仰ぎみる阿寒湖畔の小さな旅館の一室で、私は暮れなづむ赤い湖面をみつめています。背後の雄阿寒岳の雄峰がたくましい斜線を水の上に投影させその間にチラチラと波立つものは姫鱒の群れでしょうか……白樺の原始林がエキゾチック

な伝説を伝えてくれるようです。

伝説……神秘的ないつたえは、大和民族とは違った亡びゆく弱少民族の悲哀をつたえているようでした……。

異郷の地にさすらう私はホテルの日々にも倦きると、町に出てアイヌ人に会うのが楽しみになりました。でも、それも接客のためのアイヌ……私はより自然な、人目をさげ白樺林の中に住む古老に会いたくなったのです。

それは住居というには、あまりにもお粗末なものでした。都会のスラム街にみられた数多くのバラックは辛うじて雨露をしのぐものでしたが、それよりもひどいものが彼等の住いだったのです。

……ある日、私は土産物屋のメノコに連れられて、その人々を訪ねました。古老達は滅多に外来者を信用しません。ましてやシャモ(彼等は私達日本人をそう呼びます)である私です。その警戒の眼は永い間虐められ、見世物的存在とされて来た被征服の憤りをあらわしているのでしょう。

そんな気持を察した私の持参した一升のお酒に満足し、女である私に警戒の気持ちを感じてくれたのでしょうか……彼等は私の求めに応じ、快く夕映えの阿寒湖に船を出してく

れました。一面に湖岸を覆う白樺の幹に赫陽は赤々と映え、丸木をくりぬいた小舟に、しわよったアイヌの老人が漕ぐ竿も哀調にみち、どこからか若者のうた声もきこえてくるのです。

ピリカメノコ トナセノモコロ

ニシパ パスクル

チシコラセ

……歌詞の意味はわからないながらも、その単調の中にもえるような情熱を秘めた唄声は、それが恋の唄である事を容易に理解できたのでございます。

粋な女子と ただ一夜でも

鳥啼くまで 寝てみたい……

なんと素朴な感情なのでしょう。澄んだ湖面の底に無数のまりもが沈んでおります。神(カムイ)のおつくりになった神秘的まりも、緑の肌に奇しくも愛の伝説をつたえ、今も静かに湖底の地に息づいているのです。「昔、それは大昔の事、この湖はカムイの治め給うた地……平和な生活が営まれていたのじゃ……」

静かに語り始める古老の言葉……それはまりもにつながる美しい愛の話でした。昔……この湖のほとりに一つの平和な部落

がありました。人よんでモノペットの部落。

酋長の美しい十六娘セトナ、そして美男で勇敢な召使マナベ……湖の底にはかなくも、そしてそれがために永遠の愛を約した悲恋の物語は、私の心を深く湖底に導きました。いえ、そればかりではありません。私の悲しい性癖は悲恋のアイヌメノコ、セトナを自らの身に置きかえ、はては私なりの被虐への伝説として、胸の中にくりかえされてゆくのでした。この甘美な伝説は永遠に忘れられず、私の肉体のもだえを冷やかにみつめているのです。

美への羨望、セトナへの憧れは、セトナを自分だと思いこんで、自らを慰めてゆくのです。

思い出はあの日……あるうらかな春の日です。私は父に命ぜられて湖畔の径を急ぎました。あの青く澄んだ水の色をみるのも楽しい事でした。林ごしに湖面のさざなみがゆれ白い樺の肌をゆらゆらと映じさせています。その波にのって、力強く男らしい唄声が聞えてきます。蒼い湖面に白い丸木舟が漁をしています。夢のような平和な里です。それも私達アイヌが神（カムイ）の使徒として平和に生きているからでしょうか……

「マナベ！ マナベ！」

私は丸木舟の若者によびかけました。

「ああ、セトナ……」

マナベは漁する手をやめ、白樺の湖畔へ舟をもどして来ました。私は男らしいその姿にみとれ、父の用事も忘れて岸にあげられた舟の上に彼と並んで腰をおろしました。

「静かだなあ……私達、カムイの使いであるアイヌ人達にカムイのあたえられた静かさ……のどかな、なごやかな平和」

マナベの独白に私は思わず、いたずらっぽく笑いました。でも彼はなおも真剣に

「カムイよ、いつまでもいつまでも、私達の幸福がつづきますように……」

と、つぶやきながら敬虔な祈りを始めました。私もその真剣な姿に笑いをやめ、一緒に深い祈りを捧げました。私達の永遠の平和を祈って……地面に伏せる私の横顔にマナベの強い視線を感じました。

「マナベ、どうしたの？」

彼はあわてて視線をさけ

「セトナ、私に何か？」

「あ、そうそうマナベ、私、忘れてたわ。お父さんが呼んでいる」

「ニシパが？ 何だろう……」

「さあ、何かしら？」

私達はやっと帰途につきました。

途々、ともに連れだって歩くマナベと私は

大変幸福な若者と少女だったでしょう。

私達をみて子供達がささやいています。

「オレもマナベみたいなの、いい若者になる」

一人の老婆が説明しています。

「うん、マナベはな、お父っあんもおっ母さんもないくて、小さい時にな、雪の降る山の中に降てられていたのじゃ。それはそれは、ひからびた、小さな赤ン坊じゃった。それを酋長（ニシパ）様がお引取りになって育てられた。それで、マナベはな、その恩を忘れずに、ああやって酋長様の家で働いているんじやよ。」

子供はしたり顔で老婆にいつてます。

「ふーん、じゃ、マナベとセトナは夫婦になるんじやな。」

「そうとも。あの二人は似合の夫婦じや。これで、この次の酋長はマナベに決ったようなものだ。」

何と楽しい、そして部落の人達からも祝福されている私達だったでしょう。

でも、私達が父である酋長（ニシパ）のもとに帰った時、湖畔での深い神（カムイ）へ

の祈りも空しく、ただならぬ事態が惹起されていたのでした。父の顔には深い苦悩の色が浮んでいるようです。そして副酋長も興奮にふるえていました。父は私の背後に控えるマナベをみると待ち兼ねたように呼びよせました。

「マナベ、大変困った事だが……ここからずっと南に夷敵達が住んでいる。彼等は自分達の領土をさがし求めて北へ北へと進んで来ている……マナベ、そしてとうとうこのモノペットの部落へも魔の手を伸ばし始めたのだ。」

副酋長も声あらく怒鳴るのでした。

「彼等はこの部落を俺達の手からとり上げようとしているのだ。」

父は静かに言葉をつづけました。

「私は平和がつづく事を祈っている。それがカムイの思召しだ。だから、夷敵に会ってよく話合いたいのだ、充分に礼をつくして。」

マナベは、事の重大さに驚いていたようです。

「しかし、そのような重大な事が……」

「そうだ。マナベ、そちに使者として敵地におもむいて貰いたいのだ。」

あっと私は驚きました。何でそのような恐ろしい敵地に恋しいマナベを送る事ができる

でしょうか。もしかしたら生きては帰れぬ使いなのです。

「お父さま！」

副酋長は急にいい訳けがましく

「酋長には男の子がない。本来なら私の息子のメカニが行くべきなのだが、生憎体をこわして寝ているのでな。」

といいながら私の方をちらと見ました。私には何故か副酋長が恐ろしい企みを持っているように思われて仕方がありません。しかしマナベは、私の心配をよそに決然と答えました。

「はい。ニシパのいいつけは神のいいつけです。私に行かせて下さい。」

その夜、月光にかがやく雌阿寒岳の前で私は別れの抱擁をくりかえしました。マナベのたくましい胸の中に抱かれた私は、前途の不安と、そしてあの時、副酋長が卑屈な笑いとともに行った言葉の恐怖におののくだけだったのです。

「セトナ、美しくなったのお。この輝くばかりのセトナを嫁にして未来の酋長になる果報な若者は、どのどいつだろう。私の息子もお前にはえろう執心でのお。似合いの夫婦かもしれない。」

……その不吉な予感マナベが荒縄で裸馬の上に括りつけられた惨めな姿で部落に帰って来た事によって一層高められました。

「マナベ、俺達は富が欲しい。俺達には軍の神がいる。本来なら、そちを出陣の血祭にあげ軍神への捧げとするものを……帰れ！早く帰ってモノペットのアイヌ人奴に伝えよ。日を経ずして俺達がアイヌの支配者になるであらう事を。」

血に飢えた夷敵の叫びに魔神の像が狂ったように笑ったそうでございます。

斗い、戦争……私達にはこれしか部落の平和を守る方法がありませんでした。

父の心労をよそに副酋長の手で着々と戦争の準備が始められ、あわただしく部落の若者達が集ってまいりました。その姿に父酋長も戦いを決意せざるを得なくなりました。もう夷敵は部落の入口まで侵入して来ているのです。若者達は二隊に分れ、東の隊長は副酋長の息子メカニ、西の隊長にはマナベがえらばれました。でもやはりそれは弱みにつけこむ副酋長の恐ろしい企みだったのです。

「いいか、若者達よ。兵士よ。私はカムイの面前で、皆の面前で誓いをたてる。わがカムイの兵士達を勝利に導いた隊長こそ、ここに



「しかし、セトナには……」

「馬鹿な、酋長。酋長は本気で召使い風情のマナベとセトナを夫婦にするつもりか……それともセトナの秘密を部落の人々にいいふらそうか？」

父は怒りにふるえ、蒼白な顔で副酋長をにらみつけました。

世にも恐ろしい私の秘密……父がかなしそうにつぶやいた神へのいけにえ。

「お前は不幸せな運命の星の下に生れた。セトナ、ごらん。あの雌阿寒の頂きを……あの頂きに住まうカムイがお怒りになられた日、お前はカムイが火を吐かれた日、生まれたのだ。その日に生をうけた女は、再び火を吐く日、カムイのいけにえにな

いるセトナを妻として未来の酋長の座につくのじゃ。」

副酋長の叫びに一同の兵士も、私も、そして父もあっと驚きました。私とマナベの恋は誰知らぬ者もないというのに……それにメカニの東の隊は屈強な勇士が数多い攻撃隊、マ

ナベの西の隊は老人達を主として人数も半分位の守備隊。その結果はわかりきっている事でした。父は悲しみにくれる私のために副酋長の不法な発言を責めましたが、彼はせせら笑いながら答えたのでした。

「セトナをメカニの妻にいたきたい」

らなければならぬのだ。成人したら神へ奉仕し、火を吐く日まで幽囚の生活を送らねばならぬ。カムイの足下の岩牢に閉じこめられて……セトナ、私も普通の父親だ。私はそれを怖れる。お前を殺す事は出来ない。例え、この老いた身が神に怒りにふれようと、亡き

お前の母に代って、私は守らなければならぬ。」

私の運命は決っていたのです。

……悲嘆の涙にくれる日々……高らかに勝利をつげる軍歌をききました。ガイセン軍の先頭に、立っていたのは、やはりメカニでした。そして彼の後には冷めたい鎖につながれた夷敵の虜囚が長く列をつくって曳かれてきたのです。明日から私達の奴隷とならなければならぬ異国の若者達。疲れ果てた無表情な顔……ああ、恋しいマナベも武運つたなく敵の手に捕えられてしまったのです。この長い列の人達と同じように異境の地で一生、無情の鎖につながれ牛馬の如く働かされるのでしょうか。恋しい可哀想なマナベ……。

でもあの冷酷なメカニの妻になるより……そうだ、自ら敵の手の中にとび込もう。そうすればたとえ奴隷となり鎖につながれようと恋しいマナベとともにいる事ができる……愚かで夢中な私でした。

闇にまぎれ、秘かに部落の入口を出ようとした時です。私の腕を強い力でつかんだものがあります。あっと思ふ間もなく猿ぐつわをかまされ救いを求める間もなく私の両の腕は後にねじ上げられ、ぐるぐる巻きに縛り上げ

られてしまったのです。本当に一瞬の出来事でした。全く自由を奪われ、男の背にかつぎあげられた私は、その男がメカニの部下である事に気がつききました。敵の手よりも恐ろしいメカニのもとに捕えられた私を曳き据えた副酋長の意地の悪い笑い。

「セトナ、お前は私達がカムイへ捧げた誓いを破ろうとしたな、自ら神に逆く罪は知っているであろう。」

副酋長の怒りは一夜にして私を絶望のどん底に叩きおとしたのでございます。

その夜のうちに私は嚴重な高手小手に縛しめあげられ——暗い部落の広場に曳かれてまいました。

中央にある白樺の老木、私はその木に情容赦もなく肩から足の先まで何本かの縄で縛りあげられ、自殺を防ぐためにかたい猿ぐつわまではめられて晒らされたのです。しかも動かす事も出来ない私の顔の上には、大きく私の秘密を書いた札までつけられて……。

朝、立木につながれた私のみじめな姿に忽ち部落の人達が集って来ました。私の秘密を知った人達。驚きの人々の中に私はそれを弁解する自由すら奪われているのです。秘事を知った信心深い群衆の激怒と神への怖れ、昨

日まで私に同情してくれた人達も、もはや私の味方ではなくなっていました。副酋長のために秘密をあばかれ、晒されの恥辱……父は眼前に恥しい娘の姿をみながらも救う事はできないのです。いえ群衆と神の怒りを怖れ、副酋長への呪いをこめ、紺碧の湖に身を投げてしまいました。すべては副酋長とメカニの思うままになったのです。私を妻にできなかったメカニには慄然とするような復讐の計画が秘められていたのです。父は神への反逆者として副酋長は神の使徒として……そして自らの秘密をかくし神へ偽りの生活をして来た私は縛られ、全く抵抗する事もできぬ身に石を投げつけられ、衣服を破られ、なぐられ、やさしかった人達から呪いの言葉を浴びせられ乍ら、もう死んだつもりで恥しさに甘んじました。いえ——マナベを奪われ、父を奪われ神へのいけにえとなる身、もはや私の生命はたたれているのです。昨日まで父の忠実な部下だった人達から今は凌辱の視線を投げつけられ、縛しめの身を絶望の中に許しを待ってもだえたのです。陽が沈み、月が沈んでも私はただ副酋長の惨虐な次の手段を甘んじて待ってなければならぬのです。

三日三晩、私は白樺の樹につながれ、さま



ざまの侮蔑と呪いの言葉の中に過ぎなければなりません。その間、会える事のできないマナベの言葉を思いうかべる事が唯一の救いでした。

「セトナ、俺は死なない。生きるのだ、生きて再び会うのだ。その時こそ……」
その時こそ——三日目の夜、やっと許されて再び副酋長の家に曳かれてまいりました。

でも後手のきつい縄目は解かれぬまま、物置の柱につながれました。そして皿に盛られた食物を見せられた時、私は死を覚悟したものの、肉体の生へのはかない執着は浅ましくも地面にうつぶせ皿に口をつけたまま呑みこんだのです。牛か犬のような惨じめな姿を、にやにや笑ってみていたメニカは満足そうに再び私の口を覆って出て行きました。私はその後姿に憎悪の眼をむけながらも、肉体の疲労は抗し切れず、そのまま深い睡りに陥ってしまいました。

幾時を経たでしょう。げっそりとおとろえた肩のあたりに鋭い焼けるような熱さを感じて目をさしました。私の前には憎々し気に鞭を持って見下しているメカニが立っていました。

「おきろ、悪魔の娘！」

もう大部陽も高く昇ったのでしょう。物置の壁の隙間からまぶしいばかりの朝陽が流れ込んでいました。私の手足は縛しめのままです。すでに感覚を失っています。哀願をこめてメカニを見上げると、再び鋭い鞭がふりおろされたのです。私は彼の鞭におそれおののき、柱につながれた身を心死の思いで起こしました。

それからの私は、全く彼等の思うままでした。たとえ死を覚悟はしていますものの数々の恐ろしい責めさいなみ、死よりも辛い恥しめに身をもだえさせたのです。

私は群衆の前に曳きづり出されました。

「どうだ皆の衆、この神への反逆者セトナをどうするか。」

副酋長の叫びに私をとりかこんだ群衆は一瞬しーんとしずまりかえりました。私は不気味な静寂の中でメカニに縄をひかれたまま群衆の答を待たなければなりません。

「カムイへ捧げる掟じゃ。」

古老のつぶやきに群衆は、どっとわき立ちました。

「そうだ。いけにえだ。神のいけにえだ。」

「待て、いけにえは身を清めねばならない。」

「湖だ！ 湖につけろ！」

人々は私はこづきまわし、ひきづり、そして抵抗出来ぬ身をつきあげると、一せいに湖を目指して走り出しました。

湖には小さな丸木舟が待っていました。私をかついだ男達が二人のりこみ、湖心へ漕ぎ出しました。舟の中で男達は私の衣服を一枚一枚ひき破きながら裸体にしようとするのです。私は必死に抵抗しました。でもか弱い女

の身、まして、手足の自由をうばわれた身ではどうする術もありません。白い肌を男達の前にさらし、ただ観念の眼を閉じるばかりでした。その眼からは悲しみの涙が流れ、不運な星を呪い、神をうらむ……。いえ神は正しいのです。私は神の湖に投げこまれました。ああ、このまま湖の底で死んでしまいたい。

でも男達は私の死の自由さえうばっているのです。一旦沈みかけた私の体は腰にまきつけられた縄をひかれてすぐ上げられてしまします。再び水の中へ……。そして何度か水につけられ引揚げられ……。その度に私はもう自分の肌をかくす気力もなく、いやというほど水をのみ……。とうとう気を失ってしまいました。

ああ、私は気を失ったままの身体を群衆の前にさらしたのでしょう。つい先日まではマナベとの恋にもえ、生の歓喜にかがやいた私を……。

私に気がついた時、じめじめした荒ムシロの上にねていました。長い間私の身の自由を奪い凌辱のままにされて来た縛しめの縄は、もうありません。しかし私の体は湖の中に投げこまれたままの裸体でした。はっとして私は光のさす方をみました。岩屋です……。神の峯雌阿寒岳の麓にある岩牢でした。私の後手

の縄目は解かれたものの、やはり逃れられぬ運命だったのです。まとう衣服もなく岩牢に閉じこめられている私……。私はこうして神へ捧げられる日、雌阿寒の神が火を吐く日まで待たなければならぬ。その日は何時の事でしょう。

その日、すでに木々の葉も散り木枯の吹く日、神の怒りの日は、とうとうやってまいりました。

もう私は生ける屍でございました。男達の手でけがれのない白い衣服をまといわれ、後にねじあげられた両の腕にはしっかりと縄がかけられました。私は抗う事もなく身の自由をうばわれてゆきました。

阿寒の湖畔には大勢の部落の人達が集り、神への深い祈りをささげておりました。その中央に私は据えられ古式な儀礼に従い神へ祈りの言葉を、ささげなければなりません。そして、これから私を死に導く神のために……。

儀式は進みえんえんと夜空を焦がしかかり火がたかれ、私は一本の白樺に括りつけられました。これから最後の酒宴がひらかれようとしているのです。雌阿寒の頂きはあかあかと見え、美しく湖面に映えています。

この木の下で、マナベと恋をささやいた楽

しかった日……同じ木の下で今日は死を待っているのです。

ああ、恋しいマナベ。私はこれから神のもとに参ります。マナベも遠く異境の地に捕われ、この神の火をみているかもしれません。会いたい、生きて再び会えないけど……マナベ、マナベ、さようなら……。

私はマナベの面影をいだいて深く深くうなだれました。すべては終ろうとしています。

「セトナ、セトナ」

おしつぶされたような男の声……私の空耳だったのでしょうか。何で恋しいマナベの声を忘れる事ができるでしょう。

「セトナ……」

ああ、暗闇にかくれるように立った若者はまさしくマナベです。どんなに苦勞して異国の地より逃れて来たのでしょうか。衣服は破れ体は傷つきよろめいています。

「ああ、マナベ……」

幸い見張りは離れています。

「セトナ、逃げよう、神は私達の愛を信じてくれるだろう」

「マナベ、誰か来るといけない早く、早く」
死を前にした私もうとしいマナベにめぐり
会え、いまはただ生きる事への努力にかわり

ました。マナベは疲れた体で私を括りつけた縄目をときにかかりました。でも折からかがやくかがり火に私達の姿は浮び上り、たちまち見つかってしまいました。

わっと騒ぎ出した群衆……逃る間もなく私とマナベは取囲まれてしまいました。丁度その時です、マナベは、メカニを見つけたのです。メカニもはっとしたようでした。

「メカニ、お前の卑怯な行動を、だまし討ちにして私を敵の手に渡した卑劣な行いを忘れやしまい」

マナベは私をかばい、群衆と向い合いました。

「何を、お前も神へそむいた罰だ！」

メカニは刀をふりあげてマナベを斬りつけました。が一瞬早くマナベは猛然とメカニにとびかかっていたのです。それは男と男の死斗でした。くんずほぐれつ必死に闘うマナベ……どの位闘っていたのでしょうか。最後の力で立上ったのはマナベでした。

「おお、マナベ……」

群衆はどよめきました。

「マナベ、逃げましょう、早く、早く」

私はマナベと手をとって逃げ出しました。
マナベの出現に驚く群衆は、しばし追うのを

忘れたようでしたが、しかしやはり私の味方ではございません。手に手に武器を持って追って参ります。私達の疲れ切った体では彼等の手から逃れる事もならず、とうとう湖の際まで追いつめられてしまいました。

「マナベ、死んで、私と一緒に死んで……」
私はマナベの胸にすがりつき私達の愛を訴えました。

「セトナ、私は帰って来た……行こう。私達の恋が永遠に変らぬ場所へ」

神の山頂は一段とはげしく火をふき、周囲は真赤に照り映えました。

私とマナベはしっかりと抱き合ったまま、何のためらう事もなく、静かに湖の中へ入っていったのです。

驚き見送る人々の中に、私達の体は湖に吸いこまれ、やがてすべてが没し去って行きました。一匹の姫鱒に見まもられながら……私達は永遠に愛しあえる平和な湖の底に……いつまでも、いつまでも生きていますのでございます。

そして、いつの頃からか、この阿寒の湖にはまりもが浮かぶようになったのです。それは私達の幸福な美しい姿なのでございます。朝な夕な、湖の底で変らぬ愛を誓い。湖上に

浮んでは部落の若者と少女の美しい愛情を見まもってやりながら、二つのまりもは離れることなく、今もなお、生きつづけているのです。清らかな愛情に湖の水はますます清く澄み、白雪の神の頂きを湖面に映し白樺の林をわたるそよ風は今日もやさしく吹きわたって

行きます。

……ああセトナ、情熱のメノコ……私の胸の中に生きた伝説は神の使いである平和なアイヌ人達にとって冒瀆かもしれません。でも私には、そうする事が一番美しい伝説なので

す。
湖の底に静かにねむっているまりも……私はその一つ一つを胸に秘め忘れることが出来ないのです。

(おわり)

大好評！ 注文殺到の傑作責画

四馬孝画 美処女羞恥責 『悦虐絵巻』

△美しき嗜虐の生贄▽

A5判感光紙極鮮明焼付 五枚一組 五〇〇円 略号(えつ5)

○九月号一八四頁にて、第一図から第五図

までの詳細解説文を發表しましたところ、連日注文殺到し、うれしい悲鳴をあげています。どうか、分譲打ち切りにならぬうちにお早目にお申込み下さい。

〔第一図〕——淫辱全裸の仕置にされる捕われの令嬢

豊麗花を欺く深窓の令嬢雪絵は、嗜虐的な秘密ショートの手先であるズベ公の一味に捕えられ、地下の拷問部屋で全裸にむかれて、三角木馬にまたがせられようとする。クラブのボス香蘭は、雪絵をショートのスタ

ーとして仕込もうと決心する。

〔第二図〕——排泄強要の飽くなき淫婦の奸計

絶世の美処女雪絵は、ズベ公達によってヤカンから無理矢理、多量の塩水を飲まされ、奇妙なおむつカバーを穿かされて地下室の拷問椅子に見るもむざんな開股のポーズで縛りつけられる。雪絵の知白なお腹がぶっくり膨らんでいる。

〔第三図〕——羞辱排泄の哀願に苦悶する生贄令嬢

妊婦のように膨らんだ雪絵のお腹、激し

い尿意と戦い必死になって耐え忍ぶ雪絵。トイレへ行かせて欲しいと、只それだけを願う雪絵は羞恥の余り、遂にペロという一匹の牝犬となって仕えることを警わせられ泣きじやくりながら屈伏させられる雪絵。

〔第四図〕——牝犬ペロの誕生とその調教
哀れなペロにさせられた雪絵は、四つ這いのままで部屋中を廻らされ、首輪をつけられ砂の入った小箱の中へ排尿させられる両手両足を大きく開け、高々と持ち上げられた円いお尻の上に水の入ったコップを乗せ、口にはおむつカバーをくわえさせられて首輪から太い鎖をひきずりながら這い廻る雪絵。

〔第五図〕——華々しい羞恥地獄の饗宴
秘密ショートの舞台の中央、まぶしいばかりに成熟した雪白の太ももを左右に開けさせられ、天井から下っている鉄のパイプに両の足首をくくりつけられている雪絵。巨大なイルリガールから嘴管が、いまや一滴も余まらず浣腸液が注入されている。果たてどのような光景が展開するだろうか。

変^{へん}身^{しん}記^き

— 被虐愛さんげ —

万 田 不 仁

はつ秋のよく晴れた、静かな午後、私は療養所の庭の芝生の上に寝そべて文庫本を読んでいた。傍にはめっきり老込んだ犬のアルゴスがこれも長々と横臥して寝ていました。犬としては高齢の、十三歳のアルゴスはまだあまり遠くへ歩きたがらないので、うちから二十分程の療養所の庭まで来ると、些草臥れたと言いたげに、ごろりと横になったり、或は腹這いになり、その儘うつらうつらと時を過ごすのが楽しいらしいのです。だから私もその頃はアルゴスを散歩させる時は、

なるべく部厚い文庫本を持って出て、アルゴスが居睡りをしている間、読むことにしていたのです。もっとも大抵は四、五頁も繰るうちに忽ち取留めもない夢想の境に彷徨い出てしまう私なのでした。戦争が終って六年、荒廃と混乱の後の社会で、知人の誰彼がまるで約束事のように結核菌に侵されていた頃です。きれいな空気と自然に恵まれた田舎の人々は肺病に対する恐怖心が甚だしく、市内へ出るにも療養所の前の道を避けていくくらいで、まして所内の広い庭に散策の歩を運ぶ人

など全くありませんでした。偏屈な、人間嫌いの私は、その静けさが好きで、天気の良い日にはアルゴスを連れて療養者の安静時間が終る頃まで森閑とした病者の苑に安逸怠惰な身を横たえていたものです。冬、春、秋は豊かな日差を享受し、長い夏は椎の木蔭に、遠い山系から渡って来る涼風を求めて……。安静時間の終了を告げる鐘がカランカランと鳴ったので、私はふと現の自分に返りました。芝生の上に赤色帯の文庫本は開かれた儘伏せてあり、アルゴスは何時か深く寝入って

いました。

「今日は。天気が続いていいですね」

直ぐ近くに人なつっこい声が聞えました。

「やあ、」

物憂く答えた私はゆっくり体を起して声の主を見ました。名前も知らない、ここでよく逢う、そしてその都度話かけて来る男、無論療養者の一人ですが、小さな体の胴がいやに長く足の短かい、一寸奇型ではないかとも思える痩せた男でした。彼は私の感じでは、それまで全く私の視野に入らずに不意に現れて（それは多分私の夢想時であるせいかも知れませんが）その眼鼻立の整った細面にひ弱い性格を窺わせる微笑を浮かべながら物柔らかに、何か懐かしそうに声をかけて来るのでした。

「お加減は如何です？」

欠伸を噛んで私は月並な質問をしました。

「ええ、秋になると食欲が進むので良いようです。夜もよく睡れるし」

「それは結構ですネ」

彼は私の傍にしゃがみました。彼は閑な私が一応快く聞き役に廻るのが満足らしく色々話題を持出して話を途切らせません。病氣のこと、療友達の生死のエピソード、患者食の

内容など彼は話を切らして、私が立上るのを恐れるかのように、何時も饒舌になるのです。私は唯聞いている間に、気に止めることもなく彼について若干の知識を得ていました。

彼がさり気なく語るその幼年時代の明るい生活、少年期から青年時代へかけての孤独な明暮れの消息から私は彼が物質的に恵まれた環境に育ち、一流の大学を卒業して、大学中は大きな軍需工場の事務員をしていたということも、この冬に体力の恢復を俟って巨大空洞のある右肺の大手術を受ける予定であることも知っていました。

「その犬、いくつぐらいですか？」

一頻り喋った後、彼はふと慢性湿疹が漸く直りかけの被毛の落ちたアルゴスの背に眼を向けました。

「もう年ですよ、じいさんですよ」

私は漠然とした答をしました。彼がアルゴスに一度も関心を示したことがなかったので恐らく犬が好きでないのだろうと思ったからです。彼は頷いて曖昧な返事が気に入らぬのか暫く黙っていました。病棟の裏手で鳴いている山羊の声と、遠くに過ぎた夏の日を思わせる鈍い雷鳴を聞いてそろそろ私も帰ろうとしました。彼がおかしなことを言い出したの

は、その時です。

「私はネ、犬になったことがあるんですよ」
耳を疑うような驚いた顔で私は彼を見直しました。俗に黒肺と言う。生気の乏しい青黒い顔に薄っすらと奇妙な笑みを湛えてこっくり頷いた彼は徐ろに言葉を継ぐのでした。
「そうです、犬にネ。あなたはダックスフンドと言う犬御存知でしょう。昔は穴熊を捕るのに使った犬ですよ。肢の短かい、胴が土管みたいに長い、ええ、あの漫画みたいなあれですよ」

だって君、人間が犬になるなんて——と、私は反問しようとして直ぐ口を噤んでしまいました。私も今迄に色々変った人間に出逢って来ているし、世間には沢山の風変わりな人間がいる、彼など差詰サナトリウムの住人であると共に脳病院にもいなくてはならぬ困った病者なのだ、と、一瞬の驚きの後に至極あっさり割切ってしまったからです。しかし、彼の方では私が呆氣にとられ、呆然としていると思っただけで、世にも不思議な体験をした者の得意げな微笑を隠さずに、折柄あたりに散歩する療養者の姿もないのを確かめると、低い声で彼の所謂犬化の経験を物語ったのでした。……彼のその奇怪な話に耳を傾

けながら私はアプレイウスの「黄金の驢馬」やカフカの「変身」など外国の変形物語を思い出していました。

その後も私はずっと療養所の庭に憩いと夢想の時を過ごしたのですが、彼の姿は、彼が私に変身譚を聞かせた以後、もうそれっきり見る事が出来ませんでした。私は時々自分のひそかな逸楽である夢想を妨げる彼の存在をうるさく思っていたのに、そうなるか幾らか気掛りにもなるのでした。どうしたのだろう、療養の単調な日常が生んだ虚妄の幻想を偶話相手になった私に実しやかに喋ったことを恥じたのか、それともつい口をすべらせて或は異常な告白癖に唆かされて人の心の内側に蠢く暗い情念の襞を他人に覗かせてしまったことが何としても照臭かったのか知らんなど、私は彼の心の動きを臆測してみたものです。彼が手術を受けると言っていた冬も半ば過ぎたある日、私は療養所の庭を散歩する女患者の一人が大好きで話かけて来たことから彼の可哀相な運命を知りました。彼は適応を危ぶまれた肺葉切除の手術の後、経過が悪く既に死んでいたのです。明るい冬の日差の中で、私は溜息をつき、何かなうつろな気持ちになりました。

★ ☆

啓吉には千草と自分の間に、ある、だれた零囲気が自然に醸されていることが解っていた。それは身に覚えのある生温かい、濁った空気、自分たちが何時の間にかそれに押包まれると、兎角気分がこじれ、後味の悪い巫山戯過ぎや果てはいさかいにまでなってしまうような口争いが始まるあの空気だった。幼ない日、親しい女の子と積木遊びをしていた時、少年時代、勉強会なんかで友だちの家に四、五人で集った時、また大学生の頃、女友だちと野球見物の後で外苑をそぞろ歩きた時などに何かでひよっと気持ちが互にちぐはぐになったものだ。それまで親密だった心と心が、親密だっただけに殊更激しく過熱した不快な、恥ずかしい記憶の幾つかが啓吉にあった。

その日、啓吉は千草と先ず文学の話で少し言い合いをした。千草は啓吉が好きな荷風の小説を頹廢的だと非難した。次に千草は啓吉が戦争について悲観的な見通しをしていることを敗北主義だと罵った。啓吉はそれに対して文学は本質的に頹廢的なものだと言ひ、この戦争の成行は全く絶望的なんだと言ひ返した。女友だちの意見にあまり反対したこと

ない彼には珍らしい旋毛の曲げようだった。

それから千草はこれが元で姫御前のあられない腕力を揮うことになったのだが、自分は護身術を少々習ったから灯火管制の暗い道を遅く戻って来る場合も平気だと言った。啓吉は、男の力にかかつては螳螂の斧さと笑った。もうこの時は、日頃啓吉の胸の奥に隠れているある願望が無意識のうちに兆して、忽ちひとつの悪巧みと化して気弱なこの青年の心を搔乱しかけていたのだ。千草の腕自慢を故意に嘲ったならば、事の勢で或は千草がチビで非力そうに見える、事実腕力の弱い自分に腕尽で護身の技のあることを証しようとはしまいか、と言う期待であった。

「痴漢なんかには負けないわ、私案外力もあるのよ、目方だって十四貫以上よ」

「生兵法は怪我のもとだよ」

「そんないい加減のものじゃないわ、柔道の先生にちゃんと習ったんだから」

「女の子には手加減するから、ほんの型だけ教えるのさ」

啓吉は耳許で小さな悪魔が千草を口惜しがらせる文句を囁いてくれているような気がした。二つ年上の女友だちの友情に狎れて、図に乗っている自分が不愉快でもあったが、吾

れながら浅ましい企みを棄ててしまえなかった。

「馬鹿にしてるのネ。いいわ、でも私、渺なくとも、あなたなんかより強いわよ」

「まさか、瘦せても枯れても男だよ」

虚勢を張ったが、啓吉は思わくに千草が嵌まりそうな様子に内心北叟笑み、何かこわい気もした。

「フフ、丙種合格か、丁種合格の癖に。あなたのような小兵は、ホラこの通りよ」

いきなり啓吉の傍に寄った千草は、不意を衝かれて身を掠す間もない啓吉の右腕を逆に取り、強く振上げた。

「あっ、痛い、痛い、何するんだ、痛いよ」

啓吉は意気地なく及び腰になって体を左手で支えて悲鳴をあげた。千草はそんな弱虫な啓吉を冗談とも本気ともつかぬいたぶりように暫く責めたが、予想通りの啓吉の非力に呆れたのかあっさり振上げていた手を放した。と、今度は啓吉が両方の拳を交互に突出すボクシングもどきの攻め方で、千草の青いブラウスの胸や腹のあたりを軽打し出した。

「いやア、よしてよ、よしてよ」

千草は啓吉の目まぐるしく突出す拳の奇襲に閉口して、擦ったような声を出してたじた

じと後退りした。それを尚今しがた腕を振じられた仕返しとばかりに啓吉が追詰めたので座敷中を逃げながら到頭千草は床の間の前に棒立ちになってしまった。その床の間には何時もそこにある琴と魔除けの華車な小太刀の前に武者人形と精巧な細工の小さな兜が幾つかきらびやかに飾ってあった。それは軍属として南方戦線にいる千草の父のものであったが、殊に兜は多少自慢げに千草が説明したところでは、信玄の諏訪法性の兜、家康の裏白と言う、山口伊豆守の兜かげろうなどのミニアチューアで、節句が済めばデパートの地下室に保管して貰う手筈になっている大事な品であった。

「やめなさいよ、やめないと、ひどいわよ」

後を気にした千草の制止の声も、一旦胸に描いた、企みに執着する啓吉の耳には入らない。已むなく千草は啓吉の手を捕らえて座敷の中央に押戻し、曾て柔道の教師に習った肉股をかけて啓吉を倒した。

「さアどうだ、私の言ったこと本当だったでしょう。参ったでしょう」

啓吉の鳩尾に膝頭をかけて、ぐりぐりと圧しながら千草は言った。

「なんの、なんの」

啓吉は元々こんな風になるのを望んで仕掛けた戯れなのだから真剣に抵抗する気はなかったが、こうなると欲が出てもっと完全に体の下に圧伏されてみたくなり、扁平足の短かい足で頻りに畳を蹴った。

「そんなに暴れると、唾をかけるわよ」

畳の上に礫にしたように啓吉の両手を横に伸ばさせて、その手首を抑えた千草は啓吉の上にかぶさった形で、唇を尖らせた顔を男の顔に近付けた。が、女の唾液を甘露のように思っている男はずるくおどけて執拗に腕を続ける。ちいッと千草が舌打ちした。そして啓吉の胸板を押していた膝をずらすと、啓吉の胸の上にどっかりと肉付のいい尻を据えた。

「フフフ、暴れたって私が楽ちんなだけよ。もう降参なさい。こんな恥ずかしいこと、もうやめましょう、ネ、参った？」

千草は啓吉の右腕を自分の左膝に敷き、左手は右手に摺んで啓吉の喉元に押当てて促した。しつこく足搔く相手を突放さずに飽迄も降伏を強いるところに粘っこの女の性格の一面が感じられた。

「いくら足搔いてもこうなってはあなたの負けよ。男らしく降参したって言いなさい。昔の組討だったら疾く私に首をかかれてる



わよ」
色白の顔を赤らめて、千草は啓吉を見下した。切長の眼には、明らかに嗜虐の光があった。女の尻が次第に上へずって、鮮かに筋目

の立った黒いズボンのちきれそうな太腿の間に締付けられているような啓吉の細面があった。苦しげな、また何か法悦にでも浸っているような。

「弱虫の癖してしぶといのネ、いいわ、音をあげるまでやっつけたげる。容赦しないゾ」

子供の組討遊びが時に喧嘩になってしまふ場合のように、啓吉を馬乗り組敷いた千草は何時か本気で、男の頭に手をかけて乱暴に小突いているのであった。

昨日は失礼しました。大分巫山戯たことを後悔しています。あれから下宿へ戻ると田舎の父の使者の者が来ていました。父の廻船業も船が大部分軍に徴用された為閑だと言うことです。その男と喋っているうちに頭が痛んで来て、後で熱を計ってみたら八度五分ありました。どうやら風邪をひいたらしく今日は寝ています。どうも僕は会社勤めが身に合わぬらしく、一日勤めて下宿の書籍や雑誌が雑然と置いてある住慣れた一間に帰ると、がっくり疲れてほとと吐息の出る始末です。こんな時代でなければ、徴用なんていやな国家権力の発動がなければ僕は下宿にいて終日本を読んだり、戯曲の習作に耽ったりしたい非生産的な人間なのですから、会社の机に向ってカードで工員の労働時間をチェ

ックしたり、給料の計算をしたりする仕事など土台無理なことなのです。そんな事務能力の乏しい僕を女子商業出で、算盤が達者な、字も際立ってきれいな貴女が仕事の上で何かとカバーして下さる時、僕は貴女の親切に深く感謝しつつも職場で駄目な自分弱者の幸福を味っていると言ったら職場の勇者である貴方は更に僕を軽蔑するでしょう。貴女はもう日頃の僕の言動から感付いておられるでしょうが、僕は幼年時代からきれいな女の子に従って、意地悪されたり、虐げられたりされながら遊んで貰うことに深い喜びを覚えていた人間です。職場の先輩の貴女が算盤もろくに弾けず、計算機の取扱も下手な僕に意地悪く出られるどころか色々面倒を見て下さる。それ故親しい友だちになった訳ですが、実は僕は何時も貴女から職場にいる時ばかりでなく何か圧迫を感じている。そして貴女の体から発する強い迫力のようなものを過敏なまでに受取っているのです。昨日、一寸した言葉の絡み合いがもとで貴女に逆らった僕は、他愛なく貴女の豊かな体の下に押潰されるように組敷かれてしまいました。柔らかなお尻の下敷になった僕は故意に喜劇

的な足搔きをしました。が、もっと一生懸命に蹴いたとしても僕の胸の上から貴女の体重を押退けられはしなかったでしょう。貴女は昔の組打ならもう首を搔いていると言われましたが、僕は貴女が手に短刀を閃かせて、僕の首を搔切って下さったなら……と、そんな妖しく血腥い空想に戦っていたのです。あの床の間の降魔の小太刀、武者人形や兜などもあの際僕のイメージを刺戟していました。僕はその昔、粟津の合戦で巴御前に組敷かれ首を搔切られた内田三郎家吉の最後を羨しく思っているのです。この手紙をお読みになったら貴女はもう僕のような変質者とは付合わないことにしよう。と心を決められるに違いありません。それは僕にとって何よりも辛い、悲しいことです。が、僕はもう自分の中にある情念の病巣をひた隠しにして偽善的に貴女と……ああ、僕は到頭へんな手紙を書いてしまった。貴女の怒った顔が眼に浮かびます。啓吉は取って置き、便箋の上質の紙の上にペンを滑らせた。下宿の窓から見える新緑の杜がぼうと雨に煙っていた。お手紙拝見しました。お風邪の由、呉々もお大切に。毎日会社で顔を合わせており、

また時々日曜にうちにお遊びにいらっしゃるのに改まって、お手紙を交換するのは何だかよそよそしい感じでおかしい気がします。あなたって初めて会社に来られた時から私一見して、ははア文学青年だなんて解りました。文学オンチの私は些か興味を感じたわけなんです。私が職場の勇者だなんて——私、本当はいいやながら女子商業へ通ったのです。私も、実際はあなた以上の怠け者（あら失礼）かも知れませんが。よ。だって昔から遊ぶことが大好きなんですもの。でも大好きな父のいないこの古びた大きな家に継母と頭の弱い姪と暮らす一日がたまらないのです。会社へいくことはだから私の救い、と言ったら大袈裟かな。何処までも取澄ました、王朝風の歌人でございましてと言わんばかりの継母とモヤモヤが起きたりすると、特志看護婦か何かになって職場へいきたくらいよ。あなたは、「変質者」なんて書いていますが、小説の込入った心理描写のそこなど飛ばして読む私ですが、人間の心の裏側はそれは複雑怪奇なものじゃないかと考えています。私は決してきれいな女の子ではありませんが、小学生時代にはよく男の子と喧嘩して、腕

白小僧をやっつけることに痛快さを覚えていたものです。大人しい子を何と言う理由もなしにいじめてやったことも屢ある私です。それから結核で死んだ弟が未だ丈夫だった頃、夜蒲団を敷いてからよく二人で柔道？ をしました。弟が挑戦して来るからです。ママ（私たちの本当のお母様です）の止めるのもきかずに上になり下になりの大奮闘の末、弟を捻伏せてぎゅうぎゅうの目に逢わせたものです。一度なんか柔道ごっこに熱が入り過ぎて、夢中になった弟が私の手に噛み付いたりしたので、私もつかかとなり、弟のお腹の上に馬乗りに跨って喉をぎゅっと締めても未だ足りずに、へとへとになっている弟の顔の上にお尻を乗せて「お姉様のお尻の匂いをよく嗅いでおきなさい」なんて……全く呆れ果てた乱暴もした私なのです。この時は流石に甘いママも私を弟の体の上から突飛ばし、「女学生のお癖に何てことをするんです。お琴でも習いなさい」って。すっかり、叱られちゃった。あの柔道ごっこで、私のお尻の下になつて蹴く弟の軟かい体の感覚を私は今も思い出すことがあります。で、昨日あなたを少しいじめた時も……ネ、変質者なんて、

まるで重たい十字架を背負った人みたいなこと言わないで。早く癒って会社に出て来て下さい、忙しいのよ。そして日曜日にはまたうちへいらっしやいな。追伸、昨日私しまいについ荒れちゃって、ごめんなさいネ。

千草はセピアの罫の入った便箋に啓吉への返事を書いた。社内マイクから軍楽マーチが流れ、やがて勿体ぶった海軍報道部長の声が昼休みの社員たちの耳をそば立たせた。

日曜日の午後、啓吉は千草を訪ねた。池のほとりに沢山ある紫陽花が紫の穂を重そうにつけて、樹の多い庭を一層青ずませていた。椎の花の甘く強い香りもそこはかとなく啓吉の心を悩ましくさせる気怠いような夏の日だった。継母は短歌の方の会合があつて早く出掛け、姪は近郊の親戚の家に野菜を買いにいった、自分は昼前まで寝ていたと言う千草の眼は腫れぼったかった。

「来週の日曜は私、田舎へお米買いに行く」千草は苦笑して言った。啓吉は父が使の者に持たせて寄越した缶詰を差出した。

「こんなに。悪いわネ」

五箇の缶詰のうち二箇を千草は本箱の中にしまつて

「これダンに食べさせるの」

と言った。ダンには千草が可愛がつているダックスフンドで、犬嫌いの継母がこの犬に辛く当たっていることをかねて苦にしていた。

「あなたって随分力なしネ、男はどんなチビでも、あら御免なさい、小柄な人でもいざとなると案外な力を出すものよ。この間はわざと私に負けたんでしよう、今日はハンデつけるわ、私が先ず抑えられるから、実力を示してごらんなさいナ」

色々な話の後で、思い掛けなく千草がこんなことを言い出した時、既に自分の隠湿な望み、喜びを打明けてしまった年上の女から恵まれる好餌を斥け得る啓吉ではなかった。

「さアどうやって抑えつけてもいいわ、上に乗ってもよくてよ」

千草は畳の上に仰向けに寝て、無抵抗の姿勢でいるのだが、豊かな乳房で盛り上がったブラウスの胸のあたりにちらと眼を遣っただけで啓吉は後込みしてしまった。彼は女の体に跨らずに右腕で千草の頸を巻き、左手で千草の利腕を利用して、上体の重みを女の胸にかけて抑え込もうとした。

「それでいいの、遠慮しなくてもいいのよ」「うん、これで起きられないだろう」

「馬鹿ねエ、直ぐ跳返すから、いいこと、それッ」

掛声と共に啓吉は跳返され、千草を生半可に抑え込んだ形のまま重なってごろごろ畳四枚ほどを転がされた。二人の体が止まった机の傍で、千草は含み笑いをしながら、ゆっくりとした動作で啓吉を組敷いた。

「ホラ、駄目じゃない、この前と同じネ」

千草は弱い男の胸の上に膝を立てて跨り、反り身になった。初めて馬乗りになった時の羞恥を抑えた不自然な恰好ではなく、密室での戯れをリードしているような、おっとりとした姿であった。

「手を抑えないであげるから存分に反抗しなさいよ、少しは口惜しがるものよ」

好きでよく読んでいる軍記物に屢使われる「馬上豊かにゆらりがっしと打跨がり」と言う言葉がふと啓吉の頭に浮んだ時、短い扁平足の足をばたつかせて跳く前にある考えが彼を急に大胆にした。それはこの機会に千草の体臭をよく知っておこうと言う望みだった。

啓吉は抗うふりをして、女のレモン色のスカートのはしを摘んだ。忽ち彼の視野は小暗い黄色い世界に閉ざされた。彼の耽美的な眼に千草の青白い太腿は白い二本の円柱のように

見え、淡青のズロースは開き切ったはなだ色の花びらのように見えた。そしてそこには一種濃密な匂いが漂っているのだった。

「馬鹿！ 何てことするの」

鋭い叱声と同時にその黄色い世界は邪険に塗り取られ、啓吉はパチンパチンと頬に千草の平手打を食って、一瞬の幻覚から醒めた。有無を言わず千草のしなやかな指が喉元にかかり、それから彼は息が詰まる寸前かと思えるくらいきつく、それでいて僅かにゆとりを残す極めて技巧的な締め方で鬨り物を扱うようにさいなまれたのであった。

啓吉は物心つく時分から次々と色んな病気に侵された不運な人間だった。小児結核、腎臓炎、神経衰弱、ヘルニヤなどに悩まされた虚弱児の彼は夙に強健な人間に対する劣等感を抱いていた。鋼のような少年の体を見ると羨望を感じるより寧ろ恐怖の念に捕らえられた。小学校中学校を通じて、彼には腕力の強い生徒の気紛れの犠にされた記憶が山とあった。取分け雨の日の昼休み、クラスの乱暴者に柔道場へ連れていかれ組敷かれて慰さまれたことや、先生が休んで自習させられている時間に数人の悪い連中の為に突然机の間に仰向けに倒されて無惨な「解剖」を受けたこと

など、それが少年期の暗い性の目覚めに関わる悪戯だけに堪え難い厭な記憶であった。こうした屈辱の数々によって啓吉は何時か男が嫌になっていた。彼は同じいじめられるなら女の子にそうされる方を取りたかった。最初に彼が小さい女の子の稚いサジズムの犠牲になってから、大学の国文科に進んだ頃、夜間の仏語学校で知合った女子大生から主に心理的に虐げられる迄、彼のマゾヒズムは精神的にも肉体的にもチリリと小さな火傷の痛みにも似た苦痛を与えてくれる、その折々の女王を仰ぎながら隠花植物のように育ち広がっていったのである。戦争になる以前、毎年のスポーツシーズンになると、彼は新聞の運動欄を飾る女子選手の写真を切抜いてスクラップブックに収めた。大きく股をひろげて槍を投げる女、強靱な腰を回転させて力強い腕力で円盤を抛る女、均斉美溢れる体を傾げて鮮やかにハードルを飛越す女、肥馬に軽やかに跨って拍車を入れる馬術の女など、彼をある快感に誘うスナップの数々を蒐集して楽しんだ。そしてこれ等体格秀れた、彼には魔女のように見える女子選手のスパイクで踏みしめられ、黒いパンツの尻の下に敷かれ窒息させられる自分を空想すると楽しみは更に増すの

だった。啓吉はまた娯楽雑誌を漁って、女武者の登場する歴史小説を愛読した。美しく凛しく描かれた女武者の挿絵を丁寧に切取ってスクラップブックに加えた。源平盛衰記や平家物語、鎌倉三代記などで、巴御前や阪額の勇戦の模様を知ると、その箇所を精読して華やかな血腥い幻想に吾れを忘れた。「紫隔子を織付たる直垂に、菊閉滋くして、萌黄絲威の腹巻に袖付て、五枚甲の緒をしめ、三尺五寸の太刀に二十四指たる真羽の矢の射残したるを負、重藤の弓に、せき弦かけ、連銭葦毛の馬に、金覆輪の鞍置てぞ乗たりける」という巴御前の出立の描写を彼は暗記していた。彼が夜、眠りに入る前にそんな勇婦奮戦の件を読んでからスタンドの灯を消すと、やがて耳の奥に潮騒のように関の音が聞えて来る。闇の中で眼をつむり気を澄ますうちに目蓋の裏にあかあかと燃ゆる日輪に照らされた修羅場が現出する。馬蹄のひびき、軍鼓の音、矢声、劍戟の響き、夥しい旗、楯の板、濛々と上がる砂塵、そんな啓吉が予々親んでいる軍記物で想像を逞しくしている昔の戦場の光景の中から間もなく白馬に跨がり、白絲威の鎧が緋威に見える程、返り血を浴びたうら若い女武者が一騎、額に当てた天冠を光らせ、長

い黒髪を背後になびくに任せて此方へ進んで来るのであった。すると啓吉は既に小鎧に身を固めた少年の武者になっていて、金作りの小太刀を翳して女武者に斬りかかる、もう幾人か敵を斬落した朱に染んだ女武者の薙刀と真新らしい初陣の陣太刀が火花を散らす、啓吉はこの空想を幾度繰返したことだろう。彼が恣に繰広げる空想の修羅場では美しい顔立にもかかわらず胴長、脚短かの矮軀の悲哀をひそかに託つ彼ではなく、大柄な女武者と激しく渡合う中背の美少年に変形していた。火の出るような打物の争闘から二人は馬を寄合って組討ちに移る。そして遂に剛勇な女武者の膝下に組敷かれ首を取られる迄の始終を出来るだけ丹念に辿り、鮮明なイメージとして脳裡に刻み込もうとする一時の愉悦を彼は大切にはぐくんでいた。その愉悦の頂点のひとつこまは、血腥く汗臭い体で彼の上に跨った女武者がその両膝で必死に足掻く彼の手の自由を奪い、唇の辺に冷たい嗜虐の笑みを湛えて左手で彼の顎を押上げて一気に首級を挙げる時だ。女武者の右手の腰刀の刃が自分の頸に食入る瞬間には彼は寢床の中でわなわなと震え、それからぐったり虚脱したように、体内の精気が流れ出てしまった男になるのであった。

た。その翌日の夕刻、啓吉は計算課主任の東谷の家に行った。予て俺が征く時は日本の虎の子兵団が編成される危急存亡の秋なのだと言っていた東谷に召集令が来たのだ。濁った運河の傍の小さな丘の陰にマッチ箱のような東谷の家があった。何処かの会社の守衛をしていると言う六十恰好の父親と眼の悪い肥った母親、紺緋のモンペをはき、赤いヘアテープをした愛敬のいい妹がいた。千草は同僚の女子事務員三人と先に来て勝手の手伝いなどしたようだった。出征祝の宴が始まり、乏しい酒がひと通り廻ると、カリエスで背の曲がった宇田と言う会計課員が渋い声で木曾節を唄った。続いて胃弱の計算課長が酒で赤黒くなった顔を振りながら黒田節をど鳴った。それから女性組の落下傘部隊の歌などひり頻り座が賑わったが、啓吉は僅かの酒が直ぐ頭に來て、明りが戸外へ洩れぬよう黒い紙を窓に貼った窄いその部屋での騒ぎが何か仄暗い灯に集う魑魅魍魎の酒盛のように思えるのだった。誰かがぐどく東谷を激励している声にかぶさるような女の高い笑顔を夢現に聞いているうちに千草が劍舞をやり出したので、はたと現実に引戻された。千草は隣の部屋ですつ

かり仕度したらしく、白鉢巻、剣道の稽古着姿で白虎隊を舞った。詩は東谷が吟じた。農村出身者らしい岩乗な体軀の東谷は端座し、肘を張り、悲壮な声をふり絞った。啓吉の胸に中学校以来の偉丈夫への嫌悪と恐怖の念いが蘇った。赤茶けた電灯の光に千草の振る玩具の刀がキラキラ光った。

帰りの市電の中で、千草は別人のように萎れていた。

「みんな戦争にいくのネ、若い人がみんな。

この戦争だけは勝ちたい」

何時になく感傷的な千草を啓吉は訝しみ、ことによると東谷を愛しているのか知らんとも考えた。が、彼女は乗換える駅が近付くと元氣になり、啓吉の顔を覗き込んで

「青い顔してるネ、疲れたの？ それとも昨日、私があまり締めたから？」

悪戯っぽい笑みを浮かべた。乗客は妙なかったし、千草の声も低かったが、啓吉の頬は火照った。偶机の脇に彼を馬乗り組敷いた千草は柔らかな手でじわじわ喉を締める責めの終りに机上のペン皿から切出しを取って、彼の喉笛を掻切る真似をしてみせて、彼が手紙の中に打明けた倒錯趣味を喜ばせてくれたのであった。千草は乗換駅で手を振って別れ

た。

「氣をつけてネ」

年上の女友だらしい情感のある声が啓吉の耳に残った。終点までいく彼は悪い酒の酔が愈頭を抑えて来るようで、鬱々と電車の動揺に身を任かせていた。泣き出しそうだった空から雨が勢よく降って来て、大きい雨粒が車窓に当り出した。彼は再び夢現の茫漠たる暗がりへ誰かに導かれていくような、自分を喪いそうな氣怠さに包まれていた……。

……爽やかな朝風にびゅうびゅうと鞭の音がして、啓吉は愕然と眼覚めた。彼は先ず自分が大きなボール箱を潰して縁を伸ばし、その上に藁を敷きつめた中に寝ていたことに驚きの眼を見張ったが、それも束の間、何と自分の体が一夜にして黒い被毛に蔽われた犬の体に変っている事実に氣付かねばならなかった。而も犬になってしまった自分の体には見覚えがあった、いやあり過ぎた。四肢が短かく、胴の長い、腹が地面につきそうに立っているあの不恰好な犬、ダックスフンド、これは千草の愛犬のダンに似ている、あれと同じ種類の犬になったのか。啓吉は本当に驚いていながらも未だ寝起きの頭を去らぬ夜の夢魔のいたずらを笑ってやる用意が心の片隅にあ

った。彼は強いパンチを食ってスリッパダウソしたボクサーが立直って浮かべる不敵な笑みをふっと思い出していた。馬鹿げた夢を払出そうとするように頻りに頭を振った。だが……彼はやはり最早黒い、背の低い、胴長短脚の犬になったことに変わりなかった。

「ダン、ダン、ダン、出ておいで」

若い女の弾んだ声。啓吉は縁側にいたのだ。声のする方を見ると、雨あがりの盛んに水蒸気の上がっている庭にクリーム色のブラウス、黒いスカートの千草が革の鞭を手にして立っているではないか。瞬間啓吉は深い絶望感が自分の夢であれかしと願う念いを、見る見る押流してしまう目眩む悲しみに打沈んだ。ああ、ダックスフンド、千草が何時だったか嘲弄的に言ったことがある。

「あなたって何処かうちのダンに似てるわネ体付が……ネ、トルソが長くて、脚が短かいじゃない、あらあら、私悪いこと言っちゃった。ごめんなさい、氣にしないでネ」

啓吉には自分がどうして犬に、それも千草の家のダンに同化し、犬族に変身してしまったのか解る筈もなく、その非現実的な童話じみた事実を、誰に訴える術も今や全くなかった。

「さ、座をひと廻りしましょう、運動不足になるわよ、おじいちゃん」

きびしい調教師のように千草は革鞭を鳴らしている。その鞭の唸りに意気地なく脅えて啓吉はのろのろと湿った庭土を踏んで女の後に従った。朝の日差が二日酔の眼にしみて頭がくらくらした。彼は自分の体がひどく老ぼれていることにも驚き呆れるほかなかった。ダンにはや寿命の大半を消耗した老犬だったのである。

「また蚤が湧いたんだわ」

千草は啓吉の傍に跼んだ。

「じっとしてるのよ、動かないで！」

青い敷石の上に啓吉を腹這わせる、慣れた手付で千草は蚤を探し始めた。犬になった啓吉は甘えて鼻を鳴らしながら千草のスカートの下に顔を入れて臭いを嗅いだ。彼は自分の理性や意志がもうすっかり犬の感覚によって滅ぼされ、自分が完全に犬になり切っていることを改めて認識させられた。彼は俄に発達した自分の異常な嗅覚に途惑

った。曾て彼はホメロスの叙事詩「オデュッセイア」を読み、英雄オデュッセウスがトロイ陥落後二〇年、変装して帰家した際、誰もオデュッセウスと気付かぬ中によく彼を認めて慕い寄った彼の愛犬アルゴスの嗅覚に驚歎したものだ、思いもよらなかった犬の境涯に落ちた今、不意に鋭敏になった嗅覚に氣も狂わんばかりだった。そんな犬化人間啓吉を、その突然変異を知るべくもない千草は、不用意にスカートの前を開けて、青白い太腿

黒いズロースを見せてダン——啓吉の蚤を捕らえようと、切長の眼を輝かせている。啓吉は舌を出して千草の内腿をなめた。擦ったそうに千草が笑う。ああ、人間時代の僕はどんなにこの女の体臭を嗅ぎたかったことだろう。髪の毛の臭い、口の臭い、胸の臭い、腋の臭い、腕の臭い、腹の臭い、股間の臭い、尻の臭い、脚の臭い。足裏の臭い、啓吉は宿望の充足の前に心が千々に乱れるのであった。

「こんどはお腹よ、そら寝んねしてごらん」

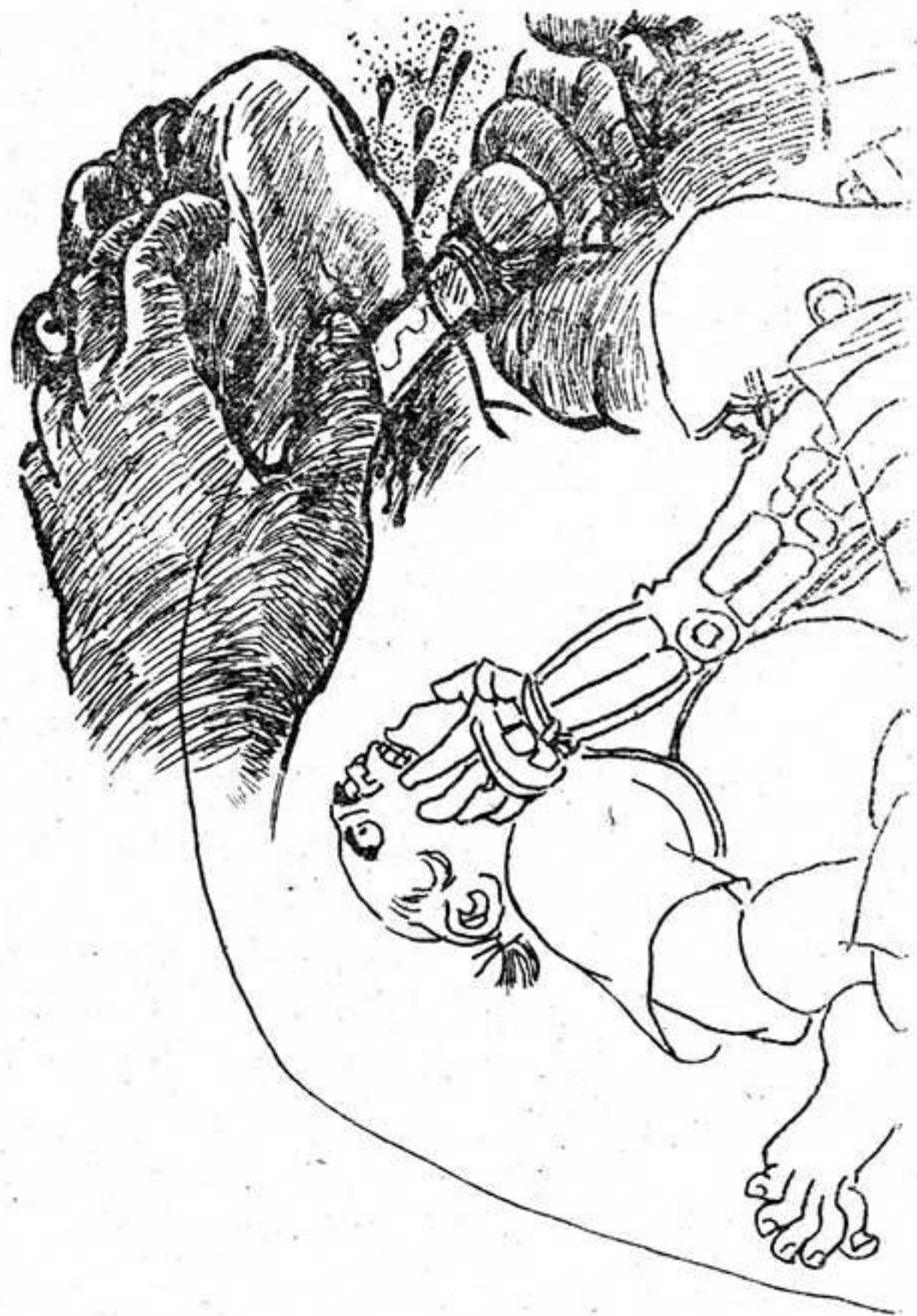


仰向けにされた啓吉の胸に梨の果の色に似た千草の膝頭が軽く触れていた。啓吉は女の腿の臭いを心ゆくまで嗅いでいるうちに自分の下宿の机の引出に固く鍵をかけて秘蔵してある千草のズロースを思い出した。それは大分水を潜ってはいたが絹製の白い手触りのよいものだった。彼は風の強いある春の日の午下がり、千草を訪ねて思わぬ収獲を得た。風に飛ばされて、庭木戸に引掛かっていた生乾きのズロースを素早く背広のポケット

トに仕舞い込んでから彼は徐ろにベルを押したのであった。そのズロースを盗んだ当座、彼は夜毎スタンドの下にそれを広げて飽かずに眺めたものだった。

明るい灯影につくづくと見詰めていると、一枚の白い絹のズロースは何時か灰色の砂丘のように或は雪の色に泡立つ海のようにも見えて、彼自身はそこを旅する隊商の一人とも舟人の一人とも考えられるのだった。それから彼の幻想は暗転して、深い睡りの底に沈む巨大な女、ホメロスの詩篇に登場するような魔力を備えた女の股間を隠すそれは亜熱帯植物の一枚の花びらとなり彼は一匹の蟻と化してその上を彷徨うのであった。啓吉は快く千草にブラシをかけて貰いながら嗅覚力の拡大を手放して喜び、物狂わしく吠えようとした。

しかし、彼はその代償のように大きな能力を喪失している自分にまたぞろ驚き周章でなければならなかった。彼の眼は色彩を楽しむことが出来なくなっていたのである。彼は学生時代から自分の服装には割に無関心だったが



女の衣裳には眼を引かれる方であった。戦争前の銀座通り、劇場の中、小旅行の列車の中、展覧会場などで彼は女性の服飾に殊にその色合に興味を抱いた。染物屋の飾窓の前には彼はよく佇んで、新しい着物の模様眼を奪われていた。彼は女友だちの趣味のいい着物や洋服をくどい程褒めて却ってうるさがられた。例の夜半の空想の時刻、軍記物の世界から抜出て来る美貌の女武者の出立を様々に変えてみることも彼の楽しみのひとつだった。

た。戦時色の簡素な女性の服装は彼を失望させ、味気なくさせていたが、犬になった結果、殆ど色盲状態の自分を見出した悲しみは仲々深刻であった。

翌朝の眼覚めに、もしやの期待をしたが、啓吉はやはりダックスフンドのダン以外の何者でもなかった。自殺をしない限りこの畜化状態から逃られぬ悲境に彼は哭いた。「おや、ダン、どこか痛いのか？」

姿見に向かって、短かく刈った髪を梳きながら千草は氣遣わしげに言った。老犬ダンを憐れむ彼女は自分の部屋の縁側にボール紙を敷き藁を置いて、ダンを寝かせていた。彼女が会社へ行ってしまふと、犬嫌いの継母と犬に何の関心も示さない姪だけになるので、長い退屈な昼をダンの啓吉は佗びしく木陰にまどろむばかりであった。漸く黄昏になり、千草が帰って来ると、啓吉は老犬らしからぬ敏捷な動作で迎えに出て、その儘彼女の部屋に入ってしまう。彼女は優しく

彼の脇腹について藁屑を取ってやりながら啓吉が人間時代には聞いたこともない猫撫声で言った。

「ダンや、いい子、今日も空襲がなくてよかったわネ」

千草は、暑そうにシュミーズまで脱ぎ捨てた。直ぐに湯殿へいくかと思うと、そうではなく姿見の前に立って繁々と自分の体のあちこちを調べるようなきつい眼差で見廻し出すのだ。姿見に背を向けて肩越しに体のうしろを見る。それからアクロバットダンサーのようなポーズをして初夏痩せした白皙の体の隅々までも眼を配って、体の一部の僅かの変化も見逃すまいとする真剣な所作が続いた。啓吉はそんな千草を腹這いになってじっと見ているうちに一日働いて来た汗臭い女の体より姿見に映る同じひとの体の方が何か淫靡な艶を湛えているのに気付いた。やがて千草はのろろした動作でズロースをはき替え、湯殿へいった。啓吉はその時を待兼ねていたように座敷の隅にある洗濯物を入れる小さな籐の籠に顔を突込んだ。彼は直ぐ女主人の汗と脂のしみたズロースとソックスをくわえ出して縁側の藁の上に持って来た。女主人の皮膚の汗線、脂線から分泌される塩分、尿酸、脂肪

酸などの混合臭のふんだんに籠っているこの二品の上に彼は顎を乗せ眼を閉じた。蟬の聲が濃い夕映の中に降るようだった。

「こらッ、ダン。いけないことするのネ、汚れたとこなめてたんでしょ、駄目よ、ひどいから」

湯上がりの体を白い浴衣に包んだ千草は軽く啓吉の尻を叩いた。啓吉が女主人の折檻を受けようと思つて、ズロースを前肢で抑えて逆らつてみても

「フッフ、駄目よ、そんなことしちや」

彼が予想した鞭打も平手打も加えられず柔らかな愛撫の手を頭に置かれた。その夜、千草は剣舞の稽古をした。また会社の誰かに召集令状が来て、壮行会があるのだらうと思つたが、前にそのことで千草と言ひ合いもしたのだが、啓吉は戦争の成行に希望を持っていなかった。強大な国力に立向かつたのでは滅びるのも当然と諦めていた。彼はボーア戦争を扱ったナチスの宣伝映画を観て、優秀な装備を誇る英国軍隊が善戦するボーア人たちを次第に圧倒し、遂に鎮圧してしまう過程をひそかに小気味よく思つたり、八幅愚童記に詳しく誌されている蒙古軍の攻鼓を鳴らし、鉄砲を打ち、毒矢を射かける豪猛な戦闘振りに

悩まされた日本軍、残酷な殺され方をされた対馬、老岐の住民の血汐を被虐の欲びで想像したりする人間であつた。千草は玩具の刀でなく、床の間の刀架から小太刀を取つて、静かに舞つた。白刃に対する本能的な怖れが啓吉の被毛を逆立てた。寝る前に、千草は啓吉を庭へ連れ出した。彼女は涼しい夜風に吹かれ、御機嫌で、あした浜辺をさまよえばアなと小声に歌っていたが、大きな向日葵の花の下へ踞むと小用をした。月が美しく遠い空に探照灯の光の筋がゆっくり移動していた。

「ダン、早くおいで。戸を閉めるから」

向日葵の下の僅かの濡れた土の辺を立去り兼ねていた啓吉の頭に、会社の白いタイル張りのトイレットの光景が浮かんだ。何時も飴色の灯のともった男女共用のその白い世界は、クリーム色の堅い木のドアの陰で、女子事務員が体を開く故に彼には神秘的な場所のようにも思われた。退勤時のトイレットの鏡の前に立った二、三人の乙女に気後れして、用を足さずに引返したことも再三あつたがその一瞥しただけの光景は常に新鮮だった。鏡の前で顔を洗つたり、髪を直したり、口紅をつけたりする乙女たちは、彼女たちが交互にクリーム色のドアを開閉して白い密室に排泄

したネクタールの臭いに包まれている為に啓吉の官能を痺れさせた。若さを修飾する衣裳を欠いた紺や茶色のズボン姿の彼女たちはそんな色の鉢にすらりと伸び開いた美しい花々だ、その分泌する香液を集めて、年古りた葡萄酒にまぜて……と、アルコールに弱い癖に啓吉は放恣な痴夢に耽ったこともあった。

雨戸の隙間から樹脂の香の忍び入る朝まだき白蚊帳の中の千草は夏蒲団をはいで、仄白く光るような脚を揃えて窮屈そうな海老寝をしていた。防空服を枕元に用意して半裸体で睡る千草の若々しい体から汗の粒が吹き出て盛り上がった乳房は熱れ過ぎようとする果実のように見えた。広々とした蚊帳にひとり寝の千草の蒲団の裾にまどろんでいた啓吉はふと立上って、女主人の汗ばんだ体をなめに行った。愛犬が蚊の媒介によるフィラリヤ病に罹らぬよう、夏は蚊帳の中へ入れる主だった。

「わああ、擦りたい、ダン、未だ夜よ、うるさいわ」

女主人は寝呆け声を出して啓吉の体を押退けようとした。彼はそれでも甘ったれた仕種で仔犬のように女主人の胸の谷間をなめようとして纏わり離れなかった。彼は犬に変身し

た時、茫漠とした、犬の記憶と思われる体験的知識の嵩が自分の頭を重くしたことに気付いていた。その知識には少女の振る革の鞭の音があつた。彼は未明の女主人の居間で何故か鞭の音、その痛みを恋うのだった。

「ダン、寝呆けないで。そんなに巫山戯るとホラ、継母さんが二階から下りて来るわよ」

千草は叱つたが、眼が覚めてしまったらしく、横臥した儘足を上げて啓吉をからかい出した。声を出さずに主従は高い窓から明け方の青い光の入る蚊帳の中で戯れ合った。女主人は右足を伸ばし、脹脛の下に啓吉の背中を抑えたいらしかつた。彼は低く呻くと、白いゆもじのはしを噛んだ。

「あ、馬鹿、切れるじやないの」

女主人の足が彼の脇腹を蹴った。彼はシーツの上に手もなく圧し伸ばしたように腹這わされ、背中に女主人が馬乗りになった。

「大人しくしないと、こうよ」

笑いながら女主人は啓吉の鼻をシートにこすりつけた。ひどい折檻をして貰いたい彼の暗い嗜好を知る由もない女主人は両膝で体重を支え、首を抑えた手にも力をこめてはいなかった。

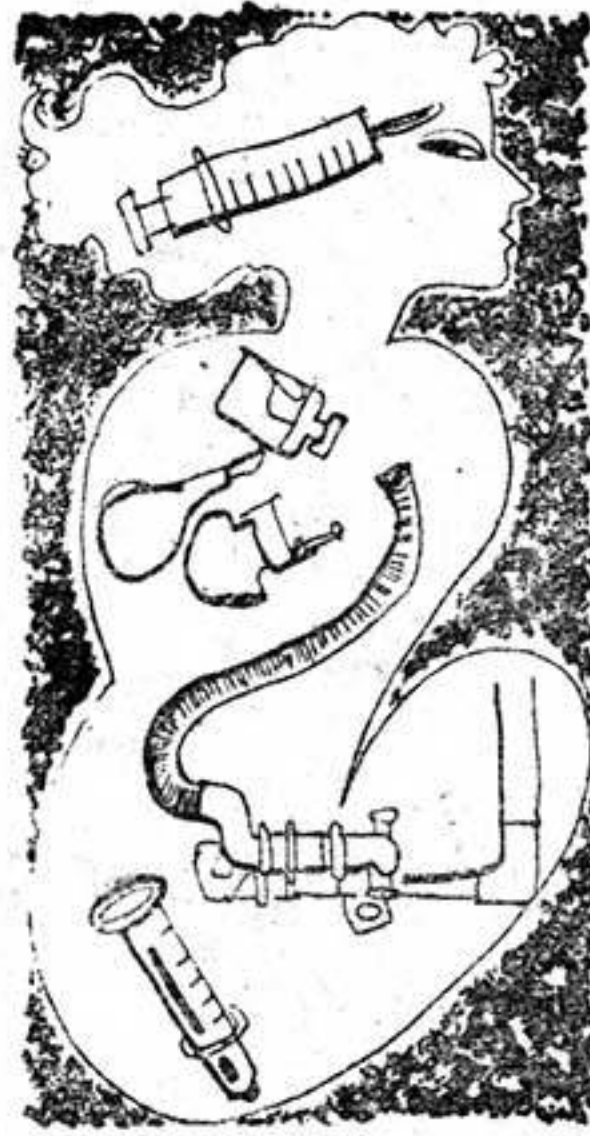
二、三日経って、蒸暑く曇った真昼、啓吉

は突然庭木戸を開けて入って来た男にまどろみを破られた。カーキ色の作業服を着、ゲートルを巻いた貧相なその中年男は縁側に出た千草の継母と二言、三言、言葉を交わした後啓吉の鎖を掴んで荒々しく彼を戸外へ曳き出した。附近の八幡様の境内に彼は連れていかれた。そこには大型や中型の犬が五、六頭不安な表情で坐っていて、小役人と巡査が獄卒のように彼等の傍に立っていた。間もなく犬たちは檻をつけたリヤカー二台に分乗させられた。啓吉は恐ろしい運命の予感に戦慄して悲しげに吠えた。

……サイレンが断続的に鳴っていた。廊下に慌しい足音が乱れた。白い病室にぼっかり眼を開けて、啓吉は横たわっていた。隣のベッドは空で、色褪せた草色の藁蒲団が処々綻びを曝して二つ折りに重ねられてあった。床頭台に夏菊が活けてあるらしく、そんな匂いがした。空襲だナと思つたが頭を上げるのも気怠く、それに第一自分が現在生きていることも、その前の不思議な畜化生活の記憶も何とも理解に苦しむことであつたが彼はまた乳色に濁った睡りの底へ落ちていくのだった。

(おわり)

【告白】 無花果の幻想



＜浣腸開眼＞

小池 一郎

無花果の実に象徴される悪魔の薬、その尖端を鋭利な針で突き刺すと、透明な液体をたらしながら迫ってくる。

冷たい薬液の広がり、異様な緊迫感で五体を痺れさせ、その後によってくる倦怠と虚脱の一刻が、倒錯の幻影の中に私を誘い込んでゆく。

私が今日迄、此の奇怪な快楽の薬の虜となっていたのも、遠い少年の頃の、或る出来事からであった。

それは、梅雨明けも近づき、むし暑い空気の中で、激しく雨の降り続けている午後の中

とであった。私が学校から帰ると、家中しんと静まりかえり、只、雨の音が薄暗い室内を一そう不気味に感じさせていた。

靴を置くため二階の自室の前までくると、従姉の部屋にされている隣室から、不意に私の名前を呼ぶ声がした。不審に思った私は、ドアを薄目に開けて覗き込むと、部屋の中はカーテンを半ば閉めて薄暗く、壁際の寝台に従姉が浅く腰をかけたまま寝そべっていた。私と視線があうと、蒼白な感じの顔色が、一瞬赤味を帯びたかと思うと、急に顔をそむけてしまい、そのまま沈黙が続いた。

暫くすると、妙に渴いた声で突然、「眩暈がするわ」と訴えた。大きく息を吐きながらそれは消えいるような声であった。私が黙っている、従姉の白く汗ばんだ手が、私の目の前に差し出された。その掌の中には、二つの無花果の実の形をしたセルロイドの容器が微かにふるえているのであった。

それを見た時、それが何にを意味し、これから私がしなければならぬ行為を考えた時羞恥と途まどいで、気が顛倒してしまい、激しい動悸がドキンドキンと、耳の下で鳴るのを感じた。

数日前、従姉に貸したコムパスが急に必要になり、前夜留守であった従姉の部屋を探していると、押入の中に黒い下着に丸め込まれた小箱の中から、チリガミに包まれた数個のものと一緒にみつけたものであった。

何んだらう？ 興味を感じた私は、そっと紙をほぐすと、半ば押しつぶされたセルロイドの浣腸器が、丸味を帯びた尖端を濡らしたように光らせながらあらわれた。

この時程、心に強い衝撃を受けたことは、かつてない。何を思ったのか、私はそこにある黒い下着にまるめ込むと、急いで自室に帰えり、夜具の中にもぐり、再び容器を取り出すと、夢中で激しい咽喉の渴きを覚えた舌の上に、そっとあててみた。

かすかに甘く、腔中にひろがり、不思議な

粘っこい感じが、いつまでもいつまでも、錯乱の空想を逞しゅうするのであった。

きつと従姉は昨夜のことを知っているに違いないのだ。だからこそ、従姉にとって、こんな恥しいことを私にさせることが出来るのだ。そう考えると、私の胸の中を複雑な黒いかげりが往復するのであった。

その時、私がどのようにして従姉に浣腸したか、今にして、はっきりした記憶がない。唯、窓を透して揺れうごく樹々の緑のあざやかな色と、目の前に繰りひろげられている白の下着の色などが、顛倒している私の脳裡に残っている。

降りしきる雨の音と、額から流れ出る汗とが、不気味な感じを残し、かすかに去っていった事だけを記憶しているにすぎない。

そんなことがあってから数日後、私が急に腹痛と発熱とで就寝したことがあった。母は細く何かと従姉に私のことを頼むと外出してしまった。心細く一人で寝ていると、ドアを開ける音がして従姉が入ってきた。

私の寝台の足の方に腰掛けると、何やら紙包みを開ける様子である。しばらくすると足もとの毛布が上の方にはね上げられ、私の下着が従姉の意外に心強い手で、ひきはがされた。やがて、腹部に冷たい薬液の広がるがりとセルロイドをつぶす特有の音と香りが入りまじって、全身が痙攣するほどのショックを受

けたのである。

従姉は、まるでそのことを楽しむかのよう

に四度も繰り返すのであった。襲ってくる猛烈な便意を脱脂綿で押さえられると、強い緊迫感となって、私のエキセン

トリックな官能を呼び起すのであった。私は夢中で蒲団をはねのけると、浴室の便器に腰をおろした。身を折りまげるようにして苦痛と戦った私は、やがて激しい下痢が終ると、今までの緊迫感がうそのように去り、排便後の倦怠感が次第にうすれてゆくのを惜んだ。それは、私にとって、初めて知る人間的な苦痛と快感であった。

ふと、我に返ると便器に腰掛けて、ぐったりとしている自分の前に、従姉が薄笑いを浮かべて立っていた。それはもう、病人と看護人とか、従弟と従姉とかいう間柄ではなく、すでに暗黙のうちに了解し合ったことを意味する微笑のようにもとれた。

そして、汚れた下着を替えるようにと差し出されたのは、何時従姉が取返したのだろうか、数日前、従姉の部屋から持ち出してきた両裾にゴムの入ったブルマースであった。

もう従姉は、私の総べてを知っていたのである。部屋にもどると、毛布を頭からかぶり、目をとじると、下着のゴムが股に微かな緊張を与えて、全身がバラバラになりそうな虚脱感を楽しんだのである。

それからというものは、お互いに暗黙のうちに了解し合った私と従姉とは、いよいよ大胆となり家人の留守を見はからっては、奇怪な遊びに酔いしれるのであった。それは従姉が女学校の卒業して実家へ帰るまで続いたのである。

或る時は従姉のワンピースを着せられて、雨の降る夜、山手を二人で散歩したこともあったし、又、夏の夜の海岸で従姉の水着を着せられ、砂の穴に首まで埋められて、尿をかけられたりしたこともあった。

このように、私に対して、異常なかずかずの体験を試み、妖しい雰囲気酔いに酔わしてくれた従姉も、二十一才になった冬、若くしてこの世を去ってしまった。

従姉の手によって私の身体に教え込まれた此の秘密の快楽は、その後、あらゆる奇想を生み、私の五官はより一層鋭敏に、あらゆる刺激に反応するようになった。私の心に描かれる錯乱の空想は、次々と新境地を開拓していった。しかし、従姉なきあの私は、徒らに空想を逞ましゅうする以外にすべのない男になり下っていた。

いつの日にか、従姉のような人が再び私の前に現れる日を、そして心のあらゆる面に、甘美な幻影を繰りひろげ、恍惚たる思いに酔い痴れさせてくれることを、心から待ち望みながらペンを置く。

特高の調室にて

(下 着 泥 棒)



庄田美起夫

「被害者の女が集まらなければ、婦人刑務所へ電話して二十人程借りてこい。こいつは一寸面白い見世物になるかもしれないから、女たちもタマのレクリエーションでよろこぶだろう。それにな、あの何といったけな。あの子うりみたいな顔つきをした女看守だ……あれにも訊問に立ち合ってくれとたのんでこい。場合によたら一寸責めてもらわにやならん。長谷川一夫みたいにいえ男やといっつけ。彼女よろこんで責めてくれるだろう、おい、早くあいつを呼び出して、準備しとけ」

刑事部長は男が少々のことと告白しないのに業をにやして、この思いつきに一人笑いをしあるいは、こんな男を責めて白状させるには一番効果があるかもしれないと思った。

×

×

呼び出された男は二十四、五才、やつれてはいるが苦みばしったいい男である。鼻すじが通っていて、一寸カンの高そうなところがある。彼は取調べ室に入った途端、そこに十何人もの女が華やかにざわめいているのを見て驚いた。

「いよう、色男！」

「ちよつと、こつちを見たらどう？」

「ドスケベエー」

口のわるいはやし声が一世いに男をとりかこんだ。男でもそうだが群衆心理にかられた時の女は、こんな場合全く無責任で破廉恥になりさがった。彼はこのいつもとは打ってかわった部屋の空気にとまどいしながら、刑事の心をよもうと一心に体を緊張させた。

「お前があつさりと白状しないものだから、

今日は、こうして被害者の人たちに来てもらった。早くいえないものを……。俺達は被害者の人たちが恥しそうだから引き退って婦人の係官に取調べてもらおう。さあ、こんな大勢の女の前で恥をかきたくなかったら、早く白状するんだな、もう一遍だけ、機会を与えろ。」

「さあ、どうだい」

「しりません。全然無実です。」

男の声がふるえた。それをきいて女たちがドッと笑った。男の身も心も圧し潰してしまふような女の笑い声であった。

「よし、では仕方がない。そのかわり何をされてもしらんぞ、いいな、俺たちは出てゆくからな。」

部長刑事は男のあごをぐいとつきあげて、女たちに見せるようにして出ていった。

男は刑事たちにおいすがるようにして逃げ出そうとした途端、ぐいっと襟元をつかまれて首がしまり、目を白黒させた。ひるんだところを猛烈な往復ビンタが頬に鳴った。

鼻の奥までしみとおるような女の臭い。男の腰はへなへなとくずれた。

「さあ、立つのよ。女と甘くみたら承知しないよ、あんたみたいなヘナチョコ男は、一ぺんにのしちゃうよ」

「そうだ、のしちゃうッ」

「いよう、いい男、泣いてみせて——」

女たちのはやす声がどつとおこって部屋中の空気をかき乱した。男は自分一人だけだという心細さが、ひしひしと身体中に感じた。

わんわと騒いでいる女たちを制して女看守は男を取調べ机の前に立たせた。

「これはお前が盗んだんだろう、よくもこんなに盗んできたものだね。さあ、一体どこでとって来たんだい、いいなさい」

女看守は行李の中からシュミーズをとり出して男の前にひろげた。ドツと笑い声がおこる。作り声かとぶ。

「それアタイのだよ」

男の唇がけいれんした。

「ぼくは、し、しりません」

「何にッ、よくもそんな白がきれるわねえ」

女看守はドンと行李を叩いてどなりつけると、「何にをッ」という表情が男の顔に出たがさっきの往復ビンタのことを思うと、急に意気地がなくなった。

「これはお前のアパートの押入れの中にあつたんだよ。こっちの方は天井裏にかくしてあつたんだよ」

「知らないよ。誰かが僕の知らない間に入れといたんだ」

「そんな言いわけは聞きあきたよ。どうして正直に言えないんだ。これも、これも……これも、どこで盗ったんだッ」

女看守は、ズロース、パンティ、ブラジャ

ー、コルセットと一枚一枚つまんで机の上にひろげた。赤や青や紫やピンク、オーロラカラーなどのいろとりどりの布地が机の上で一度に花咲いたようであった。

男の顔は真赤になった。それを見て女たちがはやし立てた。

「ズロース泥棒！」

「それはアタイのだよ、かえしてネエ」

男の表情はますます情けなくなった。もう女に圧倒されて、いても立ってもいられぬ気持だった。冷汗が流れた。

女看守は女たちを制して、再び訊問をはじめた。

「え、言わないのかよ、この中には被害者もいるのよ。どうせわかることだから、早く言ってしまった方が身のためだよ。」

「し、しりません。」

男はしどろもどろになりながらも、否定した。額からは汗がじつとりとにじんできている。

「フン、まだシラを切るおつもりだね」

女看守は、ゆっくりした言葉つきだったが右手がす早く、ふり上げられて、男の頬に激しく鳴った。

「しりませんって、言ったら……」

男は泣声で机の端にしがみついた。

「案外、強情なんだね。」

女看守は机の上にちらばった下着を左手でかき寄せると、机を回って男の前に立ちはだ

かり、男の髪の毛を掴んでぐいと起した。

「ふん、女だと思ってナメやがって」

男は髪の毛が痛いので、女看守の手につれて中腰になり、尻を椅子から浮かした。とたんに、女は手を放して、グイと男の額を押した。弾みをくらって、男は、蛙をつぶしたようなミジメな恰好で床の上に尻餅をついた。

「いよう、いい恰好なこと」

一斉に女たちがはやし立てた。年がら年中同性たちだけの中で拘禁されている女囚だけに、こういう場面は、又とない慰安だった。部屋の隅に一列に並んでいたのが、誰からともなく、ワツと机の前に集ってきた。

女看守は物に憑かれたように、スリッパを脱ぐと素足を仰向けにころがっている男の顔の上に、ぺったり当てた。足の裏が丁度、鼻と口とを掩ってしまったので、男は息が出来なくなり、女看守の足首に軽く手を掛けて、もがいた。

女看守がす早く足を引いたので、男の唇がまくれあがり、口の中へ足の指がすっぽりと入った。丁度、舌の上に爪先が当り、塩っかしい汗の味が、思わず唾液を両頬いっぱい貯めた。

「こいつめ、こいつめ」

女看守は力をこめて踏みつけた。指先が舌の奥に当り、口いっぱいにはほぼって、男はゲ、ゲゲッ、と呻めいた。

手記

冥府の広場

(めいふのひろば)

— 長浜良一さんのお求めに —

大塚啓子

モデル風情の手記を短篇だなんて賞めて頂いて、御好意を嬉しく思います。私は以前、次のように考えておりました。

「私の一日は二十四時間より長くもなければ短かくもない。どこか遠い遠い町の店頭で読者の方が奇クを買い求められて、立ち読みなさりながら、夕方のアスファルトの並木道を御自分の家まで帰られる——。

そうしたときに、後手に縛られて、その読者の方にアスファルトの道を引き廻されている大塚啓子、そしてその方のお部屋、というよりも拷問部屋につれ込まれ、責め抜かれて

呻吟している大塚啓子、そういう大塚啓子の一日は、二十四時間の何倍くらいにあたるのか私には想像できないのです。そういう大塚啓子にくらべて、この実体の大塚啓子は僅か二十四時間の存在なんです」

そういう遠慮が、今まで多くの読者の方のお呼びかけに、お答えしなかった理由かもしれません。そういう考えを改めてくれるのが切腹写真の日本刀かもしれません。きびしいいましめの外側ではばたいいらつしやる多くのの方がたの空想に対し、たった一つだけ、縄目の内側でも同じようにはばたいいてい

る空想があるのだと、その内部を切りさいてお目にかけるのが、切腹の写真かも知れませんが。私はそうした切腹シーンの内面性を強く感じます。——これが私の感想です。

ある内科のお医者さんから

「生きている人間の内臓って、実にきれいなものなんだよ」

と聞かされて、私はこの言葉をふみ合に、安心して切腹によるこびを感じ、あらゆるシンをさえ、切腹あるいはきりさかれるに至る前提として考えるようになりました。手術台にのせられて、メスがとられる瞬間を切腹

シーンとすれば、高手小手の写真、ふみにじられる写真は、執刀にいたる前奏曲——。麻酔作業、手術台への運搬というふうにごらんになって頂けませんでしょうか。

現実に切りさいている写真よりも、そういう意味では高手小手などの写真の方が、きたるべきさまざまな切腹シーンを連想させて豊かだ——そう思って、自分の写真を眺めたこともございます。

写真（大塚啓子さんの近影）



長沢さん始め、マニヤの方に切腹シーンをごらんに入れられないこともあると思いますので、埋め合せに内面の切腹、縄目の内側ではばたいている空想をごらんにいきます。

切腹シーンに限らず、私はよく縛られたまま冥府のことを考えます。

無数の人びとと私は三途の川をジャブジャブと歩いて渡っています。棺桶に収めるとき

「下着だけで高手小手に縛り、大塚啓子とわからないように短く切っておいて下さい」

と母に言い残してありましたので私は始めの無人の荒野を十五キロばかり縛られたまま歩きました。流石にもうそれ以上歩けなくなり、どうしようかと灰色の大きな石の上に横たわっております

た。すると、通りかかった老人の御夫婦が、「かわいそうに」といってほだいて下さいました。ですから、三途の川は両手をふって渡っております。

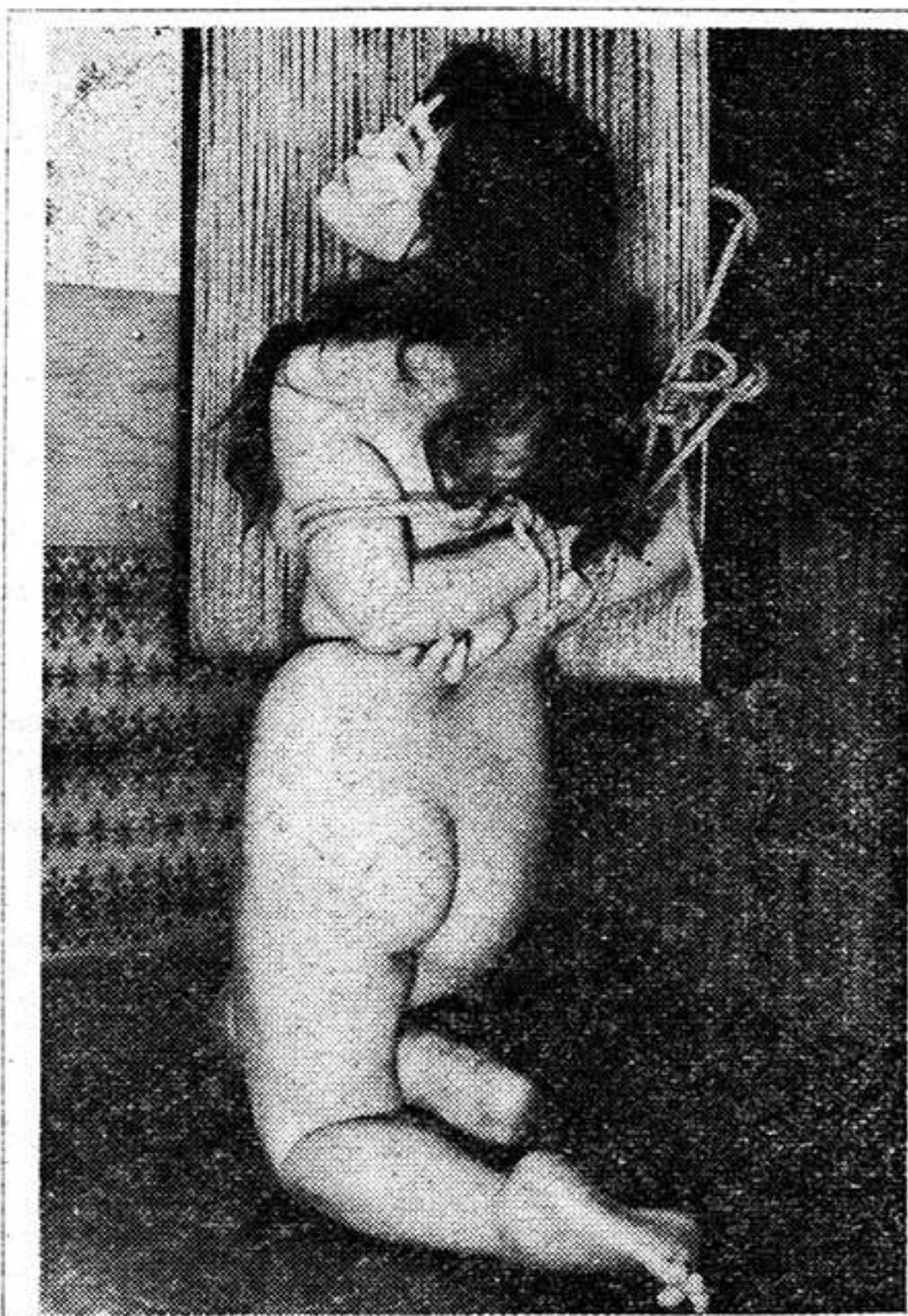
新しい人生の門出でしょうか、一応生前切りさかれた腹は、きれいになっているようです。流れるような人びとの動き、それを見ていて私はふと生きていたころ、曇天の空の下無数の自動車の流れにかこまれながら、市電の釣革につかまっていた日を思い出します。

私がその日受けたいましめは、きびしいきびしい高手小手だったのです。私は縛られながら、私に好意をよせて下さる読者の方がたに、そっとつぶやきました。

「私は冥府におちるにきまっているわ、年がら年中、蓮の花に坐りつつけるなんて、退屈な天国などまっぴら。冥府では——デモクラシーの嵐の吹き荒れた戦後の冥府では、全権は亡者にあるのだわ。亡者になった読者の方がたは、亡者になった私を責め抜かれるといいわ。拷問の道具は山程あるし、そこでは二度と息をひきとることはないのだから、皆さんは私の落命を気づかわないで、思う存分拷問にかけられるわ。」

生前の夢を求めて、私は今三途の川を渡っ

写真（ポリウムのある大塚啓子さんのバック・スタイル）



ています。水は腰までとなり、おへそまでとなり、胸までとなり、とうとう、私たちは流れのまにまに漂い始めました。砂金をふくむ砂を水の流れが流すとき、重い砂金をふるいわけるように、ズシリとした人生への愛着を抱いた奇クの読者の方がたが次第に一かたまりにならるので私もご一しょに、みんな冥府に到着致しました。

地獄の沙汰も何とかで、財源の豊かな戦後

の冥府に公会堂のようなものを考えても、決してあり得ないことではないと思います。私たちは鬼たちの案内でそこへはいります。三千人ははいれそうです。私たち一行は鬼たちが数えたところによると二千人を少し欠ける数であったようです。

やがて、壇上にえんま様の入来です。むろん亡者組合から留任を許されているあやつり人形のこわくないえんま様です。でも、えんま様は重々しく口をひらきました。「今から、第七組の犠牲者をきめる。その女じゃ」

私の左右に歩みより、私の両腕を背中へねじり上げ、私を一番前の壇のすぐ下につき出しました。えんま様が口を開きます。

「平野千代子」

私の本名が呼ばれました。髪が短いのと、三途の川で化粧がおちたので、読者の方がたにも、大塚啓子だとは分らないようです。

「平野千代子、両側の鬼を見るがよい。それでも異存があるか？」

私は二匹の鬼の顔を、穴のあく程眺めました。恐怖がおそって来ました。足もとのコンクリートがパッキリ大きな口をあいたような身も世もあらぬ恐怖です。なんと、その鬼たちの顔は、まぎれもなく、私のいましめを灰色の岩の上でほどこれた老夫婦だったのです。

「冥府の使いだったのだわ、鬼は化けられるのだ。」

主権は亡者に移っても、いけにえに対する峻厳さでは、やはりえんま様です。恐怖で失心しそうになる私の両手を、二匹の鬼がぐいぐいねじり上げます。

「異存はないな」

私はとうとう、うなずいてしまいました。たちまち、高手小手……。

「処刑場は三途の川と針の山の間にある小山のふもと、の広場とする」

えんま様はさっさと退場しました。へたへたと坐った私の縄尻を持った赤鬼が、腰をひどくけとばして私を立たせます。二千人の第七組の人びとは、私と赤鬼につづいて、ぞろぞろと会場を出てきます。

花一つ咲かない灰色の野をこえ、どす黒い小川を渡って、やがて私たちは、その広場にきました。私は自分の行くべきところを、おおぜいの方たちの視線にうながされたような気がして、ふらふらと、その十字架の方へ歩いてゆきます。縄がとかれ、私はしっかりとその十字架にはりつけられます。十字架が立てられ、根もとが大きな穴にさしこまれ私は空中に十字になって浮かんでいます。それまでは、何か小説でも読んでいたような、大した感動もなく、自分の周囲で進行してゆく諸事を眺めておりました。そのとき、人びとの中で声があがりました。

「大塚啓子だ」

「そうだ、間違いなく大塚啓子だ」

羞恥にけいれんする全身と、頭をのけぞらせて、かくそうとする私の顔に、四千に近い視線がぶすぶすと音を立てて、つきささりま

す。

「冥府でまでも」

そういう心理的な苦悶も、次に来た恐怖で一掃されました。さいぜんの二匹の鬼が鋭利な槍をとって私の方へ向けたのです。一本はみぞおちに、一本は股間にぱたりとあてられました。鶴が水の中でするように、左足はのびし、右足の足首は左足のすねくらいのところで十字架に縛られた。

私は生前の学校の理科の時間を思い出しました。解剖台の蛙は私です。二千人の人びとは、若かった生徒たちにたとえてよいでしょうか？ 先生のかわりに二匹の鬼。理科の間と違う点は、私に麻酔がかけられていないということと、半ば好奇心、半ば嫌悪で見ていた生徒たちにくらべて、二千人の人びとは今か今かと処刑を待っているのです。私はたまらなくなつて、

「私も人間なんだわ、私も人間なんだわ」

と、二声叫びました。更に二本の槍が左右から両方の乳房の外側にぴたりとあたりました。失神も絶命もできない冥府でのはりつけ。叫べはふえる槍数。私の恐怖は絶頂に達します。なんとか十字架から逃れようと無駄なものがきが続けるばかりです。

みぞおちに穂先をあてた赤鬼が音頭をとります。

「ヨーイコリヤ、ヨイ」

突然、体中が張りさける激痛がやってきます。私の絶叫は三途の川と針の山にひびき渡ります。四本の中、三本が抜かれました。みぞおちの一本だけは、三センチばかり穂先を腹中にかくしています。その一本が下に向かって運動を始めます。1の字に切りさかれた私の腹の皮は、左右にチャックつきのバッグのようにひらきます。血汐と腸が流れおちます。腸の尖端は地面にとどき、三十センチばかりの長さだけ、地面に横たわります。槍を捨てた鬼たちは十字架の周囲に垣根をはり始めます。十字架の私を、永劫の悲鳴をあげる彫刻として鑑賞するために……。

腸がだらりと下にたれて、空になった私の腹中は、はくせい動物につめられる綿のかわりに、激痛とさすような視線の槍先で一ぱいになります。二千人の人びとは、この広場で、この生きながらの彫刻をかこんで永住するのです。次から次へとおそってくる激痛で下の人びとが何を云っているのか、私には全く聞えません。

けいれんする私の唇から吐く息が白く空中

に漂います。水分の蒸発しない冥府では、それは小さい霧のかたまりとなって、私の顔を薄く包むこともあるでしょう。そのとき、読者の方がたの中には、

「アレ、魔女の吐く妖気を見るがいい」

「いや、大塚啓子の昇天なんだ」

私は返ってきた小さい思考のかたまりを激痛の中にぎりしめ、こうつぶやくのです。

「どんな恐ろしい激痛と永劫に同棲しても、私はこの十字架にとどまるわ。奇クの愛読者を捨てて、一人だけ天国へなど行くものか」

ある日は、悲鳴の聲が小さいと、読者の方がたの手から、数十数百の石が、私めがけてとんでくることでしょう。

嵐がくると地面までたれた腸が、ふり子のように左右にゆれて、激痛を倍加するでしょう。

縄目の下でうごめく女の情念を、切りさいてお見せしました。長浜さんは御満足でしょうか？ 物いわぬは何とか、私は書きおえてはればれた気持です。もう書くことは種切れで、これでも、せい一杯の背伸びをして書

きました。至って、お恥しい文章になってしまつて、申し訳ありません。でも、私たちモデルの中で、誰か文筆をとり、

「彼女はもと奇クのモデルだったんだ」と、ささやかれ、その写真を公開されたときの、元のモデルの一人だった仲間が、幸福な生活を、——マリリン・モンローや浜村美智子さんなどと比較にならぬ——そして、かな誇りを感じるような時代が来ると思っているのです。

(おわり)

△ゴムマニヤの空想▽

或る理髪店にて

斎藤 七郎

「じゃいいわね、頼んだわよ」

言いながら明子は入口に並んで見送っている使用人の女達に顔を向けたまま、一緒に出ようとする夫の正一と見送っている葉子の眼をちらりとぬすみ見、それから使用人頭の清子に念を押すようにまばたきして見せた。

「かしこまりました。どうぞ御氣をつけて……」

微笑し乍ら清子はうなづくように言う。

(大丈夫よ、奥さん。まかしとき。腕が鳴るわ)

葉子の顔から血がひいて行くのを感じた。

若主人夫婦の姿が消え、四人の女達はそろそろと店の中に引き返した。入口の回転灯は止まっている。今晚から四日間、この広川理髪店は臨時休業だ。ここの婿養子である正一の妹の結婚式で田舎の実家に夫婦そろって出掛けたのだ。明日からはペンキ屋や大工を入れて店舗の修理改装をする。その一切の監督は奥方から絶対の信頼を受けている清子に任せられている。そしてあれも……。

「さあ煮て食おうか、焼いて食おうか」

勝手にタケ子がわざと大きな声を張り上げる。たしかに彼女はエプロンをしている。しかし魚や肉を前にしているのではない。とう

に夕食は済んで茶碗や皿を洗っているのだ。葉子と一緒に店の掃除をしているエミ子も「そうね。本当に煮て食いましょうか。焼いて食いましょうか。たのしみだア」と調子を合わせる。

「駄目よ、あんた達、そんな大きな声を出して……お隣りに聞えるじゃない」

と清子が奥から出て来た。床掃除をしている葉子は、何か居たたまれないような気持で一杯だった。

「あら葉子さん。だめじゃないの、年頃の娘が、そんな尻端折りなんかして……」

（始まった！）

洗っていた箸を放ったらかしてタケ子とはとび出して来る。

「エミ子。さあ、カーテンを閉めて錠をおかけ」

一瞬葉子は青くなって、そこに立ちすくんでしまった。

パチンと螢光灯のスイッチを入れた清子は葉子の方を向いたまま仁王立ち、

「あら葉子様。ほんとに失礼しましたわね。二号様に対して年頃の娘だなんて……。今、御部屋様に似合う御召物を御持ち致しますから……」

タケ子もエミ子も期待に胸をどらせ、息を吞んで次の場面を待っている。

「そう。これがいいわね」

清子の手には以前、この店で使っていたゴム引き洗髪用カバーである。

「御部屋様。これなど如何でしょう。御当て遊ばせ……タケ子。エミ子。ばやばやしないで手伝っておやり」

二人はふるえている葉子を前後からつかまえると、否応なしに理髪用の客椅子に連れて行く。

「お手をうしろにお廻し遊ばせ」

ぎりぎり椅子に後手に縛り上げると、ゴムのカバーをお客にかけるように彼女にかけた。

「葉子さん……葉子様……いやさ、お葉……」

と芝居もどきに大声を上げ、大袈裟なジェスチュアで葉子をなぶる清子。タケ子もエミ子もげらげら笑い出す。

「葉子。鏡に映っている自分の姿をとっくりと御覧。ほんとにグットスタイルねえ」

縄はぎりぎり葉子のやわ肌食い込んで彼女を椅子に固定している。

細面で色白な葉子の顔は青みを帯びてふるえている。いきなり、その頬をつかむとぐいとねじ上、

「やい葉子。何もかも泥を吐いておしまい。お前が若旦那に可愛がられている事は誰にも何もかも、ちゃんとわかってるのだよ」

言い捨てるなり両頬に続け様にビンタが飛ぶ。葉子はうめくばかり。（そういうようにして「泥を吐け」というのだから勿論目的は彼女の自由にあるのではない）汗が、涙がばたばたとしたり落ちる。

「暑いでしょう。そうだ、タケ子。おつむを冷しておあげ。」

「はい」待ってましたとばかり洗髪用の流しの所の水道管にホースをつなぐと葉子の髪の毛をわしでかみにして椅子を仰向けに倒しその顔の上にはとばしる水を浴せる。濡れた髪の毛が顔の上にかかってすごい面相だ。「喉がかわいた事でしょう。どうぞ、これを……」

今度は一旦水を止めて、そのホースの先を無理矢理葉子の口の中にねじ込むと又蛇口をゆるめる。彼女の口許からパーと水がもれほとばしるのを出来るだけそうさせまいと、三人の女の六つの手が葉子の顔をおさえつけホースの先を支え、彼女の口をしめつけている……

それからどれ位たったろう。ゴムの前掛をかけたまま葉子は椅子に縛られていた。しかしこれらは明子が清子に託したほんの序の口であった。羨望と嫉妬の為、今は全く復讐の鬼と化した三人の同輩に葉子は、どんな御仕置を受けねばならないのだろうか。

……………



体験小説

華^か鼻^び受^{じゅ}難^{なん}

花房孝子

幸男は内心面白くなかった。幼な馴染みで

ありながら、通勤の途中で顔を会わせても、何時もフンと鼻で笑って通り過ぎてしまう貞子。事実貞子は美しく整った姿態の持主であったし、自分の容貌には、誰も及ぶ者がいないだろうとさえ思う程の自信を持っていた。美貌の中心である鼻が、殊の外恰好がよく秀でており、形のよい二つの鼻の穴から上唇に流れる線が美しく、チャーミングであった。特に上向加減の卵型の鼻の穴にある種の引き

付ける何ものがあつた。

自分の美貌に自惚れて人を見下げる態度が幸男に対して高慢な鼻と受けとれたのかも知れない。

「人を馬鹿にしやがって、よし、今にあのツンとした鼻をヒイヒイ泣くまでいじめてやるんだ。」

こう思った幸男は、今から一カ月前程から着々と彼女の傲慢な鼻をいじめる方法について構想を練り始めていた。

身動き出来ないように彼女を束縛する台も

特別注文で作らせた。

暇を見ては医療器具店に足を運び、鼻をいじめられるような器具を選んで、セッセと購入したのである。

耳鼻科医の使う器具は殆んど揃ったのは勿論である。種々雑多なピカピカ光る金属製の器具が机の抽出に一杯になった。

これらの鼻いじめ道具を総動員して、高慢チキな貞子の鼻を思い切りいじめぬいてやろ

うと計画し着々準備も完了した。

今はただ貞子をいかにして、この台の上に
乗せるか、そのみが問題であった。

然しそのチャンスが、案外にたやすく到来
し、貞子をこの鼻いじめ用の実験台に乗せる
ことが出来たのである。

初夏の或る一日、それは日曜の朝である。

退屈しのぎに散歩に出た幸男は、偶然にも
彼女貞子に遇った。そして彼の部屋にうまく
誘い込むことに成功したのである。

彼女の綺麗なことを強調して褒めたたえる
と彼女も女である以上、悪い気はしないらし
く幸男の計略に乗って来たものである。

部屋に入ったら、あとは幸男の思うままに
ある。男の力と女の力。力の差によって貞子
の衣服は強引に剥ぎとられた。シュミーズ、
ブラジャーも次々と彼女の身体から離れて行
く。一瞬にしてパンティーとシームレスだけ
にされた貞子は、鼻いじめ用の台に固定され
てしまった。丁度理髪店の椅子に似ているも
ので、上体も顔も角度を自由に調節出来るよ
うになっている。豊満な雪のように白い貞子
の肉体の要所要所が台に付いている革バンド
で固定されているので身動き一つ出来ず顔も

ビクとも動かなかった。

調節器のハンドルを廻すと貞子の顔が意に
反してグイグイと仰向になり、首と直角にな
るまで後に曲げられる。恰好のよい鼻の穴が
真上を向いて丁度その上の天井に昼も欺むく
ような照明がつけられた。

どんな微細なところも余す所なく照し出さ
れて二つの鼻の穴も奥の方まで明るく覗かれ
る程の電光に、思わず目を半眼にする貞子で
あった。少し心に落ち付きを取り戻した貞子
は顔の上にかぶさるようにして鼻の穴を覗い
ている幸男を意識して屈辱感に顔をけいれん
させながら、

「あなたって、ひどい方ね。暴力でこんなこ
とをするなんて……あんまりだわ。これから何
するつもりよ。」

「ウフフフきまっているじゃないか、今まで
よくも俺を、このツンとした鼻で笑っていた
な。その罰をこれからお前の綺麗な鼻に与え
てやるのさ、すぐそばで見ると成程素晴らしい
鼻だよ。穴の中をこうして覗いて見るのも又
格別面白いものだね。今からゆっくりとこの
鼻を可愛がってやるんだよ。」

幸男はこう言いながら傍の机の上にガチャ
ガチャと金属製の器具を一杯に並べて行く、

脱脂綿、ガーゼ、チリ紙からコヨリまで何本
も用意したのである。

台に固定された以上、今更じたまたしても
仕方がない。貞子は観念した。彼のなすがま
まになるより仕方がない。

真直ぐに上向いている恰好のいい二つの鼻
の穴が、ヒクヒクと動く。目を穴に近づけて
奥の方を覗くと照明の光が、奥の隅々まで届
き、ピンク色の鼻腔の粘膜が美しくキラキラ
光っている。

よく手入れしているか、入口は勿論奥の方
にも汚物は一点も見当らない、清潔そのもの
であった。ただ鼻毛だけが呼吸の度毎にかす
かに揺れ動いていた。

生れて以来、誰にも覗かれたこともない鼻
の穴を遠慮もなく奥の方まで覗き、これを自
由に玩弄出来るのだと思うと、流石に幸男も
胸が高鳴るのを禁じ得なかった。

二本の指で静かに摘んで見る。卵型の恰好
よくハの字に並んでいた鼻の穴が、だんだん
細長く縮んで行きピツタリと密着する。

力一杯強く摘んで引き延ばしたり、左右に
振り廻す。手を離すと又元の穴に復元するの
が面白く何回となく繰り返された。人さし指
を鼻の先端に当て思い切り押し上げると、ノ

ーブルで上品な鼻もツツラのように縮み豚の鼻よろしく穴が上を向き、なおも奥の方が露出される。上唇まで吊り上って綺麗な歯並びが口の間から洩れる。余りの屈辱に貞子は思わず涙ぐむ。

しかし、自分の美しい処を人によく見て貰いたいのが人情のように、人一倍自分の鼻の美しさを知っている貞子は、誰かにこの立派な鼻を、思う存分可愛がって貰いたい、一種のマゾヒズム的な気持が、心のどこかにあったことは否めない。

強制的にこうしてノーブルな自分の鼻をいじめられる苦痛が、いつしか一種の快感に変わって行きつつあった。目を半ば開いた貞子の表情が、なおも幸男の鼻に対するサジズムの心を昂揚せざるを得なかったのである。恰好よく程よい大きさの行儀よく並んでいる貞子の二つの鼻の穴が完全に彼の心を魅了してしまった。

いきおい幸男の鼻貴めが、この二つの鼻の穴に向けられることになった。

柄の部分がビニール製で自由に曲る約三十糎位の綿棒を取り出して脱脂綿を先端に巻き付けると、貞子の右の鼻の穴へソロソロ入れて行く。先端の綿の部分が穴の入口に没して

鼻の穴に沿うて遠慮なく奥へ奥へと侵入しついに咽喉に達し、なおも食道にと挿入されて行く。右左と交互に押し込まれ、ぬきさされる度に鼻粘膜を刺激して分泌された粘膜が鼻の穴からネバネバと出て来た。

綿棒の綿が何回となく取り替えられての穴の煙突掃除に、半眼に開いた貞子の両眼からポロポロと涙が溢れ両頬を伝わった。

今にも出そうになるクシャミを辛うじて我慢した貞子であったが、鼻の先を指で押し上げられて、豚のような鼻になった右の穴にコヨリをクルクル廻しながら、なるべくゆっくりと粘膜を刺激するように挿し込まれて流石の貞子も眉を八の字にしてハックション、ハクションとクシャミを連発する。

意に介せず、なおもコヨリの先端は奥へ奥へと侵入して咽喉に達した。

アーンと大きく口が開けられると奥の方に二本のコヨリが食道の方まで入り込んでいるのか白くよく覗かれた。又透明な鼻汁があふれて来て、綺麗だった貞子の顔一面が鼻汁でベトベト、クシャクシャになってしまった。

ギョツと鼻を摘むとツルリと滑って流石に高い鼻もよく摘まれない。幸男はガーゼで涙と鼻汁を綺麗に拭きとると、二つの鼻鏡を左

右の穴に押し込み力一杯拡張した。

貞子の鼻の穴が驚く程大きく拡がり奥の方まで完全に露出され、透明な鼻汁が穴一杯に分泌されていた。吸引器で何回も丁寧に取り綿棒で拡げられている二つの鼻の穴の奥の隅々まで丁寧に掃除された。

幸男は自分の鼻の中でさえ見たことがないのに、こんな素敵な鼻を存分に拡げて奥の方までも観賞しながら玩弄出来たことに大いに満足したものである。

抵抗を抑止されて強制的に往服された女は案外にもろくなるものである。

今日は手始めの鼻いじめであったので、余り苦痛を与えなかったが、徐々に荒療治をやってやろうと内心想っている幸男の計画を知るか知らずや、次の日曜日の午後、貞子の方から幸男の部屋を訪れて来た。

もっといじめて貰いたい意思表示である。いつもより綺麗に化粧したせいが美しさが一際目立っている。鼻腔にホンノリと紅をさしたのか、恰好のよい二つの穴が一際魅惑的であった。

今日は別の実験台に座らせることにした。横に広い腰掛け椅子のようなものだ。腰掛けるところが、尻から十五糎位しかな

く前部が、U字型に切り込まれている。

背の部分の首の当たるところが凹型になっており、脚が横に一米位大きくハの字型に拡がり、要所要所に革の尾錠がついていて、これで身体を固定するようになっていた。

「早速、今度はこっちの椅子に座って貰おうか」

貞子はほくそ笑みながらいうと、

「そう面白い椅子ね。やっぱり裸になって座るんでしょう。」

こういいながら、貞子は自分からサッサと洋服を脱いでいく。

「今日は全部脱いじゃうわね、幸男さんも、その方がいいんでしょ。」

彼女は椅子に腰掛けた。

豊満な丸く白いお尻が半分程しか掛からない。

カモシカのような脚を大きく左右に拡げてそれぞれ椅子の脚に縛り付け、両手も後に廻してきつく固定した。首を後の凹部の部分にはめ込みグイと後に直角に倒すとこれも動けないよう

に固定すると、彼女の身はビクとも動かすことができない。

女としてこれ以上屈辱に満ちた姿態はないだろう。拡がっている貞子の両脚の間に椅子を置き彼女に向い合って座った幸男の目のすぐ前に貞子の綺麗な鼻の穴がさらけ出されている。

ピラミットのように高い鼻を、二本の指でチョイと摘む。人間の悲しさ、呼吸を止められて思わず口をあくと、いきなり口腔鏡を奥の方まで挿入した。ギリギリとネジを廻すと

貞子の口がだんだん大きくあいて来た。

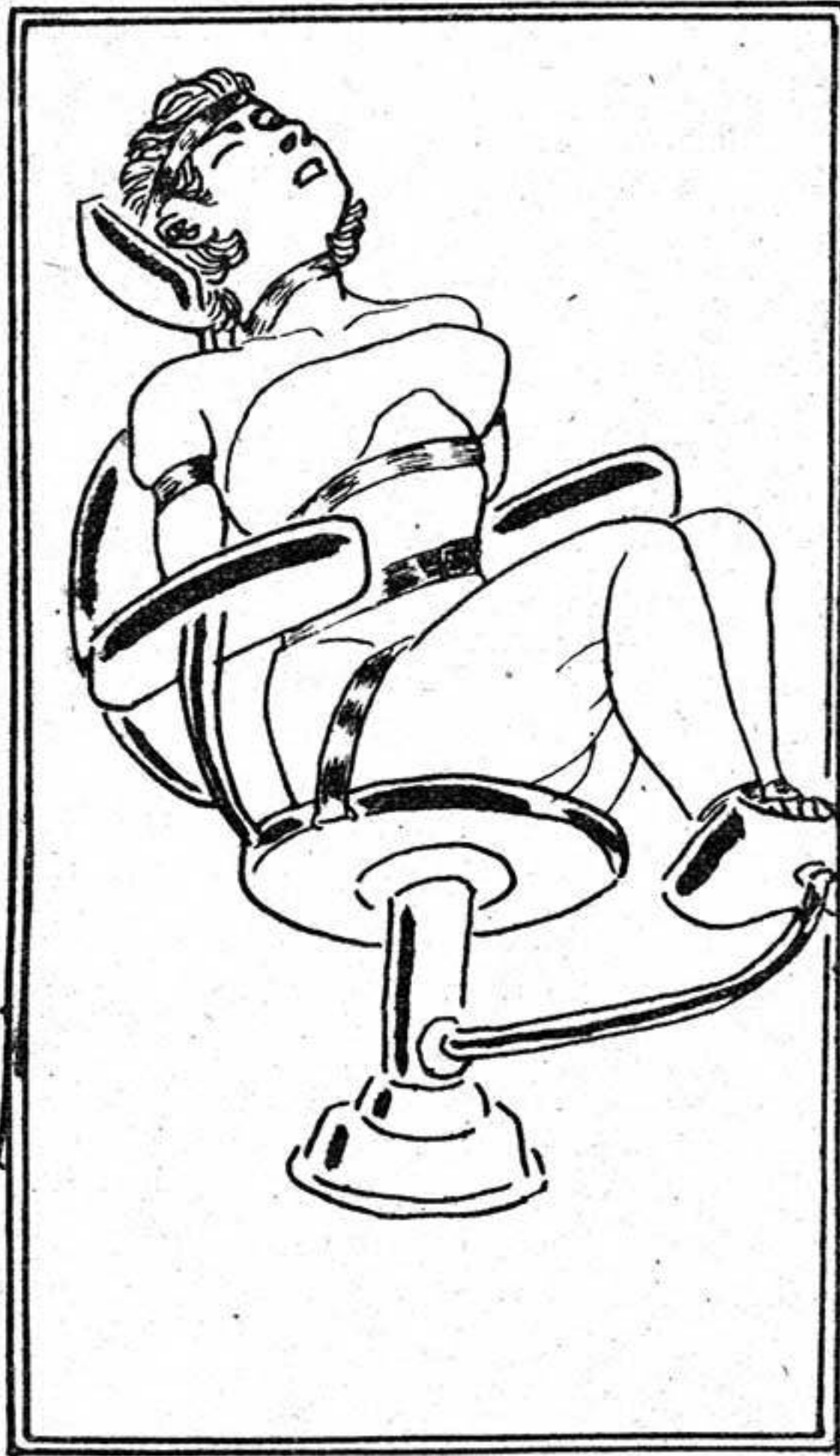
これ以上拡げられたら顎の骨がはずれてしまいう程、一杯に、あけられると咽喉の奥が手にとるように覗かれる。ピンク色の弱皮がすすかに震えている。ピンセットでその弱皮をチョイと挟んで引っ張ると思わずゲゲゲ……と激しい嘔吐感に襲われる。

幸男はゆっくりと顔の真中に鎮座している鼻の先に左手の親指の腹を当てるとグイと押し上げた。穴が完全に上向きとなって、幾分ふくらみ加減に細長くのび、奥の方までさらけ出している。

鼻の穴をそのまま上向けにしたのへ右手でコヨリを取り出てクルクル廻しながら奥へ奥へと挿し込み始めた。

貞子の顔は、くすぐったさに今にもクシヤミが出そうな表情で、目を半眼に眉を八の字にしているのが、幸男の心を一層楽しくさせたものである。

わざとコヨリを真直ぐに挿入したので先端が上部の



方の副鼻腔の中の粘膜を刺激して、なおさらくすぐったく、思わずクシヤミを連発する貞子であった。

ポロポロと涙が両頬を伝って流れ落ちる。

副鼻腔の中に入ったコヨリの先端が行きどまりになると、キーンと疼痛が鼻の奥に感じた。

「穴を間違えたかな。」

貞子の表情を見つめながら、幸男は独り言をいいコヨリの先端を斜下方に向けると又スルスルと奥の方へ入り始めた。一杯に拡がっている口の奥の方を覗きながら、なおも奥へ奥へと挿し込むと、弱皮の裏側からついにコヨリの先端が白く覗いて来た。同じように右の穴へも挿入し二本のコヨリが咽喉の奥に通っているのをピンセットで挟むと口から引っぱり出した。

こうして何本ものコヨリが鼻の穴から挿し込まれ、口から引張り出された。

ヌルヌルとまわりついた鼻汁がコヨリと一緒に口から出て美しい貞子の顎にねばりつく。ヨガの訓練では鼻の穴から口に糸を通してゴシゴシするのだが、左右の穴を境している鼻中隔を鍛えてやる、いや責めてやる方法を考えた幸男である。

細い三十糎位の針金の先端を直径一糎位の輪にして先ず右の鼻の穴へ挿し込み咽喉へ通すと口から引っぱり出した。

長さ五十糎の小指大の糸の先端を口から出してある針金の輪に通する鼻の穴の方へ引っぱり張る。糸が口から咽喉の奥の弱皮の裏側を通り右の鼻から引き出された。

同じように左の鼻の穴から糸の別の方の先端を引き出すと左右二本の糸の先端を一緒に引っ張った。糸の中央部が弱皮の裏側に消え鼻中隔に境されてしまうと左右の糸を交互に引っ張りゴシゴシするのであった。

キーンと疼痛が鼻柱まで伝わって来る。

二本一緒に強く引っ張って額の方に持ち上げると貞子の鼻の穴が細長く延びきって鼻柱が縮れて小田原提灯のようになった。

口の奥に見える弱皮も充血して紅潮している。余りの苦痛に鼻汁と涙が……それに誕まてが綺麗な貞子の顔をクチャクチャにした。

丁寧に、よごれた顔をガーゼで拭きとると鼻の穴にあふれている透明な鼻汁を綿棒で何回も奥の方まで掃除を始める。

これ以上あかない程大きく拡げられている口の奥に二本の綿棒の先端が交互に出入するのが手にとるようによく見えていた。

鼻の煙突掃除を終ると又鼻鏡を両方の鼻の穴に挿し込み力一杯けて奥の方を覗き込んでいた幸男は、「どうも鼻毛が邪魔になる、全部剃ってしまおう」口腔鏡で口を一杯に拡げられていたので声も立てられない貞子にかまわず独り合点して耳毛剃刀をとり出すとヒクヒクしている鼻の穴の右からゾクゾクと鼻毛を剃り始めた。穴の入口から奥へ奥へと……

初毛のようでも案外にかたい毛だ。

貞子の鼻毛は一本も残らず剃り落されて、もう一度鼻鏡で拡げられると完全に奥の方がよく覗くことが出来た。

剃られたあとのヒリヒリする鼻の穴に丁寧にメンタムを塗り付ける。

拇指よりも太目の試験管の丸い底の方にもよくメンタムをすり込んで左の穴に当てがってグイグイと押し付けた。なかなか挿し込めなかったがついにブスリと三糎程入り込む。

鼻の穴が今にも裂けん許りに拡がって激しい苦痛がズキズキと襲って来た。

もう一本の試験管が今度は右の穴へ……。恰好のよく高かった鼻が横に広がり二つの穴が円く拡がって青白く血の気を引いてしびれて来た。余りの痛さに又涙がポロポロとこぼれる。しびれて痛みも感じなくなる頃よう

やく試験管をぬかれたが暫らくの間二つの穴が元に戻らず大きく円くなっていた。

「もうやめてよ」

貞子は言おうとするが、声にならない。顎の骨も大分マヒして来ている。コヨリ責め、綿棒責めの次に鉄棒責めが待っていた。

火箸を鼻腔沿いに彎曲させたような鉄棒を穴に挿し込むのである。

思い切り鼻の穴を上向けにして鉄棒を挿し込む。先端が咽喉から食道までも入り込んで激しくゲーゲーと嘔吐感が襲って来た。

それにも意に介せず、もう一本の鉄棒を別の穴から食道まで押しこむと貞子の鼻の穴が完全に上を向き細長く延びて鼻柱が提灯のように縮んで涙をポロポロとこぼしている痛々しさ。鼻吊りよりも苦痛を伴う責めである。

貞子の顔は紅潮し額にブツブツと汗をにじませて苦しみもがくのだ。

鉄棒責めの次にペンチによる挟み責めである。鼻に傷がつかないように厚い皮で覆われているペンチがツンと高い鼻をガッチリと挟んだ。ネジ式になってペンチが締るようになってる。

ネジを廻すと貞子の鼻がだんだんと板のように挟まれ薄くなって来て二つの卵型に恰好

のよかった穴がピッタリとふさがり、寸分の呼吸も出来ない。容赦なくネジがギリギリと廻されて薄く平べったくなった鼻の峯が血の氣を引いて、青白く光り、ブツブツと油汗がにじみ出て絞り出されて来た。

強力なペンチ挟みに、いつしか苦痛の感覚も痺れて、只顔半分程も大きく一杯に開かれている口からハアハア呼吸している貞子であるそのまま五分間放置されたが、なんと長く感じた時間であつたろう。

ようやくにしてペンチを外されたが、暫らくの間、板のように薄く平べったくなった鼻は中々元に戻らず、密着した穴も、そのままになっていた。元通りの恰好よい鼻に戻るまでの間に、幸男は次の鼻責めの準備を終っていた。

缶の中からとり出したのは、二匹の蚯蚓である。長さが二十糎位、太さが小指程もある大きなものであった。

両手の指で器用に動き廻る蚯蚓をおさえ付けて、八の字型に並んでいる卵型の二つの穴へその頭部の先端をそれぞれの穴の入口に当てがった。鼻の穴よりやや太目の蚯蚓の頭部がギュッと縮んだと思うとスルスルと二つの穴から奥へとすべり込んで行った。蚯蚓の身

体全体が全体が伸縮しながら穴を求めて入り込んで行く。ヌルヌルヌルヌルと鼻粘膜を刺激する気味悪さ。大あく開いている、口から奥の咽喉を覗いていると、ついに蚯蚓の先端が見え始めて来た。幸男はピンセットでその先端を挟み、口の方へ向けると蚯蚓は口の方へと這って来る。二つの鼻の穴にぶら下っていた、二匹の尾の先が穴の奥に消えて口の外へと這い出して来た。二回三回と繰り返されて鼻のトンネルをくぐらせられた蚯蚓は流石に元気がなくなっている。もっと元氣のよい奴と取り替えて二つの鼻の穴に当てがってやると穴にもぐる習性を發揮して勢よく這い込み始めて行く。咽喉の奥に達した蚯蚓は食道の方に頭を向けて奥を刺激したからたまらない、嘔吐感が襲い貞子は顔を紅潮させてゲーゲーといかにも苦しそうだ。

口の外へ向って追い出された二匹の蚯蚓が口から這い出してヌルヌルとした分泌物を体から排泄する。ヒクヒクしている貞子の鼻の穴の中を覗くと粘膜から分泌した鼻汁と蚯蚓が排泄した粘液で穴の中が一杯につまっていた。穴一杯にあふれた粘液の中に苦しさの余り蚯蚓が吐いたドロが点々と交っている。

又もや綿棒で奥の隅々まで丁寧掃除をされ

最後の仕上げである鼻洗滌が始められた。頭の真上に吊られた三千cc入りのイルリガートルから洗滌液が左右交互に貞子の鼻の穴へ奔流となって殺到し穴の奥の隅々まで洗い清められて行った。

顔が仰向けにされているので鼻から入った

液は殆んど食道から胃の中へ流れて貞子の腹が妊娠のように膨らんでしまったのである。幸子は汚れない貞子の姿態を前に、決して鼻責めだけで満足は出来なかったのは当然のことであろう。

女として、顔の中心である鼻を責められる

ことは、これ以上の恥辱はない。更に浣腸をし、思う存分あらゆる器具を用いて肛門責めを行ったのである。貞子も又全身の粘膜の部分をいじめられることを望んでいたことも事実である。

にして（探せば未だありますが）次は、やや特定の人——。

「蘭学事始」

蘭学を学ばんとして集った学者が、オランダの医学書を片手に勉学し始める。解剖図につき議論していると、娘が「学問の為なら」と腹を切って臓を掴み出して見せる。実際は処刑死体を「腑分け」（解剖）したのだが、これも史実は御遠慮願うことにする。

「忠直卿行状記」

菊地寛の出世作だが、原作は割にさらりと書いている（文学部の友人にストーリーを教ったので興味を持って読んでみた）。しかし我々としては、さらりとしては読み過ぎない文献である。殿（忠直卿）に一夜の伽を命ぜられた若妻（又は許婚者）は泣く泣く務めを終えて帰宅した後、夫（又は恋人）の眼前で申訳に腹を切る。忠直卿は特定だが、家来の

女体切腹の構想

桐原柴門

「時代篇」

「お吟さま」

利休の娘で自害する。映画にもなったが見ていません。本当は咽かなんかを突いたのでしょうか、我々としては切腹させたい所。

「白妙」

木村長門守重成の妻で、大阪城一の美女。

最後の合戦の時に夫の呪に香を焚きこめておいて、夫に心残りさせぬために自害する。これも咽を突いたらしいが、それじゃ面白くない。この際、史実等どうでもよろしい。やは

り花々しい切腹を遂げさせたい。しかし、特定の個人というのは、まずいかな？

「蝶々夫人」

オペラで有名だから誰でも御存じ、ついだから切腹させちゃえ。横に坊や（目隠しされて日米の旗を持っている。三才位）を忘れずに……。

「築山御前」

徳川家康の妻、武田と結んで事を挙げようとして失敗する。気の強い女だから、切腹してもおかしくないでしょう。個人名はそれ位

方はなんとでも名前がつけられる。

「姦通の妻」

右と同じようなテーマで、姦通が露見した妻が、夫の情けで自害を許される。既に斬り捨てられた情夫の横で、夫に見守られながら腹を切る妻。

「孤愁の岸」

今年度直木賞受賞作品、切腹者五十名というから、その中に一名ぐらい女がいても良いでしょう。人柱とか何とかこじつけても良いでしょう。工事場の雰囲気が出る事が肝心。

「生胆」

浪人の夫が労咳（肺結核）にかかったが、金は出てゆくばかり、生胆が良く利くという医者の言葉に「あなた、お体を大切に……」と別れの挨拶をして腹を切り、生胆を掴み出して皿に載せてこと切れる。

「守役」

若君の養育の任に当るまだうら若い乳母、若君の我儘に「私にはとても手に負えません死んで地下の母上様に、お詫び致します」と言って切腹して諫める。

「尼」

仏に仕える清らかであるべき身で、フトした心の迷いから身を汚し、情欲の虜となった尼僧、仏へのお詫びにと本堂にて袈裟をまくり上げて切腹（下へ脱ぎ下すのかナ？ 衣の構造は良い知りません。）

「虚無僧」

父の仇を討つ為に虚無僧に身をやつして、仇討ちの旅に出たが、目指す相手はもう病死していた。生きる望みを失った彼女は、虚無僧姿のまま、父の墓前で切腹。父でなくても夫、恋人でもよいし、とに角理由はどうしても服装が変わってれば良いわけ。

「証（あかし）」

殿から不義の子を宿したと疑われた腰元。腹を切って子宮を取り出し、無実の証明をする。（腰元でなくてもよい）

「現代篇」

「相場師」

株の大暴落で莫大な借財を背負って破産した女相場師、今はこれまでと腹を切る。今は無一文となって床に散らばっている夥しい株券に血がしたたり落ちる。

「受験生」

受験に失敗した女子学生が、両親への詫びに切腹……と誰でも考えるストーリー。

「遭難」

恋人が山で遭難した。遺体収容隊と同行した彼女は（名前は適当でよろしい）夜中に山小屋の中で一人でこっそり、毛布に包まれた恋人の死体に跨って切腹する。血は恋人の死体を染める。彼女自身が遭難しても良いのですが……。とに角、登山姿の切腹が一枚位あってもよいでしょう。重装備してるのに、お

腹の辺だけ出しているコントラストが面白いと思う。

「キイパンチャー」

近頃、キイパンチャーのノイローゼ自殺が報道されています。肩こりの鬱血からくるノイローゼですが、どうせ死ぬのなら切腹させてあげましょう。

「スチユワーデス」

麻薬の密輸がバレて切腹自殺。

「婦人警官」

逮捕しようとした犯人は意外にも初恋の人。つい逃してやった彼女は、警官としての自責の念から切腹して上司に詫びる。

「軍国の妻」

一夜契ったきりの夫は、戦線に旅立って行ったが間もなく戦死して遺骨と遺品の血まみれの軍服と軍刀が送られてくる。今は生きる望みを失った彼女は（決まり文句ですネ）夫の遺品の軍刀で切腹して果てる。

「修道尼」

時代篇の「尼」と同じでも良いのですが、何か別の理由を考えたいもの。手籠めにされて汚されたなんては駄目かな。しかし、あの服装は清潔そうで魅力を感じます。

「舞妓」

舞妓さんも魅力ある題材です。踊りの師匠に叱られて破門され、絶望の余り（又か？）切腹とは如何？

若妻のサド夢

湯 上 り 偶 談

沖 田 小 五 郎

かよ子は、満夫の帰りが遅いので、夕飯を膳の上に並べたまま一風呂浴びて来ようと、洗面器と石鹼を用意して八カ月になる赤ん坊の光代を抱き上げた。

夫が朝出掛けに「今日はちょっとおそくなる」と勤めに行った日は、残業して何時も七時にならないければ会社を退けて来なかった。だから家につくのは、三十分やそこいらかかるので、近所の奥さん達といっしょに買物して、夕飯を作り上げてしまったかよ子には、凡そ二時間程の暇が出来る。かよ子はその折をみてほど近い銭湯へ体を流しに行くのであ

る。

風呂は、夕飯時なのか割に空いていて、赤ん坊を一人分に勘定しても十人前後で、広いタイルのあっちこちで、ゆうゆうと自分の席を使えることが出来た。

かよ子は赤ん坊の両耳を指でおさえ、熱いのを避けて子供湯の浅い方へそうと沈ませた。光代は瞬間刺戟されてか、手足を硬直させ口を赤く開いたが、静かにつかった。

様々な婦人雑誌で、育児方法が指示され、こうするところは、こうしなければならぬ——と書いてあるが、かよ子が一番にが手で

むずかしく神経を張りつめて赤ん坊のめんどろをみるのはお風呂に入れるときであった。不潔になり易い小っぱけな光代のお尻を、ぬるま湯にして洗い、再び身体を暖めて、お風呂屋の姉さんにあずけ、おしめのことまでつけてもらってからが、かよ子自身の体を隅々まで流す時間である。それも短く手早くしなければならぬ。

首すじから石鹼をつけてかよ子は、足の爪先までなめらかにこすった。が、すぐには湯で流し落さない。石鹼の泡がついているうちに、別に人の目を盗もうという考えで



いが、片膝立てて、丹念に全身を洗うのであった。

かよ子が、風呂へ入った時には、きまってその夜、夫の目が求めてくるのが、この頃のかよ子達の習慣である。かよ子もそれを念頭

にきれいに身体を洗った。

かよ子は豊富な乳房が自慢であった。又自慢するに価した。処女で今の夫に見込まれ、結婚して、さて一女の母となっても、昔の面影が、なお艶めかしく、授乳のため乳房で、

赤ん坊の光代がくわえても、未だ上向きの処女のような乳首が、形をそこなわな

い。

かよ子はざっと上り湯をかけ上った。光代を守してくれている風呂屋の姉さんに「どうも済みません」と声をかけ、例の如くパンティからシュミーズと肌着一切を洗濯した新しいのと取りかえた。湯上りの汗が湧き出て来るのだが、手拭でゆっくりはぬぐってはおれなかった。光代が生れる前だったならば、夕飯も先に済まし、夜寝る直前に満夫と風呂屋の玄関まで一緒に、時間をしめし合せて夜道も恐しくもなく二人して帰れたのを、赤ん坊が出来てしまうと、そう甘いことばかりいって、夫を頼りにすることはなかった。

七時を風呂屋の高い柱で大きな電気時計が鳴った。かよ子は早く帰ってお茶でも沸かさなければと思った。

戸外は、今迄のむされた湯気の風呂内と違って、つまりそうだった息も新鮮に感じた。体内から熱さがほとばしり出るのも冷っとした空気に触れると肌ざわりが快よく、風呂の有難味が「いい湯だった」と思わず感激まじ

りについ出てしまう。

かよ子は、家へ二、三十歩手前に来た暗闇でギョッと立すくんだ。あいつだ。一週間程まえに一軒置いた隣りの大工さんの二階に下宿し始めた三十才位の男である。大工さんの素人下宿へあの年してちよっとおかしく、不思議でもあったが、一人者の気楽さが、身形から比べると、こんな二階に下宿をするような人には見えない、どっちかと言えば、女好きのする野性的な肩巾の広いい男である。

朝、かよ子がお飯の仕度を台所でしていると、その男は早々に出掛けた。台所の横を通るので男はカマドに火をつけているかよ子に「お早ようございます」と挨拶をして通り過ぎる。

二、三日過ぎてその男は朝方帰って来た。

そして台所のところを通りすがりに、かよ子が訊きもしないのに立止り「今朝、夜勤明けなのです。どうも夜勤のある仕事は身体がたまりませんよ、それに月給がそれだけの価値があればいいですが……お宅さんなんて良いですね、夜勤ってないんでしょう？ 夜勤あったら大変ですよ、僕ん所でも世帯持ちの者は夜勤っていうくらんです。家に奥さんや子供おいたんではねえ。それにもしお宅に

夜勤があったら、心配でまともにつとめていられないでしょう。奥さんみたいな美しい人を残しては！」

「まあ」

とかよ子は言ったが、嬉しくて放った声ではなかった。男のなれなれしい態度や、人をお世辞などで丸めて、ごまかそうとする体が嫌悪をきたした。

かよ子が下を向いてとり合うまいと思っても男が続けた。

「奥さんは、きれいです。始めての僕が面とむかって図々しく思われるでしょうが、僕は、奥さんの面影から思い出す人がいたので。別におのろけではないですが、奥さんが此地に居たって言うことが、この地を選んで引越して来た僕には、浅からぬ因縁に思えるのです。引越して来た夕方、奥さんが買物からでも帰られたでしょう。あちからいらした時、僕はドキッとしました。全く似てたので、他人の空似というが、びっくりしました。」

おやおやこの男は何を言うのだろう。かよ子は妙な気になった。私に似た人は以前の恋人だろうか？ 又どんな結果で終わったのか、かよ子は、そんな想像もめぐらすのだった。

「奥さん、お暇な折、その辺でお茶でものみながら、僕の話を書いてくれませんか、本当にぶっしついで無礼な奴だと思いでしょが……」

まるでかよ子の手を取ってふし拝むように哀願した。かよ子は解せなくて口元で笑っていた。男は「覚えて下さい、そのこと」と気軽に約束を抑えつけるように言って離れていった。

かよ子はその話を夫に持出そうと思っていたが、時間にせき立たされている満夫の態度に言うのをすっかり忘れてしまっていた。

今、その男が、くらがりにつつ立ってかよ子を待伏せしているのである。かよ子は、どうもあの時以来気になって、隅におけない油断ならぬ男とみてとっていたが、風呂帰りを狙って待っている男に胆を抜かれ、道の真ん中に仁王のようにつつ立っているのにうす気味悪かった。

「今、お帰りですか？」

男の言葉にかよ子はさり気なく、

「ええ」

といって素早く道をよけて、通り抜けようとしたが、

「一寸、お話しませんか？」

「いまは駄目です。家で待っていますから、早く帰ってお食事しなければなりません。」
「ほんのちょっとでいいですから、ねえ奥さん。」

「いや、今夜はだめです。忙しいのです。」

近づいてくる男にかよ子は、二、三步退いた。男は「奥さん！」と言ってかよ子の両肩を掴めた。「さあ、こっちへ来て！」と強引に引づる男の力に、腕の光代が落ちそうになって危く取りおさえていた。

男は既に恐怖のために全身の力を失っているかのように無抵抗な、かよ子を引づった。かよ子は、家へ入る露路の横の百坪ばかりの原っぱに建ち半ばな建築中の家へつれこまれた。板囲いは終って、床も張られていた。かよ子は恐しさに声がつまった。それにここでこんな様に男に乱暴されているのを、隣り近所の奥さんが見つけたら、なんというだろう。一人の奥さんが目撃して口から口へ、そう思うと怖くなって声も出なくなってしまうた。

男は目を血走らせて言った。「声を上げるなら、上げてみな、俺はもう明日は遠くへ引越しちゃうんだ。こうやってあっちこっちへ引越して、美しい若妻を犯していくのが俺の

趣味だし、道楽なんだ。」

「お願い、身体だけは許して、その代り何でもするから」

「何でもする？——じゃ裸になれ。こんな餓鬼、その辺に放っぱっておけ。」

男はかよ子の腕から無理に光代を取り上げようとした。

「やめて、やめて！」

「大きな声を出すとひとが覗きに来るぞ」

「やめて、赤ちゃんだけは」

「何を言ってるんだ。身体だけ許してくれ、赤ちゃんをいじめないで——寝言もいい加減にしろ！」

光代をとり上げようとする男とかよ子は、もつれて必死に離すまいと、床板の上に転った。二人の勢いで投げ出された光代が火がつくように泣き叫ぶと思ったが、何のめぐり合せが、かよ子は床の上に落ちても、風呂屋で姉さんに眠らされたきり目が覚めなかった。「ほら、ぎゃあぎゃあ言うお前さんより、餓鬼の方が良く知っていて、こういう時によくねていらあ。」

「……」

「さあ、俺はお前の身体がいいのを、ここへ来た時から、ずっと目をつけていたのだ。俺

の二階から、お前ん所の部屋が窓から丸見えだ。いつかお前が風呂上りに鏡台の前で、パントリー一枚になって、身体全体に香水をかけていたろう。あのときだって、いい思いでお前のストリップをみていたのだ。それをお前は知るまい。だからあんな放辣な姿態で鏡台に向っていたのだな。何って言うていいか頭が混乱したぞ。さあ、だから言うわけじゃないが、今夜はゆっくり拝まして貰おう。」
「……」

「何を黙っているのだ。自分で早く脱いでみろ、いつも鏡台に向う時のように」

かよ子は気絶しそうだった。泣くにも涙が出ない。絶叫しようにも声が利かない。身体も硬張って、その癖四肢がガタガタふるえるのを止めることが出来なかった。

男はニツと笑ったようである。

かよ子は不安を感じた。怖しさが目の前に迫ってきて急激に顔が青ざめた。かよ子は身を引こうと思ったが、身体は麻痺していた。かよ子は観念した。もう仕方ないことだ。

自分の不注意のなす業である。かよ子は、その男が夫に思えて来た。顔が男と重複する。

男が突然「おい！」といった。

かよ子は、その隙をみて思い切りつつ張り

男をはね飛ばした。

「かよ子！ 何そんなに暴れるんだ。かよ子！……おい！ かよ子、馬鹿な奴だなア」

かよ子は神経が次第におさまってきた。現実に戻ったのである。息苦しいのが、いくらか直ってきた。

「かよ子、わかるか、僕だよ」
夫の声である。

「お前は、僕の薬を飲んでしまったらう。いくつのんだ、確か未だ四つ五つあったらう。薬も知らない奴が急にのむとあぶないことになるぞ、おいかよ子、もう眼をあける、ほら

冷い水を一息に飲んでごらん。」
かよ子はだんだんわかって来た。よみがえったのである。

かよ子は、夕飯の仕度を膳に整えると、光代に添乳をしていた。その時、鼻っ先のねずみいらずに薬の箱が目についた。常時、夫が神経質で、睡眠の節にちよいちよい使用していたものである。かよ子は、夫の帰宅時間を計算して、それまで一ねむりとうかつにも軽く考えて一服含んでしまったのだった。

満夫は残業で七時半を廻った頃に我家へたどりついた。玄関を開けてもいつもの出迎えがない。「何してるんだらう」と足音をしの

ばせて部屋に入ると、誰もいない。奥の座敷はと覗くと、その蒲団へ親子して、かよ子と光代がねそべっている。

「只今」と満夫は声をかけたが、よほど熟眠しているのか、かよ子の愛嬌もない。その代りかよ子の寝姿は行儀が悪い。片膝たて、太腿や、ズロースがはつきりみえる。スカートがずり落ちていたのである。

かよ子は、満夫にその夜ゆったり温められた。何か不味ものを食った後の気持である。しかし、もう絶体に、あんな二階の男となんか口を利くまいと思った。
(了)

本誌最近号在庫案内

本誌の最近号は、左記の通り在庫しておりますから、欠本は売切れにならない中に、お申込み下さい。送料は当方にて負担いたします故、代金のみお送り下さい。尚昭和35年5月号以前の号は全部売切れとなり、残部は一冊もございません。各月号の総目次は先号誌上より漸次掲載の予定です。

昭和35年6月号 (特価一五〇円)
昭和35年7月号 (特価一五〇円)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|
| 昭和35年8月号 | (特価一五〇円) | 昭和35年9月号 | (特価一五〇円) | 昭和35年10月号 | (特価一五〇円) | 昭和35年11月号 | (特価一五〇円) | 昭和35年12月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年1月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年2月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年3月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年4月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年5月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年6月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年7月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年8月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年9月号 | (特価一五〇円) | 昭和36年10月号 | (特価一五〇円) |
|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|----------|
| 昭和36年11月号 | (定価二〇〇円) | 昭和36年12月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年1月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年2月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年3月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年4月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年5月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年6月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年7月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年8月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年9月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年10月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年11月号 | (定価二〇〇円) | 昭和37年12月号 | (定価二〇〇円) | 昭和38年1月号 | (定価二〇〇円) |
|-----------|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|----------|

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-------|----------|-------|----------|-------|----------|-------|----------|-------|----------|-------|----------|
| 昭和38年3月号 | (定価二〇〇円) | 昭和38年4月号 | (定価二〇〇円) | 昭和38年5月号 | (定価二〇〇円) | 昭和38年6月号 | (定価二〇〇円) | 昭和38年7月号 | (定価二〇〇円) | 昭和38年8月号 | (定価二〇〇円) | 昭和38年9月号 | (定価二〇〇円) | 悦特第一集 | (特価一五〇円) | 悦特第二集 | (特価一五〇円) | 悦特第三集 | (特価一五〇円) | 悦特第四集 | (特価一五〇円) | 悦特第五集 | (特価一五〇円) | S特第四集 | (特価一八〇円) |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-------|----------|-------|----------|-------|----------|-------|----------|-------|----------|-------|----------|

胸毛ある男優たち

梶

孫

一

遅ましい男性のシンボルの一つとして欠くべからざるは、その厚い胸板に密生する胸毛であろう。私は脇毛礼讃者の一人として、銀幕に現われた東西男優達の胸毛と、それに伴う緊縛シーンを語りたいと思う。

真夏の太陽のもとに、海風になぶらす胸毛、水に濡れてびったり胸にはりつく胸毛、はだけたシャツからのぞく胸毛、少しぐらい容貌がお粗末であっても、漆黒の胸毛によってその男性の魅力は、いちじるしく倍加するだろうと思える。

さて、私好みの男優の一人に、中堅スターのスチーブ・コ克蘭がある。彼の胸毛はトニー・カーチスと同型の、いわゆる螺旋状型であって、いってみれば草原に一陣の突風が吹

き、草が一斉に横だおしになった瞬間的な状態とでも形容しようか、つまり、渦を巻いて中央を流れている型で、数ある型の中でも珍らしく好ましい型である。

元来、彼はアクの強い個性ある俳優で、ギャングスターとして「白熱」「明日なき男」で売出したのだが、近頃ではドラマチックな役柄にも新境地を拓いている。

大映配給の「ダニイケイの牛乳屋」でボクサーに扮し、コミカルな演技と共に、その素晴らしい胸毛を存分に観せてくれた。続いてリパブリックの「春来りなば」でも農民に扮して、上半身裸で木挽きするシーンがあったし、同じく、リパブリックの「地獄部隊を撃て」では政府派遣の密偵となり、敵に捕われ

て後手にしられる。格闘の後なのでシャツは破れ去り、遅しい上半身が露わに、色彩を得て極めてリアルに描かれていたし、緊縛というオマケまでついて正にお誂え向きであった。

トニー・カーチスも又、見事に整った胸毛の持ち主で、その魅力を百パーセント生かした映画に、古くは、パラマウントの「魔術の恋」、ユニバーサルズの「四角いジャングル」

「野望に燃える男」等がある。「魔術の恋」では、愛妻ジャネット・リーと共に出演し、魔術王フーデューニに扮し、舞台上に裸形でグルグル巻きにしばらく、電気鋸によって寸断の直前に縄抜けをしたり、パンツ一枚で両足首に鎖をかけられ、吊り上げられ

たりガラスの水槽に漬けられたり、恰も拷問に等しい魔術を展開させたり、忘れ難い場面が数多くあった。又、「野望に……」では、始めから彼の男性美を売ることを計算に入れて作られたように思うほど、随所に素晴らしい場面が観られた。

次にはロリー・カルホーンとガイマ・ディーンの二人が挙げられよう。前者はKKOの「黄金の銃座」で、腰にタオルを巻いただけのトルコ風呂シーンで、黒々とした逞ましい胸板を覗せてくれたし、後者はNCCの「西部を股にかける女」で、見事な胸毛をみせている。

パラマウントの「裸の天使」に於けるジョン・デレックの胸毛も忘れ難い。年とともにますます濃さを増してきたW・ホールデンは又、素晴らしい胸毛の持主であり乍ら（「ブラボー砦の脱出」「サンセット大通り」等で見せた）コロムビアの「ピクニック」、フォックスの「慕情」等では惜し気もなく剃り落とし、大いに若々しいところを見せていたが、「鍵」では、再び以前に優るような見事な胸毛が観られた。

大体において、所謂トップスターよりも中堅スター、若しくはニューフェイスの中に、

思いがけぬ魅力をも、発見することがある。アルドレイ（「やさしい狼犬部隊」「裸者と死者」）や、デイルロバートソンの、毛皮を貼りつけたような、物凄いの一語に尽きる素晴らしい胸毛もさることながら、ジェームス・ガーナーとダリル・ヒックマンなども思わぬ拾いものである。

ガーナーはWBの部落の対決」で、本邦初お目見得をし、劇中、R・スコットらと池で游泳中、衣類をこっそりと盗まれてしまい、アチラ版、次郎長裸道中と洒落込む場面がある。腰に樹木の小枝を纏っただけで、ウッソウとした胸毛が、私を惹きつけたことはいうまでもない。

ヒックマンは、ウトロの「お茶と同情」一本のみの出演ではあるが、その溢れる若さと健康美から受ける清潔な印象は、無限の感動に似たものを与えてくれた。主役のジョンカーと同室する好青年の役で、彼が他の生徒達と白いショートパンソー一枚で海浜に戯れる場面は、幾度観ても飽きないものであった。

リパブリックの「硝煙のユタ高原」に出演したスコット・ブラディ。アライドの「赤い河の逆襲」出演のジョージ・モンゴメリの二人も、又、素晴らしい胸毛スターである。

ブラディは前作、リパブリックの「烙印なき男」でも、半裸でヒロインを追い廻す場面があったが、逞ましい赤銅色の膚に玉の汗が流れ、濃い胸毛が数えられるほどにクロージアップされたときには、思わず息が詰りそうなショックを受けたのを憶えている。

「硝煙——」では、白人に迫害されるインディアンに扮し、立木に両手足を縛られ、背に焼鉄をあてられる場面があったのだが、プリントの故かこの画面は大変に暗く、彼の魅力を充分に堪能できなかったのは残念であった。モンゴメリの「赤い河」では、これも又、混血インディアンに扮し、ある誤解から太い杭に後手に縛りつけられ、大勢のインディアンの女達に石を投げつけられる私刑に遭うが、私は、この人の誠実さを現わす精悍な風貌と、逞ましい体格が好きだ。

ユニヴァーサルスの「ジョン・サクソン」も若手売出しの男性美スターだ。又、フォックスの「ならず者部隊」に於けるロバート・ワグナーも仲間いただけ。ナラタージュ場面で、水泳を終え、プールから上り濡れた膚に水光りする胸毛の見事さと、純白の水泳パンツが強烈な印象となって私の臉に残っているのである。

プールで忘れられないのは、パラマウントの「暗黒街の巨頭」である。ギャングの王者グレート・ギャッビーの生涯を描いた、アラシッド若かりし頃の映画なのだが、ラストシーンで、彼が自宅の豪華なプールサイドで黒パンツ姿で日光を浴びながら、共演のマクドナル・ドケリイに、ギャングというものが如何に悲惨な生態であるかということを、さまたまにポーズを替え、苦衷を表現しながら話すシーンであるが、逞ましい胸毛を余すところなく、ラスト一卷にわたり観せてくれたのは満足の収穫であった。

これらアメリカの男優達にも増して、特に魅力を感じるのは欧州映画の男優達である。殊にイタリヤ系のトップスターにこの趣きが多いようである。レナード・バルティニ。マツシモ・ジロツティ。ガブリエル・フェルゼッティ。マルチェロ・マストロヤンニ。リク・バッタリア。ラフ・ヴァローネ。フランスのレイモン・ベル克蘭。アンリ・ヴィダル。ローラン・ルザッフル。イヴ・モンタン（彼の胸毛は少々お粗末だが、体格が素晴らしい）ドイツにはヨアヒム・フックスベルガー等、男性美の魅力横溢した俳優達がウヨウヨしている。

中でも、ラフ・バローネの胸毛は、その野生的なマスクと共に実に素晴らしい。彼の出演作で、東和提供の「妄執の影」を改題した「愛の迷路」などは、彼の胸毛を巧みに強調したと思われる場面がかなりあったことを記憶している。この映画では曲芸師に扮して、茶色のサポーター一つ（アチラの曲芸師はタイツを穿かないようだ）で、随所に現われ、その素晴らしい男性美が画面一杯に躍動し、観る者を圧倒せんばかりだった。

ベル克蘭は二重瞼の冷酷で理智的なマスクで、「肉体の怒り」では黒の水泳パンツ一枚で魅力的な胸毛を見せていたし、バルティニは、NCC提供のローマ帝国時代を背景にしたスペクタクル史劇（題名失念）で奴隷の一人に扮し、その逞しい男性美を発散し、フェル・ゼッティの、同じNCCの「明日なき愛情」で、海浜に水泳パンツ姿で見せる胸毛も又、捨てがたいものであった。

ジロツティは、映配の「ファオビラ」の刑罰シーンで、凄々といえる胸毛をみせてくれたが、彼の出演映画は、いつの場合も裸形場面が多いようで、「ファオビラ」の昔から映配の「悪者は地獄へ行け」東和の「リラの門」、又「殿方御免遊ばせ」「女は一回勝負する」

等々で、それぞれその胸毛を見せてくれた。

レヂアニは、この処すっかり御無沙汰だが旧作「火の接吻」で、ガラス工場の職工に扮して見せた上半身の逞しさは印象に深い。フックスベルガーはドイツ映画には珍らしくタフガイ的な二枚目でデビュー作「0815」で一兵卒に扮し、シャワーを浴び乍ら見せる上半身の逞しさ、胸毛の素晴らしい。共にいつまでも忘れ得ぬ男優であろう。

ローラン・ルザッフルは、人も知る谷洋子の旦那様。東和提供の「われらバリツ子」でボクサーに扮して見せた胸毛は、胸板一杯を覆いつくす程に感じられたし、バートラン・カスターのそれも割合に整っている。殊に、パラマウントの「欲望の砂漠」に於て、半裸で逆吊りの拷問にあう場面など、苦悶の好演技と共に忘れ難いシーンであった。

我国の男優に目を転ずると、残念ながら特筆すべき「男性美スター」がいない。東宝の南道朗に素晴らしい胸毛があると伝え聞くがまだ一度もお目にかかっていないし、僅かに森繁久弥、水島道太郎、葉山良二、仲代達也等を挙げ得るに過ぎない。しかし、それとて外人のそれと比して、いたってお粗末であるといわざるを得ない。

異色推理小説

炎の殺し

野 本 大 蔵

誰かが呼んでいる。それも一人ではない。何人もの人が、あわただしく呼んでいる。

「先生、先生！」

何人もの声が騒々しく、遙か彼方から聞えるのである。

「先生、先生！」

返事をしよう、返事をしなくちゃならないと思ったが、声が出ない。答えようとしても、声は喉元で止まってしまうのである。

「うッ」

返事をした積りだが、そのまま、引きずり込まれるように、深い眠りの谷底に沈んで行く。

「先生、先生！」

「宗方先生」

「宗方先生！」

宗方医師はハツとして目覚めた。荒々しい呼吸を意識しながら不吉なものを予感した。

「宗方先生」

「おッ、何だね」

「大変なのです」

あわただしい婦長の声が、窓の下から聞えて来た。

窓を開くと、婦長を始め、二三人の看護婦が、顔をこぼわらせて立っていた。

陽はとうに高く上って、晩春の空は懶いような暖かさであった。

「先生、大変な事になりました」

「何だ、またストを起すのかい」

「いいえ、そうじゃないんです。十三号室に死人があるのです」

「おいおい、もっと落付いたらどうかね。婦長たるもの、そんな報告のしかたってあるかい」

「だって、先生」

「わかってるよ。十三号室は駒井という患者だね」

「はい、駒井信三さんです」

宗方医師は重症患者の駒井信三を思い浮べた。

「案外に早かったね。昨夜の何時頃だったね」

「それがよくわからないのです」

「君も、昨日今日の駆け出しじゃないんだから、もう少し平静にならないと因るな」

「はい。でも亡くなったのは駒井さんじゃないんです」

「何だって、駒井は十三号室の患者だろう」

「そうですわ。その十三号室に女の人が殺されているんです」

「おんな？ 人殺しか」

宗方医師の睡気は一ぺんにケシとんだ。

「それならそうと、最初からそういえばいいのに。どうも話がトンチンカンだと思った。それで、その女は誰なの」

「わからない人ですわ」

「駒井にきけばわかるだろう」

「駒井さんは、どこへ行ったか、見当らないのです」

「よし、直ぐ行くから、現場はそのままにしておいてくれ」

看護婦達が去ると宗方医師は

「チッ」

と舌打ちした。

今日は折角の公休である。妻のえり子は昨日の午後から実家に泊りに行ったし、思い切って羽根を延ばそうと思っていたのに、思いがけない殺人事件が起きてしまったのである。然し、病院の棟続きに住んでいる以上、たとい非番でも、そのまま見逃すわけには行かなかった。

十三号室は病棟の西外れに当り、立木に囲こまれた薄暗い病室である。その妙に湿った、鈍い光線を浴びて、濃い化粧の女がベッドに横たわっていた。脂肪の乗った小麦色の腕をダラリと垂らして、マニキュアされた長い爪は、そこだけが未だ生きているもののように、白いシートと無気味な対照をなしていた。

当番の看護婦の話によると、いつもの通り朝の検温の為に十三号をノックしたが、返事がないので扉をあけて見ると、濃艶な女がベッドで殺されていたというのである。

「ところで、この女は一体誰なのか？ 君達知らないの」

「ええ、存じません」

「どこかで見た覚えがないかね」

「ありませんわ」

「昨夜、何時頃から、この病室にいたか、誰か知らないかね」

見舞の人は、一応受付まで申し出る規則になっているので、宗方医師は看護婦達に聞いたのである。

然し、婦長を始め看護婦達は、自分達の落ち度をかくすかのよう

に、だまっていた。

「駒井はどうしたの？ 探してみたかね」

「ええ、この附近を探しましたが、見当りません」

見習看護婦が、恐る恐る言葉をはさんだ。

「駒井は重症な結核患者だから、そう遠くへ逃げる事はできない筈だ」

宗方医師は注意深く、部屋中を見廻した。

駒井が重要な容疑者である事は間違いない。

この時、病院の掃除婦が息をはずませて駆け込んで来た。

普断は元気な四十代のおばさんだが、余程驚いたらしく、口も満足にきけなかった。

掃除婦の報告で、裏門の近くにある燃料小屋を見に行った宗方達は、その小屋で駒井の死んでいるのを確認した。

「矢張り……そうか」

これで事件は解決したのも同然だと、宗方医師は思った。駒井と謎の中年女の間には、或いは、複雑した痴情関係があるかも知れない。

然し当事者の二人が死んで了った現在、事件は憶測に過ぎないものになっているのだ。

「兎に角、現場は両方とも、このままにして、手をつけちゃいけない」

宗方医師はこう命令すると、病院長と警察に報告する事にした。

検屍の結果、謎の中年女は薬物死だったが、驚いた事には、駒井の死は他殺であった。

解剖の結果、何者かに首を絞められている事が判明したのであった。

中年の女の薬物死は青酸によるものだが、これが果して自殺か他

殺かはハッキリしていない。然し駒井は自殺ではない。犯人は判明しないが、他殺である事は確実なのだ。

宗方医師はこう考えた。

謎の中年の女が、駒井を扼殺して、それから駒井の病室で青酸をおおった。この両者の間には、何か複雑な痴情関係か或は金銭問題があったのであろう。そこで女が怒って駒井を扼殺し、自分は毒物自殺をしたのであろう。

駒井は重症患者だから、女の細腕でも、容易に扼殺する事ができたと思われるのである。

十三号室は刑事達によって、念入りに調査された。然し、期待した程の結果は得られない風であった。

「この事件は、問題にする程の大きなものでないのだから、出来るだけ秘密にして貰いたい。下手にマスコミに騒がれると、病院の人氣に障るからね」

小心な院長は、早くも自己擁護にかかっていた。

「そうですとも、大した事じゃないですからね」

宗方医師は、禿げてずんぐりした院長の心配そうな顔を見乍ら、腹の中で院長の小心翼翼たる態度を冷笑した。

単なる無理心中か、それとも大事件に進展するかは、宗方医師の胸のポケットの中にある、部厚な手紙が鍵を握っているらしいのである。この手紙は宗方医師に宛てた駒井の手紙で、宗方医師は駒井のベッドの下にかくされてあったのを、人知れず素早く抜き取ったのであった。

そして、この手紙に依って、宗方医師は事件が意外な方面に発展しているのを知らされたのであった。

駒井信三の手紙

宗方先生。

先生はこの遺書めいた私の手紙には、何の興味も抱かれないかも知れません。医師が患者の悩みを、一々聞いていたのでは、際限がありません。まして、人生に破れ去って、今日明日の命かも知れな

い人間のたわ言など聞くさえ腹立たしい事に違いありません。いかにレジャーブームとはいいい乍ら、こんな暗い繰り言などは、真っ平だといわれるでしょう。

それは尤な事で、誰でもこんな手紙を読もうなどとは思われないでしょう。

然し、私は敢てこの手紙を先生に読んで戴きたいのです。而も最後まで念入りに読んで下さいと、お願い申し上げます。ずい分押しつけがましいお願いで、無礼な奴とののしられるでしょうが、私の最後の頼みと考えられて御許容下さい。

私は近頃、自分は殺ろされるのではないかと思うようになりました。この予感
は重病人の単なる妄想ではありません。
或る原因から、私自身ハッキリ認めてい
るのです。然し、殺ろされるという予感
が、どんなに現実性があるとして、私は
恐れているわけではありません。最早、
死期の見えている私が、今更死を恐れる
などは、笑止に思われるからです。

それなら、何故に私がこんな予感を受
けるようになったか、その原因から申し
上げなければなりません。

私はこの病院にお世話になる前に、M
療養所に入院しておりました。K海岸に



ある国立療養所で、数年前大火に遭遇したのを、先生も御存じだろうと思います。

M療養所に入院して一カ月ばかり経過した或る夜。そう、晩春の空には星一つなく、一筋の光すら見えない、妙に蒸し蒸しする夜でした。時間は十時を過ぎていましたでしょう。無論、療養所は既に就寝の時間が過ぎていましたので、どの窓の灯りも薄暗いか、或は消えておりました。

その時、誰かが扉を軽くノックして、呼んでいるような気がするのです。フツと気がついた私は、暗闇の中で眼を大きく見開いて、廊下に佇んでいるらしい気配を察しました。

「どの部屋か知ら？」

耳をすましてみると、又も静かに扉をノックするのです。どうやらその音は私の部屋の扉らしいのです。私は、用心深く起き上りまじしい。蒼白な皮膚がピクピクいれんして、緊張しているのを意識しながら、私はベッドを降りてスリッパを突っかけました。

「もし、もし」

確かにこう呼んでいるようです。

「はい、何でしょうか」

「あの……すみませんが」

澄んだ女の声が、扉の向うから聞えて来ました。扉をあけると、螢光灯が、廊下を水底のように仄青白く照していました。その光の中に、ひとりの少女がほっそりと立っていたのです。そして、その少女の立っている処だけが、ボーッと明るく感じられたのは、少女がピンクのネグリジェを着ている為かも知れません。

「怖いよ」

いきなりこういって、少女は私の方に寄って来ました。

「えッ、何かあったの？」

「何だか変なの。変な音がするんです」

と、何か物におびえている様子でした。

「変な音って？」

「ええ、とっても気味の悪い音なの。看護婦さんを起そうかと思いましたが、怖くて怖くて」

「お部屋はどこですか」

「お隣りですの」

「あ、今日入院なさった方ですか」

「ええ」

少女は面映ゆそうにうなずきました。

「見て戴けませんか知ら」

「ええ、行って見ましょう」

私はちょっと騎士のような気持になって隣室へ行きました。私の寝間着の袖を掴んでついてくる少女の肌からは、柔らかな匂いがふんわりと流れて、ロマンチックで未知な冒険に踏みこむ時のような不安な楽しさがこみ上げて来るのです。

「ほら。ね、きこえるでしょ」

恐る恐る入った私達の耳に、部屋の片隅から、カサカサカサという連続音がきこえてくるのです。目を凝らして見ると、黒い大きなものが、壁を叩き乍ら動いているのです。

「あれですね。きっと」

「何か知ら？」

少女が声をひそめて囁きます。

「そう。何だろうね」

私はうごめくものに近よりました。

蛾！

黒くて大きな奴です。夏の宵に飛び廻るあの蝙蝠くらいもある蛾です。

「何だ。蛾ですよ。黒くて大きな奴」

「いや……。怖い」

と少女は身を震わしました。

「紙を下さい。取って捨てちゃいましょう」

少女は牀頭箱から、薄いちり紙をとって、私に手渡しました。

私は紙を重ねて、黒い蛾を素早く壁に押えつけて包みました。

蛾はブルブルンと翅をふるわせていましたが、完全に包まれると、じっと静かになりました。やがてポリウムのある紙包みからは、蛾の体温が掌に伝わって来ました。私は生き物の生命を自分の掌中に握っているという、不思議な感情に浸りました。然し、次の瞬間、私はハッとするような不安に襲われたのです。

それは何の根拠もない、一種いいような不安ですが、私はこの蛾を握っている事が、私を不安にする大きな原因ではないかと感じたのです。

私はその不吉なものを、窓をあけると遠くの闇を目掛けて捨てたのです。

「薄気味の悪い蛾ですね」

「ほんと」

「変な音は、やはりそうでしたね」

「あたし、怖くて怖くて、音のする方を見る気がなかったわ」

少女は初めて微笑をもらいました。そして私も初めて少女の顔を眩しそうに見たのです。透きとおるような蒼白い、細面に大きな瞳が濡れて、小さな唇の鮮紅色が印象的でした。

それはハッとさせるような鮮烈な美と、そこからもし出される夢のようなムードを漂わせているのです。私は釘付けにされたように立ち尽しました。

やがて、われに返った私は、この部屋に長くどまる事の失礼を悟りました。

「もう、大丈夫ですね」

「すみません」

「では、お休みなさい」

「お休みなさいませ」

自室に戻ってから、私はベッドの中で暫らく反転し乍ら、眠りにつけませんでした。

翌朝、いつもより早く目覚めた私は、隣室の扉口へ行ってみました。室内はひっそりとして、あの少女は未だ起きた気配がありません。

「檜山真木子」

と、私は入口にぶら下っている名札を読みました。

看護婦が朝の検温に来た時、私は何気ない風で、檜山真木子の事をききました。

「ええ、きれいな人でしょ。何でも大きな会社の重役さんの嬢さんですって」

然し、これ以上は何も知る事ができませんでした。

午前中の安静の時間が過ぎると、扉をノックする音が聞こえまし

た。

「どうぞ」

「はいってもいい？」

扉の蔭からは、真木子の清純な顔がのぞいています。大きな瞳がいたずらっぽく、ほほえんでいます。

私達は永い間の知り合いのように、顔を見合せて笑いました。それにしても、真木子は何という清潔な肌をしているのでしょうか。汚れを知らぬ、きめの細かい肌は、落付いた気品さえ具わっているではありませんか。私は昨夜捕えた黒い蛾の、温もりのある感触を思い出して、それと関連した夢想的なムードに蕩然と浸ったのです。

「あれから眠れましたか」

「ええ、お蔭様でぐっすりよ」

「僕はなかなか寝つかれなかった」

「あら？」

「興奮しちゃったのかな」

「まあ……」

こうして、私は真木子と親しくなって、やがて、純粋なものを互いに求め合うようになりました。誇張していえば、格調の高い、真実な愛を求めて、火華を散らすようになったのです。

或る朝のこと。そうです、それは、頬白が療養所の裏山でしきりに鳴いている、すがすがしい初夏の朝でした。洗面所で顔を一緒に洗うと、真木子は赤い山つつじの花を弄びながら、突然こんな事をいい出しました。

「今日、お父様がいらっしゃるわ」

私はなんだか不満になって、黙っていました。

「そうしたら、あたしに口をきかないでね」

「どうして、おしゃべりをしていけないんだい。人間が口をきかなくなったら、動物と同じじゃないか」

「だって仕方がないじゃないの」

「そうすると、僕達はこれっ切りになっちゃうの」

私は焦ら立って聞き返しました。

「だって仕方がないじゃないの」

と、真木子は再び同じ言葉をくり返すだけでした。

私は何とも言えない不安に襲われ始めました。そしてその不安は段々ひろがって行って、丁度それが実際にあるかのような思いになるのです。私は胸の痛むような、緊迫感を覚えたのです。

今にして思えば、この不安感は、神経の過敏になった病人特有のものですが、結果的には現実となって表われて来たのです。私の予感には妙に当るのですが。この日をきっかけとして、この程迄に私の運命が狂うとは夢にも思いませんでした。

この日の日暮れ時、私と真木子はテラスに並んで、気拙い沈黙を守っていたのです。

「お父様、遅いわ」

真木子は二、三回、このひとり言をくり返しました。それが私には、真木子の裏切りの言葉のように思われてならないのです。

「お父様、遅いわ」

この父を気づかう単純なひとり言が、恋敵に恋人をとられたように、強く私の胸を刺すのです。

その時、真木子の父が、見舞に来ました。

ゴルフの帰りらしく、日焼けした顔をほころばせて、案内の看護

婦に冗談などいい乍ら元気よくやって来ました。父の姿を見ると、真木子は私のことなどは全然無視したように父のそばへ行っていました。間もなく隣室からは、楽しそうな父娘の笑い声が洩れて来ました。

ポツンとただ一人、テラスに取り残された私は嫉妬めいた淋しさを噛みしめ乍ら、フト庭の一隅に眼をやりました。庭は夕暮れの霧に包まれてその尽きる処、松林が鉛色の海面をくぎっていました。すると……。

「おや？」

私は芝生の片隅に、ひとりの女の人がひっそりと立っているのを見つけました。私は気がつかないでいたのですが、先方では、私をずっと見ていた様子なのです。私と目が逢うとニッと笑って、静かに歩み寄ります。目が射るように美しい女の人です。

「失礼ですが」

女の人はテラスのそばへ来て、

「真木子さんのお友達ですの」

と、私の顔をじっと見つめて聞きました。

私が曖昧な微笑を洩らして返事をしぶっていると、その人は重ねてニッと笑いました。その笑いは人をひきつけずにはおかまいという意力のこもった笑でした。

「御気分いかが」

「はあ……」

「お宜しいの」

「はあ……」

「そう。お大事にね」

と、女の方は前よりも一層濃艶な眼差しで私を見つめました。それから、暫らくの間、いろいろな事を話し合いましたが、その時どんな内容の話をしたが、今は何も覚えておりません、ただ、その間の時の流れは、アッというように早かったようにも思われますが、又その反面、じりじりするほど遅かったようにも思われました。不思議といえば、私の足はテラスに釘付けされたようになり、見知らぬ女の人と話しつづけたのです。これも一つには、真木子に去られた心の虚ろさを何かで満たしたいという、潜在意識が私の心の隅にあった為かも知れません。

あたりは漸く、闇の色が濃くなって来ました。

「ね、あたし、ゆっくりお目にかかって、あなたとお話したいわ」

「はあ」

「お約束しましょうね。あたし、近くの別荘に來ていますの。今度お迎いをよこしますから、いらして下さいね」

こういうと女の方は芝生を軽く踏んで闇の向うに消えて行きました。私はその闇の空間に、謎の女の姿を画いて、暫らく茫然としていたのです。

「あら。まだお部屋に戻らないの」

こう真木子に声をかけられて、私はフト我に返りました。

「あ、お父様は？」

「お帰りになったわ」

「お見舞はお父様だけなの」

「そうよ。どうして」

「いや、お母様は來られなかったのかと思ってね」

「母はおからだが悪いのよ。だから滅多に來られないわ」

真木子が探るような目付で、私の周囲から何かを嗅ぎ出そうとしているのを意識し乍ら、私はあの女の事だけは口に出すまいと、心にきめたのです。真木子に話をして、私自身の心の秘密を明るみに出されるのを恐れたのです。尤も心の秘密といっても、ハッキリ指摘される程のものではありません。極く淡い、秘密のような影とでもいうべきでしょうか。それでも私は、それをそのまま、そっとして、誰にもあかしたくなかったのです。

それから二三日経過した或る夕暮でした。入梅前の湿り気の多い陰鬱な模様が療養所一帯にたれこめていました。周囲に気がねをするように窓をノックする音がきこえました。

テラスへのガラス戸をあけると、若い見知らぬ女が窓に身を寄せるように立っていました。

「あの……」

と、その女は素早く私に手紙を渡すと、早口でいいました。

「奥様がこのお手紙の返事を、すぐ伺って来いと申しました」

私は急いで手紙を抜きました。手紙には先日失礼しましたが、今夜これからお越し下さいますか。若し、いらっして下さるなら、この女と一緒に来て下さいという意味の走り書がありました。

私が躊躇していると、女は私の心の中を見抜いたらしく、声をひそめていきました。

「ここから近くです。わたくしがお供致します」

それで私は心が決まりました。

「人目につかないようにって、奥様がおっしゃっていました」

私は未知の世男に入る時の、あの興奮を覚えました。スリルに緊張したのです。幸いにも、その頃は病状も安定していたので、平

熱の日が続いていたのです。私は身支度をする、何気ない風を粧って、こっそりと戸外に出ました。

松林の中の小道で、女は私を待っていました。松林を過ぎると、堀割りのした、ゆるい山道になります。両側の山肌から、じくじくと水が滴たっているのを、夜目にもわかりました。深閑とした空があたり一面にひろがって、息苦しさや圧迫感に、私は荒い息づかいをするのでした。

堀割りをすぎると、急に視野が拡ろがって波の音が大きく響いて来ました。前面は丘を背負って、なだらかな砂丘が続き、砂丘の尽きるところは黒い海がよどんでいました。

そこはこの海浜の別荘地帯になっていました。いろいろな型の別荘が、近代建築のサンプルのように建っているのです。それらの別荘の一番前に、あの女の別荘があったのです。

「やっぱり、いらしたのね」

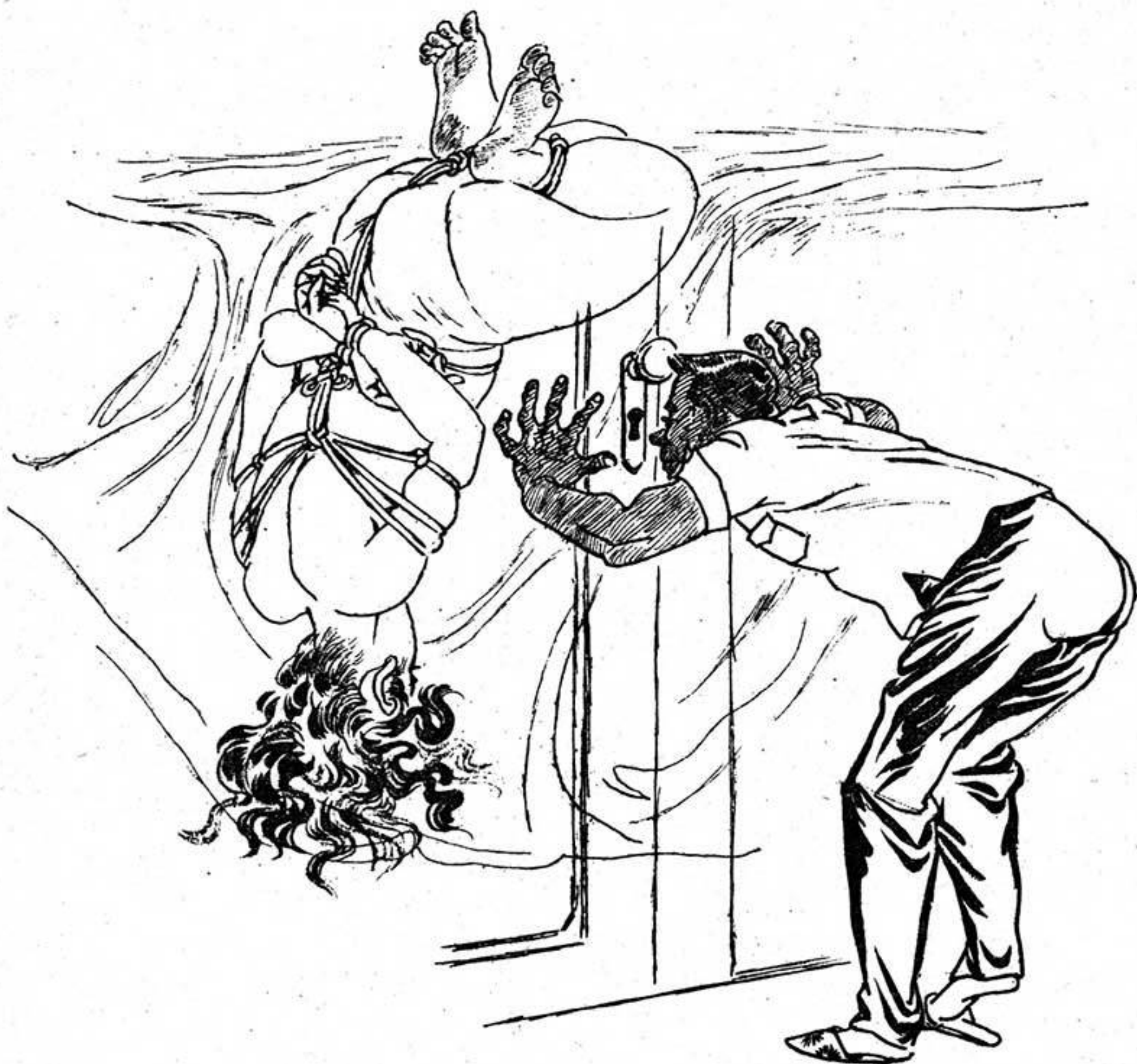
あの女はニッと微笑しました。笑うと片方に深いえくぼの出る陰影のある顔立ちです。

刺激の強い香料が、キーンと緊張した私の神経に快よい刺激を与えてくれるのです。

「あたし、京子といいますの。覚えて下さるわね」

京子は唇を近づけると、私をじらすかのように、スイと身をひるがえしました。京子が意識して、そういう態度をとっている事は充分知りながら、私は焦らだたい思いになるのです。散々じらされた揚句、私は簡単に京子の思うままになってしまったのです。京子の身体は、私を有頂天にする程、深みのあるものでした。

夜更け。



「京子は途中まで私を見送ってくれました。別れ際に京子は私の手をとりました。」

「ね、今度いつ来て下さるの」

「いつでも」

全身にひろがっている、快よい疲労感に甘えながら私は京子の熱い口づけを受けたのです。

療養所の建物は濃い闇に包まれて、ひそと立っています。私は神経を集中させて、注意深く廊下をあるいて、自室の前に来ました。

すると、隣室の扉が細目に開いて、その蔭から、低いハッキリした声がひびいて来たのです。

「駒井さん」

（アッ！真木子……）

私はギクッとして息を吞みました。その声は今夜の私の行為を、見透すかのように、鋭く憎悪さえもっています。

私が凝然として佇っていると、隣室の扉は荒々しい音をたてて閉まりました。私は自室に入るなり、急いでベッドにもぐり、息を凝らして隣室の様子を伺っていました。隣室からは物音一つしないで、深夜の静寂の遙か向うで、咳ぶく声が続けざまにするばかりでした。それにしても真木子はどうして、あんな態度をとったのでしょうか。今夜私が出て行ったのを、見ていたのかも知れません。或は結核患者の特有の鋭い神経で、私の今夜の行為を見抜いているのかも知れませ

ん。こんな、とりどめのない事を考えている内に、私は引きずり込まれるような、深い眠りに入ったのです。

その翌朝から、真木子は私に口をきいてくれません。私が真木子の機嫌をとろうとして話をしかけると、真木子はツンとして立ち去ってしまうのです。真木子は段々、自室に閉じこもっている日が多くなりました。私もまた、真木子を自然と避けるようになっていたのです。それは真木子を恐れるというよりは、京子の濃艶で巧妙な誘いに夢中になって了ったからです。私の思いは京子の肉体だけでした。のめり込むような感触と心憎いまでの技巧に、私は完全に虜になっていたのです。庭の帳が降りると、私は物に憑かれたように療養所を脱出して、京子の別荘にひたむきに急いだのです。

或る夜。

私はいつもの時間よりずっと遅れて、京子の別荘に行きました。勝手知った玄関の扉を音もなく開けて、私はするすると部屋に入って行きました。

すると、何となくいつもの気配と違うのです。何か息詰るような緊迫した異常な気配が感じられました。私はそこに唯ならぬものを感じたのです。熱線のような、烈しく熱いものでした。私はハッとしてあたりに気を配りました。

その時、息を押し殺したような声が隣室から洩れました。京子の声でした。私は足音を忍ばせて、鍵穴をのぞきました。

「あッ！」

私は思わず声をたてるところでした。そこは京子の寝室で、緋色のカーペットが敷いてあって、私と京子が過した部屋です。

いま、私の眼前には、その京子が真白な肌をくねらせて、もがい

ているではありませんか。

両手と両足を縛られた京子は、エビがはねるように、うごめいているのです。

私は心臓の高鳴るのを覚え乍ら、鍵穴から目を放さないでいました。

男は一体何者か！

私は縛られている京子に夢中になって男を観察するのを忘れていましたが、私の中に嫉妬の炎がメラメラと燃え始めると、私は男の事が気になりました。

瞳を凝らしていると、男の顔が正面を向きました。そこで私は、「あッ！」

と、再び驚きの叫びを押し殺さなければならませんでした。

「真木子のお父さんだ！」

確かにそうです。相手の男は、真木子の父親に相違ありません。日焼けした、あの顔を見違える筈はありません。

口がカラカラに乾いているのを意識し乍ら、私は喘えぎ喘えぎ砂浜をあるいていました。

幾度も足をとられてはころんで、なぜこうして逃げ出すようにしなければならぬか思考する余裕は全然ありませんでした。ただ物凄じかりの風が海から吹きつけてくるのを意識しました。

砂丘を越えて松林に入ると、風に吹きさらされた松林のどろどろという音が耳に入りました。

「あ、ここが療養所の前の松林だ」

と、私が気付いて、向うを見ると、松林の外れは一面明るくなっています。

「おや？」

松林を走るように抜けると、前面の広い芝生を前にして、療養所の赫々と燃えているのが私の目につきました。

「火事だ！」

木造の建物は折からの強風にあふられて、炎々と燃えひろがっていました。私は思わず自室を見ました。

炎は私の部屋の方にもひろがって、夜目にも明るい炎の舌がメラメラと燃えあがっていました。

私の混乱した意識はこの時、ハッキリ統一されたようでした。

「真木子！」

そうなんです。真木子はどうしたか、その安否を気づかう心が、ぼつ然と湧いて来たのです。そして、次の瞬間、これはこうしてられないという考えが起りました。

私は燃え燃える部屋を目がけて進んで行きました。然し、いくら私が勇気に駆られても、真直ぐ炎に突進する事はできません。自室のある方を遠廻りして、炎をよけ乍ら裏山の裾を通って行きました。顔がじりじりと熱く、焦げそうになるのを覚えた時、

「駒井さん！」

必死の叫び声がきこえたのです。

「真木子さん」

ネグリジェ一つの真木子が、山裾の小さな繁みに炎を避けて蹣んできました。

「危険だよ！　こんなところは危険だ。早く逃げろ」

「怖い！」

真木子は私に抱きついて来ました。

白い華奢な顔が炎に赫々と照り映えているのをチラと見て、私は真木子のか細いからだを抱くようにして、裏山を登りました。少しでも炎を避けようと。私たちは野茨や雑草の繁みをくぐったり、越えたりして、やっとのことで炎を逃れる事が出来ました。

痛くなる程抱き合った私達は、坐り込んで大粒の涙をポロポロと流しました。そうして、果ては呆然として、顔をくっつけていたのです。そうしなければ私達は不安でならなかったのです。

翌朝、余燼が未だぶすぶすときすぶっている内に、いち早く駆けつけたのは、真木子の父でした。私は真木子の父の顔を、人知れず穴のあく程注視しましたが、昨夜のあの男かどうかを確認する自信を持ちませんでした。

真木子は早々に父と共に、全焼の療養所を後にしました。切なく見送る私に軽い一べつを残したきり、自動車と共に消えて了ったのです。

あの夜の出来事を境として、私は真木子とも京子とも、それきりになって了いました。

そして、そのままになっていれば、それは愚かしい青春の思い出に過ぎません。ただ一つの夢として、貧しい私の人生にささやかな花を添えたかも知れません。ところがここに、思いがけぬ運命が私を待っていたのです。

療養所を焼け出されてから、私は二三の病院を転々としました。そうしながら、私の病状は、少しづつ悪化の方向を辿って行きました。最後に辿りついたところが、この病院でした。その時は既に重症患者として、私は回復の望みを全く絶たれていたのです。ここは私にとって人生の終着駅です。この終着駅で私は意外な事に気がつ

いたのです。それは、あの真木子が実は私の身近かにいたのです。私は真木子である事をハッキリ認めました。

真木子も私を認めてくれました。

宗方先生。

先生はこの退屈な手紙をお読みになられている内に、早くも私の意図するところを、お汲み取りになられた事でしょう。それはそれとして、この手紙の冒頭に、何故、私は殺されるかも知れないという、物騒な事を書いたのか、述べなければなりません。

それは京子が私の居所を突きとめたからなのです。病院を転々とした私の居所を、京子はどうしてわかったのか、私のいるこの病院を訪て来ました。その後二、三回、京子はこっそり私に逢いに来ましたが、無論京子の欲望を満足させる事のできるような私ではありませんが、何かの拍子に、私は真木子が私の身近かにいる事を話しました。ここから、私は殺されるかも知れないという予感がするようになったのです。

宗方先生

もうこれ以上、ペンを進める体力は私にありません。先生は私の主治医として、冷静に親切に接してくれました。どうぞこのお気持ちを、先生の愛する奥様にも持ち続けて、幸福にお過ごし下さい。奥様もきっと、私の意を汲んで下さる事と存じます。最後に一言申し上げますが、真木子という名は、私がつけた手紙の中の仮名であるということです。

駒井信三の手紙を読み終った宗方医師は、焦点のぼやけた内容に

モヤモヤしたものを感じた。宗方医師は度のきつい眼鏡を拭いながら、手紙の終りの方に書いてある、奥様もきっと私の意を汲んで下さる事と存じます、という言葉にこだわりを感じた。何もここに突然、奥様を持ち出すがおかしいような気もした。

或は単なる儀礼として、末筆乍ら奥様にも宜しくとよく手紙の終りに書くものだが、そうともとれるのだ。

然し……。

宗方医師は、つと立って、妻の用筆司を探し始めた。鏡台の引き出しを開けたり、トランクを開けたりして、紳士に似合わぬ事をやり出した。やがて、どこからともなく、白い角封筒を見つけ出して来た。表は、妻のえり子宛で、裏には或る女よりと書いてあった。

或る女の手紙

突然お便りを差上げる失礼をお許し下さいませ。実はこの手紙を差上げた方がいいかどうか、迷ったのですが、矢張り、どうしても差上げずにはいられなかったのでございます。

私は貴女さまをよく存じ上げております。貴女さまも亦、わたくしの事を不本意乍らも、心の隅に刻み付けられておられるのではないのでしょうか。こう申上げると、生れつき御利発な貴女さまは、わたくしが誰であるかを、すぐ思い出されて、古い憎しみを新たになさるのではないかと思われるのでございます。

早いものでございますね。あれから、もう三年の月日が流れました。然し、わたくしにとっては、昨日の事のように思われます。すべてが生々しく、すべてがドギつく、忘れようとしても忘れる事の出来ない、人生の何頁かでありました。あの時、わたくしの心のど

ここに巢をつくっていた、鬼が今になってもヒクヒクうごめいて、わたくし自身ではどうにも制御する事が出来ないでおります。妄執ともいうべき、わたくしの愚かな心を、どうぞお笑い下さいませ。

あの頃、あたくし達はお互いの心に憎み合いの印象を深く刻んでおりました。貴女さまは、どんなにか深い衝撃を受けられたことでしょう。わたくしは今、それを弁解する為にこの手紙を書いているのではございません。前にも申し上げたように、あの時の鬼の妄執が、今でも続いていることをお知らせしたいのでございます。

わたくしの夫は、或る二流会社の社員でした。わたくしの口から申上げるのも何ですが、夫は、極く実直な平凡なサラリーマンでした。それがどうした事でしょう。平凡なサラリーマンの生涯は平凡でなくなったのでした。

夫はある刑事事件で、重役の身代りとして刑に服しました。つまり、上役の罪を背負って服役したのでございます。然し、その当時会社からは何の挨拶もありませんでした。実際の罪は重役が犯して夫自身はその上役の身代りとなったわけですから、会社は当然、あとに残されたわたくしに、何等かの挨拶があつて然るべきではないでしょうか。それが、それきりにして、何の手当ても下さらないとは、余りにも冷淡な仕打ちであります。わたくしは怒りに燃えて、その重役に面会して詰問しました。重役はわたくしの姿を、好色相な目で見ていましたが、わたくしのいい分を即座にきき入れて、毎月過分の手当を支給する事を約束してくれました。

或る時重役はわたくしに、夫の面会へ行く事をすすめてくれました。わたくしも夫に逢いたいと思っていた矢先でしたので、早速同意して、夫の服役先へ重役と同道しました。そして、その夜、近く

の温泉ホテルに泊ったわたくしは、重役の自由にさせられてしまいました。女を縛るといふ趣味を持っている重役の為に、わたくしは縄による憂き目を、一晩中、味ったのでした。

その夜から、わたくしは心で復讐を誓いました。どのような手段をとっても、重役の罪を暴露しなければならぬと思いました。

一度、わたくしの身体の味をしめた重役は、殆ど連夜のように誘ってくるのです。社宅にもいらなくなったわたくしは、重役の計らいで、あの海浜の別荘に隠れ、昼間だけ通勤の女中をおいて、公然と二号生活に入ったのでございます。

丁度その頃でございました。あれは、梅雨曇りの夕暮れ時でしたね。私は彼のお供をして別荘の近く療養所に入院された、貴女さまをお訪ねしました。療養所の玄関を彼だけが入り、わたくしは、その生籬に添って庭に行きました。すると、正面のテラスの上で、貴女さまが、ひとりの若い男性と並んで睦まじげにしておりました。折から物憂く風いである、鉛いろの海からは、淡い光が反射して清純なお二人を柔らかに包んでおりました。

間もなく、貴女さまは、見舞いに行った彼と自室に入りましたので、わたくしは、貴女さまが彼の愛嬢である事を確めたのでした。すると、どうした事でしょう。貴女さま達お二人をうっとりとして眺めていたわたくしは、急に悪魔的な気分になりました。わたくしの鬼が鎌首をもたげて、ニタニタと笑い始めたのでございます。この若い男性は、貴女さまの恋人にちがいない。而もふたりの仲は清純そのものであるのを、わたくしは見抜きました。わたくしは、その人に、情念のこもった瞳をジッと注ぎました。焼き尽くさずにはおかまいという、陰にこもった烈しい眼差しを送ったのでした。

そして、病的な蒼白い皮膚に、かすかな反応の出てくるのを観察し乍ら、わたくしはじわじわと、わたくしの肉体に魅きつけて行きました。

目的の為には手段をえらんではおられません。わたくしの肉体は既に汚れ切って、今では心まで貴女のお父さまに同調して、或る種の苦痛的な快感に喜びを感じているのです。わたくしは丁度、蜘蛛が糸を手繰って、獲物を引き寄せるように、この肉体を波打たせて貴女さまの恋人を吸い寄せて、貴女さまと恋人の仲を割いてしまえばよいわけでございます。この計画は、簡単に成功してしまいました。貴女さまの恋人、恐らく初恋の方ではなかったでしょうか。その病弱な肉体を、一層ゲッソリとさせ乍らも、私から離れようとはしません。

前にも申し上げました通り、私の夫は、無実の罪で獄に下りました。貴女さまのお父さまである重役の罪を背負ったのでございます。その上、妻のわたくしは、その重役に弄あそばされ、白色奴隷の恥目を一晚中味わっていました。わたくしが重役の罪悪をあばいて深く復讐を心に誓ったのも当然でありましょう。この復讐の矛先が、何の罪汚れもない、貴女さまに迄及んでしまつて、又、それに復讐の快感を感じるわたくし自身、既に変質者の血を受けていたのであります。

重役はわたしの肉体を、自分だけで独占したものと自負していますが、わたくしは貴女さまから恋人を獲た事によって、重役の自負心を人知れず打ち破り、その上、貴女さまに悲しみと苦痛を与えていた事を、打算して喜びに浸っていました。

然し、それも束の間の喜びに過ぎませんでした。それから半月程

経過した、或真夜中にあの療養所は猛火に包まれてしまいました。強い風が海から吹き寄せて、荒々しい感じのする夜でした。夜が明けると直ぐ、お父様は貴女さまの安否を気づかって、わたくしの許から焦土と化した療養所へ駆けつけました。

わたくしもまた、その夕方、療養の焼跡にこっそり行って見ました。そこには余燼がくすぶって、鼻を衝く臭いが漂っているだけでした。その内湿った重い風が吹いてくると、細かな雨がしとしと降って来ました。どこへ移ったのか、患者の姿は、貴女さまも、その恋人も含めて、ひとりも見当りませんでした。そして、この日から、わたくしは貴女さまとも、貴女さまの恋人とも別れてしまふ結果になったのでございます。

さて、こうなってみると、わたくしの身边には、ポツカリと虚ろな穴があいているような、虚無感におそわれたのでございます。これが宿命と申すのでしょうか。考えてみると、わたくしの虚無感、貴女さまの恋人と別れたという、この事に依って起きた現象でした。つまり、いつかわたくしは、貴女さまの恋人を本当に愛していたのでございます。わたくしを本当に満足させてくれた人、わたくしの自由になった人、それが貴女さまの恋人なのでした。

人間は先ず精神的に愛し始めて、それから肉体への道に入るのが常識とされております。然し、わたくしの場合は、先ずこの肉体で試して、それから愛していることを悟ったのでございます。動物的だと、貴女さまはわたくしを軽侮なさるでしょうが、わたくしは、全然別個の目的で、つまり復讐の一部を満たす為から、それが転じて愛に目覚めて行ったのですから、わたくしなりの愛情だと今でも確信をしているのでございます。

それからというものは、わたくしは重役と逢うのが、いとわしく思うようになりました。まして、あの変質的な悪魔的な行動には耐え難い思いを抱くようになったのです。一日も早く重役の罪惡をアバカなければならぬ、そしてこのいまわしい絆を断ち切らなければならぬ。わたくしは日夜、心を砕きましたが、これはなかなかの難事で、思うように行くものではありません。或る点まで行きつくと、そこには厚い壁が一面に立ちはだかつて、どうしてもそれを突き破る事ができないのです。

わたくしは、少しずつ絶望の淵に立つようになりました。この上は、重役を刺し殺して自分もまた、死をえらぶしかないと思いつめるようになりました。

丁度こういう時でした。わたくしは偶然の事から、貴女さまの恋人が入院している居所を知りました。わたくしは早速彼に面会しましたが、一目で彼が相当の重症患者である事を感じました。そしてそこで、わたくしは彼の口から、貴女さまの消息を知ったのでございます。而も、わたくしは、彼の口から、未だに貴女さまを愛している事をききました。

この告白は、わたくしにショックを与えた事はいうまでもありません。わたくしは、三年前、療養所が焼け崩れる時の炎を思い出さずにはおられませんでした。

大変永々と申し上げましたが、これで失礼させて戴きます。最後に貴女さまの御結婚生活の御幸福をお祈り申し上げます。

ただ、気になることは、若し、貴女さまに何等かの変事が起るとすれば、それはあの炎のせいだと思ひ下さいませ。

特別捜査本部はこの十三号室事件を、痴情関係による無理心中と断定した。これにはそれだけの理由が充分にあった。つまり、十三号室のベッドで死んでいた婦人は、キャバレーのホステスで、三谷京子という名であった。

京子には夫があったが、或る罪名で服役中なので、彼女は、キャバレーやバーなどを転々としていたのである。駒井信三とは、多分そういう場所で知り合いになったのではないかと推定された。ところが、人生に行き詰りを感じた京子は、死の道連れに駒井を呼び出して、燃料小屋で扼殺し、自分は、駒井の病室で毒を飲んだのである。

ただ、少し不思議な点は、京子が何故に駒井と同じ場所で死ななかったかという事である。然し、これも京子に本当の愛情がなくてただ、己れの死の道連れにしたと考えれば、自分だけが安楽なベッドで死にたかったのであろう。

宗方医師はこの説に一応うなずいた。常識からいっても、こういう断定をするのが当り前であり、特別に変ったケースにも思われないのである。然し、宗方医師は二通の手紙が気にならないではいられなかった。そこには常規を逸した何かが秘められているような気がするのであった。

宗方医師は鑑識課員に質問してみた。

「燃料小屋の中に、何か証拠のようなものが見つかりましたか」
「何もありません。然し、この薪に指紋のない手の跡が残っているだけです」

「と、いいますと」

「つまり、掌の中だけが残っているというわけです」

薪は短い丸太のようなもので、何かの古材を燃料とする為に、小屋の隅にあったものである。真二つに割られて、小さな蒲鉾型をなしていたが、そこに薄く掌紋が浮んでいる。

「これだけじゃ仕方ないですね」

宗方医師は笑いながら、その木片を返した。

事件が一段落した夜、宗方医師は妻のえり子と考え深そうに向い合っていた。

「ねえ。えり子」

宗方医師はえり子の右手を握った。

「あら、今から何よ」

と、えり子は恥かしそうににらみ返した。媚びを含んだ眼差しである。

「ね。この間実家に泊りに行つたろう。あの時、二た晩とも実家に泊ったの」

「まア。何をおっしゃるの。当り前じゃありませんの。それとも、

あなたは、あたしがどこかへ泊ったとでもおっしゃるの」

えり子は憤然として色をなした。

「失敬、失敬。気を悪くしないでくれ。この話はよそう」

宗方医師はえり子の右の掌を何気ない風で見た。

「でも、あたし、何だか、いやアな気がしてよ」

「ま、おこらないでくれ。あの晩は、十三号室の心中があつた晩だろう。お前は、そのいやな事にぶつつからないでよかったよ。全くつまらない事だったからね」

えり子は目を伏せた。宗方医師は妻の細い肩を抱いて、つぶやいたものだった。

「ね、えり子。僕は誰よりもお前を愛している。この愛を信じておくれ」

宗方医師は捜査本部の断定を、自分自身に重ねて呑み込ませた。

然し、宗方医師の推理は当局のそれとは違っていた。そして、自信を持っていたのである。

宗方医師の推理によると、京子は駒井に毒殺されたのである。駒井によって、真木子の幸福な生活を知った京子は、真木子の父である会社の重役に復讐出来なかった刃を、真木子に向けたのである。

京子は、まず、真木子に手紙をやり、真木子の結婚生活を破壊する手段に出た。これは簡単な事である。真木子の過去を大げさに彼女の夫に知らせれば、復讐出来る筈である。

それを知った駒井は、この京子の企だてを阻止しようとした。駒井は矢張り真木子を愛していたからである。

駒井は最後の手段として、京子を毒殺する事にした。あの夜、京子を招いた駒井は、愛情の変らぬ接吻を京子に与えた時、自分の口から京子の口中に毒薬を流し込んだのである。

京子の死を見届けてから、駒井は病院の裏門で、予てから話を通じておいた真木子を、燃料小屋に呼び入れて、彼の最後の欲望を満たそうとした。然し、それは真木子の抵抗を受け、却って首を絞められる結果となった。

宗方医師は手相学に興味を持っていた。

掌の中央を横に走る直線、つまり、母指と人差し指の付け根の間から出て、横に走っている線で、これを知能線と名付けられている。知能線は主として——知力の高低、才能の方向と優劣——を表

わすものである。

知能線は極めて種類が多く、十人が十人共同じという事はありません。指紋と同じで、一人ひとりが全部違うのである。

燃料小屋の中にあつた薪の半片に残っていた掌紋は、この知能線だった。而も二重になっているのである。これを二重知能線といつて、極めて稀な存在となっている。

真木子が駒井に押し倒された時、薪の半片に手をついて、その時掌紋が残つたのであろう。薪の半片は小さいので、指ははみ出た。つまり指紋が残らなかつたわけである。

宗方医師は妻の知能線が二重になっているのを確かめた。ピタリ

と適中するのである。

真木子という名は、駒井が付けた仮りの名であることは、駒井の手記の終りにハッキリ断つてあるから、宗方医師は真木子の本名が何であるかは、既に知っていた。

「先生、先生！宗方先生」

宗方医師は呼ばれてハッと現実に返った。

「おッ、何だね？」

「急患です。往診の準備をお願いします」

あわただしい婦長の声が廊下の外から聞えてきた。

晩春の懶い曇り空の午後であった。

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙（9×13 ㎝）焼付

各組一枚一組（送料共）

| | |
|--------|--------|
| 一組一枚 | 一〇〇〇円 |
| 五組五枚 | 四〇〇〇円 |
| 十組十枚 | 七五〇〇円 |
| 二十組二十枚 | 一四〇〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 二〇〇〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 二五〇〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 三〇〇〇〇円 |

| | |
|-----|--------------|
| B 1 | 全裸エビ責仰向け（関谷） |
| B 2 | 逆エビ責め全裸像（水本） |
| B 3 | 乳首ペンチ挟み（竹野） |
| B 4 | 後手十字縛肩口上（梨花） |

| | |
|------|---------------|
| B 5 | 足の裏擦り責め（竹野） |
| B 6 | おへソいじめ大写真（関谷） |
| B 7 | 剥いだバタフライ（関谷） |
| B 8 | 貴方に捧げた裸身（大塚） |
| B 9 | 乳房責め絶叫苦悶（大塚） |
| B 10 | 無防備双手吊り（絹川） |
| B 11 | 豊満臀部エビ縛り（水本） |
| B 12 | 糸纏わぬ股間縛（水本） |
| B 13 | 全裸亀甲股間縛（関谷） |
| B 14 | 足踏付け二つ折り（大塚） |
| B 15 | 尻突出しムチ打ち（関谷） |
| B 16 | 手錠にもだえる（竹野） |

| | |
|------|--------------|
| B 17 | 尻突出てエビ責め（水本） |
| B 18 | 椅子開股鼻責触手（梨花） |
| B 19 | 息もつがせぬ猿轡（竹野） |
| B 20 | 投げ出した全裸（関谷） |
| B 21 | 美しき尻部の露出（絹川） |
| B 22 | 首絞めの悦虐境（竹野） |
| B 23 | 後手柱縛り脚線美（竹野） |
| B 24 | 強制鼻挟水吞ませ（梨花） |
| B 25 | 苦悶にねじる裸身（関谷） |
| B 26 | 責めに気を失って（関谷） |
| B 27 | さアどうでもして（関谷） |
| B 28 | 豊麗乳房膨隆縛り（竹野） |
| B 29 | 投げだされた女体（竹野） |
| B 30 | 裸身をくびる麻縄（梨花） |
| B 31 | 強烈縛りに悦ぶ（梨花） |
| B 32 | 全裸逆エビ片脚拳（東浦） |
| B 33 | 踏みつけマゾ境地（東浦） |

| | |
|------|--------------|
| B 34 | すべてをさらけて（関谷） |
| B 35 | ムチ打ち失神寸前（関谷） |
| B 36 | クリップ鼻挟み（絹川） |
| B 37 | 台上的マゾポーズ（大塚） |
| B 38 | 吊られゆく美体（絹川） |
| B 39 | 拷問に無惨な美貌（梨花） |
| B 40 | マゾ女性の表情美（東浦） |
| B 41 | 喰い込む股間縄（絹川） |
| B 42 | 灸責めに悶える（梨花） |
| B 43 | 犠牲台の人身御供（大塚） |
| B 44 | 美肌無茶苦茶縛り（絹川） |
| B 45 | 裸身に立つ蠟燭（大塚） |
| B 46 | 手枷足枷大写真（四方） |
| B 47 | 鎖に悶える足首美（柳初） |
| B 48 | 蛇責めに柔肌栗然（梨花） |
| B 49 | 鼻の玩弄恍惚境（大塚） |
| B 50 | 女囚菱縄さらし（絹川） |

風俗回想記

劣^{おとる}氏の残酷^{ざんこく}責^{ぜめ}

越 原 秀 美

梅雨があがると、本格的な暑さがやってくる。ガラガラとエネルギーな太陽が沈んだ後に、むしむしと湿気の多い寝つかれぬ夜が来る。いい加減頭にくるのは、精神異常者だけでない。頭がカッカツとしているのに、下半身でポカポカすると、誰でも、とんでもない事をしでかすものだ。真夏には思いがけない事件が起こる。泳げないのに海へ行く、勿論、水着の娘さんが一杯いるのだ、大きな女湯みたいなものだ。

ある種の男達にとって夏はたまらない季節だ。女は男のためにあり、男は女のためにあ

る。然し同じ男でも、女を愛すだけでは、つまらない男がいる。それがSだ。下手な口上はこれ位で終り、本筋に入る事にする。美女がただ、美しく装っていたのでは、美しさは引き立たない。時には、その美を汚すものが添えられてこそ、女性美が一層発揮する。と言っても女を裸にして、縛って、鞭打ったとしても、一時は目の保養になるだろう。然し日が経つと欲が出て、あきてくる。だから、女をいじめる時は、あらゆる小道具を用いてじわじわと責めるものだ。女はそのままの姿でも、魅力があるのだから、いろいろの手で

責めたら、本当にSはまんぞくなのだ。

私は劣氏、下着のデザイナー、これが私の職業なのだ。大東メリヤスKK、他三カ所の会社から、私の腕は相当高く買われている。年令三十二歳、まだ独身、私は生涯妻をめとらないだろう。

鉄筋アパートの四階、六畳と三畳の二間。私は一人だ。然し部屋は狭い。六畳の間には今まで設計した女性用のパンティの山。そして、私の考えたデザイン。女性用スリッパ、確かに女性用の下着類ばかりだ。この私の職業が、私をSにしたのだろう。

私は特によく映画を観賞する。外国雑誌、絵画の雑誌類、私の部屋にはたくさんいろいろな雑誌がある。これも職業に大いにプラスになるのだ。映画は勿論、女性が男性、否怪物達に汚されるものばかりだ。日本映画の恋愛物、すれ違い物、私は好まない。私の観賞するのは特に外国の映画だ。五つ位上げて見ると、

『暗黒の帝王』レックス・ダイヤモンド。

ギャングの情婦が、相手方からいじめられる。髪の毛を掴まれ、ひきずりまわされる、頬を平手で殴られる。大勢の男達に囲まれているのだから逃げられない。着ている物ははぎとられ、乳房をもて遊ばれ、さんざんにいじめられる。そして最後に女は殺される。風呂場で水死体となって、勿論殺されたのだがアルコールを注射され事故死と確認される。女は身体に何もつけてない。

『夜と昼の間』

この映画は、スペイン内乱にまきこまれたエヴァーガードナーが政府軍に捕えられ、革命軍の秘密をばらせと脅迫される。エヴァーガードナーは手首を縛りあげられ目の前にナイフを突きつけられる。美貌を売りものにする歌手に扮しているだけに、女は悲鳴をあげ

てしまう。この場合、確かに女は目前の恐怖より、傷ついた顔になってからの自分を想像して、精神的に参ってしまう。私はこの映画を観て、女は確かに魔物だと思った。たとえば乱暴されても、それが表面に何の形も残さないなら、すましているのが、女の本能なのだ。

『野性の誘惑』

これは小鹿みたいなマリナ・ヴィラディが大勢の村人に魔女だとののしられ、ヴィラディが大勢の村人に手を取り、足をとりにじめられる。短いワンピースの下になにもまとっていない若い豊満な女が、それを破られ肌を露出して泣き喚くシーンは、小鹿みたいなマリナ・ヴィラディの演技、まったく圧巻。

『非情の町』

これは、米兵がドイツに駐留しているある日、米兵四人が一人のドイツ娘を暴行する。然し米人弁護士の詭弁によって死刑から無期に軽減される話。ドイツ娘、クリスチーネ・カウフマン、失神した少女を前にして恋人が呆然とするシーンは、何か恐ろしいような迫力があつた。それより、米兵四人に暴行される寸前のドイツ少女、クリスチーネ・カウフマンの苦悶にみちた表情のアップは身体が燃

える様に感じる。さすがに圧巻だった。

『唇によだれ』

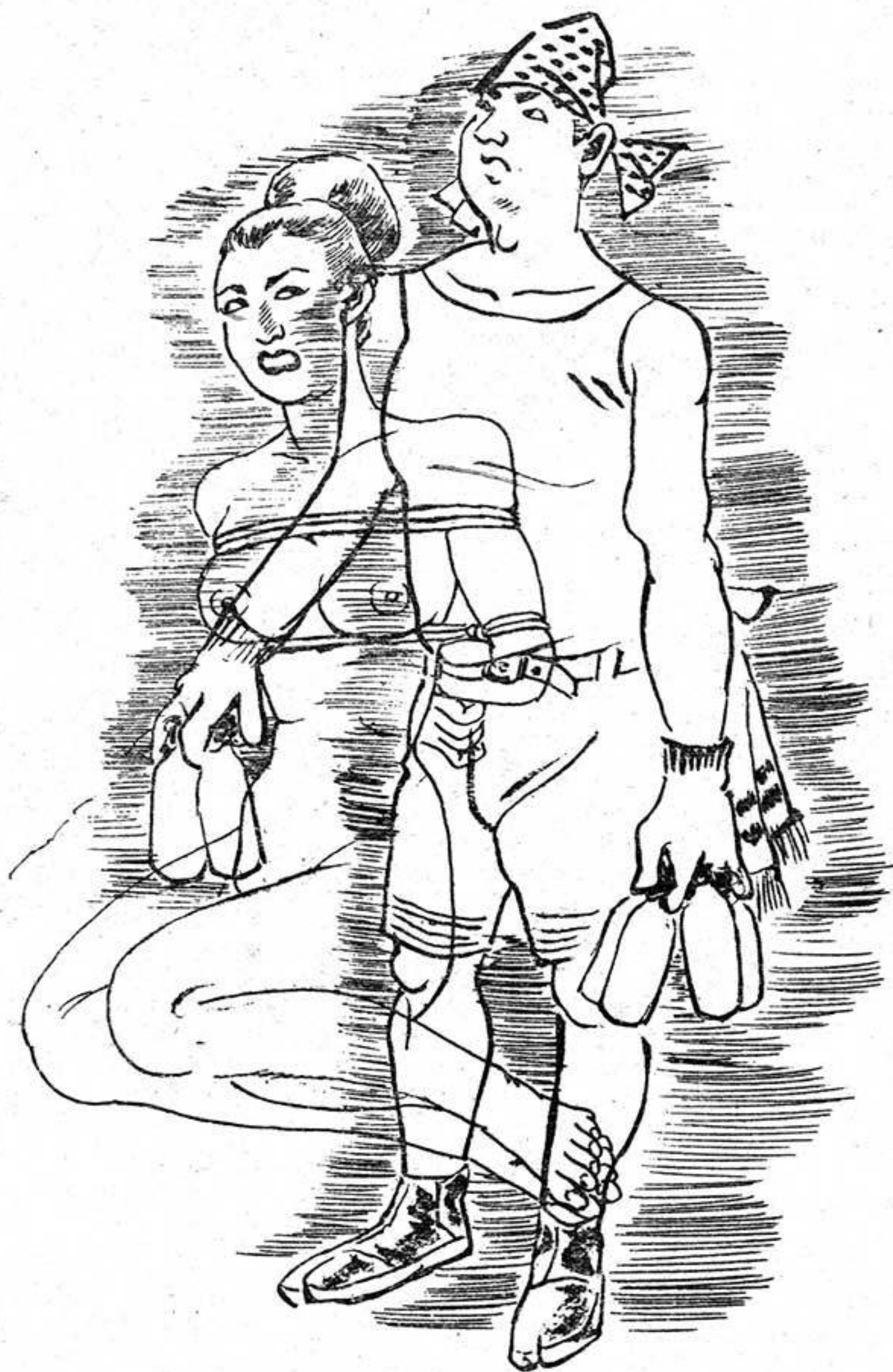
フランス映画、この映画も確かによかった。然し私はこの映画は退屈した。然し題名どおりよだれが出るのは当然だ。然し女をいじめるSシーンを期待して観たら、ガッカリだ。

『女の獄舎』

同じフランス映画だが、これはSに向いている。観ていても身体が燃えてくる。悪い事をした女が、女ばかりの獄舎に入れられ、付きあいが悪いとばかり、女を大勢でいじめるこれは女同志の暴行シーンだ。乳房を二人の女性で掴まれ着ている服をもぎとられ、首をしめられる、女は苦痛に顔を歪める。これは私にとって下着の研究にもプラスになった。女は最後に恥かしい姿で這いまわされ、笑いものにされる。確かに圧巻だった。

日本映画にはこの様なストーリーの映画は出来ない。そのため私はあまり好まないのかも知れない。

私は四階の自分の部屋の窓から外の密集している屋根、屋根を見つめていた。「この屋根の下に私の目のつけた人物が住むのだ」私の目は光線を浴びた様に鋭く光った。



私の目につけた人物、春越吾郎の妻智香子二十三歳。まだ新婚はやはや。然かも智香子は八等身美人、確かに私の好みのタイプの女性だ。この智香子を目につけるまで二万円の金が掛っているのだ。この地区を牛乳配達している宝牛乳の住み込み店員、佐森修治二十

一歳、が春越吾郎夫婦の引越の時サービスとして宝牛乳が佐森ともう一人、手伝いに寄こした。その時佐森は春越の妻、智香子を見初めた。

彼は牛乳配達だから朝が早く五時前には配達に回る。佐森修治が異常な心の持主になっ

たのは一年前の夏だ。丁度二年目の夏を迎える。然し佐森の手口は巧妙で一度も見つかっていないのだ。知っているのは、私劣氏だけかも知れない。

私は一週間前、丁度月曜日の朝だった。私は四時頃に床を放れ屋上に行った。そこで牛乳配達の佐森の姿を発見したのだ。

佐森は自転車で丁度私の住むビルの真下に来ていた。牛乳瓶のすれ合う音を残し、密集している屋根の下を佐森は口笛を吹きながら行った。

佐森が止まったところは、丁度私の目のとどくところだった。むし暑い夜は窓を開けたまま朝まで眠ってしまふ家がある。佐森が止まったところは、春越吾郎の家。確かに屋上から直接春越の玄関が見える。玄関か

ら少し入ったところの部屋のあたりまでよく見える。牛乳箱が玄関になく、中にある家が多い。春越の家も牛乳箱は、玄関口より二米位先にある。佐森修治は当然庭まで入る場合がある。佐森は牛乳二本を手を持ち、玄関から庭に入って行った。庭に出るまで少し屋根

のため、私の眼からは、佐森の姿は見えないが、部屋に通じるところへの道はよく見えるのだ。

牛乳箱は玄関口二米先にある。当然佐森配達員はすぐ出て来るはずだ。然し佐森は部屋に通じる石敷のところを何か不思議な行動をとった。私は見守っていた。佐森は引越しの時の春越の妻、智香子の姿を頭に浮かべたのだろう。まるで猫の様に佐森は春越の部屋の中に入った。それ以上見る事は、出来なかった。然し私は佐森のあの行動をあれこれ想像して見た。約二十分。佐森は微笑して春越の家から出て来た。この二十分、佐森は一体春越の家で何を行ったのだ。

その話は、後に佐森から聞けるが、私は丁度、誰かいじめる女をさがしていた折なので佐森に逢う事にした。佐森を私の部屋まで呼び出した。勿論用のためだ。宝牛乳店に五本の牛乳を室に届ける様に、電話したのだ。佐森は小さな本箱に五本の牛乳を入れ、私の室に来た。私は佐森を部屋の中に入れた。下着類の山のおかげかも知れないが、佐森は微笑しながら部屋へ上がった。私は何気なく今日の朝の事を口に出す。佐森は一瞬顔色をかえた。そこを私は根強く追及した。もし佐森が

私に乱暴でもしようとするなら、私は得意の柔道で投げてやる積りだった。然し佐森は観念した様に頭を下げるのだった。

「ところで、春越さんの家で、何を盗んだのか？」

佐森修治は首を振った。違うと言うのだから。「では、一体何をやった。たとえば、春越さんの奥さんに乱暴したとか」佐森は首を上下に垂れる。そうだと言う意味らしい。「僕は何もいわん。その時の模様を話したまえ」

佐森はまた上下に首を低く垂れた。そして低い声で今日の朝の出来事を話した。

「夏は皆、夜から窓を開放して眠るのです。

私は経験から知っています。春越さんの奥さんは私の好みのタイプです。一年前にも私はあの家で当時住んでいた美しい女の人、その人は未亡人でしたが、春越さんの奥さん同様美しい女性でした。何か夢を見ていたのでしょうか、私は襖が開く音に何か言いました。

私はその時驚き、じっと未亡人の様子を直視しました。私は何も気づいてない女の様子を知り、ゆっくりと近かきました。腹部だけ薄い夏布団を掛け、胸ははだけていました。小さな窓に向いた両足も心持ち開いた格好で

眠っていました。未亡人なので女一人です。そのときの味が忘れられず、その後何度も罪を重ねました。女性の下着も盗みました。」

佐森修治、宝牛乳の真知面な一人の青年なのだが。私は別に、この青年を警察に突き出そうとは考えてない。それどころか青年に二万円の現金を渡し、この事を黙っている様にといい渡し、佐森を店に戻した。佐森は大喜びで何度も何度も頭を下げて帰って行った。この男は、女の下着と覗きに興味を持っていたのだ。私は佐森の帰りぎわにもう一度注意した。これ以上罪を重ねない事を。もし自分がその気になったなら、私の部屋に来る様言い渡して帰えした。

その日の朝十時、私は行動を起した。先ず春越家を訪問する。春越家の玄関で私は智香子さんと逢った。智香子さんの顔には、朝の出来事など何も暗い影は見当らなかった。用件は名前を聞くだけ。あくまで口実なのだ。確かに智香子さんは佐森との関係を隠している。これは私にとっていい遊び相手なのだ。もし春越智香子が、佐森とのことを、主人に話しているなら私は智香子を諦める外ないだろう。然しその事を隠しているなら、私は智香子を相手に出来る。私は五日間智香子の様

子を見る事にした。

こうして、私の道楽の第一歩は人妻智香子と決った。春越智香子は確かに美人だ。私より背が高いかも知れない。まったく、整った顔、美貌というより他に言う事がない。然し美女が、ただ美しいだけでは、本当の美しさが成り立たない。私は自分の手で、智香子を本当の美しさにしてやるのだ。私は五日間待った。そして私は再び春越家を訪問した。智香子は私を玄関から中へ入れた。私は何の前ぶれもなしに、突然六日前の朝の出来事を話した。当然智香子は顔色をかえた。唇を噛み私の注文を早速聞いてくれた。女は秘密を握られると弱いものだ。それを私は目の前に見せてもらった。女は自分の秘密を守るためなら、どの様な事でもするかもしれない。

私は平気な顔でついて来る智香子の姿を見て心の中が燃えた。「女は、こんなものだ、自分の幸福のためなら、なんだってやる。畜生」私はこの女を責めて、責めて、責めぬいてやろうと思った。智香子は男の欲求を心得ている。然し私は常の男の様にいかんだ。今に見ている。然し智香子も人間だ、しかも女性だ。表面は何の変化も浮かべないが、心の中では怖がっている。確かに恐れている。

智香子は今の幸福は崩したくないのだろう。私は別に家庭を乱すなぞいささかも考えてない。智香子のあの考え方が無性に腹が立つ。智香子のあの美しい顔が歪み、苦痛に悲鳴を上げるだろうと思えば私の身体の中は激しく燃えていた。

「まあ、こんなに下着が？」

智香子は私の部屋に入るなり驚きの声を放った。下着類の山、誰が見ても、びっくりする事だろう。然しそれが私の仕事なのだ。私は表の扉の鍵を降した。もし誰か訪問客が来た場合こまるのだ。私は三畳の間に智香子と向い合った。智香子は私の顔を見た。私が変な行動に移ると、智香子は、腰をすぐ浮すだろう、と思われる様な目付。

「奥さん、私は貴女達御夫婦とは赤の他人です。でも、奥さん、今日から奥さん、否、智香子さんと、何かの関係が出来ますね」

智香子はまだ下を向いて、私の言葉を聞いている。私は突然いても、たってもいられない錯覚に陥った。いきなり立ち上り、智香子の肩に手をかけた。

「何をするの」

智香子は私の身体を両手で突き、私の手から逃げる。然し、私はわざと逃してやったの

だ。私は逃げまどう女を、何処までも追って女が抵抗出来なくなるまでは手を出さないのだ。私は上衣を脱ぎ、畳の上に投げる。

「奥さん、私は御主人には佐森の事も内証にします、だからいいでしょう」と微笑して、舌なめずりをする。

智香子は本能的に、ゆっくりといざりながら後退する。その表情はSにとってたまらない姿なのだ。私はじわじわと智香子を追い詰める。智香子は壁に突き当たる。私は微笑を送る、智香子の目と私の目が鋭くからみ合う。智香子はどうしてもこの場を逃げたい様子、壁を両手でささえ、じりじりと壁にそって逃げる。然し私は、両手を一杯ひろげて、智香子を逃がさない。息が詰りそうだ。二十分も私は、智香子と追い駆けっこをした。もう智香子は疲れて来る頃だ。やはり智香子は音を立ててその場に腰を降した。チャンスとばかり、私は拇指と中指とはじく。パチンと音がする。然し智香子は意外な言葉を吐いた。「私に近づくな」と大声でいった。然し私は別に驚かない。然しこの場合驚くふりをする方が私のためなのだ。女は油断するはずだ。「いや、私の身体に、一寸でも触ると死ぬわ

よ」

智香子は必死だ。もしかすると、本当に舌を噛むかも知れない。ここで智香子が舌を噛む様な事になれば面倒な事になる。「判った何もしない、帰すよ」と私は呟いた。そして扉の方に向って歩き出す。智香子は油断しない。私は本当に諦めかけた。扉の鍵を外す。「奥さん、鍵は外しましたよ。また何時か、お逢いしましょう」と私は扉から放れる。然し私は今、帰すのがおもしろい気がする。私は扉から二米位放れた机の傍まで行った。その時私の頭の中で素早く、まるで電子計算器の様に計算した。机の引出しに麻縄があるのだ。私はその縄を掴み智香子の姿を見た。麻縄を私は背中に隠し机から放れた。扉から私の立つ距離は一米七十センチ。麻縄の長さは二米五十センチ。私は素早く頭の中で計算した。

智香子は油断なく扉に近かざるところだ。

今智香子のいる場所から私の立つ位置までの差は、二米三十センチ。もう少し待つのだ。智香子は私の目をじいっと見つめ、ゆっくりと扉に歩みよる。私は背中に隠した麻縄の先端を、右手で強く握りしめた。智香子は扉に近かざく。手を伸ばせば扉の把手が掴める。智香子の右手が、そこに伸びる。私はその一

瞬を待っていたのだ。智香子が把手を掴んだと同時に私の右手は力一杯振られた。勿論麻縄は空を切り縄はうまいぐわいに智香子の首に巻きついた。私は力一杯縄を引く。「グァー」と智香子は野獣に似た声を上げ、畳の上に倒れた。私は素早く倒れた智香子の身体に飛びかかり、うつ伏の智香子の両腕を取り背中で縛った。首の縄を解いてやり、バタバタする両足も縛りつけた。もう動けない。

私は智香子の身体を起した。智香子は無念そうに唇を噛み、私を鋭い目付で睨んでいた。

鋭い目、唇を噛む、智香子。確かに美しい顔だ、鼻の高い、目のパッチリとした顔。日本人放れしている顔。ふるいつきたくなる美人だ。然しもうこの女は私の奴隷なのだ。

着物姿で後手に縛られている智香子を劣氏は見つめていた。うまそうにタバコを吸っている。煙が智香子の顔に吹きつけられる。劣氏は微笑を浮かべタバコを灰皿にネジ潰した。そして智香子の傍で腰を落し腕時計を智香子に見せた。

「十二時半、奥さん、四時頃には自由になれますよ」

劣氏は微笑して立ち上った。そしてズボン

を脱ぎ、ランニングシャツとステテコ姿となった。劣氏は美事な体格をしている。柔道で鍛えた事はある。

「奥さん、ところで奥さんの着用しているパントリー一度拝見したいですなァ」

劣氏は智香子の返事を待たず智香子の着物の裾を掴み、力一杯引き上げる。そして着物の裾を帯に巻く、尻まくりの格好だ。智香子の美しい両脚が丸出しとなった。白い大腿が微かに震える。足首を巻く麻縄、そして白足袋の対比が奇妙なまめかしさと、何か妖しい美しさに包まれている。女の緊縛姿は芸術品だという人がいるが、確かに縄をかけられた女は不思議な雰囲気をもし出している。智香子は大きな瞳を見開いて劣氏の行動を直視して「許してくれ」と悲鳴を上げる。劣氏は素早く智香子の足の縛り目を解き、白足袋を脱がした。陽に当たっていない真白い足の指だ。まるで宝石のように白く輝いている。

劣氏はパンティを手にした。丁度両股に別れている部分にレースで刺繍してある。何処の製品かすぐ判った。ローマ字で YASIRO (ヤシロ) とネームが入れてあった。矢城織物株式会社といっても、小さな会社だが。矢城織物には、外国で留学して来た衣裳デザイ

ナー大森佐工郎氏がいる。智香子の下着は大森佐工郎氏のデザインだろう。確かによく出て来ている。然し私のデザインもかなりの自信はあるのだ。全国の女性が着用している事だろうと思うと、私は、それだけでも嬉しいのだ。然し智香子の着用していたパンティは、私のデザインではなかった。私はその事でもかなり智香子をにくんでもいい筈だ。私は智香子の目の前で、その矢城織物のパンティを無茶苦茶に切りさいた。そのかわり、私の考えた普通の女性がはくパンティではなく、ストリップガール達が着用するツンパを智香子にはかした。柔かな肌触りの絹糸で締めつけ感触を強化してある。デルタテイの中心に飾り窓があり、穴の中はごく薄いナイロンのカバーで開閉自由の便利な物。

確かに常の女性が着用しているものではない。然し下にそれらの舞台衣裳を着用し、普通のパンティをはく女性も近頃かなり多くなっている。冷え症の女性は三枚位着用している。普通パンティは足先からはくものだが、私が智香子に着用させたパンティは両側にスナップが付き、横でとめる様になっている。まったく便利な舞台用パンティだ。一つ二千円はする。私はそれを智香子にプレゼントし

たのだ。そして帯を解く、さすがに智香子は私にパンティを入れ替えられたのを恥かしく思っている。

「許して下さい」

智香子は目に涙を滲ませ呟やく。然し智香子を許す事は出来ない。帯を完全に解いた。私は着物を肩からはずす。勿論智香子の腕は背中に回わし縛ってある。智香子の身体から着物は放れないのだ。智香子の両腕に着物が丸められた。両肩は完全に露出した。薄いナイロンの巾の広い肩紐のスリップ。智香子の胸の隆起が目立つ。かなり、弾力のある乳房だ。智香子の肌には脂がのりきっている。私はハタキをもって来て棒の方で智香子の胸元を強く突いた。ブルンとする様な感触、ハタキを握る私の手につたわった。「痛いイ」智香子は顔をしかめて呻いた。ハタキの棒が丁度智香子の乳首を突き上げたのだ。今度は、お腹に向けて突いた。グッと食い込む柔かい肌、さすがの智香子も美しい顔を歪めて黙って耐えぬく姿は私の心をいたく打った。よく映画で観られる場面だ。女奴隷が荒くれ男達によって手を縛り上げられ乳房、横腹、腹部などを棒で突かれる場面だ。観ていても身体が燃えてくる位だ。それが今、目の前で自

分が行っている。しかも主人公は私だ。

午後一時、私は、智香子のスリップを取った。然し全裸になったわけではない。乳房を隠すブラジャーがあるのだ。私はそれも引き破る様に取った。完全に上半身は裸だ。美しい豊満な乳房、胴の細い、ヒップの大きい、凄いい曲線美だ。私は智香子の腕を縛ってある縄を解いてやった。智香子の着物は足で智香子にとどかない場所に一早く行動している。すべて油断のない私だ。だから自由になった智香子も私のデザインしたパンティ一枚の姿でいることになる。智香子は両腕を十字に組み、豊満な乳房を隠している。然し乳房は丸出し同然だ。だが今の智香子は私のデザインしたパンティを心から喜んで受けている事だろう。

「奥さん、そのパンティの肌触りは、どうです」

智香子は顔を染め私から目を放した。私は智香子のなよなよとした見事な曲線美を見つめ、微笑を送った。

「お願いです。主人には何も話さないで」

智香子はもう観念したのかそう呟やいた。これが女の弱身。然し私はこの女がにくい。男はこの様にみんなだまされる。私は畳の上

に脚を伸してもうどうでもし
てと言った格好の智香子を見
て、何か怒りが心の中に浮ん
だ。智香子を凄く苦しめてや
ろうと、また新たな決心をし
た。

私はロープをもって来た。
このロープは特別に造ったも
ので、手にしても痛く感じる
ザワザワとした感触のロープ
だ。昔農家では井戸から水を
汲む時、普通の縄では、途中
でよく切れてしまった。そこ
で考えたのがこのロープだ。
これで肌を縛ると、肌に縄の
トゲが付きささって痛めるの
だ。まるで針がついている様
なロープ。それでいてよく締
る。私は智香子を海老責めに
縛った。

古書によると海老責めは鞭
打ち、石抱き、その他の責め
でも白状しない時、行われた
という。手を後ろに、身体を
前に曲げ両足と頭がくっつく



まで縛りつけた。

海老責は苦しい拷問とされ
ていた。然しその形で縛られ
た女は確かに妖美だ。ザワザ
ワとしたロープが女の柔肌を
痛める。髪は乱れ、額には油
汗が滲み出ている。乳房が両
足に垂れ下り異様な雰囲気
を出している。また私のデザイ
ンの舞台用パンティー一枚だけ
の智香子の姿も悩ましい変化
を作っている。私は智香子の
海老責めの姿の背中へタコ糸
で編んだ網を被せる。荒い目
の網の中から苦しそうな智香
子の顔を見る。まるで映画の
『ジャングルの裸女』ドイツ
映画の一シーンの様である。
さらに私は智香子をその姿の
まま今度は足で蹴り倒す。畳
の上に智香子は背中をついて
足を上にあげた姿で仰向けに
倒れた。苦しそうな智香子の
顔、獲物だ。何かいいかげな
唇。智香子の表情の美しさ、

やはり女はただ美しいだけではいけない。その美を汚す事も美がさらに一層發揮されるのだ。私は、智香子を約一時間海老責めで苦しめ、午後二時解放してやった。然し四時まで、まだ二時間の時間が残っている。私は残った二時間を有効に使うため、智香子を休まらず、すぐ第二の責めに移る。智香子は顔を紅潮させ畳の上にグッタリしていた。髪は胸に汗と一緒に流れ、智香子の美しさを助けている。その智香子の傍に私は近かずき、痛々しいロープの痕が残っている肌に今度は犬の首輪を智香子の首に固定する。首輪には長い鎖がついている。智香子は目を閉じ、観念の姿態……。鎖はまだ長く、その先端を私は握る。「這うんだ」劣氏は命令する。智香子は何の抵抗なく、四つ這いになった。勿論膝で畳を這うのではない。両手は真すぐ畳に尻部を高く振り上げた格好だ。

「さア、歩け」劣氏は命令調……。智香子は顔を隠す様に這う、まるで犬の様に。「どうだ、犬になるのもいいものだろう」と私は鎖を柱に縛る。智香子の首を柱につく様に接近させ縛るのだ。そして両脚は伸すだけ伸す。滑り台の格好の仰向けの智香子の姿。手足は自由だが動く事は許されない。もし智香子の

両脚をもち上げると、智香子の重心は首輪に掛る。智香子の悲鳴が、三帖の部屋に響き渡る。智香子の胸、否、豊満な乳房の丁度上にずぶ濡れの皮の厚い紐が強く巻きつけられる。バスト八十八、ウエスト五十三、ヒップ九十二。然し、今の智香子はバストは七十位か、もっと強く締めつけられている。濡れた皮が何を意味するのか。乳房がグツと張って乳首が突き出る。その乳房の下にもう一本ずぶ濡れの皮で巻き、息が詰る程締めあげている。口を少し開き目には涙が光っていた。自由になるのは両手両足。然し動かす事は不可能だ。苦しそうな顔の智香子の鼻をつまむ。智香子は両脚を少し痙攣させ口を開く、私は用意した酢に漬けた脱脂綿を口に押し込む。そして細い紐で口の中に入れ後頭部で縛る。その上から繃帯で何重も巻く。智香子の顔は鼻の穴だけ残し、顔は白い繃帯でグルグル巻き。

智香子は恐怖を感じた。然し息は出来る。劣氏は、智香子に今度は乳房責めをするらしい。電気スタンドに六十ワットの電球を灯け乳房に近ずける。熱い電球が、智香子の胸に巻く濡れた皮の上に……。ずぶ濡れの皮の意味が判った。濡れた皮は乾くと締るのだ。だから智香子の胸はじわじわと締って行く。私

はスタンドを消し、今度は智香子の両足を別々に縛り、片方ずつ開いて行く。私は股裂きしばりをする。しかもじわじわと一方の縄を引く、智香子の両脚は完全に真横、一直線になった。智香子は今は自由に出来る腕だけを少し動かす。劣氏は無残にもまだ脚を開けて行く。智香子の股は今にも音を出して裂けそう。だが智香子は暗い世界で何もいえず、心の中で苦痛を味うのだ。胸は自然と締められて行く。股は裂けそうに痛い。喉に通る酢。智香子の姿を楽しげに微笑して見守る私。今度は腕も責めるのだった。すんなりした腕を横に伸し、肘が曲らない様に板を当て一緒に縛る。天井から垂れた縄に縛り、腕は横に上げ動けなくする。だから春越智香子の姿は身体全体が責められる事になる。顔隠し、口中酢責、首輪、腕責、乳房濡皮責、股裂き責。

これで劣氏の、責め篇を終わっておく事にする。勿論私は春越智香子を時間通り家に戻した。然し女を責めることは確かに私の心を何とおうか、楽しませてくれた。

「後記」 尚、この物語の人物はすべて実在であり、事実にもとずいていますが、責めに関してだけは全部、作者の創作である事を附記致します。

【代理部分讓品案内】

全部在庫しています。略号にて
お申込み下さい。急送します。

○被虐夫人の表情

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「せや」 関谷富佐子

○バンド開股(アテゴム)

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はこ」 東浦ひかる

○バンド着用責め

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「はん」 東浦ひかる

○月経帯足挙げ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はと」 東浦ひかる

○バンド只今着用

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「もか」 東浦ひかる

○相撲褌締め込む

大手札 十一枚一組 一〇〇〇円
略号「すま」 大塚 啓子

○乳房いじめ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「とき」 東浦ひかる

○強烈エビ責

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「えひ」 水本 茂美

○ゴム衣緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「みす」 水本 茂美

○六尺褌

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号「ろい」 東浦ひかる

○蒲団の上に悶ゆ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「なき」 関谷富佐子

○悦虐の果て

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「なみ」 関谷富佐子

○椅子縛りエビ責

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おき」 東浦ひかる

○全裸強烈ムチ打ち

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「もた」 関谷富佐子

○六尺フンドシの女

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「くろ」 関谷富佐子

○強打に泣く夫人

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「むち」 関谷富佐子

○浣腸シリーズ

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円
略号「れち」 梨花悠紀子

○弓吊り宙責め

大手札 二枚一組 二五〇円
略号「つき」 梨花悠紀子

○手足宙吊り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「つた」 梨花悠紀子

○六尺褌縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「ろは」 東浦ひかる

○BG覚悟の切腹

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号「えん」 東浦ひかる

○強烈エビ縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「もい」 関谷富佐子

○乳房責の苦悶

大手札 二枚一組 二〇〇円
略号「もろ」 関谷富佐子

○月経帯責め

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「つけ」 梨花悠紀子

○エネマシリレンジ挿入

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「えね」 東浦ひかる

○太い浣腸器の使用

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「かふ」 東浦ひかる

○バンド穿きかえ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はみ」 東浦ひかる

○レインコートの拘束

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「いろ」 大塚 啓子

○ゴム布に包まれて

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こま」 梨花悠紀子

○狙れた和装の娘

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円
略号「ねい」 愛川 悦子

○裸女繃帯覆面

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「ふく」 大塚 啓子

○バンド晒し責め

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はる」 東浦ひかる

○腹を切り裂く

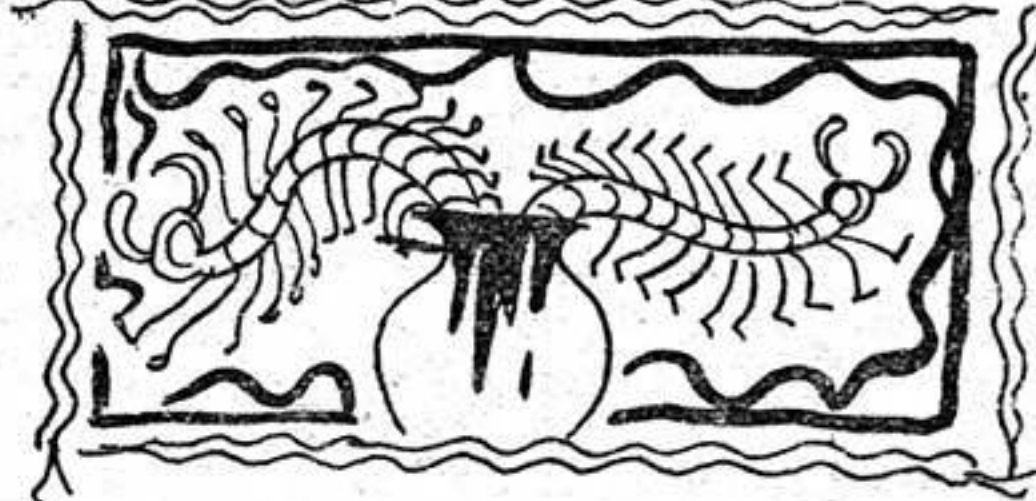
大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「やい」 大塚 啓子

○下腹に刺す刃

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「やえ」 大塚 啓子

○柔肌を切りさばく

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「やえ」 大塚 啓子



告白手記に解説を

栗 瀬 長

発刊されては泡沫の如く消え去ってゆく類書の多きなかにあって、奇クのみが隆々として、その名声をほしいままにしているのは、常に読者の真実の叫びを採りあげているからに外ならない。

それは読者通信をみれば明瞭である。「真先に読者通信を読む」との声が何と多いことであろう。

本文も亦然り。奇クのバックボーンとなっているのは、辻村、牧、佐治、近藤氏等に代表される一連の執筆家達の健筆に負うことは

言を要しないが、同時に読者の偽らざる魂の告白手記そのものである。

山はその高きが故に尊しとしない。告白手記は、その長短、文の稚拙は問題でない。或は悩み、或いは苦しめる魂の、心の叫びが拙い一言一句の端々に現われてこそ、読む者の心の琴線に触れずには措かないのである。

公刊誌である以上、編集者において不適当と認められる場合は、削除もされるのである。首尾一貫しないもの、尻切れとんぼの告白にも往々にしてお目にかかる。しかし、ああ、ここにも悩める一つの魂があったということに、私は、無上の近親感を覚えるのである。

それにしても、奇クのバラエティに富んでいることは正に驚嘆に値する。思いつくままに羅列してみても、サド、マゾは勿論のこと緊褌、切腹、浣腸、襦袢、女斗、女装、自己愛、灸、鼻、革・ゴム等のフェチ、いや数え上げればきりないこと、こんな世界もあったのかと、奇クに教えられ、反省してみれば、自分の心理の奥底にも、矢張り多分にそうした要素のあることを発見して、愕然とすることも屢々であった。

新しい風俗文献誌を標榜する奇クは、今や

啓蒙誌となったといつては、世辞が過ぎるであらうか。

ところが、折角これだけ多種多業の告白手記が誌上を賑わすにもかかわらず、それがただ漫然と放置されているのではなからうか。

あるがままの姿を、そのまま直視する。何等の批判を加えることもなしに、色眼鏡でみることもなしに、批判は読者各々の心の鏡に照らして、それも確かに結構なことである。

しかしこれだけの、凡そ心理学最の例証にもないような心理的事実が、ただ誌上に活字となっただけでは、何か勿体ない気がするのである。

奇クが文献誌としての価値を誇るためにもこうした告白手記に、解説をつけて戴きたいのである。

例えば、(小生の浅薄な智識では、分り切った事しか言えないのであるが)サディズムの告白の場合には――

サディズムは相手の人の肉体に残酷な刑罰的行為を加えることによって、自分自身が興奮を覚えることである。元来、男は積極的、攻撃的、侵略的であり、女は消極的、守勢的である。それ故、女を征服し、勝ち取ることが男には大きな快樂となる。配偶者同志の接

吻も時として愛咬に代る。更に夫が、脅しの方法で妻に迫って夫婦関係を結ぶ場合があるとするれば、正常な心理よりもサド的衝動によるものと解される。サディズムはこのように精神的な性欲機能を伴う現象の、過度の生理学的衝動であるといえる。しかし、サド的な人がこの本能を意識しているかどうかは問題でない。彼が感じているのは、相手の異性を残酷に手荒く扱いたいという衝動と、色欲的な感情でそのような行為を彩りたいという気持であるその行為を彩りたいという気持である。その行為の実際の動機が本人には分っていないからこそ、サド的行為は衝動行為のよ

うな性格をおびたように見られるのである。

或いは、靴フェチの場合——
靴フェチシズムはマゾヒズムの潜在形態の一つである。幼時に消すことのできない印象を残した初期の経験によって、愛する女の足や靴は（やがてそれは愛していようがまいが、女の靴でさえあれば……とまで昇華されるが）彼女の人の柄のうちで最も美しく、最も優雅で女性的なもののシンボルとなる。靴は真のシンボルであり、崇拜の焦点であり、理想化された対象物である。やがてそれは衝動を起させる道具となって、真の性愛的シンボ

ルが靴そのものから、自己服従の感情にまで発展する。

といったような解説がつけられたなら、よりよく『告白手記』が理解されるのではなからうか。

勿論、『告白手記』にあらわれた部分だけでは、頗る断片的であつたり、独善であつたりして、その一文だけでは判断し得ない場合もあるう。

しかしそれはそれでよい。奇クは学術書ではないのだ。文献誌であり、啓蒙誌であるのだ。奇を衒い、興味本位でないという意味か

らも、我々の気のつかない心理的考察の糸口を与えられたいと切に願うものである。

今想えば、二年前の別冊奇ク「偏執者の記録」は、他に類を見ない告白の集大成として正に圧巻であつた。

しかしそれが唯単に告白の記録として終つたのは誠に残念であつた。

そこに仮令五行でも十行でも、然るべき解説批判があつたら、どんなに素晴らしい文献誌となつたであらうかと惜しまれる。

編集部の御一考を切に願うものである。

(完)

☆賞金☆

| | | | |
|----|------|-----|-----|
| 優作 | 一篇に付 | 一万円 | 若干篇 |
| 秀作 | 一篇に付 | 五千元 | 若干篇 |
| 佳作 | 一篇に付 | 二千元 | 若干篇 |

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

懸賞（告白と手記と体験）原稿募集

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従つて必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限ります。二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

「S・Mプレイ・ガール」

(被虐モデル)

遠藤百合子さんの登場)

辻 村 隆

お願い！ このルポを読んで頂く前に、奇ク八月号の「マニヤ通信」(七二頁)「被虐モデル志願」遠藤百合子——の一文に眼を通して下さい。

× × ×

パブリカの新車で、名神高速道路、尼崎―栗東間を、友人Aが時速一〇〇キロでブツ飛ばすのに同乗して、暑苦しい大阪に戻ってくると、陽は急にくらまって、おどろおどろした遠雷が西の空から近づいていた。

梅田で友人と別れて、駅の構内の公衆電話から箕田編集長に電話する。約束の五時――

「待っていたよ。彼女、五時半に千日前のスタイル喫茶で待つことになっている。服装はブルーの花模様のワンピースに黒いビニールバンド、頭髮のうしろはカットして、前の髪は逆毛にして立ててあるそうだ。白のハンドバッグで、週間新潮を手持っている。年は御存知の通り二十三才――、今夜十時半まではいいそうだ。しっかり頼むよ」

「分ったよ――、で、アンタは？」

「残念乍ら来月号の編集ギリギリで徹夜なんだ。塚本君も生憎、食あたりでねこんでいるし、幸か不幸か辻村さん、アンタ一人だよ」

「いいのかい、相対ずくで……」

「彼女はそれを希んでいるんだ。辻村さんと、お名指しだから、邪魔者は消えろってわけさ。まあ、うまくやってくれ給え。すばらしい傑作を乞う、御期待だよ」

電話をきって構内の荷物一時預り所で、カメラ一式を入れたバッグを受取ると、私は地下鉄の梅田から天王寺へと向った。

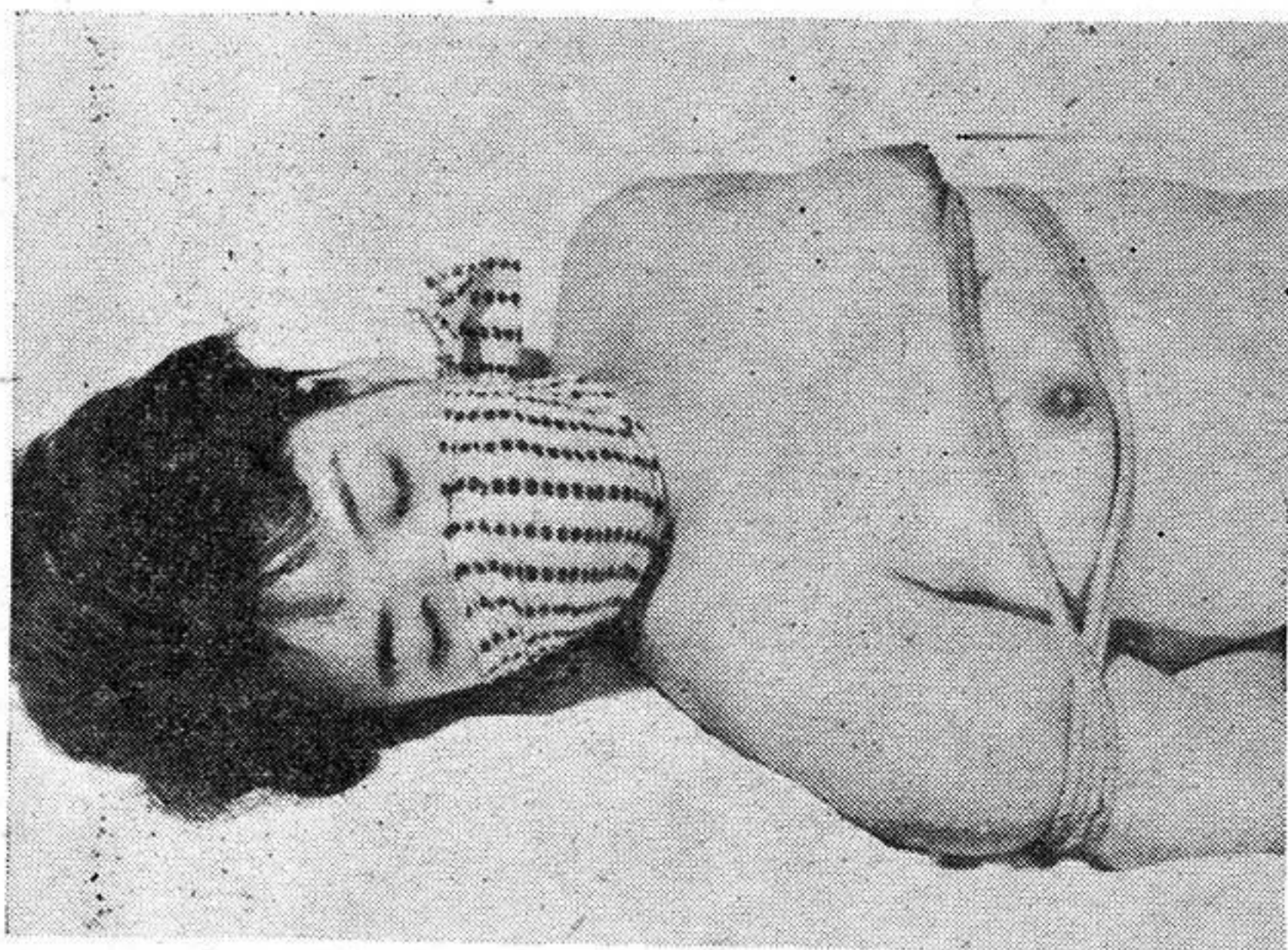
退社時刻にかかった地下鉄の人いきれ、うだる暑さにもまれ、十分ばかりで難波駅の地上に立つ、目指すスバル喫茶はすぐそこだ。

約束の五時半きっかり、私は喫茶の扉を押

す。よく効いた冷房が、爽やかに、汗ばんだ体内に冷気を流し込む。

目指す女性、遠藤百合子は何処?——一巡して、それらしい女性を認めず、私は期待と

写真①豆絞りのさるぐつわ



失望と相半ばした気持で、兎も角一隅に腰を下してアイスコーヒーを注文する。

八月号の「奇譚三十九夜物語」——第二十夜Vに眼を通し終って、第六十二話

「女豹息づく時」が「女貌息づく時」に誤植されてあって、苦笑し乍ら、私はフト、三十九夜に続く一文の、マニヤ通信に興味をひかれたのであった。

(……………辻村先生にお逢いしたい、と思いつつも、とてもそんな勇氣はありません。家を出るまでは、辻村さんをお訪ねして、

「私、遠藤百合子、被縛モデル志願、二十三才、独身……」

そんな文面に私はフト心ひかれた。

「一度でよいから、自分の縛られたポーズを写真にとられて、全国のマニヤの方の眼にさらして見たいと願うのです」

願ってもない話じゃないか。私は瞬間意慾にかられた。矢も楯もたまらず、雑誌をおくと受話器をとる。二云う迄もない編集長にだった。

「グラビヤのマンネリズムを破るに、もってこいの話じゃないか——遠藤君の住所分ってるんだろう。当って見たいけど……」

「相変らず箸まめだね。この暑いのに、いいのかい——」

「心頭滅却すればさ。で、何処の娘?」

「住吉区墨江だ。近いよ——。それじゃ一度君から連絡して見るかい。それとも、こちらから連絡しようか——」

「編集長から頼むよ——、でも、まさか男じゃないだろうね——」

「そりや分らないさ、逢って見なくちゃ……随分今迄女性からだと思って、交渉したら、男だったり、手紙が戻って来て、受取人不明だったりで、ガッカリしちゃうね。まあ当てにせず連絡を待っていてくれ給え——」

それから十二日目——

「色よい返事が来たよ。君に是非逢いたいって、それも電話でいって来たぜ。声だけきくとまるで美人だね」

「それじゃ本ものだ。で、いつ頃……?」

「B・Gらしいよ。日曜か祭日ならいいそう。それとも、午後五時以降なら会社が退けるからいいそうだよ。会社の電話番号きいておいたよ」



写真②柱に立縛りされた百合子のポリウム

「ワクワクするね。善は急げだ——早速日取をきめよう——」

すぐにもと思いつつ、相手の都合があったり、こちらが雑用に追われたりで、毎日毎日気になりつつ半月許り経ってしまった。

「いい加減に逢う機会を持たないと、相手の熱がさめてしまうぜ——」

編集長のアドバイスで、やっと私の腰も上った。何しろ暑いので、多少は夏バテ気味で

あったのだらう。

そして今

——。黄昏には、未だ早いと云うのに、天はいよいよ暗さを増して淋しい雷鳴と稲妻が、南大阪のうるしの様にぬり込めた空をつんざ

いて閃光が鋭角に割けて走った。

正に雷光は真上にある。バリバリと空気をつんざいて轟く、雷鳴と共に、一瞬、光が消えて、数秒後にまたたいて点灯する。どうやら近くに落ちたらしい。眼を挙げて扉から、外の気配を覗くと同時に、裾を巻いて、一人の女性が、稲妻と共に飛び込んでくる。ブルーのワンピース、白いハンドバッグ、ためらうことなく、これだと直感する。

雷をさける人々で満員になったテーブルを縫って、彼女はキヨロキヨロと空席を求め、やっと、私より三つ前のテーブルの、女性二人の客の片側に、遠慮する様にそっと腰を落した。さり気ない素振りで見廻し、心なしか落付かなかった。気がついて彼女は、丸めていた週刊誌を見よがしに机に表紙を上にしてのせ直した。見えてそれが可笑しかった。近代的な顔立ちの、黒眼勝ちの、何処にでもあるB・Gスタイルと云えば曲もないが、謂わば眼立たない存在で、これが被虐のモデルを望む女性であるとは、恐らく誰一人として気付かないに違いない。斯く云う私だって、編集長に知らされておらなければ、ゆきずりの、若い一B・Gとしか見なかったであらう。

私は奇妙な錯覚に捉われた。彼女が被虐モデルであるとすれば、彼女とテーブルを同じくする若い女性二人も、私の前の女性も、左斜めの女性も、すべてが、均一に被虐のモデルの様に思われてならなかった。

或いは期せずして、彼女等は、すべて、被虐の想念を心の裡に内臓しているのではなからうか——。何かに端を発すれば、彼女達は被虐を願望し、或いは身を投げ出し、自から

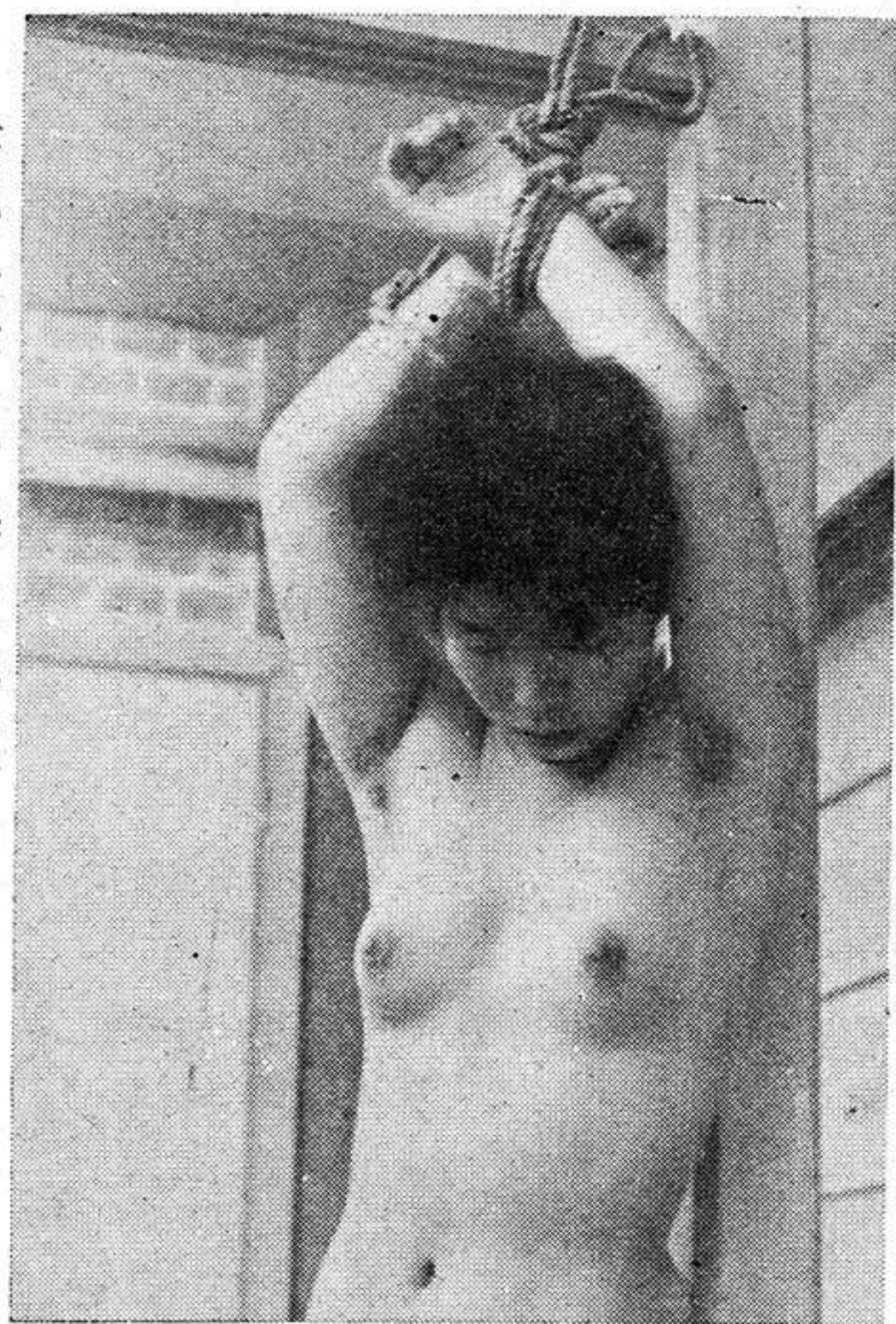
を虐たげられたくてウズウズしているのではなからうかと思われた。

私の眼は、心は、その女のAを裸にして後手に縛り、傍らBの女を海老責にし、Cの女を逆吊りにし、Dを浣腸責めにして見たが、すべてが、ふさわしく似つかわしく見えた。そして当の遠藤百合子をその眼で見るとやはり彼女が一等似つかわしく、被縛に悶え、うごめく肢体が、歴々と映像に写った。

いつ迄も私の心のプレイをしてはおられない。私は席を立てて彼女に迄ついた。

「遠藤さんでしょう。辻村です。今日は……」
今日は……とは何ともヘンな挨拶だが、初対面で咄嗟に言葉もない。ビクリとして彼女は私を見上げ、そして忽ちに紅潮して、おずおずした眼で私に黙礼してうなづいた。

二十二貫の私の体を恐れてか、幸い、私の横の椅子は空席になっていた。



写真③ 両手首を吊り上げられた百合子

「こちらへ参りませんか——」

私のいざないに、彼女は慌てて伝票を持って立ち上った。注文品は未だ通っていないらしい。彼女と向い合せの女性二人が、チラリと私を瞥見

した。デイトの相手かな？ そんな顔色だった。激しく大粒の雨が路上を叩き出した。

ルームは雷雨を避けた人々で混雑し、余りよい雰囲気とは云えなかった。

すぐにも此処を出て、何処か静かな処へ移りたかったが、二人とも雨具の用意もなく、況して、この激しい雷雨では動きようもなかった。

私達は二人だけに通ずる言葉を周到に用意しながら、小声で話し合うことにした。

「とうとう出逢えましたね。貴女の御期待にそえるかどうか——」

「あら——そんなこと……」

遠藤百合子はチラリと美しい眉をひそめ、困惑した笑顔になった。

「確か貴女自身仰有る通り、梨花さんに似たタイプですよ。何時か機会があったら、梨花さんと貴女と二人でSMプレイを撮るのも面白いでしょう。そんな場合があると仮想して貴女ならSに廻る？ それともM……？」

「そうですね、そんな夢が若し辻村先生によって実現出来るのでしたら、梨花さんと二人ピタリと肌と肌を合わせて、一緒に縛られて見たいですわ……」

「そして？……」

「そして……最高のプレイを辻村先生の構成で撮って戴きたいわ。例えば、太い棒の両端に、私と梨花さんが、後手に縛られて吊されるの。あの方と体重が同じなら、その棒は平衡を保っているでしょう。若し私が重ければ、中心から私が下って、梨花さんの体が高く宙に浮上る事でしょう。浮上った梨花さんの足に錘をつけて平衡にし、どちらかの足が引張られる度に、ゆらゆらと二人の体は宙に上下するのです。緊縛のシーソー、そんな夢を考えたくありませんわ。」

「いいアイデアですよ。夢じやなく、機会があればきっと実現出来る事でしょう。ところで貴女に何か希望があるの——」

「別にこれと云って……、辻江さんを信じてすべてお任せ致します。お好きな様にお縛りになって結構ですわ。」

遠藤さんはキレギレにそう云って目を伏せた。それは精一杯の彼女の言葉であったかも知れない——。

雷鳴はいっしか遠のきつつあった。小降りになり出したのか、一人又一人、喫茶から出て行く人があちこちで立上り始めた。

「行きましょう、時間が惜しい。この近くがいいでしょう」

私は伝票を纏んで立上った。声もなく彼女は私に従がった。

× × ×

狭いアベックホテルの一室——これと云った取柄もないが、部屋は案外に凝って綺麗だった。

おきまりのダブルの純白のシートに彼女は眼をつむって裸身を横たえていた。胸に数条縄をかけ、後手にしただけの初歩の縛りであったが、均整のとれた体は、処女の堅さを充分に誇示して従容としていた。若い桃色に勾う乳房はコリコリと弾き返すように引締っている。その小麦色にほんのり焼けた頬に、用意した豆絞りの手拭を当てて、大きく猿轡をはめる。その観念し、耽溺した静かな顔の、何と云う美しさ、私は思わず嘆美の声を放った。

「素晴らしい。これは正しく被縛にしばれた強烈なナルチシズムの姿だよ。身も心も陶酔の境地に浸っている——」

溜息を洩らして、大急ぎでカメラを向けるクローズアップ——。

ふっと彼女は微笑んだ様だった。憧がれの被虐の願望が、思いがけなくも早く実現し、今私とこうして相対している事に、限らない

喜悦と、ヒタヒタと忍びよる幸福感に酔っているのではなからうか。

素直に伸びた形よい眉が特に印象的で、彼女の理智性を物語っていた。

私はカメラの手を休めて、その美しい顔を凝視する、一分—二分—三分。

「どうなすったの？」

なじる様に、彼女はパッチリと瞼を開いて聞いた。少々不審かしげな表情をこめて……私は慌てた。

「いや、なに、余り美しい陶酔の姿に、思わず見とれていたのさ——」

「まあ——そんな旨いこと仰有って……」

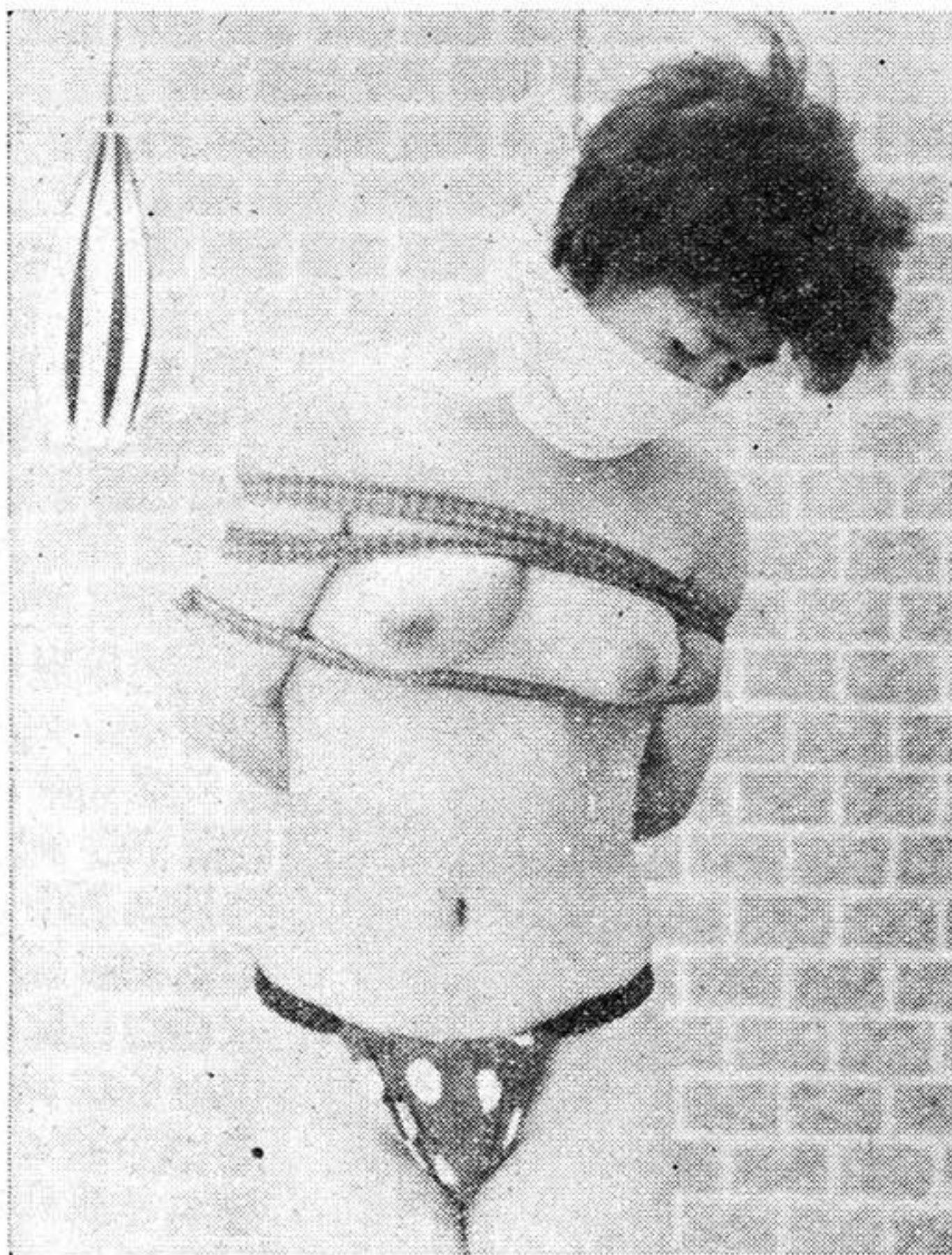
豆絞りの下の唇から洩れる、くぐもった声は、それでも充分に自己満足を感じている様子であった。

「ぼつぼつ本縛りにかかりますかね」

「ええ、お好きな様に……。すっかり覚悟していますもの」

再び彼女の眼は、こぼれる様に微笑んだ。

私は思い直して、彼女を起すと一枚とり床柱の前へ引立てて行った。パンティもとった全裸に、柱を背にして上半身を柱ごと縛り、別の細引で柱の後で両手を縛った。両足を揃えさせて、足首から股へぐるぐると巻き上げ



写真④ 肌にくっきりと喰い込む縄目

て、柱に強く引絞って縛り上げた。首を垂れて、彼女は自分の柱立縛りの縄の食い込みを反芻する様に、眼を落している。

私の一眼レフは、彼女の全貌をなめるように見つめて、バシヤリと重量感のあるシャッター音を残して、その姿の全身をとらえていた。

彼女のマニヤ通信の文中に、こんな個所があった。

（ああ一度でいい、誰かに縛られたい。荷物のように、がんじがために血行も止まるほどに。この私の秘かな願い、切ない欲求をみたして下さるのは誰？）

私は彼女の思いつめた欲求の叫びを記憶に呼び戻し乍ら、さて、何処迄満足させ得るだろうかと、次々と縛り方を変えていった。

ルームクローラを背にして、鴨居に彼女の両手を高々と吊り上げた。かいなの付根に頭をもたせかける様にして

緊縛の作業中、いつも彼女は、私の緊縛の行為を、しみじみと味わう様に眼をつむっていた。ぶくりと乳房が盛上って、豊かなメロンの成熟さを思わせる。

腋毛が程々にしっとり濡れて、高々と挙げた両手の腋から、鮮やかな陰翳を描き出していた。

くびれた胴の中央を占める臍窩の凹みも、可愛いいえくぼのように、ぼちちりと中心がとれていて申分がない。

適冷の筈の部屋も、次々とカメラを向けるうち、いつしか私は汗ばみを覚え、彼女のひたいにも、うっすらと汗がにじんでいた。

「少し休もうか——」

「ええ、どちらでも——」

■シンプルな縛りに物足りぬのか、乙女の差らいが、それ以上の欲求をも云い出しかねてか、彼女は生返事の儘、その場にうづくまっで、手首の縄目の跡を静かにもんでいた。

私はホテルの備付の浴衣を彼女の方へ押しやったが、触れようとせず、彼女は黙念と白い裸身を惜しげもなく、私の目前に曝していた。

部屋の電気冷蔵庫を開いて、私はビールを彼女にはジュースを進めた。

「遠藤さんの事は通信文以外、何も知らなかったね——」

「百合子と呼んで頂戴——。何でもお聞きになって……、プライバシーに関しても、何で

写真⑤ 絹のサテンの紐で縛られた百合子



もお答えしますわ。むしろ私の方から生活の断片を、辻村さんに聞いてもらいたかった位だわ……」

以下、私の問いを省略し、彼女の生活の一部を纏めて綴って見た——。

彼女が被縛の体験をしたのは、小学六年の

時が最初であった。二男四女の三女に生れた百合子は、遠縁に当る遠藤家の養女として、九才の時、遠藤家に貰われ、養父母は百合子にとって善い父であり、母であったが、六年生の時、偶々両親に内緒で、近所の肉屋の青年に映画に連れて行ってもらった事が分り、

こつぴどく叱られた。肉屋の青年と云うのが、近所でも評判の不良で、多くの女を泣かしていると言ふ噂を彼等はきいていたからである。

父親は泣いて逃げ廻る百合子を、つかまえて、ジタバタするのを細紐で後手に縛り、母は泣き乍ら、彼女の両足をしっかりと押えて足の裏に灸を据えた。

女学生時代、下級生のU子とSと謂われる同性愛に陥り、時々U子の家で泊ることがあった。そんなとき、U子の部屋で冗談にU子の手足を縛った事があり、それは自分に対する代替条件に過ぎなかった事を自認している。U子に紐をつきつけ、まごつく彼女をリードして、百合子はその後度々U子から縛られる様になった。年は百合子が上でも、いつしか二人の関係は入れ換って、U子が優位にたつて、百合子を縛ると、少女らしい虐め方をして喜んだりした。大抵は暫らくもがけば、自分で解けるような簡単な縛り方であったが、或る夜、余り百合子がきつくきつくと云うので、U子は本気で有りったけの紐で百合子の体を、雁字搦目にした事があった。U子は疲れてウトウトと寝てしまい、百合子は縛られた苦しい体で、数時間紐をとくのに懸

命になったが遂に解けず、精魂つきて、縛られた儘朝まで寝てしまった。その痛み、徐々に喰い入る縄目、不自然な姿勢——その中に彼女は甘美な被縛の陶醉境を覚えたのである。

養父母に十数年振りに、姉弟と云うには余りに小さい弟が出来た時、彼女は家を出て働らく決心をし、父母の住む河内長野市から大阪へと出て、月々幾許かを両親に仕送りしながら現在勤めている、軽電機メーカーの寮で、充ち足りた生活をしていると云う。

部屋は同僚との二人の相住居であるが、三部制の方に同僚は勤務しているので、事務系の百合子とは、顔を合わさない日がよくある。幼ない頃——又、女学生当時に胚胎した縄による被縛の愉しさが忘れ兼ね、身内に疼きの走る夜は、同僚が不在を幸いに、一人でスーツケースにしまった、自家製のサテンの絹紐をとり出し、下着一枚になって、自縄自縛を試みる。部屋にとりつけた三面鏡にその姿を写し、時には畳の上を転々反側して、じっと縛った儘、夜更ける迄素肌をさらして誰かにその姿を見られている事を夢想する。

想念からさめて、果ては彼女一人、その身を泌々といとはしむのであった。

自縄自縛には限度があり、犇々とした緊縛は到底希めなかったし、同僚の清江は至極陽気なノーマルなたちで、専ら石原裕次郎と高倉健にアツアツに熱をあげている他愛なさで、話にならず、緊縛の件はとも云い出しかねて、独り愉しむ夜が多く、時に悶々の情に身をさいなむ時もあった。

或る書店で、ふと何気なく目についた「奇ク」をバラバラとめくり、百合子と同好のこの世界のある事を知り恥かしさも忘れて買い求め、爾後は、秘かに「奇ク」の発売を待ち兼ねる様になった。百合子にとってそれを購入するのが、一番の難関であったが、本の持つ魅力には勝てず、ジロジロと顔を見る書店の店員の眼を避ける様にして今日迄買い漁って来た。遂に情念は燃え上って五月中旬、長雨のうっとうしさを吹き飛ばす思い、生れて初めての投稿をした。八月号に自らの通信ルポが掲載されているのを読んで、胸は高まり血の疼く思いで反響を待った。九月号にはその通信に対する反応は全然なかった。その代り、かねて私淑していた辻村隆とのプレイの話編集部より手紙で受取り、飛び立つ思いで、手紙を書く間ももどかしく電話をかけた。一日千秋の思いで、その日を待ったのに、仲

々に機会には恵まれず、やっと今日その願望を果すことが出来た。だから今日の百合子は身体を投げ出すつもりでやって来た。身も心もクタクタになるまでプレイに徹して欲しい。今日の日を逃せば、今度ははいっ逢えるか分らない思いにかられている。……云々。

謂わば、遠藤百合子は、葱をくれえた鴨の存在で、料理される事を只管に望んでいるのだ。この様な女性を、読者通信欄で誰一人、言及しないとは、私もヘンに思う位だった。むしろ、読者通信欄なら、反って読者は心易く、同好の士として迎合したのかも知れないが、誌中のスペースを埋めた事が、むしろ目立なかったのではなからうか。

一本のビールは既にカラになっていた。

「じゃあ、思い切って、満足のゆくのを始めるとしようか。暑いし、疲れるので、こらでゴンと盛り上げて、さっさとやめましょう」

百合子はイソイソと立上った。スラリと均整のとれたやや日焼けした肉体は、こりこりとして健康色に輝やき、触れなは落ちゃん風情にも見えた。

数条の縄を手にとると、今夜始めての本格的な緊縛に移る為、私は百合子の背に近づく。両手を最初に縛り、首にかけて前に廻し更に別の縄で、盛り上った乳房と眼鏡状に強

調して縛って、二の腕に廻し腰で合流した縄は更に股縛りに移行した。

私はフト、これが間違ひもなく、誌上を飾る事に思い到り、一度しっかり縛った股縄を外すと、彼女のパンティをはかせてやり、更に上からホテルの浴衣をぐるぐる巻きつけ、その代償に、股縛りの縄を、先刻よりきつく引締めて両手首に繋いだ。

肌にくっつきりと喰い込む縄目に、百合子は呆然としていた。夢に見、醜に描いた緊縛の現実、彼女は自分を見失って、唯、その刹那の甘美な被虐の愉こびにひたりきっているのかも知れない。乳房はむっくりと盛り上がり、指を縄目のすき間にさし込んでも、轟と固くしまり切っていた。

縦横に私のカメラは躍動し、シャッター音が、絶え間なく、大きく音を立てていた。既に百合子は、これが始めて撮るモデルかと思う程に落付きをとり戻し、私の意の儘に体を動かし、カメラに協力した。

梨花悠紀子になり、序盤のポーズではあっても、この日始めての遠藤百合子なら、これで上乘と云わなければならない。

△こんないい彼女と知ったら、塚本君——恐らく腹痛を押しても、奴の事だ。きつと汗を拭き拭きやって来たに違いないだろう▽
腰の弾力的な厚み、そしてその豊満さ——



絵と写真

アイデア提供

正岡ツトム

一、虐縛

△絵▽

土蔵——。

一、土蔵の入口で裾をからげた女、緋色の腰巻の上から足をぐるぐる巻きに縛られ後手、猿轡にて二人の男に担がれている。

二、土蔵の内部で腰巻の半裸、うつ俯せ男の一人は後手に縄をかけ、他の一人は足の縛しめを解く図。

△写真▽

森の小道——。

一、森の中の細道を前方より女、日傘をさして歩き来る。男二人、草むらに待ち伏せる。

二、女の背後より、一人は猿轡をかけ、他は女の帯を解く。

三、女、全裸猿轡、後手に縛られ、太股から足首まで、ぐるぐる巻きに綱を巻きつ

けられた身体を、樹木を背に縛りつけられて、男、坐って見上げる。

二、合意縛

△絵▽

殿と侍女——。

大盃を傾ける殿様の前、一列横隊に腰巻だけの半裸の侍女、手を後ろに廻して俯向いて坐る。背後より着衣の侍女、綱を持ち既に縛った組、縛りつつある組、縛り始めんとする組等。

坐り相撲——。

殿様の面前、侍女腰巻だけの半裸、猿轡にて後手に縛られて二人坐り相撲をしている。腰巻乱れて太股露出。

足相撲——。

右と同様、片足を立膝して、交叉している。

ダンス・パーティー——。

私は尚も、編集長に提供するつもりで、あれこれと撮りまくり、既に三五ミリのフィルム三本をとり終っていた。

流石に彼女にも疲労の色が見えて来た。

彼女の見事な肉体の豊満さを証明する、絹のサテンの紐で簡単に縛ったポーズ一枚を提供して、そろそろ終りしよう。

何れ、塚本君や私の撮った彼女のグラビヤが誌上を次々と飾る日も近かるう。皆さん、素晴らしきマゾ女性、遠藤百合子に声援を送って下さい。

× × ×

夕立のあとの都心は流石にヒンヤリとした冷気が、そこはかとなく漂っている様に思われる。道頓堀の角の、カニ料理の専門店で、かなり豪華な夕食を奢ったあと、私はさり気なく彼女と分れる事にした。

一度味をしまったマゾ女性は、必ず再び追及してくるに違いない。やがて緊縛の度を増して行く事だろう。

名残り惜しげに、百合子は、万感の想いをその指先にこめて、私の手をそっと、しかしきつく握って、再会を約した。

夜空に赤く、通天閣のネオンが点滅する公園の闇を歩き乍ら、天王寺駅が分れの場所であった。

被虐モデル遠藤百合子に幸あれ！

縛られたダンサーを抱き、縛られた紳士を抱き、ダンサー紳士共に後手に縛られたまま、男女括り合わされてステップを踏むの図。

△写真▽

尼僧――。

僧衣を両肌脱ぎ、後手に縛られ、両足あぐらに組んで縛られ坐禅している。

撮影会――。

全裸で縛られたモデルを多数のカメラマン撮影するの図。

三、愛縛

△絵▽

夫婦――。

一、夕食の卓、妻縛られ、夫箸にて御飯を妻の口に入れてやる図。

二、縛られた妻に接吻する図（手足がんに掘目に括られ、妻感じを出して）。

三、庭園に妻手足を縛られてニッコリ笑って立ち、夫撮影している図。

ハイキング――。

一、洋装美人三人、後手に縛られ山道を登る。男一人後ろよりリュックサック四個

をかついで従う。

二、人無きいこの場にて、女三人服を脱ぎ、手足を縛られ、男煙草をふかしている図。

△写真▽

海水浴――。

人無き岩陰、水着姿の男女一組、女を縛っている図。

スナップ撮影――。

若い女子社員、手足を縛られ、屋上にて男子社員撮影している。女ニッコリと笑っている。

四、トリック写真

曳かれる女――。

都会の十字交叉点、洋装の女、両手を後ろに囲し、手首を括られ、縄尻を刑事に曳かれる。

ファッション・ショウ――。

ファッション・モデル、後手に縛られて舞台の上に立っている。

ストリップ・ショウ――。

縛られたストリッパーが舞台の上で脚を挙げている。

長篇SM小説

宇宙のどこかで

△太平洋戦争終結▽

佐 治 麻 造

一郎が此の小会社の奴隷となって一年余り経った頃、講和条約が調印された。

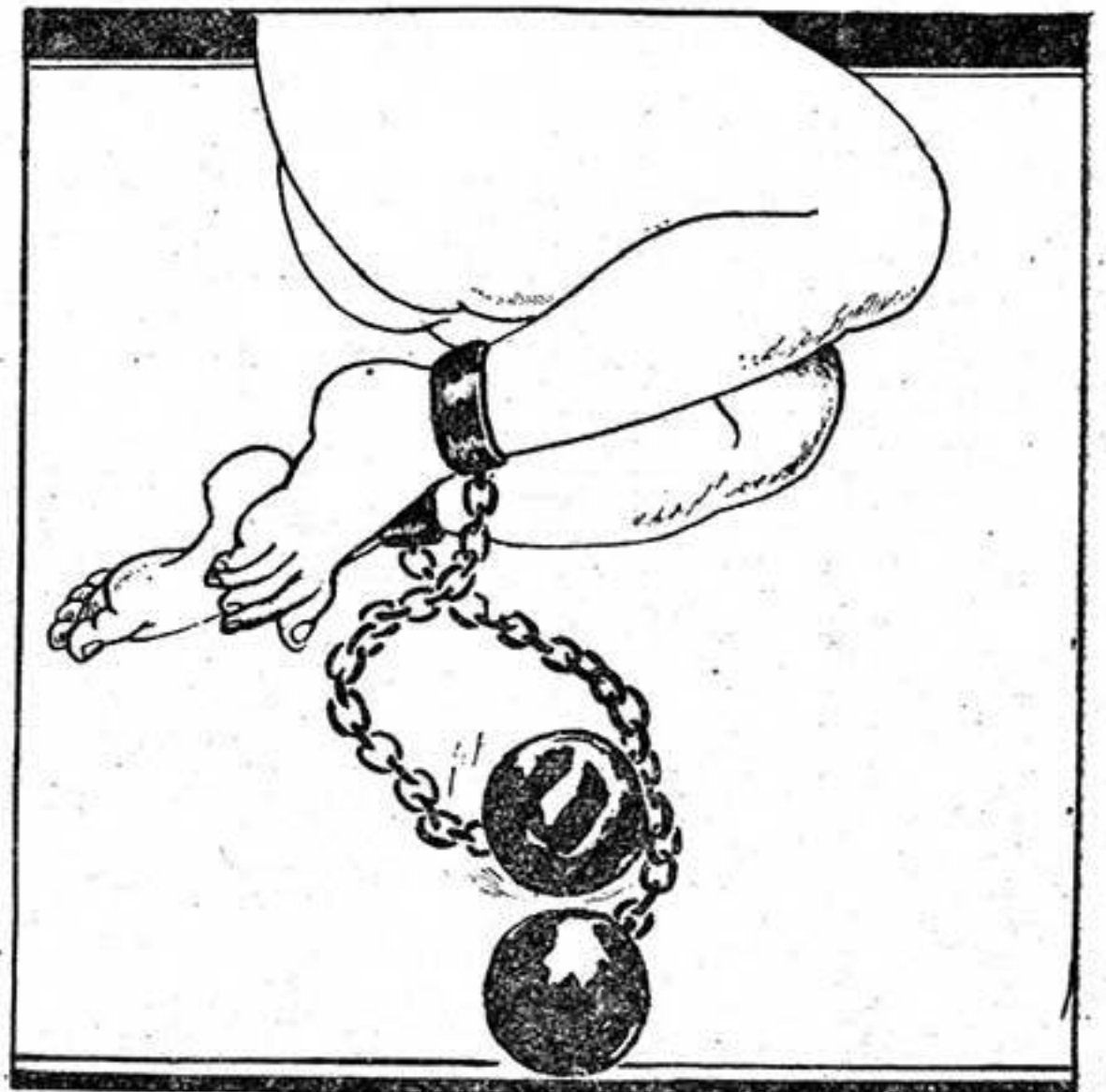
——本日標準時刻午前十一時三十分、良田首相を全権とする一行は、サンフランシスコの市議事堂に於いて、共財圏各国を除く七カ国と我が国との間に於ける講和条約に調印しました——。

或夜、一郎は守衛室の土間の檻の中でうつらうつらし乍ら、雑音の混るラジオのニュースを聞いた。

——講和条約の内容に関しては全く発表されて居らず、シルバーハウス・スポークスマンの非公式な談話によれば、我が良田全権一行の帰国後、出来るだけ早い機会に発表されるとの事です。なおA P特電の伝える所によれば、前占領軍総司令官モ元帥が、大統領に

対する公開状を以て抗議した他は、秘密裡に事を運んだ合州国政府に対する不満の声はさして聞えないとの事です。無条件降伏を背景として居るだけに、合州国々民は条約の内容が満足するに足るものであると言う根強い予想を抱いて居るがためと考えられます。そして其の反面、我が国にとっては極めて苛酷なものである事は充分予想される訳で、調印の際の良田首相の表情は苦悩に満ちたものであったと伝えられます。共財圏四カ国を無視して分割講和に踏み切った我が国には、今後共財圏側の圧迫と共に、此の条約を履行して行かねばならない棘の道が続くことと思われれます。首相は国民の覚悟を促して次の様な談話を発表しました。——

首相の談話は悲壮なものであったが、其の中で共財圏と自由国家



群との対立の間に於ける我が国の存在の意義について意味深長に仄めかしたのを一郎は聞き逃さなかった。そして首相の判断が適中したことを、十五年を経ずして一郎は身を以て悟ったのであった。首相の読みの通りに国際状況が進展したからこそ、一郎は異境の奴隷生活の鉄鎖から解かれて帰国する事が出来、そして多額の政府補償で安穩に生活を楽しむことが出来る様になったのである。

首相一行が帰国して二十日余りの後、条約の内容は発表された。領土問題、軍備の大制限、産業の制肘、基地提供等は概ね予想通りであったが、賠償に関してはおよそ想像された中でも最悪のものが要求されて居た。二十日余の準備期間を要したのも、無理はなかった。

連合国は莫大な賠償金の他に膨大な労働力をも要求したのだ。満二十才から四十才迄の男女各廿万名宛を奴隷として引渡せ、と言うのである。賠償金は長期の分割支払が認められて居たが、奴隷の提供は短い期限付なのだ。ショックであった。

夜を日につぐB39の戦略爆撃、沿岸を横行する艦砲射撃、殆んど組織を分断された本土に展開された敵のオリンピック作戦、そして更にコロネード作戦の舟艇群が白波を蹴立てて殺到するのを、豊富な食糧のみを唯一の頼りに迎え撃った老若男女の全国民が降伏の至上命令を耳にして「すべては果てた」

と虚脱してから数力年、漸く復旧の緒を掴んだ矢先の悲報であった。全国民は天を仰ぎ地に伏して歎き恨んだが、政府は冷静に諸準備を押し進めた。臨時国会は揉みに揉んだが、占領軍の鶴の一声で涙を吞んで批准した。次の問題点は提供する人員の選択である。批

准時に受刑中の囚人、奴隷を先ず充当するには異議がなかったが、該当年令の者は些かに足りなかった。一般社会人の中から抽選するより他にないことが直ちに承認された。調印した首相を初めその与党に対するデモは日に日に激化し、国会議事堂附近は、学生を先鋒とする青年の大群が、占領軍に指揮される警官隊と血の雨を降らせて争った。

守衛の妻女に哀願して、こっそり彼女の名で出させて貰った故郷の母宛の手紙が空しく返って来て居た一郎は、世上の騒ぎをものはや皮肉な思いで眺め聞いた。遠い西国の涯の故郷には、母と二人の妹が彼を待ち侘びて居る筈だったが、それも空しくなった今、天涯孤独の彼にとっては、どこの鎖に繋がれようともはや同じ事なのだ。「私、若し当たたら、どうしようかしら。裸にされて鎖や枷をつけられる位なら死んだ方がましよ。」

会社の娘達は寄ると触ると仕事も手につかないで、おそれおののいた。

「私ね、たった十日のこととてひっかかるのよ。昨夜も母と喧嘩して泣かせてしまったわ。何故もう少しおそく産んでくれなかったのかって……」

「あのね、率は女の方が悪いんだって。率が悪いって言うのは当り易いって事よ。馬鹿ね。男の方はね、囚人や奴隷が多いのよ。」

「あら、何言ってるのさ。くじを引く人数は女の方が遙かに多いのよ。結局女の方が得なのよ。」

「そうお。少し安心したわ。え？三十二人に一人だってノけど……けど当たったら同じことよ。」

「ちょっとおノニュース聞いた？何でもねえ、何百万か献金したら

くじ引かなくてもいいって事にするんだって！」
「まあ！」

献金に依るくじ免除の案は社民党及び国民大半の反対の声で引込められた。提供奴隷の従順性の保証を要求する一項があるので、受刑者の中の兇悪犯罪者の提供に就いても当局内部で問題となったが、それは首相の断で決定された。若し兇悪犯罪者を残すならば異国の鎖に繋がれるのを嫌う者の中には、故意に兇悪犯罪を犯す者が出るやも計り難いからである。戦争で青壮年の多数を失った我が国にとって更に四十万の青年男女を失うことは痛手であった。しかし連合国とても、其の高い生活水準を維持するには、失われた労働力を早急に補充する必要があったのだ。敗戦のみじめさを今更の様にひしひしと全国民が味う中で、犠牲者を選ぶ準備は着々と進められた。要求された積出完了期限迄はもはや三カ月もないのだった。

○

政府の必死の努力によって、期限の定めなかった奴隷年限について、一応三十年後には解放する事が出来るかも知れないと諒解が主要国との間に成立し、国民は僅かに安堵した。

或る朝、「サンフランシスコ条約履行に関する奉仕員選出に就いての法律並びに施行細則」が公布され即日施行された。

曰く、奉仕員は、サンフランシスコ条約調印時に於いて満二十才以上満四十才を超えざる社会人（但し王族を除く）より選出す。選出方法は各人本人が任意にくじを抽くものとす。

曰く、年令該当者は送付される選出票を所持し所定の期日場所に出頭すべし。

×月○日迄に選出票が到達せざる該当者は×月△日迄に所轄警察

署、市町村役場に連絡すべし。正当の理由なくして前二項に違反せる者は終身懲役に処す。其の理由に関して虚偽の証明、証言をなせる者又同じ。

曰く、条約調印の日より選出完了の日迄の間に、奉仕員として不適当な負傷、疾病、若くは身体精神機能の欠損を生じたる者も抽籤を免除せず。而して選ばれたる場合に於いて、受入れ側の検査に失格せる時は、其の障害の発生が故意に非ざる証明をなすべし。証明不能の場合は十年以上の懲役に処す。其の障害の発生を幫助せる者又同じ。

曰く、条約批准時に於いて懲役刑及び死刑を受刑中の者及び奴隷たる者の中、年令該当者はそのまま奉仕員に充当。該奴隷の所有者は無報酬にて政府にそれを引渡すものとし、当局の指示する時日に指示する場所に持参すべく。受取完了迄は該奴隷を良好なる状態にて保管すべし。違反せる所有者五年以上の奴隷刑に処す。

曰く、奉仕員となりたる者は即時国籍、人格及び身体を剥奪されるものとす。

曰く、奉仕員の選出業務に携わる者は満五十才以上の者とす。但し府県知事の承認を得れば此の限りにあらず。

曰く前条の者が不正行為をなしたる時、又は義務を完遂せざる時は、故意たると過失たるを問わず十年以上の懲役に処す。

曰く奉仕員を志願せんとする者は……

曰く、国外に在る者については……

曰く……

旬日の後、年令該当者は厚い紙の大きな選出票を震える手で受取った。約一カ月後の運命の日を控えて自暴自棄になった男女が能う

限りの享樂に耽るのが、あちこちに見られたが、大部分の男女がむしろ嚴肅な日常を送ったのは意外であった。しかし土壇場になると各地で大小の騒ぎが起った。そして秘密にして居た「警察官に対する免除」が明らかにされて、怒りに平静を失った男女が暴れ回ったが、彼等が検束されて無条件で奉仕員にされた旨が発表されると騒ぎも静まって行つた。

何しろ当る確率は非常に小さいのだ。男女は僥倖を期待して其の日を待った。奴隷達はどうに奴隷管理所に移されて居た。そして一郎達は更に或る工場に移された。罪もない同胞を鎖錠する戒具や鎖を昼夜兼行で製作する其の工場で追い使われ乍ら一郎は涙を流した。手錠や足錠が詰った重い木箱を荷造して發送する労役に疲れ果てた体で横臥する度に、元海軍大佐の言葉が耳に甦えるのであった。

其の大佐は終戦時、内地の航空基地の司令をして居た男で、一郎が帰国後ぶち込まれた監獄で暫らくの間彼の隣りの独房に呻吟して居た。彼は至上命令にも肯んぜず、徹底抗戦を主張して上層部を心痛させ、あわやと言う瀬戸際に無念の涙を吞んで逮捕されたのだった。即時軍法會議で懲役三十年を宣告されてしまったのであったが、度重なる脱走企図や不従順の故に苛酷な懲戒を繰返して身に受けた彼は、一郎が繋がれた頃には既に体力を消耗し尽して居た。しかし一郎の耳には、機会さえあれば絶叫して居た彼の血を吐く様な声がありありと想い出されて来るのだ。

「大馬鹿野郎共めが！ 今に今に、国民全部が奴隷にされてしまうのが分らんのか。俺はどうなってもいいが……。刑務官っ、典獄に会わせてくれい。頼む。要路の連中に献策したいのだ。紙と筆をくれ。頼む。その女の刑務官っ、男一匹がこれ此の通り土下座して頼

みます。紙と筆を……。そして後手錠だけは外して呉れ、お願いする……」

許可なくして口を利き、しかも刑務官や典獄を呼び捨てにした廉で、彼は忽ち半死半生の罰を受け、しかも暫くの間は食事の時も嵌口具を外して貰えないで、鼻孔から吸ってむせて死ぬ様に咳込んで苦しんで居た。しかし男の刑務官連中の殆んどはひそかに同情の念を寄せるのであったが、何分男子職員は少数であった。圧倒的に多い婦人刑務官の大半にとっては、彼は狂人とし映らず、彼の血の叫びも所詮は空しかった。

持て余した典獄は執念深く生き永らえる彼を北の涯の監獄に移した。瘦せさらばえた体に第四種の手錠足錠を固く嵌められ重い鉄丸を両足に曳き摺らされた彼が、鼻環につけた二条の捕縄を前後の婦人刑務官にそれぞれ一本宛握られて曳かれて行った光景は、今も一郎の臉に残って居る。

彼は必死の努力で頭を真直ぐに立てて眦も裂けんばかりに前方を凝視して居たのだが、嵌口具に締め上げられた其の横顔には信念と憂国の想いが火と燃えて居たのであった……。

全国を十ブロックに分けて、一日おきの選出が遂に始められた。

○
首都を含むブロックは第一日目であった。

久江は山手の閑静な住宅地域の我家の門を出て空を仰いだ。初秋の空は爽かに澄んで白雲が去来して居る。或いは二度とは戻って来れない住み馴れた我が家を振り返ると、母と祖母がハンカチで目を押えて手を振って居た。戦争中、手馴れた家業を統制で失った父が亡くなって既に十年、三人の兄は南溟の空に海に消え、一人残った

末娘の彼女だった。

「私が若し帰らなくても気を落さないでね。大丈夫よ。行って来ます。」

彼女は呟くと手を振り返して門を離れた。

「若しも、若しも、当っちゃったら、どうしよう。諦める他ないけど、此の年になる迄どうとう好きな男も出来ないで過したのが残念だわ。」

早朝の歩道を踏んでバスの停留所に急ぐ彼女のハイヒールが静かな周囲の塀や生垣に響いた。奴隷商だった父の名声の故か、彼女は年令該当者であるにも拘わらず選出業務の一員に指名されて居たのだった。

街路樹が落す長い影の上に空いたバスが静かに停車し久江を乗せると動き出した。運命の朝にしては余りにもひっそりと平和なたたずまいであった。しかし定められた場所である中学校に近づくにつれて、街も道も次第に騒然とした気配を感じさせた。未だ七時前と言うのに校庭にはかなりの男女が集って不安な面持ちでウロウロして居る。開始時刻は九時であるが、残り少なになつたくじを引くよりも、多数のくじ中からの一個を選びたいのが人情かも知れなかった。集った男女に整理券が渡され湯茶の準備も出来、警官や係員も全部出揃った。腰に大型拳銃を吊った駐留軍の憲兵が男女二名宛ジョブで乗りつけ、その姿を見た青年達は憎悪と怨嗟の声をあげた。

此の場所に集まるべき青壮年者は男四四〇名、女六二〇名、その中から二〇名宛の男女を選ぶのだ。講堂には男女別に分けて抽籤場が設けられてあった。大きな木箱の中にキッチリ人数だけの空薬莢が鈍く光って積まれて居る。その小銃の薬莢の中には赤、緑、白に

塗られた鉄球が、どれか一個入って居るのだ。薬莢の口を嚴重に塞いだ赤い封臘が嘲笑う唇の様だった。講堂の入口の受付から木箱へ向って高い木柵で両側を仕切った狭い通路が延び、木箱に隣接して並べられたスチール製の机の群と木箱を囲んで其の柵は再び通路になって、壁際を天井から遮ぎって垂れた厚い二重幕の中に消えて居る。

其の二重幕の中には既に連鎖用の太い鉄鎖が四本並べて床に延びておかれてあるし、又戒具の入った木箱も運び込まれてあるのを久江は知って居た。其の效果に就いては、久江は未だ半信半疑ではあったが『ノイロン』とか言う薬の注射の準備もしてあるし、整理番号刷り込み用の器具も片隅に置いてあるのだ。

鼻環装着の器械はとでも行き渡らなかつたので、あとで集めて嵌めるのだと言う事だった。スチール机の所に設けられた木柵からの出口の扉、くじを入れた木箱の所を初め柵の内外のあちこちに警備の警官が立ち、駐留軍の憲兵が机の上にガタリと拳銃をおいて椅子にふんぞり返っていた。講堂の入口の壁に、首相の直筆を拡大印刷した掲示が貼ってある。

——奉仕員選出のくじをおひきになる皆様へ——

本日はほんとうに御苦労様です。何も申しません、お心静かにくじをおひきになって下さい。選ばれた方々には本当に申上げる言葉もありませんが、我が民族のために崇高な犠牲となつて下さい。敗戦の悲哀をまともにお受けになるあなたの方の年代に対し、唯々合掌して感謝の意を捧げます。われわれはあなたの方の犠牲を永久に忘れるは致しません。何事にも唯々堪え忍んで決して希望をお捨てにならない様に。帰国された暁には必ずや充分の償いをさせて頂く事をお

約束致します。失われた年月は戻っては来ないでしょうが。そして又、われわれは一日でも早くあなた方が帰って来れる様、懸命に努力致しますことを固く誓います。

年 月 日

内閣総理大臣 良田 繁

並んで貼られた別の掲示にも男女の真剣な視線が集中した。

——御注意——

静粛を旨として下さい。若し指示、制止に従わないと射殺されます。

まことにお気の毒ですが、混乱、事故等を防ぐため、衣類は全部脱いで受付に渡して下さい。そして当非決定迄手錠を使用させて頂きます。

当らなかった方は証印済の選出票の丙片を少くとも向う一カ年は大切に保存して下さい。其他選出票の裏面をよく読んで下さい。久江の仕事は、当らなかった者から、手錠を外してやる事であって、女子の部に位置した事は勿論であった。

最初の娘が全身を真赤に染めて、両手の手錠を光らせ乍ら通路を進んで来たが、薬莢の木箱に近寄るにつれて血の気が消えて行き足が進まなくなりました。向うの受付の所では既に手錠姿の次の娘が、年配の看護婦に口腔内の検査を受けて居るし、その次の娘は両手を揃えて差出し乍ら顔をそむけて泣きそうな表情で堪えて居る。年配の婦人警官二名が、何か慰さめと励ましの言葉を掛けては居るものの、表情はきびしく引き締めて、次々と裸の女達の両手に手錠を嵌めて行った。其の嵌め方は、ゆつくりと優しくかったが、それだけに入念であった。

「あつ、い、いたいわ。」

細い右の手首に嵌まった手錠を、婦人警官にゆすぶられた娘が悲鳴を挙げた。

「あら、ごめんなさい。可哀想だから、うんとゆるくして上げたのよ。けど、抜けやしないかと心配になったもんだから……。さ、そっちの手もおかし。」

次の女は子供の二人もあるうかと思われる三十台の婦人で、脱ぎ捨てた和服類一式をノロノロとたたんで箱に入れ乍ら、しゃがみ込んだまま中々立ち上らない。眉根を微かにしかめた婦人警官が其の右腕を掴んで引き起した。鈍い金属音が鳴って肉付きのいい両腕が白い胸や腹のあたりで切なげにもだえ、手にして居た選出票が床に舞い落ちた。

「我慢するのよ。すぐ外して貰えるんだから。」

婦人警官は紙片を拾って、わななく指先に持たせてやり乍ら、そう言って、白く丸い肩を押した。その後が続く二十才になるやならずの小娘が其の小さい口を思い切り開いて喘いだと思うと矢庭に身を翻えして逆戻りしようとした。

「あら、あんた。駄目よ。もう受付印を押して貰ってるんでしょ？さ、こっちへおいで。此の箱に服を入れて……。」

控えの婦人警官も二人ばかり寄って来て、泣きじゃくる娘のドレスを脱がせて行った。

「静かにしなさい。でないと……、ホラあのMPがこっち見てるでしょ。くじも抽かせて貰えないで奉仕員にされちゃうわよ。くじをひけば殆んどは助かるのよ、分ってるわね。さ、手をお出し。」

先頭の娘は恰かも処刑台に昇る死刑囚の様な足取りで最後の三米

ばかりを漸くにして歩いて、くじの入った木箱の前に立って胸の隆起を波打たせた。額にはジットリと脂汗が滲み其の大きな眼を見開いて薬莢の山を見詰めて喘ぐ。真先を切って二十米余りの通路を進んだ其の勇氣も萎えたのか、中々くじをひこうとはせず、其の血赤った眼は何度も木箱の前面の掲示の上を泳いだ。

——「注意」——

一、くじは一個だけ取ること。

一、選り取ったくじは、そのまま開封係へ持って来ること。

一、一旦選んだくじは取替えないこと。又、余り長々かかると鞭打たれますし、場合によっては当選と見做されます。

一、赤玉は当選です。緑玉は補充要員として当選者と同様に処置されます。白玉は落選です。

木箱の横に立った婦人MPが鞭を振り上げた。

「早くおし！」

鋭い言葉と共に鞭が娘の背に鳴った。

「ヒューッ」

見せしめの痛撃を受けた娘は絶叫と共に身をくねらせ、床に這って肩と背を波打たせ、そして手錠を床に鳴らした。木箱の傍に立って居た婦人警官が唇を噛んで婦人MPを見やり、そして呻き続ける娘を扶け起した。

「さ、早くお取り。痛かったらうねえ。可哀想に……」

漸く起上った娘は勝気そうな顔に怒りをこめて婦人MPを睨みつけたが、青い眼に傲然と見下ろされて其の黒い眼には口惜し涙が溢れて頬を伝った。手錠で繋がれた両手が揃えられたまま薬莢のくじの山に差延べられ、震える指先が一個をつまんだ。

「次っ！」

鞭が振り上げられ、そして床を叩き、二番目の娘は膝で歩いて木箱に近寄って其れに縋って漸く立ち上った。もう一人の婦人MPの鋭い監視を受け乍ら、三名の立会人の前で、先頭の娘の薬莢の封臘が破られた。娘の指先から選出票が床に落ち、其の横顔が安堵に弛むのが久江の席からもよく見えた。

「よかったわねえ。鞭痕に薬つけたげるわ。」

選出票の丙片が切り離され証印が押された。

「さ、これを持ってお帰り。あそこで手錠を外して貰うのよ。」

銀髪が少しある初老の婦人警官が久江の方を指さして言った。

「早く外してよ。」

鍵を持った久江の眼前に両手を突き出した娘は、上ずった声でそう言うって焦れったように手錠の鎖を引張った。脱兎の如く柵の出口を潜り出た娘が手首を撫で撫で、既に回されて居る自分の衣服箱の上にしゃがみ込むのを見乍ら、久江は複雑な気持だった。

「年取った婦人警官がいくら少いからって、該当者の私にこんな仕事をさせるなんて……」

久江がそう考え乍ら眺めて居ると、ブラジャーをつけた娘が忽ち悲鳴を挙げた。鞭痕がすれて痛いのだ。

「……外してよ。」

二番目の娘が両手を差し出した。

ビシッ「ヒューッ……くそっ」

男子の方の柵の中で長身の青年がMPの鞭を喰って呻き、並んだ男女は息を呑んで眼を見交わせた。七、八名の女性が何れも白玉をひいて嬉しそうに帰って行き、列は少し途絶えた。

「外にはまだ多勢来てるらしいのにね、どうしたのかしら？ 早くしないと日が暮れるわよ。」

「皆様子を見てるのよ。あなた、自分が該当者でないからって随分薄情なのねえ。夜中迄かかったっていいじゃないの。」

女性の部が一休みしてる間に、男性の方で遂に赤玉をひき当てた男が出た。

「……か、かんべんして呉れ。嫌だ、俺は奴隷なんか嫌だ！ 何も悪い事してないのに……。ゆ、ゆるしてくれ。その出口から出しておくれ、お願いだ。」

顔面蒼白になって喚きもだえる浅黒い男は、両腕を二人の警官に抱きかかえられ、足の指先を床に引摺り乍ら厚いカーテンの中に連れ込まれて行った。微かに鉄鎖と鉄枷の音が何度も聞え、痛ましい慟哭の聲が断続して止まなかった。

「何よ！ 手錠なんか嵌めなくってもいいじゃないか。覚悟を決めてるんだから、見苦しい真似はしないわよ。あ、どうしても嵌めるの？ ちちきしょう！」

バーかなんかの若いマダムらしい女が現われて通路の入口で婦人警官達と争ったが、やがて唇を噛み乍ら手錠の両手で腿のあたりを

本誌十一月号より、定価二五〇円—。

本誌は、次号（十一月号）より、内容充実、増頁のため、従来より五〇円値上げして、定価を二五〇円にさせて頂きます。従って「奇クサロン」その他、読者に直結した内容を盛り上げ、より充実した雑誌にしてゆきたいと考えております故、何卒ご愛読のほど、お願い申し上げます。

掻き掻き通路をやって来た。度胸の据った女で、スタスタと木箱に近寄ると、婦人MPを流し目でグイと睨んで無造作に薬莢のくじを摘み上げた。

「さ、早いとこ開けて見てよ。」

開封係のデスクの上に選出票を放り出し、其の上に薬莢をカチンと叩きつけて彼女はあたりの連中を見回した。

「あらっ」

転がり出た赤球を一目見た女は一瞬、体をグラツとさせたが忽ち立ち直って両眼を閉じた。

「お気の毒だけど……」

「分ってるわよ。どこへでも連れてってよ。あんた達何よ！ お為どかしの言葉なんか聞き度くもないわ。」

啖呵を切り乍ら其の聲は流石に段々と震えを帯びて来て、其の膝は少しガクガクした様だったが、通路を通過してカーテン仕切りの中に消える迄、自分の足で歩いたのは立派だと久江は思った。最初の犠牲者が意外にもシャンとして居たので、係員の連中も少し気を呑まれた様子だったが、二人目からは自分の足で歩く犠牲者は見当らず、其の悲痛な喚き声は耳を掩い度い程であった。

「……私……三十九才と六カ月なのよ。お願いですから見逃してやって……。子供が三人も居るんです。私が居なくなったら……」

「あとの事は出来るだけの事を致しますから。本当にお気の毒ですけど……」

泣き声が仕切りの向うに入って行き、やがて突然消えた。嵌口具をはめられたのだ。

コルセットの歴史 成田 一郎

第一章 序論

その昔、遠くエジプトの時代に源を発した西欧の女性の服装が現在に至るまでの間、その長い期間にさまざまなスタイルの変遷を経てきたが、洋装の美は二つの要素に分けられる。

それはあたかも人間の美しさが、肉体の美と内面の精神的な美とによって構成されているように、洋装においても外観の美を表現するコスチュームと、内面の美を型づくるファンデーションとに分けられる。

殊に洋装におけるファンデーションは日本の和服或はその他の東洋の服装と違って服装美を表現する上において非常に大切な要素を

持っているのである。そしてそのファンデーションの中で重要なものはコルセットである。

西欧の服装はまずその基本となる体型によって型づけられるからである。その体型を決定するものがコルセットである。

それではこれから洋装におけるその重要なコルセットについて順を追って述べてみようと思う。

第二章 コルセットの起源

過去の婦人達が服装を美しく見せようとしていかに涙ぐましい努力をかさねてきたかは枚挙にいとまがないが、その最も内奥の問題がこのコルセットにかけられていた。

エジプト時代に源を発した古代の文化が近代文明の精華をなしたのはギリシャ時代であろう。そしてそのギリシャ時代の文明の前身とも言えるものがクレタの文化である。その当時の古跡の発掘が行われ、クレタ文明の婦人服のシルエットを知ることが出来た結果、次の様なことが明らかになった。

それは正に近代の服装ではなにかと疑うばかりのシルエットを当時の婦人達が身につけていたことが判明したのである。殊に十六世紀から十九世紀にかけて流行したエムパイヤ・スタイルのシルエットに酷似していた。細くしまったウエスト、長くたれたスカート、これがBC三〇〇年頃の女性の服装であったとは驚くの外はない。

これは明かにコルセット (The Corset) をつけていた結果である。そのクレタの女性のつけていたコルサーージュは前を紐がけにして完成なコルセットを形成していた。またなおはっきりした資料によって判明したことは、このコルサーージュは胸部と腰部の二つの部分からなっているが、全体の型は殆ど十八世紀の頃のものと同型であって例えばブラジエール (Brassière) までについて、これは現代のところ我々が歴史上始めてみることが出来た典型的なコルセットの原型なのである。

さて時代は移ってギリシャ時代になって、最も実際のなコルセットの基礎が出てきたのであった。それはギリシャ人はストロツォイ (Strophion) と言っているが、一種のガードル (girdle) であつて……と言つても現代の様なガードルではなくて、一種の腰帯の様なものであるが……。ギリシャの婦人達はチュニックを着た時に、それがずり落ちるのを防ぐ為にやや広めの帯を胸下に締めていた。この腰帯がやがて西欧のコルセットの基本として発展してゆくのである。

第三章 コルセットの発達

さてギリシャ、ローマ時代から初期キリス

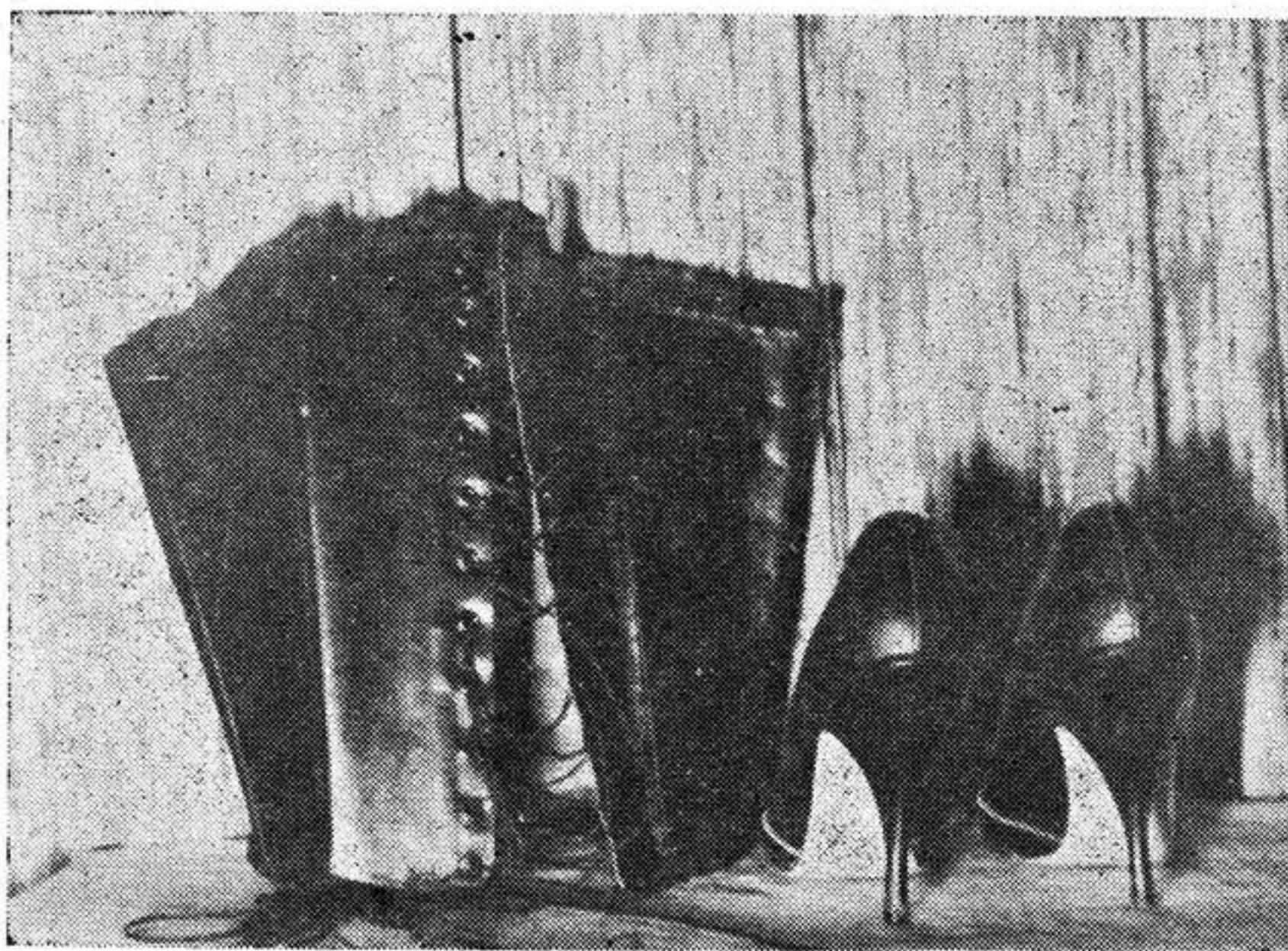
ト時代、ビザンチン、中世前期、中世後期を経て、十六世紀になり、いよいよルネッサンスの豪華けんらんたる華開く時代となる。

この時代になると、もはや衣服は人間の肉体を気候やその他の障害から保護する為という本来の役目のみでなく、装飾的な意味に身につけるといふことが大きな比重を持つに至った。殊に女性の服装は異性の関心を引くという点に重点が置かれ、そうなるや当時の男性の好むスタイル……、プロポーシオン……を造りあげることに夢中になった。

それは雀蜂 (wasp) の胴の様に細くくびれたウエスト……… (wasp-waist) の完成に集中された。ウエストを思いきり細くする………その必然的な結果として、バスト、ヒップの大きさが目立つ……つまりそれは女性の性的魅力の強調である。

ここにおいて、コルセットの持つ効果は絶体的に不可欠なものとなったのである。

(第一図) コルセットとハイヒール



かくして蜂腰コルセットは時代の脚光を浴びて登場するのである。

ルネッサンス時代のコルセットは、この目

的によって考案され完成された。

その構造は極く初期のものは、細いスカシの入った鉄で作られたもので、ひどく苦痛なものであった。

次いで十七世紀後半になるとコルセットの材質も改良されて鯨骨の芯の入った硬い布で作られ、背部に縦に穴をあけ紐を通して後で締め上げるようになってくるのが出来てきた。

上流社会の貴婦人をはじめ、その他の女性においても、こぞってこの様なコルセットを着用し他人よりも少しでも細いウエストのサイズを望みまたそれを誇った。

乳房の貧弱な女性も或はヒップの小さい婦人もこのコルセットをはめることにより、乳房は高く盛り上がり、ヒップは大きく誇張され男性の目は必然的に突き出されたバストと大きく張ったヒップと、そしてちぎれる程に細くクビしたウエストにひきつけられた。

ここにおいてコルセットの果した効果は絶大であった。

第四章 十八世紀時代

十八世紀に入るとこの様なコルセットの必要性はますます増大して、その結果コルセッ

トも種々様々なものが次々と考案され制作された。

多くはサテンを使っただもので、中に鯨骨の芯を縦に何本も入れ、後部で紐を使って締め上げる様にしていた。

また中にはファンチンゲールを留めるマスク付のものもつくられた。

また特殊なものとして柔かい羊のなめし革を使用して作られた極端に細いコルセットがつくられた。

これは、マヌカン等の特殊な職業の女性や上流階級のまだ成熟しない少女の訓練用に使用され、その訓練の方法はさまざまのものがあつた。

(第二図) コルセットを締められる女と締める女



上流階級の家庭においては将来貴婦人として社会に出るべき娘に対して、蜂腰をつくるべき訓練を十二、三才の少女時代から始めていた。

かくして成長した貴婦人達は外出の折には数多くのコルセットの中から特に細く締まるのを選び出してはめるのであるが、勿論自分では締めることは出来ないで女中や時には夫の手によって締めさせた。

それも最初のうちは人の手によって締めていたが、そのうちにそれでは満足出来なくなり、特別にコルセツトを締める為のロクロの如き構造の器具を考案し、それによって締める程になった。

骨も折れよとばかり締め上げられたコルセツト。

中には鯨骨で造られた芯が縦に何本も入っている為にコルセツトをはずすまでは絶体に体型がくずれることがないのである。

そしてコルセツトにより圧迫された下腹部は女性の身体をたえず刺激してコルセツトをはめた女性はますますコケツトリにエロチックになってゆく……。

【臨時増刊号】 予告!

新しく登場する未発表のモデル達を中心とした豊富なグラフィック。(サド、マゾ、フェチ、切腹、浣腸、禪、女斗美等々)並びに四馬孝画く、連続絵物語等を結集したグラフィックの特集を目下企画中です。発売は十月中旬、定価一部五〇〇円の予定。何卒御期待下さい。詳細は追って、次号誌上に発表いたします。

(題名)

未定

モデル写真を中心としたグラフィック雑誌

(定価)

五〇〇円

そのスタイルは当時の女性のまた男性にとっても羨望の的になったスタイルであった。その一つの証拠として当時の画家の書いた絵画の中にはコルセツトをモチーフとしたものがよくあった。

例えば

『コルセツトをつけている女』

『コルセツトの仮縫いをしている女』

或は

『コルセツトで胸を狭窄している女』等にある。中でも一七五〇年にウイルソンの描いた有名な銅版画『コルセツトの仮縫い』はこの特徴をもっともよく表わした絵の一つである。

限定特別号、残部僅少!

第一弾「アラベスク」売切、

第二弾「緊縛」在庫なし

第三弾「……」在庫……

「緊縛写真グラフィック集」

略号「グラフィック」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育ったベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した『グラフィック』です。誌面いっぱいには所狭しと盛り上げる大型グラビアの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの

また画家ウランソンの描いたものには、『弱い夫が体力をふりしぼって「もっときつく!」というやさしい妻の命令に従って夢中になって妻のコルセツトを締め上げている』図が描かれている。

この後フランス革命の時に一時陰をひそめていたが、政治的な騒ぎが治まると、第一次大戦に至るまでの長い年月の間、婦人の蜂腰に対する憧れと欲望はますます激しくなり、コルセツトを使用しての蜂腰の完成にすべての努力がかさねられていったのである。

(この項終り)

中へと誘い込むことでしょう。

第四弾「……」在庫……

緊縛フォトと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作貴画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。

＜緊縛研究講座＞

絹川文代さんと
マゾヒズム

牧 野 純 一



「絞首台、打首、縛られる、女囚、足枷、素足、足指、責め、浣腸、括られる、ハイヒール……」――

これは毎号貴誌のグラビア写真を飾って居

る絹川文代さんが、何時か偶々貴誌上に麗姿ならぬ麗筆を揮われた、其の手記の中で「関心をひかれる言葉を順に書きます」として挙げた言葉である。

「黒いイブシのかかった足枷を足首にされてハダシで歩かされる、といったのは、一度やってみたいと思っています。」

「『女囚処刑の図』は見えていませんのでお答えしかねますが、時代劇の映画でハリツケになったり、馬で引廻しになったりという場面は好きですし、自分もそういうヒロインになってみたい気がします。」

「ジャンヌ・ダークや八百屋お七、或は白木屋お駒のようなヒロインだったら、十分感じを出せるつもりです。うんとむごたらしく、しかもうんと美しいものにして残しておきたいような気がします。」――

これ等も其の手記の中の一節である。又、以上の手記とは別であるが、貴社の分譲写真の傑作の一つに「絞首処刑」（略号こう）という三枚一組の写真があつて、これは絹川さんが首に縄をかけられ脇腹を突かれて絶命して行く凄まじいシーンであるが、貴誌の説明によると、彼女自身が処刑される場面を撮ってもらい度いと希望して実現した写真であるという。

此の様なことから判断して、今の絹川さんの心理がマゾ或いは少くともマゾ的であることは疑無い。

「ところが絹川さんも初めから今の様なマゾ状態だったかという、これも亦疑わしい。そして、其の点にこそ余計我々の興味を唆る課題がある。」

試みに何年か前の彼女のデビュー当時の写真を振返って見よう。其処にあるものは、今の絹川さんとは、凡そ似ても付かない無表情、無神経な姿である。偶に表情があるとすると、縛られ乍らニヤニヤ笑って居るというチグハグなもので、これが今の絹川さんと同一人かと怪しまれる程のものである。

それで、其の頃は、投書欄にも「絹川嬢、一体全体痛くないのか。無表情とはこのことだ。そんなに表情が下手なら、一そのこと芸者の装いでもし給え。そうしたら少しは見られるだろう」などと、こき下されたこともある位だ。それが今はどうだろうか。例えば此の間のグラビア写真「黒い手套」にしても、「恍惚のムード」にしても、或いは臨時増刊「グラフ」の中の幾つかの写真にしても、其の表情といい姿態といい、絶妙という外いい様もない。

我々は絹川さんの此の様な変化と進境を目のあたりする時、人間の努力と精進の成果というものに改めて目を瞠る思いであるが、更

に、それと共に、或いはそれ以上に、一つの疑問を持たざるを得ない。それは何かというと、此の様な表情や迫真力は、果して単なる演技力だけから生れるものだろうか、という疑問である。恐らくは、絹川さん自身の気持が段々マゾヒステックに変化して来て（或いは呼びさまされて）、被虐の情景なりムードなりに浸り込んで、それを味って居るのではなからうか。

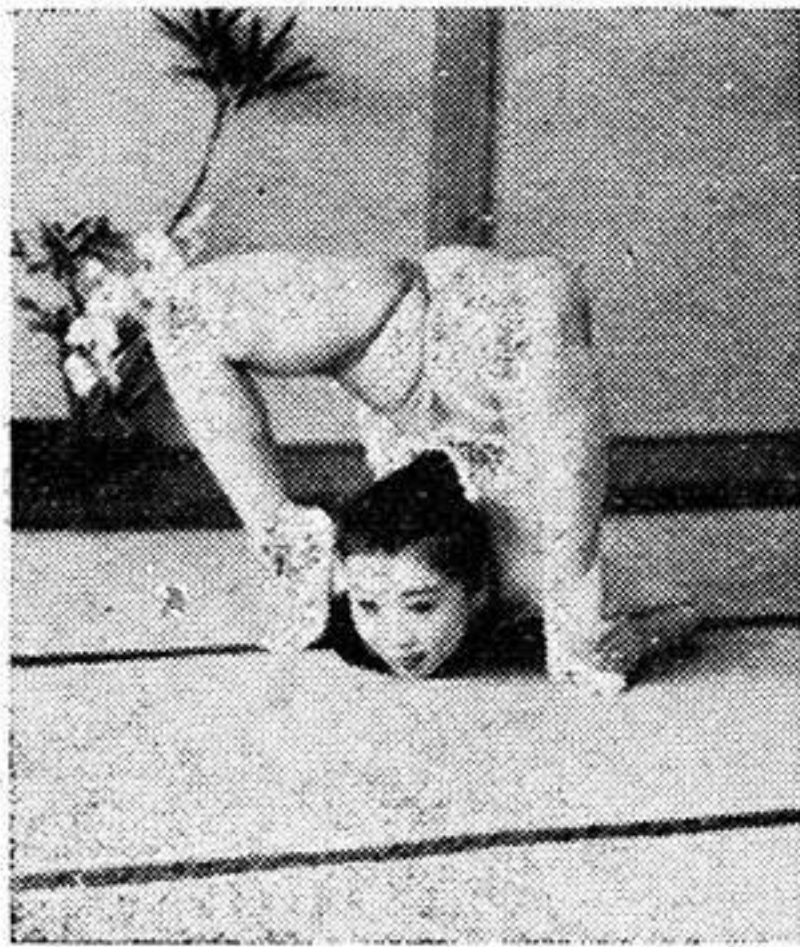
そこで、もう一度「恍惚のムード」と「黒い手套」の九葉の写真を見ると、絹川さんは、シュミーズをはだけられ、二つの乳房が飛び出してしまふ程強く締め上げられ、ベッドの上に押し倒され、乳房をつままれ、乳首を撫でられ、上半身を男の両足で挟まれ頭を持って顔を振じられ、顎をいたぶられ……凡そあらゆる所作を加えられ、而も半眼を開き口を開いて喘いで居るその表情と心境は、恰度半殺しにされた小鼠が猫に弄ばれているような姿、或いは北海道などで間々あるという半殺しに遇った馬が熊に担がれて行く時のような気持なのではあるまいか。（序でにいうと、熊は馬を殺してしまふと、死体が重くて運べないので、半殺しにし、馬の腹に背を入れて両前足を背負って行く。すると、馬は熊

が歩くにつれて後足で歩くので、運ぶのに都合が好いという。）

絹川さんの気持についての右のような解釈は、最初に挙げた絹川さん自身の好きな言葉とも合致する。そうすると、絹川さんも初めはそれ程でもなかったが、段々良くなって来て、今ではマゾになったということになった。其の間の事情を、同嬢の手記によって探ってみよう。

「初めて縛られた時の感想といっても、不安だったとか、はずかしかったとか、いうような気持は持たなかったと思います。……でも別になんともなかったかといわれると、そうとも限りませんの。やはり今まで一度も経験したことのない、自分の身体を縄で縄られるのですもの、少し不安という気持でしょうが言葉ではちょっとうまく説明できないのです。不安といえば、人間が何か初めてのことをやる時の淡い不安、といった程度でしょうか。その時の気持を今思い出そうとしていますが、それ以上、はっきりと覚えておりません。」

「はじめのうちは、女を縛ったこんな写真が何になるんだろうと思っていました。この頃では、男の人が夢中になる気持が、だんだ



「私の特写フォト」

アクロバットと白足袋

阿 部 能 丸

んと分るような気がしてきました。きっと女の人も、男の人に縛られているうちに、縛られることが好きになるんじゃないかと思うようになってきました。」

「初めのうちも殊更いやという気持はなかったのですが、縛られることが重なっているうちに、いやでなくなるといよりも、むしろ縛られることが好きになったのではないかと考えたりします。」

「後手に括られて、胸や腕がぎゅぐゅと締めつけられるのは悪い気持ではありません。普通の写真モデルに比較して緊縛モデルの方がなんだか私には、ぴったりするように思います。」

「緊縛とセックスとの関係について——普通のモデルになるときよりも、緊縛モデルの方がよりセクシヤルじゃないかと想像します。」

直接肌に縄や紐が触れるということ、又縛られて行く過程に於ても、そういう縄と肌との接触というものが、女の気持にどういふ変化を与えるか、ということも御想像いただけると思います。だから普通の受縄の際、そういう情緒ムードを感じるといことも、事実だろうと考えます。」

「緊縛写真は私好みのものを沢山撮って頂いて、大きく引伸して保存しております。」

「処刑された後の死体の表情で、大好きな写真も大分あります。」

ところで絹川さんは、括られる時にセクシヤルなものを感じるといふが、それは事実だろう。又、世間には往々緊縛を指して、「いやらしい」とか「汚らわしい」とか指弾する向もあるが、馴れると、今度はそういう気持が薄らぎ、やがてはなくなり、遂には全面的に受け入れるようになるのも面白い現象だと思う。

いずれにしても、絹川文代さんは、本誌にとっては、稀にみる美貌のモデル嬢として貴重な存在なのであるから、今後更に、誌上に分譲写真に大活躍して下さいを、お願いしたい。

(おわり)

貴社御清栄のことと存じます。貴誌の発展を心から喜んでいる者の一人ですが、白足袋物の掲載がもっと、もっと多くなれば幸いです。小生は女性の白足袋姿と女性のアクロに興味が高く、時々これに関した拙い原稿を掲載して頂き感謝しております。

小生、昔のサーカスの軽業（かるわざ）やアクロバットの研究をしてから、すでに十数年になりますが、最近、和洋折衷スタイルによる『アクロバットと白足袋のアラベスク』を演出構成して特写致しましたので、ここにその中の八葉を同封いたします。

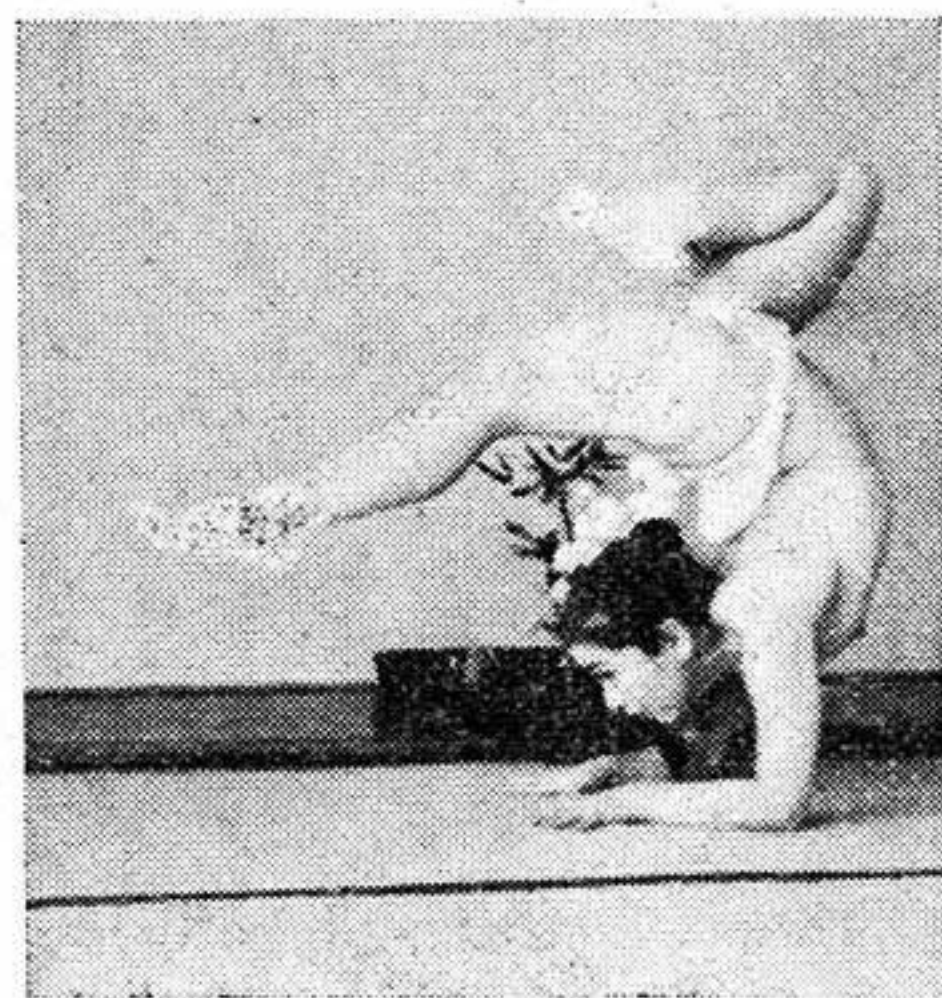
誌友の中には、白足袋やアクロバットのフアンの方々も相当多くおられることと思いま

すが、その方たちの共感を得れば幸いです。何卒誌上の一隅にでも発表の上、フアンの御批評を頂ければ、これに越した喜びはございません。

アクロバットの優美の姿態の中には、サジスチックなムードを多分に持っています。アクロの習練をつむまでの過程を考えますと、そこには、いろいろな常人では、とても耐えられそうにもない激烈な仕込みがありますので、小生も一時は、小屋の楽屋を訪ねたりして、その方面のデータも集めたこともありましたが、最近では、完成されたポーズそのものに、いたく興味をひかれています。

勿論、アクロは誰にでも出来るというものでなく、又、優秀な演技を続けるためには、不断の練習が必要なのであって、そういう背景があればこそ、見事に演じられたアクロのアクションの中に甘美なサジスチック・ムードを感じるでしょう。

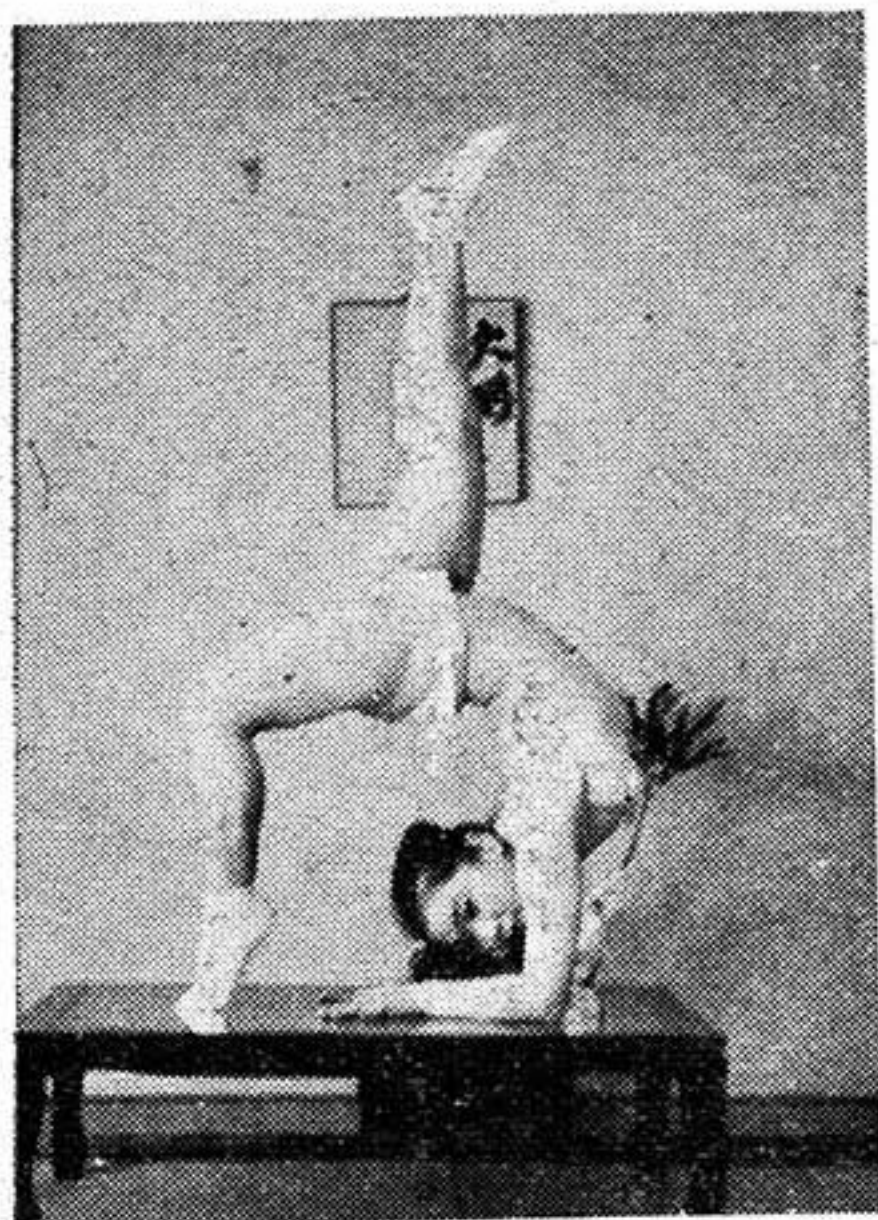
アクロバットと白足袋、この二つの観点を一つにして、小生の興味に構成したのがこのフォトなのです。アクロバットに関心を持たれる誌友の方、どうか、御手持のコレクション

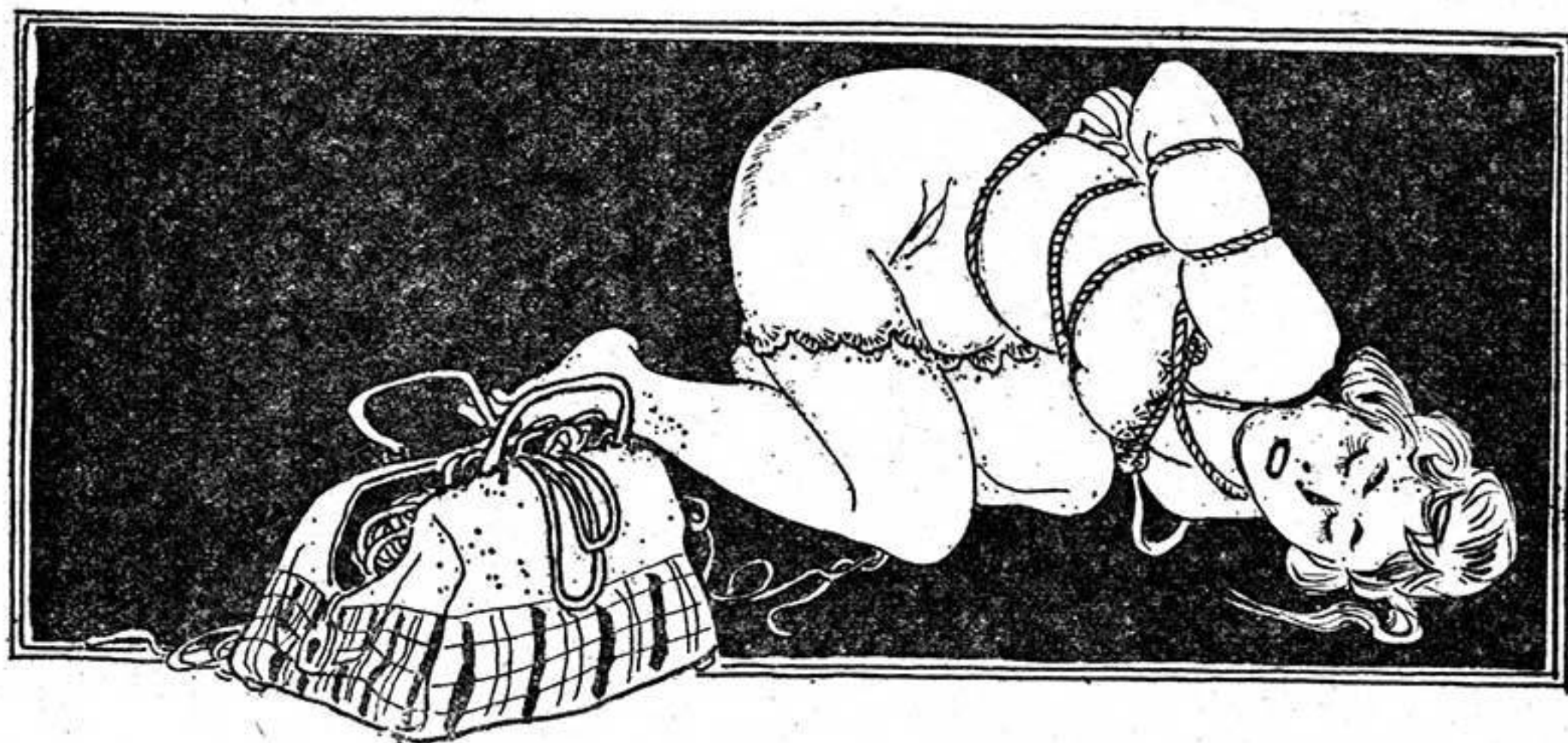


ンをフアンのために提供して下さい。

それから、アクロのできる女性の方で、本誌フアンのために御協力頂ける方、何卒、名乗りをあげて下さい。そして貴女の素晴らしいアクロのポーズで誌上を飾って下さい。小生等は、その日のくることを首を長くして待っています。

厳しい訓練によって体得したアクロの芸術が、満天下のアクロ・フアンの目に触れてこそ、貴女の真価も発揮されることでしょう。貴女の一挙手一投足を、フアンは凝視しています。重ねて、アクロ・ダンサーの登場を期待いたします。





ある新婚旅行の思い出

琅^{ろう} 玕^{かん}

幌 泉 里 子

琅玕のたまを溶かして未だ足らず

何秘めたりやこの湖の色

これは十和田湖水に魅了された九条武子夫人の作です。今その十和田湖が私たちの眼前にひろがっていました。彼——良一は湖畔の広い休憩所で、私のためにヒメマスのムニエルとビールをとって呉れました。

「里子さん」——彼はまだ私のことを里子さんと呼んでいました。

「ヒメマスというのはね、産卵のために海から川をのぼって来たベニマスが、何かの拍子で海へ帰る途を遮断された魚のことなんだ。ヒメマスとは同じ魚なんだよ」

こんなおとぎばなしのような事実がひどく

私を喜ばせました。一昨日までの通学、アルバイトのゴタゴタした生活が、もう一昔前の遠い思い出になったという実感がヒシヒシと感じられるからでした。

それにしても、処刑場にひかれて行く私のために、この美しい湖水を見せて呉れ、ヒメマスをお馳走して呉れた良一の心づくしが、私には何にも増して嬉しく思われました。私の空想は私の身体を抜け出て、湖畔の並木の間を見えかくれするボートやモーター・ボートと共に湖面をすべっておりまして。泳いでいる人も二、三人いました。

「寒くないのかしら？」

同意を求める積りで良一の方を見た私は心

持ハツとしました。良一の目は湖面でなく私の目のすぐ下をじっと射すくめていました。

「何を見てらっしゃるの？」

「ウン」

空想から呼びさまされた彼は、右手の中指をポキンといわせて答えました。

「君の身体の中で女らしいところは一つ残さず責めようと思う」

ぐっと熱い血が私の全身に湧き起り、私の頬めざして上って参りました。私の頬がポツと染まるのを、彼は

「十和田湖より美しい」

そういつて、うっとり眺めました。私はもう彼のたくましい腕が私の首をしめ上げている想像で、少時息を止め、ヒメマスのムニエルの咀嚼をやめ、目をとじました。どっと幸福感が押し寄せて参りました。

バスはその休憩所の前の広場から発車しました。バスの中は乗客はまばらでした。十和田銀座といていい青森⇄休屋のコースとはあべこべの、南方の大湯温泉へ私たちは行くのでした。

「その方が途中で、発荷峠の展望台があるからね」

良一はそういいましたが、この旅の目的か

らいつでも、そういう客の少い温泉へ連れて行って呉れる彼の心やりは察しられました。バスはもう秋田県にはいつておりました。

バスが登りつめて、発荷峠からの展望がひらけました。私はベートベンの、そしてモーツァルトの、又チャイコフスキーのシンフォニーを一どきに思い出していました。私はある都心の大学の英文科へ通うかたわら、神田の名曲喫茶の店にアルバイトとしてつとめていました。

一月程前のある雨の日でした。いくらか雨に打たれた、ワイシャツ姿の彼がとびこんで来たのが始まりでした。私はおしほりと一しよにかわいたタオルを運んで行きました。

「有難う」

彼は礼を云ってコーヒーを注文しました。

曲は春の大地にいけにえの聖なる乙女を捧げるストラヴィンスキーの『春の祭典』でした。雨が上ったのか、陽光がさして来ました。小暗い店の一すみに、壁によりかかって休んでいた私の乳房の上に、ステンド・グラスを通してさし込んだ陽光が不思議な色あいであわわれていました。私はそのとき、私のその乳房と横顔を射すくめている彼の視線に気づきました。次の瞬間、私たちの視線はあ

いました。そして私たちは全てを理解し合ったのです。彼は一日おきにやって来ました。彼のリクエストするベートーベンに、モーツァルトに、チャイコフスキーに、私も耳を傾けました――

バスが五分ばかり発荷峠に停車している間に、彼は私のために休憩小屋でヒメマスの押し寿司を買って来て呉れました。

「有難う」

お礼をいうと、彼は横の席で、私の右腕を花びんでも持ち上げるように、そっと背中へまわし、そしてねじ上げました。私は目をとじました。

やがて国立公園地域を出はずれたバスは山の温泉町に停まりました。こういう静かな山の温泉に来ると、本当に温泉というものが大地の中から湧いている湯だということがわかります。少し歩くとかなりの巾を持った小川が流れていました。私のおぼろな地理の記憶では、それは日本海に注ぐ米代川の上流だったと思います。彼は先に立って、その小川沿いに少し下流へ下りました。

そこに私の処刑場があったのです。K荘という質素な宿でした。

宿の人も良一を覚えていました。

「いつもの部屋だ」

良一の注文に応じて、私たちは川がすぐ下に見下せる部屋に案内されました。

「約束したように新婚旅行に来たんだから、これから一週間、食事は廊下において合図さえして呉ればいい。決して誰も部屋へはいって水をささないように」

彼の命令に、素朴そうなおかみさんは、ハツとかしこまりました。

二人だけになると、川のせせらぎが一きわ高く聞えました。

「これなら、少々呻き声を出してもいいわ」そう考えて私は安心しました。

紙とペンが用意されました。彼のいう通り宣誓書を書かされるのでした。彼はひややかな声で、その書式を述べました。私のペンはそれを追いました。それは次のようなものでした。

宣誓書

一、昭和三十七年八月二十五日をもって、無期懲役に服します。

一、いかなる折檻、拷問にも不服は申しません。

一、いかなる苦痛に対しても、呻き声のたぐいはあげても、許しは乞いません。

以上お誓い申し上げます。

幌泉 里子

浦河 良一様

署名の下には拇印が押されました。ヘタヘタとくずおれるように畳についた私の両手を良一が奪いました。あっという間もなく、それは背中にもわされ、細引きがギリギリと喰い込みました。あう向けに倒れようとする私の肩を、彼のガッシリとした胸が受けとめました。

「押し寿司を食べさせて上げようか？」

私はコックリをしました。ヒメマスの押し寿司は大へん美味しく思われました。

「さあ、これからボツボツ責めて上げる。もう少ししっかりと縛るよ」

ボストン・バッグから大量の細引きが出されました。布製のもので柔いものでした。そのかわりそれは長時間に亘って私の身体のみずみまでをしめつけることでしょう。

「さあ、この細引きにキスをして」

命令で私はその細引きに唇をあてました。

真白い細引きに口紅がつかまりました。

「もう一度」

屈辱をしのんで、私はもう一口をあてました。

「三回キスするんだ」

目から涙がこぼれました。私はもう一度キスしました。

私の上半身をささえた彼の腕に力はない、白い細引きは蛇のように、乳房の上を二回と下を一回のびて行きました。それをしめるとき彼は

「可哀想に」

と、つぶやきました。細引きは背中では括り合わされ、その結び目からたれた紐は、先刻縛り上げられた両手首を吊り上げました。もう抵抗もできず、受けるだけの凌辱を甘受しなければなりません。

彼の右手が私の首をしめ上げました。私は恍惚として雲間をさよいました。川のせせらぎがよく聞えて来ます。手がゆるめられ、私の胸に山間の冷気が再び送りこまれます。何回かそんなことがくり返されました。

「里子」

彼のつぶやきが耳元で聞えました。そうして右手と左手とは交互に、あるときは同時に私の身体をしめ上げました。失心寸前に、私は許されました。

私は床の間に引き立てられ、其処の柱を背負って座ったまま縛りつけられました。私の

足首に二本の細引きのはしが巻きつけられました。
す。

「ああ」

私は次の瞬間を思つて溜息をつきました。
二本の細引きの中、一本は窓際の手すりに、
他の一本は押込みの中の横棒にのびて行きま
した。

私の正面に死刑執行者が座りました。カミ
ソリの刃を持っています。

「可愛いや姫君、僕の辱しめを受け給え」

彼はそういいながら、パンティをカミソリ
で切り裂いて行きました。宣誓書が私を奴隷
につきおとしてから初めて聞く言葉でした。

でもそのとき、私はその姫君という言葉
に、奴隷、家畜という言葉よりも屈辱を覚え
たのでした。私は青い十和田湖面から釣り上
げられて、住みなれた水をはなれようとして
いるヒメマスの幻を目に浮かべました。裂か
れたパンティがちぎられ、それは布くずとし
て、私の口の中へ押し込まれました。猿ぐつ
わがはめられたのです。

それから私は一週間の間、よく飽きないこ
とだと思ふ程の根気で、のべつまくなしに責
め抜かれました。

失心しそうになると手をゆるめて呉れまし

た。こらえられなくなると、私の目から後か
ら後からと涙がこぼれました。猿ぐつわを通
して洩れるかすすか呻き声は、みんな小川の
せせらぎに吸い取られました。

こうした平和な山峡の温泉郷の一すみで、
世にも恐ろしい刑が一週間にも亘つて続けら
れたのです。でも世にも恐ろしいというの
は、傍観者が見た場合の言葉でしょう。私に
とつてその責苦は、次第に世にも楽しい天国
のような甘美さとなり、私はのたうちまわり
ながら全身がふるえて来るのでした。縄を解
かれたのはトイレに行き、そして湯につかる
ときだけでした。

疲れると彼は湯にはいり、又新しい元気で
責めました。

私を縛ったまま、彼は眠りにつきました。
拷問で疲れた私は、縛られ猿ぐつわのままね
むりました。

でも縄目が身体に喰い込むためか、夜明け
の空をホトトギスが鳴いて渡るころには目が
覚めました。彼はまだぐっすりねています。

彼が目を覚ますと、ただちに私を責めて責
めて責め抜くことはわかり切っていました。
それでも私は、小川のせせらぎとホトトギス
の声しか聞えない孤独にさいなまれて、そし

て心の中にはある期待に胸をときめかせ、

「早く目を覚まして責めて頂だい」

と思うのでした。

山間の宿は真夏とはいえ春の気温でした。
一週間が過ぎました。私は完全にマゾヒス
トとして成長していきました。

奥入瀬の溪流に沿つて下界へ下るバスにも
私をそのおとぎの世界から連れ出しそうな気
配は少しも感じられないのでした。だから、
「十和田よ、さようなら」という感傷は少し
も湧きませんでした。

夫も同じことを考えているのか、バス・ガ
ールが告げる色々の滝の方には目もくれませ
ん。きつと

「東京へ帰ったら、どういう風に責めてやろ
うかな」

そんな空想に、夢中になっているのでしょ
う。

丁度海——下界へ帰る途を遮断されたヒメ
マスの一つがいように。

私は今、彼のすることなら、どんなことで
もついてゆけるという献身的な気持でいっぱ
いです。彼を心の底から愛しているからこそ
どんな厳しい仕打ちにも、私は喜んで耐えて
ゆけるのです。

アブ随筆 思いつきの記

南方佳男

一、映画残酷論

最近「残酷」という言葉を題名に使っている映画がやけに多い。

世界残酷物語、日本残酷物語、女族残酷物語、武士道残酷物語、陸軍残酷物語、残酷の河……。

いや、題名には「残酷」とつかなくとも、最近残酷性を売り物にした内容の映画も確かに多くなっている。ことに時代劇の傾向としては、これをリアルに描くことに、重きをおいているかのようだ。

武士道残酷物語などは、その代表作だが、ほかに切腹、忍びの者、第三の影武者……いずれも強烈なサドシーンが見せ場の作品である。

だがこれらのサドシーンに対して、サジストをもって自認している私の感想は必ずしも満足でない。むしろ不満なのである。

たとえば誰しも「それじゃあ、もっと強い刺激を求めるのか」と——。ところがまったく逆で、もっと緩和してもらいたいのだ。

これら一連の残酷映画のねらいが、数多いサジストを観客の対象にし製作されたものならば製作者のうかつさ、研究不足を責めたい。何とならば残酷映画をもって残酷行為の真実な姿を描き出すことに全力をつくしているのなら、それはサジストのための映画でなく、ただ単に残酷行為を展示したに過ぎないものだからだ。

サジストのサジズムにはロマンがなくてはならない。サジストといっても私などは理論派だ。行動派サジストはまた違った考えを持っているかも知れないが、映画を観賞し、書物を読んで己のサド性を慰まめているサジストの多くは、私と同じ理論派だと考える。そして理論派サジストは空想的残酷美にこそあこがれを持っているのだ。

真剣に考えてサジズムの発展は犯罪につながらぬとはいえない。だが私たちと同じ世界のサジストは犯罪とは縁がない。それは越えてはならない一線をよく理解しているからである。

それを知るには奇クをみればよい。奇クが他誌に比べて傑出していることは内容がいたずらな刺激をさけ、読者に空想的な楽しさを与えるていどにとどまっているためだ。これだつて斜好的に進もうと思えば、無限な世界があるはず、それを抑制し、なおかつ最大限に読者を満足させているには編集者のなみなみならぬ苦心があるからだ。

映画も雑誌も大衆にアピールする点では共通である。映画製作上、たしかに内容をリアルに描くということは、大切な要素である。だからといって、そこにはおのずとリアルな限界があるはず。真実に描いてしまうのではなくて、真実らしく描くものでなくて

はならない、と私は思う。立派な内容、立派な作品でありながらかえって下品な感じさえ受けることもあるということを映画製作者たちは勉強してほしい。

例えば大映作品「忍びの者」を例にとってみよう。真城千都世の女忍者が捕われ、裸で生き埋めにされ、舌をかみ切って死んでいる姿。ほんの一カットの描写でしかなかったがその姿になるまでの行程を省略していることによって、空想的な楽しさを与え、印象的には残酷であっても、私のいう真実らしい描写の範囲にとどまるものであった。

だが同じ作品の中で、中村豊の演ずる忍者

が、後手吊りにされ、両耳を切り取られる拷問シーンがあった。いかにもギンギンと音をたてて耳が引きちぎられるように切られ、血が頬を伝わり落ち、あまりにも実感がともない過ぎて、女性の観客は顔を伏せていた。客が見たがらない描写、それは無駄というほかはないのではなからうか。

要は空想的と実用的の違いだが、ともかく血なまぐさいにおいのする作品は御免だ。

したがってこの論法で行くと、東映作品の「武士道残酷物語」などは落第ではなからうか。興行結果がはたしてどうだったかは知らぬが、煽情的な作品にならぬ注意は必要だ。

もちろん劇映画以外の残酷映画たるや、罪悪的に無責任なしろものというほかに、何ものもない。こんな俗悪なものが出たりするから健康なサジストと犯罪性変質者との区別を間違ひ、奇クなども誤解を招く原因が生まれるのだ——とは私一人の一方的な考え方だろうか。

○

以前に映画界に関係したことがあるせいか、私はどうも映画とサジズムに特別な興味を持ち過ぎているようだが、厚顔なお筆をとっている次第である。仕事が忙しかったり、持病の内臓障害の再発などで、このところ長く映画に接しなかったが、つい最近、東映の「江戸忍法帖・七つの影」を見た。

以前に私が「こんな映画をつくりたい」で紹介した責任？もあつたせいだが、私の想像とはおよそかけ離れた作品に終っていたのが残念でたまらなかつた。

難しい七人の敵方忍者の特技描写には私の空想よりはるかに優れた、さすが本職だと感心させられる巧さはあつたが、それはサジズムとはほとんど無関係のこと。肝心のヒロイン達の取り扱い、あまりにもおざなり過ぎたきらいあり。

原作のラストは、柳沢出羽守の娘鮎姫が、恋仇の娘を救うため牢内ですりかわり、自ら



刑場へひかれ、磔柱にかかる——といった期待のシーンは、もののみごとに省略されていた。

名貌北条きく子の鮎姫が、純白の囚衣姿で後手本縛り、ハダカ馬の背にゆられて刑場へ向うシーンは、さだめし素晴らしいものだろう。かつて、同じ東映が製作した「流賊黒馬隊」の西条鮎子の引き回しをしのご傑作となろうと考えたり、北条きく子の美しい磔姿にあこがれていた私の夢は無理な期待だったのだろうか。

東映ではこの「七つの影」の好評に力を得て、今後忍者ものを続々企画しているというが結構なことだ。いずれもオリジナル作品らしいが、忍者とサジズムは切り離せないものがあるし、といって全く暗い内容は東映調といわれる同社作品のカラー、同社作品のファンに合わない。そんな点を考えると東映ファン好みの忍者作品が想像できるが、その中には私に満足を与えてくれるものもあるう。なるべく女優さんたちを上手に可愛がる作品を作ってほしい。

話は変わるが、大映でも「忍びの者」の好評から同じ山本薩夫監督で「続・忍びの者」を撮影している。

こんどは、ようやく忍者の世界を離れ、妻子と水いらずの生活にはいった石川五右衛門

が、織田信長や秀吉の執念深い忍者狩りの手に追われ、妻子を失い復讐の鬼となるが、伝説のような最後を招くというストーリーになるらしい。

続編はとかく前作に見劣るというジンクスがあるらしいが、英才、山本監督のことだしまたどんな工夫がこらされるか楽しみだ。

いまの邦画界で俳優たちを遠慮なく使える監督は少ない。柔肌に縄が食い込んだような縛り、ずっしりと重さを感じさせる石抱き、ソロバン責め、顔が充血するほどすぎましい逆吊り、足合なしの磔柱への緊縛——そんな充実したサド場面が撮れる監督といえば、今井正、内田吐夢、黒沢明、小林正樹、稲垣浩、田坂具隆、伊藤大輔……等、数えるほど。その中の代表的な一人として山本薩夫監督の手腕に期待を持って損はないと思う。

二、空想と夢と現実

内臓をわずらっていたとき、いろいろな夢をみた。内臓障害は安眠をさせないので、神経をいらだたせアブノーマルな夢をつくる。その夢の一つ——。

どういうストーリーから発展したかは記憶がないが——

ともかく私は広い浜辺の砂浜にいた。濃い霧がたち込めていたようだ。そんな背景の中

に、数本の十字架がくっきりと立ち並び、裸の女性があわれな姿をさらしていた。

その中の一人が、かつてのガールフレンド古谷明子だった。大映の三条江梨子に似る小柄だが、マスクもスタイルも整った近頃娘だった。夢の中の彼女は、私もよく知りくしている肢体をすみずみまであらわにしている。恥しがるでもなく無表情にハリツケられていた。そして私は、その美しい彼女の姿に魅かれて、どこで手に入れたものか長い竹竿で身動きできない彼女の乳房や、腋の下や、腹をつついてたわむれていた。その後どのような経過で、夢がさめたかは判然としませんが、ともかくこんな夢を見たことがあった。一度見たいと思っていた夢だった。それにこんな夢を見た原因を、いろいろと調べてみた。

古谷明子と交際していたのは、いまだに妻の彼女が女子大生だったころだから、七、八年も前、いや十年も前のことだ。私のつき合った女性の中では一番の美人だった。なかなかの発展家で、意見が一年ほどで絶交してしまった。明るい性格だから放言を飛ばすこともあったが、ただ一度だけ、私をゾクリとさせる言葉を口にしたことがある。それは二人で映画「クオヴァーデス」

ての帰り道だった。

彼女はデボラー・カー演ずるクギヤが猛牛の前に立たされる刑場シーンを回想しながら上づつた声で

「デボラー・カーって綺麗ねえ。あんな綺麗な人がひどい目に会う場面は印象が強いわ。でもあれが柱に後手縛りていどでなく、十字架にハリツケにでもされていたら、もっと感激させたと思うわ」と切り出した。

この彼女の予想外の発言には私もいささかドキッとして、つい話が飛躍してしまった。

「明ちゃん、あんなラストシーンが好きなのかい？」

とって内心（しまった）と思った。それまでかくしていた私のアブノーマルな性格を現わしてしまったからだ。それもあまり突然に切り出し過ぎたように思えたからだ。

彼女は一瞬げんそうに私の顔をみた。しかしすぐに淡々と

「映画って結果的には必ず救いがあるとわかっているけどハラハラさせる場面がないと面白くないわ」

と答えた。私もどうせ話はじめたものを

（えい、ままよ）と

「そうじゃあないんだ。ヒロインがいじめられるっていうシーンのことだよ」

ともう一つ深入り。

「そうよ。ヒロインは災難に出合って、ひどい目にあうべきものなのだわ。わたしって割りかし空想家なの。自分があのヒロインだったら——って想像したりして……そして自分だったら、あんな目に会うのはイヤダッ！と思うことを、ヒロインがさせられたら楽しくなるの。おかしい性格ね」

彼女は私の意中を知っているのだろうか、それとも……どちらにしろ、一向に平気な顔である。どうもカマトト振ってるようでもある。

「じゃあ明ちゃんは縛られるのは嫌いかい」「嫌い、大嫌い……でもいやだいやだと思ふことを強制されたら、と身振るいするようない空想をすることは好きよ。でも現実には有り得ないことだから判らないけど……わたし、ハリツケにでもされたら、どんなだろう。きつと一ぺんに気が遠くなるだろうな」

この日は、このていどの問答が続いた。そして私は

（彼女の話っぷりだとサド、マゾ両性を持っているようだけど、本当はどちらが強いのかな）と真剣に考えてもみた。

しかし当時の私は、いまのようなずうずうしさがなく、彼女もその後、二度とこんな話を出さなかったりして、ついに彼女を縛る機会がないままサヨウナラをしてしまった。

十年後のいま、何の関係もなくなっている彼女が夢に登場したりするのは、忘れ去っているようでも、まだあのころの未練が残っているのだろうか。

○

以前に妹たちがお臍に氷をおいてがまん比べをした——と書いたことがあった。それを知って妹は相当におかんむりだったが「お前たちのこととは、自分でしゃべらなければ判らないじゃないか」と悟したら案外早く納得した。それがきっかけで、その後は逆に私に知恵を借りにくるようになったから愉快である。

つい最近も、海水浴場で何か面白い遊びはないか——と訊ねるので

「試してみろよ」と砂浜を使ったがまん比べの方法を教えてやった。

それは、砂浜に一列に並んで首だけ残し、全身を埋めて潮の満ちてくるのを待つという遊び。海辺までの距離な全員同じ。潮が満ちてくる不安に対して、誰が一番長くとえられるか比べようというものだ。

彼女たちはさっそく面白がってやったらしい。報告によると早いものは足先に砂を通して水がくると恐しがりお尻が濡れはじめる上半数以上が落伍したそう。最後までがんばった二人の娘は背中の上まで冷たくなっても

お互に意地っ張ってソワソワしながら悲鳴をあげない。手足がまったく動かせないのだから大変に心細いはずなのだが……。

と誰かが発案で、最後の二人のお腹の上あたりの砂を少しとることにした。砂の下から水着の一部が現われる。そこに近くにいた小ガニを捕えて来て入れてみたそう。

これにはたちまち二人も悲鳴をあげたようである。くすぐったさ、気味悪さ——そうなる意地の悪いのが敗けた連中。かえって放りっぱなしにして二人が半ベソをかくまで見ていたというから、彼女たちのサド性もなかなかだ。

それにしても私は自分では砂に埋まった経験はないが、妹たちの様子だと、このアイデアは割り合いよかったらしい。

そんなことから女学生たちと比較的気軽に話せる仲に進んだことは収穫だ。とくに妹が兄貴をよく理解してくれるようになって、彼女たちに盛んにアブノーマルな話題を提供しては反応を探ってくれはじめた。

何でも走高跳の選手だとかいうボーイッシュな感じの安田由貴子という娘には、私の興味をそそるデータを集めてくれている。

彼女は裸に対して「だらしない不潔な感じがする」磔縛りに対して「何もかも征服された女性の弱さを表現しているようで恐い」

切腹について「女性のお腹は体中で最も美しいところよ。マスクと同じくらい大切にしたい。いつも美しさを保つべきだわ。切腹だなんて自分で自分の顔をめっちゃめっちゃに切り裂くのと同じことじゃない。女性には絶対にできるはずのないことだわ」——などの意見を述べているそう。

私はその意見が彼女の真意であるかどうかを確かめたい。

裸の安部嬢に裸を締めさせてみる。その姿で磔縛りにする。身動きできない彼女に背後からそのピチピチしたお腹に刃物を当ててス——と十文字に切り開く——といっても本当に切っちゃあまずい。切腹（正しくは違いかも知れないが）前の恐怖感を与えれば、あとはまねだけ——そして、これらの行為を受けた後、前の意見と同じか違うか訊ねたい。

私が直接手を下すことはおそらく出来ないことだが、妹をおだてて使ってみよう。きつと協力するだろう、などと虫のよいことを考えたりしている。

四、お臍と女優

東宝女優の白川由美が、肥りたいのでお臍にお灸をしているそう。

週刊誌から拾った話題だが、臍マニヤには興味深い話。それも中島そのみのようなお姉ちゃん族ならまだしも、理知的でエレガントな白川由美のことだから、いっそうこっけいな感じがする。

本人はすぐ真面目にこのお灸に精を出しているようで、五、六キロ肥ったと喜んでいそう。ただしいくら人前に出さない個所だといっても女優さんのこと、ちゃんと灸跡が残らない方法をとっているそうである。

お臍の灸について、跡が残らない方法を、ずっと以前にどなたかが書かれたことがあった。お臍の穴に塩を盛って、その上からすりおろすのだそう。白川嬢もきつとこの方法を使っているだろうが、その姿を想像するだけでおかしさがこみ上げてくる。

お臍の灸で肥った白川嬢が、その効果をビキニ・スタイルでも見せてくれれば大変に楽しいのだが、一寸無理な相談だろう。

ついで話に、これも週刊誌から拾ったのだが、松竹映画「申し訳けない野郎たち」で鰐淵晴子のお臍が見えそうだという話。見えるとは書いてなかったのだが、そこは好きものめったに見えないミュージカル作品をのぞいた始末である。

もちろん鰐淵嬢のお臍とはご対面しなかったが、前結びのシャツとタイツ姿の彼女が踊

るたびに、本当にタイトツの下からお臍が飛び出しそうな感じがして、思わず客席から乗り出してしまった。彼女はその後作品「彼女に向って突進せよ」でも同じような姿で踊るらしいので、性こりなく、もう一度見たいと思っている。

○

ことはサンライト・ルックとかいって、しごく開放的な女性スタイルが流行しているようだが、新作水着は逆行しているのか、セパレーツ水着でもパンツの股上が深く、お臍をギリギリでかくしてしまっているのは一寸不愉快だ。

日活の星ナオミ、東宝の星あけみ、若林映子、松竹の瞳麗子、東映の筑波久子、大映の江波杏子といったビキニスタイル専門女優たちも、ことは期待を裏切った。といっても見あきた人たちはばかりだが……。

わずかに東宝の中川ゆき、松竹にちよいちよい出演の加賀まりこがビキニ水着姿を披露したていど。中川ゆきは若いくせに下腹に脂肪が多く、そのくせお臍が小さく浅いのである。まり形がよくない。これに比べて加賀まり子は小さな深い臍だが、腹の形が綺麗だからよく調和したアクセサリーとなって恰好がよか

った。

このほか大映の滝瑛子、三条江梨子らもセパレーツ水着を着たが、お臍はかくした組。しかし滝瑛子は「温泉女中」でビキニ水着を着るそうだから、またのチャンスがあるかも知れない。

またスクリーンでは「ハワイの若大将」の星由理子、「温泉あんま」の高千穂ひづるらがやはりビキニ型水着姿にはなったが、お臍がみえるかどうかはあまり期待できない——とは悲観的先入感かも知れないので、上映されればやはりのぞいてみることにしている。

ことの収穫は東映の宮園純子。「海道一の鬼紳士」でストリッパーを演じた。グラマ—Iといえるほどりっぱな体ではないけど、深く大きく少し縦長のお臍はかなり魅力的。元新東宝女優でいまテレビで活躍している三ツ矢歌子が随分以前にやはりストリッパー役をやったが、彼女がこんな体つきで、同型のお臍をしていたのを思い出した。

そういえばあのころの新東宝は、ずいぶん女優さんのお臍をみせてくれて嬉しかった。もう遠い思い出しかないが……。

明星の八月号に歌手の渚エリがショートパ

ンツ姿で踊っているポーズの写真があり、お臍がのぞきかけているのが、いかにも可愛らしい。

と思ったら、次のページには新しいリズム「タムレ」の踊り方を教えている彼女の衣裳がまたグツといかす。

黒いタイトツ、それもストッキングも一続きになっているものだが、前がV型にお臍の少し下まで開いていて、これを赤い紐で編み上げ形に締めている。といっても上のほうは七八センチくらい開いたままなので、黒い着地の間から、ブラジャーもしていない渚エリの美しいピンクの肌がのぞいている。九枚の組み写真のうち右上の一枚だけがちよっぴりお臍がみえる。ちょうどX型に渦巻きの影がついているのがご愛嬌だ。でもまともにみえるよりもずっとセクシーである。

だいたい黒いタイトツ姿は女性の姿をそのままに現わすのでセクシーな衣裳だが、それにしてもこの写真の姿はすこぶる大胆。写真を見ただけで興奮するくらいだから、本物でも拝見できたらどんな気持ちになるだろうか……。それにしてもこんな服装がもっと流行してくれば、大変に嬉しいのだが……。

「奇譚三十九夜」物語

第二十八夜

辻村 隆

じりじりと焼けつく様な土用の熱気が、未だペーブメントに這っている、夏の宵でした。

雷雨前線の停滞は今日で三日——、轟然たる雷鳴のあとの空気を掻き廻すべく、退屈男達は二カ月の鬱屈を一気に振り払おうと、定刻には既に八人のレギュラーは、いつしか定まった各自の椅子に深々と腰を落し、てんでに黒い気炎を挙げていたのです。

三カ月許り、写真の展示が続いて、人々は流石に種切れしたのか、今宵の集どいに、フオトは遂に姿を見せず終いでした。

小康を得たドクター氏が、皆から推されて、さらばとグラスを一気に呑みほし、心待ち姿勢を改めて、静かに口を切ったのです。

第六十三話 火の女、水の女

「ザ・ビーナッツに端を発した、双生児コンビが、芸能界で成功してから、こまどり姉妹の人氣上昇と共に、最近はやッとした双生児ブーム見たいなものをくり上げております。私が扱ったお産のうちでも、無事に育った双生児は十指を超えておりますが、茲で少し専門的に説明しますと、日本人には一卵性による双生児が大半を占めております。欧米に比べて、その頻度は遙かに劣りますが、それでも出産一四〇回——一八〇回に一回の割合で、双生児がこの世に誕生してくるのです。

単一の受精卵が、その分裂の過程で、何らかの原因で二つに分れ、それがそれぞれの一個体となって成長したものが一卵性双生児であります。この場合は、両親から受けついだ遺伝子の組成は全く等しいので、その形態、容貌、性向はすべて一致している時が

多いのです。ザ・ビーナッツなど、その典型的なものと言えましよう。

それに反し、同時に二個の卵子が受精して、それぞれが成長した二卵性双生児の場合は、遺伝子組手も異っていて、それぞれの容顔や性向も全然違った二人が生れてくる場合が多いのです。

私がこれからお話しする双生児の物語も、この二卵性双生児の、顔はまったく判別がつけられぬくらい相似しているのに、魂の全然違う、いわば、陰と陽、水と火程も性質の違った、若い女性双生児のエピソードなのです。」

× × ×

大阪国際フェスティバルの幕の一点にポツカリとライトが光り、暗い場内に一人——ロンドン交響楽団の指揮者、ビエール・モントウーの、恰福のいい姿が、鮮やかに浮かび上った。エルガーの変奏曲『なぞ』が、総員九十二名のデラックス楽団によって、徐々に演奏され始めた時、生駒三郎は、その圧倒的なポリュームに眼眩めく思いで、夢中で手を握りしめ、座席から体を乗り出す様にして、その部厚い旋律にひき込まれていった。魅力ある七本のコントラバス——、チェロの斉奏——ホルンのソフトなタッチ——、一糸乱れぬ弦——、その渦紋のような弦音に、和音的な管の重奏が融和して、彼はしらずしらず音の世界に没入していった。

開幕前まで空席だった、彼の隣りのシートに、ひとと坐った黒一色の洋装の若い女性の存在に気附いたのは、荘重な『なぞ』の変奏曲が、爆発する拍手と共に終わった、その時であった。

「素晴らしいですねえ——」

感動の余り、生駒三郎は、この未知の女性に思わず声をかけてい

た。

「ええ、とっても……」

黒い瞳を爽やかに見開いて、女性はそう言って淑やかな微笑みをかえた。

「どうですか——。モントウーはあの様に小柄な体にもかかわらず、しかもタクトの動きも極めて内輪目ですのに、楽員全体が、よく棒の指示するものを受取って、一糸乱れず、それを楽器に増幅して、指揮者の意の儘に表現しています。そして、あの十四もある楽章を、最後は実に燦然と、明確にピリオドを打っていたのです……」

今も臉にありありと残るその感激を、彼は十年の知己に話す様に感情を昂ぶらせて喋っていた。

真白な肌に、漆黒の洋装がこよなく似合う彼女は、にこやかに、無言で、彼の言葉を肯定して、笑顔を絶やさなかった。

黒い手袋に黒いハンカチ、それに首にかかったカラオの貝の色までが、妖しい黒味を帯びて、手彫りのプロフィールがレリーフの様に黒く浮彫りされてあった。

斯うして、生駒三郎は、絶世の黒美人花園冬子を知る機会を得たのである。桜も散り始めた、四月半ばの頃だった。

× × ×

数度デートしたが、それは主に、生駒三郎の好きなクラシックな演奏会での日が多かった。黒美人花園冬子は非常に気紛れであった。淑やかに彼と妙なる演奏に耳を傾け、ヒソと指と指を絡ませている時があるかと思えば、日によっては、聴くに堪えぬ様に、ありありと退屈さを眉に現わし、彼が色々と奏者の知識を話しかけてもさもやめてくれと言わん許りに、話をわざと外に転じ、その代り、

ヒタと彼に身を寄せ、辺りに彼が気兼ねする程の、露骨とも言える媚態を露わに示して、しかと彼の手をとって離さぬ、積極的な時もあった。さればと、その次は、積極的に彼から持ちかけても、彼女は身を引き、辺りに気を兼ねて、体を硬くしていた。

服装は色々と日によって変わるが、唯、いずれの日も黒づくめである事には変わりなかった。凄く能動的な反面、ひどく消極的であったりして、生駒三郎にとっては、仲々彼女の真意が掴めず、屢々間違っていた。△分らない——全ったく判らない。前に出逢った時は彼女からキタの喫茶に自分を誘い、仄暗い部屋で、テーブルごしに熱いベレーを交わしたのに、昨日は、中の島公園の木蔭で、顔を近附けたら、途端に避けた——。何故だろう。エレガントな彼女とドライな彼女が、黒衣の肉体に同棲しているのであるか——▽

彼はそのうち、ジャスミンの仄かな香りを、ただよわす夜の彼女は、つつましく淑やかであるに反し、ウビガンの強烈な香をふりまく夜の彼女は、掌を返した様にコケティッシュである事に気付いた。彼はその事に気付いて、花園冬子に詰問した事がある。彼女はハッとした様だったが、ウビガンの香のただよう、その夜の彼女は、何時にも似ず、しとやかに振舞った。

ジャスミンが媚態を送り、ウビガンが淑やかであったりして、彼は香水の匂いだけではその折々の、彼女の気持が掴めなくなった。

三カ月近い交際が続いたあと、彼女が今迄頑として拒んで来た、彼女の家への訪問をやっと納待させたのだった。約束の夜、彼女は車を駆って迎えに来た。暗い街をクライスラーは闇へ去った。

茲迄、話は駈足で来た。どうやら、これから本題へ入りそうである。生駒三郎は、その日、世にも妖しい、不思議な体験をしたので

あったから……。

× × ×

繡洒なソファに寄り添って、生駒三郎は、豊かに熟れた花園冬子の、熱い肉体に陶醉していた。広い邸内に冬子の他には人の影もなかった。それを審かると、

「今宵を愉しく過す為に、宵のうちから、使用人は全部暇をやりましたの。十時までは誰も戻っては来ない筈ですわ——」

冬子は艶然と頬をほころばせて、再び彼に唇を求めた。

その時——、彼は微かな断続的な物音をききつけた。ギョツとして三郎は身を起す。「あら、きっと猫のチーコが騒いだのでしょ——」

冬子はさりげなく、生駒三郎の神経をそらそうとした。

△そうかも知れない——しかし、奇妙だ。いつしか、愛玩用のペットについてきたら、彼女は動物は嫌いだと言った筈だが……▽

彼の手は冬子を愛撫し乍ら、神経はピンと立って、その物音に集中し始めた。耳をすますと、それは隣室からの様に思われた。

二人の眼前の、嵌め込みの姿見の鏡が、微かに揺れた様でもあった。

「ねえ、キスして……。しっかりと私を抱いて……。二人の姿を永久にこの鏡に灼きつけましょうよ」

狂おしく冬子は、三郎の手をとり上げると、二人並んで姿見に立った。彼の首に両手を巻くと、冬子は三郎の顔一杯に、所嫌わず唇を押しつけて、離れなかった。

異様な微かな物音が、再び鏡の奥から、コトリ、ガタリと断続した。



三郎は思わず冬子の手を振りほどいて、妖しい鏡を凝視した。

「何がある——きっと何か……。この鏡の奥に……。それに今日の冬子のこの狂態はどうした事か——。きっと何かある」

謎に遭遇すると、三郎は、冬子とのこの愛撫すら薄気味悪くなり出してきた。

尚も冬子は身悶えして、これ見よがしに三郎に身をすりよせて来た。

心ここに在らぬ乍ら、三郎は心ならずも、冬子の首に手を廻し

た。

「おやッ——変だぞ、ないッ?……」

慄然と肌寒い思いが、三郎の心を貫通した消えも入りたげに自分に身を寄せた、羞恥になよなよした冬子の、白磁の襟足には、ポツリと一点、可愛いほくろが右襟足首にあった筈だ。今この、情緒をかき立たせる、水色の螢光灯の下に、白々と襟足を曝した冬子の何処を探しても、あの可愛いほくろは点在しなかった。

パッと三郎は身を離れた。

「あ、あなたは誰です。あなた

は冬子さんではない——、

いや、物の怪か、妖美人か

——僕の憧れる冬子さんは、

あなたの様に、露骨でも、積

極的でもなかった。しとやかな、エレガントな人だ。違う

違う、あなたじゃない——」

冬子の顔は蒼ざめ、屈辱が

せり上って、眉が徐々につり

上っていった。いつしか彼女

の手には、小さなコルトが握

られていた。

「このウスノロさん——、今

頃になって、やっと分ったの

ね。ええ、私は冬子じゃない

わ。私は冬子の妹の夏子——

姉妹と言っても、同時に生まれた姉妹——。分ったでしょう。双生児よ——。二人のものはすべて共有にしていたの——、だから冬子にあなたが出来たと知った時、私は当然共有する気になっただけよ。どうしたの、ホホ、まるで鳩が豆鉄砲喰ったみたい——。見たいでしょう。逢いたいのでしょ冬子に……。ええ、逢わして上げるわ、あつ動かないで……」

三郎の全身に冷汗が流れた。数カ月もの間、冬子と夏子が交互に彼とデートしていたことに、この善良なる青年はやっと今気付いたのであった。冬子は嵌め込んだ姿見の、壁掛けで隠してあったボタンを押した。姿見の下、デコラの壁が、音もなく正一メートル許り床に吸い込まれて、そこにポツカリと口が開いて、真鍮格子の枠をはめに口が展開された。

凝然と立竦む三郎の背後に、コルトを凝した儘近附くと、

「手を後ろに廻すのよ——」

夏子は冷たい声で言った。

言われる儘に彼は両手を後ろに廻した。カチリと両手首に金属の冷たい手錠がはまった。

「檻の入口まで歩きなさい——」

コルトで押し乍ら、彼女は三郎を真鍮格子の前に立たせると、再びボタンを押した。

真鍮格子はスルスルと軽い金属音をきしませて、徐々に壁間の空隙に上った。

「入るのです——」

言われる儘に、背を踞め、三郎は、ローンタイトルのしきつめられた、檻の中へと這入りこんだ。この中に冬子が必ず幽閉されている

と信じて、彼の必死の勇気が、敢えて進入させたのであろう。中は暗かった。

再び元の如く格子が降りて、しまると、惨忍な笑みを浮べて、夏子はスイッチを押した、瞬間、檻の中はパツと明るくなった。

キョトキョトする三郎に、夏子は勝ち誇った様に叫んだ。

「見るのです。貴方の後方を。恋しい冬子の姿を、よく見てやって——」

言われて振返った彼は、呀っと思わず息をのんだ。なんと言う惨酷さであろう。彼は思わず瞬間眼をつむってしまった。

冬子は裸の姿で、X型の鉄棒に逆さにはりつけの様にベルトで縛りつけられていたからである。Xの交叉する中心は太い軸になって垂直な太い鉄棒に連結していた。

長い時間、この姿態でいたのか既に冬子の顔面は紅潮し、眼が充血して血走っていた。

「驚くのは早いわ。暑さ凌ぎに人間扇風機は如何——恋しい人の体から送られる風も乙なものよ——」

格子ごしに夏子は愉しげに覗き込んで、一人で喋べった。

と——、静止していて冬子の体が、ゆるゆるとX棒の回転につれて廻り出した。手が足が頭が胸が、やがて目まぐるしく、或いは上に、或いは落下して、ぐるぐると軸受の廻転と共に廻り出したのである。

悲鳴をあげ様にも、冬子の口は大きい絆創膏でしっかとふさがれていた。「ジェーンに何が起ったか」の映画そののけに、その端麗な美顔を蔽った白いバンソーコウは、完全に彼女の口を塞いでいた。もがいても、叫ぼうとしても、苦悶を訴えようとしても、その総

ては見事にうばわれていたのである。

三郎の目には、ぐるぐる回転する、四肢の羽根がやがて六つに見え、八つに見え、千手観音のように数十本に見え始め、黒髪乱れる頭部もダブって四つにも五つにも見え始めた。激しい最高頂の回転から、やがて徐々に速度は落ち、静かに止った時、冬子の体は、水平の横向きに止まっていた。首はがくりと肩に垂れ、息も絶え絶えに、胸のふくらみのみが、大きく浪打っていたのである。

「どうして、こんな非道いことをするのです、貴女は鬼だ——」

「冬子は約束を破って、私に内緒で貴方とデートしたから、その罰よ」

「それなら、彼女を誘った僕が受けるべきだ。あんまりじゃないか——」

「だから、貴方にもそろそろ罰を加えて上げますよ——その檻の左端の台に昇りなさい。そして足を揃えるのです——」

足を揃えて昇った三郎の背後に、スルスルとバイスのような恰好の機械が電動で近付き、その下から伸び始めた鉄棒の先の爪が三郎の両の太腿をガッシリと締めつけた。称して鞭打ちマシン——。

しっかり骨も砕けよとばかり、鉄の爪が両腿をしめつけたのを見届けて、夏子はボタンを押し、格子を上げて、スルリと檻に滑べり込んだ。カーテンレールを頑丈にしたパイプが天井に装置され、檻の片隅から、カラカラと音をさせて、夏子はレールを走らせて、三郎の頭部の辺りへ、鎖でつながった直鋸の首輪を引ばって来た。佇立する彼に首輪を馴れた手付で嵌め、身動き出来ない様にしておいて、彼女は鞭打ちマシンのスイッチを入れた。リモートコントロールによって、マシンの突端が、五センチ、十センチと伸び、その突

端が、恰度、彼の背中辺りに来た時、マシンはゆるやかに回り出した。突端に垂れ下っている皮鞭が、徐々に遠心力によって、彼の背を撫で始め、次第次第に水平に伸びて、彼の腕を背を間断なく打ち始めた。リモコンによって、鞭の位置は下って尻に当り、上ると容赦なく肩を万遍なく、正確に打った。三郎の連続して打たれて肩の肉は忽ち破れて血を吹き始め、リモコンの操作と共に、半身がみみず腫れから、やがて間もなく血を噴き出した。回転がゆるやかになり、マシンは逆に回り出すと、今度は彼の反対側の腕や肩、腰、尻が、これも至極正確に鞭打たれて、やがて全身隈なく鮮血に蔽われたのである。

失心寸前の彼がようやくもうろうとした眼を開いた時、二人の冬子が彼を凝視していた。が、やがてその一人の冬子が手錠をはめられており、今一人の冬子は、黒のタイツ一つになって、細い鞭を握りしめていた。鞭の女が夏子である事が、やがて三郎に先刻の記憶を呼びもどして来た。

その意識の彼方に、黒々と、鋭い歯を上部ににして、三メートル許りの長さの帯鋸がビンと床から五、六十センチの高さにはいられていた。冬子はその鋸歯を股にして、帯鋸の上にまたがらされていた。

夏子は冬子の股一杯に鋸の刃の高さを調整し、更に爪先立ちにさせて、調整のねじをしめた。ビシリと鞭が鳴り、爪先立ちで、冬子は、トゲトゲした鋭い歯の帯鋸を股いで一方から歩き始めた。踵をおろすと、鋸刃が相違なく冬子の跨にグサリと突き立つに違いない。そろそろと歩を運ぶ冬子に、三郎は我が身の麻痺した感覚を忘れて絶叫していた。

「冬子さん——、許して下さい。ボクの為に、ボクの為に……」

悲しげに冬子は声にふり向き、淋しい微笑を送った。それはすべてを運命と肯定する微笑みに見えた。夏子の火の如き性向に較べ、

これは又何と言う水に似た優しい微笑みであったことだろう。

「冬子さん……冬子さん……」

生駒三郎は、段々と気の遠くなる脳裡の中で、きれきれに叫びつづけていた。

× × ×

「尻切れトンボの話ですが、これは双生児の相異なる二人の性向からヒントを得た私の空想の物語りです。いやどうも、暑苦しい話になりましたが……」

こう言って、ドクター氏は改めてピースに火をつけたのです。

「話をきいている方がずっと涼しいよ。近頃の電車の混雑ぶりにはホトホトいやになるよ」パイプ氏は言うのです。

「それにつけても、近頃は電車内でも、悪ふざけや、いたずらが非道くなったね。衆人環視も平氣の平左で、此の間も、地下鉄の満員電車の中で、ラッシュアワー帰りのB・Gに数人の若い男がとり囲んで、平然と尻を触る、スカートはまくり上げる、ハンドバッグをとり上げて、中味を引っ掻き廻す——。いやこれが法治国日本の現状かと眼を疑いたくなったね——。そうそうそれで思い出したが、戦前の、名人気質のスリの氣風は廃れて、近頃は専ら集團暴力化して来たね。春の事だが天王寺動物園で、友人のKのふところから、財布を抜きとったスリは、単独であったが、珍らしく女であった事が、Kを奇妙な行動にかりたてる結果になったんだよ——」パイプ氏の話は、こうしていっしか本題へ入ります。

第六十四話 若くて悪くて凄いい娘

天王寺動物園。日曜日の混雑で、人浪に押され乍ら、家族連れで歩一步運んでいた彼は、後ろから押す様にしていた、ジーンパンに赤いセーターの娘が、一瞬、彼によるめきかかり、凭れたと見ると、彼の前に出た。刹那、電撃の様に娘の白い手が、彼の服に触れたのを感じし、彼はハッと背広の内ポケットを押えた。

「やられたッノ七、八千円許り入っている札入れだ。あの女に違いない——」

彼の眼は真剣味を帯びると、妻にその事を告げて家族と別れると足早やに、雑踏を掻きわけてゆく娘の跡を懸命に追った。動物園を出て天王寺の公園を横切って、娘はその儘、阿倍野の方へと人混みを縫うて歩いて行く。チラリとも振り返らない。左へ折れると茶臼山である。混雑はめっきり減った。

女は人影もまばらになった、この小公園の公衆便所へ駆け込んだ。

「きつと、ここで始末するに違いない。ああ俺の札入れも、糞と共に去りぬか——。併しとられた金は別として、困ったことがひとつあるぞ、あれはどう処分するだろう——」

あれと言うのは、彼が最近愛人に行っているクラブ・ランタンのS子を口説き落して、漸く苦心惨胆して撮った、浣腸の写真数葉である。浣腸に興味を抱く彼は、この写真を、垂涎おくあたわざるものとして、常に肌身離さず、持ち歩いていたのであった。そのことに思い到ると、彼は金より、無精に、その写真が惜しくなって来た。小便組が二人出て、老婦人が用を足し終って出ても、娘は未だ頑張

っている。彼は足音を忍ばせて、トイレに近づいた。幸い便所の利用者は途絶えている。

「あの女、どのハコなんだろう。四つ並んだハコを、端からノックしていったら——」

その時、手前から二つめのハコで微かに立上る気配がした。

「今だ——、おあつらえに、連れ込みホテル代りにトイレの中を利用してやれ——あの女、唯じゃおかねえから……」

魂胆があつて、わざと服装を乱し、息を殺して、そのハコの前で佇立していると、掛金の外れる音と共に、スーツと扉が開きかかった。咄嗟に彼は、無言で、出ようとした娘を押しつけると、狭いトイレの中へ体をスリと入り込ませた。後手で掛金をかける。

「呀ッ！誰か……」

「シート、声を立てるんじゃない。先刻御承知の、俺のポッポから、あんたのポッポへ移動した財布の持ち主だ。見ろ、下の糞壺を——、俺の財布が、臭い臭いとアップアップして泣き喚いているぜ——。人を呼ぶか——、声を立てるか——それとも素直に還すか——、よもや、俺がミナミでチツとは顔の知られた、N会のうるさい男と知って、やったんじゃない

からうかね——」

「知、知らないんです。私そんな……」

「大それたことはやらないと言いたいんだろう。だがね、ジーパンに真赤なセーター、黒い眼張りのその体つきじゃ、まさかおぼこなお嬢ちゃんとも思えないねえ。さあ、素直に出せッ——」

「でも、本当に……本当に知らないんです——」



「顔に似ず強情だなあ——。よしッ、調べる処で調べてやる」
外の気配を窺がって、彼は娘をハコから引っ張り出すと、女の利腕をとって歩き出した。

△愚連隊を装おうのも仲々ラクではないな。第一、舌の噛みそうなべらんめえ調が、シンドウで叶わん——▽

それでも彼は努めて肩を怒らし、眼をむいてギョロつかせ、娘に示威運動をこころみた。

「何て名だ？」

「……………」

「住居は何処だ？」

「……………」

「畜生——、やけに強情を張っていやがる。今に痛い目にあつて、吠え面かいたつて、知らねえぜ——。俺がやらなくても、仲間の奴は気が荒いからね。俺の財布をスツたと聞きや、血嘔吐のはく程にしばき上げて、二三日逆吊りにしておくかも知れねえからね。悪く行きや、一生使いものにならねえ、御面相に変わるかも知れねえぜ——」

娘はビクリと肩をふるわし、擱んでいた利腕がケイレンして小刻みに震えた。小麦色の健康な顔色が、蒼く白々と硬わばってゆく。

「お願い、助けて頂戴——、お願い、カンニンして……」

「やったことを認めるんだね——」

娘は小さくコクリとうなづいた。

△ホホウ——、女スリにしちゃ、案外うぶな娘じゃないか——。一寸した脅しでも、効果百パーセントだ。しめしめ▽

「素直についてくるんだ——いいな……」

彼は駄目を押して、動物園裏の、温泉マークに二人で這入っていた。二三度利用して感じがよかったので、何かの時に利用しようと思にきめていたホテルだった。

娘はとられた手の力を抜いて、うわべは、さも恋人然と言った姿で、無言で彼につき従がった。昼のホテルは大体に暗い。陽の当らぬ場所が多いからだ。その薄暗い廊下を突ききって突き当りを右へ曲り、ドアを押すと、おあつらえのアベック向きの部屋が覗ける。狭い場所に、テレビ、ラジオ、トイレ、バスが、犇めき合つて、お負けに冷蔵庫から電話までととのつてある。二帖許りの二の間に二人座れば、それで殆んど一杯だ。

茶菓をおいた女中が去ると、彼は内側から錠をかけて鍵を抜きとった。

「さあ、おとなしく出すんだ」

娘は顔を硬ばらして口をつぐんでいる。

「じゃあ仕方がない。触らしていただくぜ」

彼は矢庭に近づくと、セーターを脱がしにかかった。はち切れそうな胸のふくらみが、脱いだセーターの下から覗いた。

ジーパンをしらべると、後ろポケットに、数枚の千円札や百円札が二つ折りにたたまれて入っていた。そして小銭のふれあう金属音が、ポケットの底で鳴りはためいた。彼の五千円札はない。

「これ以上脱がされないうちに出世せよ。ええおい、頼むからさ……」
「それだけよ。だから始めから知らないと言つたでしょう。」

娘は不逞くされたようにうそぞいた。彼はカッカとなつて来た。何の前触れもなく、彼の手は女の頬に飛んで、パンと見事な音を立てて、炸裂していた。

「甘く見るな——」

彼は、倒れた娘に飛びかかり、二本の寝巻の紐で、娘を後手に両手を縛り、一本で両足を縛って転がした。ジーパンとセーターを引っくり返し、ふり払い、あちこちと隠しポケットをしらべたが、女の残香が微かに鼻をくすぐるだけで、遂に高額の小札は出て来なかったが、有難いことに、彼の貴重な写真がポケットからパラリと落ちた。

「ひょっとすると体内に隠したに違いない。とすると、これは厄介でも困ったところを調べなくちゃならない。さて面倒な仕事だぜ、こいつは——」

パンティをずり下げ、探って見たが、娘が七転八倒して仲々思うように行かないが、矢張りそこにもなかった。

「俺の写真のあったのが、何よりの証拠だぜ。お前、これを見たんだな——」

「……」

娘はパッと頬を染めた。急に彼女の体内から、羞恥が、じわじわとにじみ出したのである。

彼はハッと思い当った。

途端に浣腸欲が湧然と、彼の身内を包み始めた。S子に実施しようとして、なし得なかった浣腸プレイ——。これを今、彼はこの娘に試みて見ようとしたのだ。

彼はその日、渴を癒やす為にポケットに入れておいたインスタント・ソーダラップの十包入りを一袋ごととり出した。ついで、胃腸が悪いので絶えず携行している胃腸散薬用の袋オブラートを机に広げた。

恐怖のまなざしで、彼を見守る娘の傍らで、彼は悠々と袋オブラートにソーダラップの粉末をサラサラと流し込んで、唾液でしめらせて封をし、それを三つ許り作り上げた。

洗面所の、備付のクリームをもつてくると、始めて彼の頬に快心の笑みが浮んだ。電気冷蔵庫を開いてビール瓶をとり出し、栓をぬく——。

「俺の写真を捨てない処を見ると、どうやらお好きな様らしいね。さてこの結果どう言うことに相なりますか——。始まり始まりとゆきますかね——」

彼は娘にしっかりとタオルで猿轡をはめ、両足の紐をといいた。ジタバタする足を寝室との境いの鴨居に改めて縛り直して両足を高々と吊った。先ずクリームをたっぷりとなすりつけた。

次に適当にしめらせたオブラートの包みにも、軽くクリームを塗ると、一つ、二つ、三つと、細巻きにしたオブラート包みは、割合共もなく娘の腸内に納まっていった。

ビール瓶の口にもクリームを多いめにつけ、彼は娘に近附いた。もがく拍子に猿轡が外れて

「あッ、勘忍して……出します。許して……」

「出して戴かなくてもいいよ。自分で探し出してもらって行くからね。さあ、ビールを御馳走して上げるから……」

彼は哀願する娘の口を、更に強く塞いで、しっかりと猿轡をし直した。

既に彼女の顔は、恐怖にヒクヒクとけいれんしている。

彼は徐々にビール瓶を倒した。滾れたビールが、娘の体を伝って流れ落ちた。やっと逆立した瓶の腰を廻して振ると、ビールは発泡

して、上部に炭酸ガスがたまり、その圧力でビールの液が下方に押し出されて、娘の体内へと流入して行った。六三三ミリリットルのビールの液がすっかり腸内に移行した時、既に娘の腹は可成りの膨らみを示していた。

△所謂、ビールのラッパ呑みって奴だ。普通に飲んだ場合より、うんと早く酔っ払うし、オブラートのソーダーが、液によって解けた時、果してどう言う現象を起すか、これは又と得難いデーターに違いない——▽

期待通り、数分を経ずして、彼女の腹部が激しく鳴り出した。グルグルグル、ゴロゴロゴロ際限もなく、腹はなっている。

意地悪く、彼はビール瓶のそのあとへ、ポケットに残っていたパチンコ玉、七、八個をそっくり使ったのである。

娘は気狂いの様にもがき出した。蒼ざめた顔色から紅が昇り、そしてタラタラとひたいに汗が流れ、涙線から止め度なくしづくが頬を伝った。

△もういいだろう。よしッ五分経過——▽

彼は大小兼用になった猫の額程の、室内のトイレの扉を開き、水洗便所の前の水洗孔の穴を、女のパンティで塞いだ。

娘は既に全身びっしょりと汗にまみれ、酒酔の紅斑を白い肌に浮き上らせ乍ら、吊られた両足を、唯闇雲に振ってもがいていた。

女の両脚の紐をといて、ドサリと床に降すと、彼は後手に縛った紐尻を握って、背をこずいた。猿轡はその儘である——。

憎み合う同士が意心伝心、彼の指図までもなく、娘は小走りにトイレに近づいた。

更に彼に、そこで背をこづかれ、今は観念した様であった。

一瞬、間もあらず、激しい音響と共に、堰をきった如く、さながら、泡沫消火器の栓を叩いた瞬間の様に、白泡状の泡沫液が奔流した——。

カチカチとタイルにはじける金属音は、パチンコ玉であった。まるで豆がはじけるように玉は飛び散った。

彼はその壯観さを、息をこらして凝視していた。泡沫液の白色がそろそろ変化し始めた頃、長さ七——八センチ、直径一・五センチ許りの、赤い長円筒型のものが、吐き出された。彼はそのものが、おびただしい泡沫液の底に沈んだのを見逃さなかった。

腹のつかえが降りて、虚脱した様に、娘はうずくまった儘立上らなかつた。

紐尻をぐいと引いて、やっと彼女を立上らせ、手洗いのカラシに紐尻を結んでおいて、彼はその白濁の中から、手摺みで赤いものをとり出した。

浴槽の湯で、ザブザブ洗って、よく見ると、それは長いめの押出し式口紅の容器であった。容器の蓋をスポッと抜くと、細く小さくくるくる巻いた紙幣が、筒一杯にビッシリとつまっていた。筒からとり出して見ると、一万円札が三枚に、五千円札が三枚、千円札五枚、しめて五万円である。

彼はそれをポケットに挟み込むと、娘の傍により、後手の縄の雄結びしたのを、一つといてやり、少しもがけば解けるようにして、そこに横たわっている娘をチラリと見下し、黙って部屋から出ていった。

若くて、悪くて、そしてチョイトいかす凄い娘——。

娘が、その筒を挿入する時の図を思い浮べると、彼は妻子が案じ

乍ら待つ家へは戻らず、ホテルを飛出すと、車を止めて、S子のアパートへと走らせていた。

「いやとんだ話になりましたして恐縮です。(註羽村京子さんへの御返事、これをもってかえさせて戴きます。辻村隆)」

好評「臨月腹」妊婦フォト……分譲

「妊婦新作フォト」として児玉昌子さんの写真が分譲されて以来、安原さゆりさんの妊娠九カ月の写真が発表され、引続いて先月号では、この「臨月腹」の発売を見て、今や妊婦ブームも最高頂に達した感があります。分娩二日前に撮影された、この「臨月腹」のフォトは、まことに貴重な風俗文献として、好事家の間から珍重されております。何卒他の妊婦フォト(八カ月、九カ月)と比較検討してご研究下さい。尚、分娩五時間前に撮影された写真もある由です。で、いずれ次号あたりで発表できると思います。先月号の広告で「略号」に誤りがあり、大変ご迷惑をおかけしましたことを、お詫びいたします。ここに左記の通り訂正いたします。

臨月腹ヌード

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号「りく」

モデル 安原さゆり

お臍を中心にして、まんまるく太鼓のようにふくらんだ出産前二日の極限に膨大したお腹を、斜め正面と側面とから狙いをつけたこれこそ、まさに刻明な妊娠中の腹部をあからさまに印画に記録した全裸の妊婦フォト。

臨月腹アップ

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号「りと」

モデル 安原さゆり

物凄くふくれ上った臨月の女の腹部を、膝の上から胸部までを切りとって、大写しとし、むくれ上ったお臍、せり下した下腹部、妊娠線もあざやかな、はちきれそうな便々たるお腹をアップした。

臨月妊婦の全身

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号「りせ」

モデル 安原さゆり

出産を目前にひかえて、もうこれ以上は大きくならいませんとという皮膚もはちきれそうな巨大なお腹を、大いばりでせり出して立ち、或は、お腹をかかえてどっしりと坐したところを、全身あますところなく、つぶさにマニヤの方々に見て頂くというフォト。

臨月腹の側面

大手札 三枚一組 四〇〇円

略号「りそ」

モデル 安原さゆり

立ち上った妊婦の膨大な腹部を最もよく、特徴づけて見る事が出来るのは側面からのカメラアングルである。前面にむっくりと突き出た腹部、背後にしゃくろようにつき出された臀部、これほど妊娠中の女性の生態をありありと露出したものはないでしょう。

臨月腹の背面

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号「りも」

モデル 安原さゆり

臨月の妊婦の前面ばかりでなくその背面から狙いをつけて、臀部の有様や、背後から見た腹部のせり出し模様などを、とくとごらん頂くために、特に背面からの分もつけ加えました。

臨月垂れ腹

大手札 三枚一組 四〇〇円

略号「りみ」

モデル 安原さゆり

出産を二日後に控えて、せり出した妊婦特有の垂れ下ったお腹。八、九カ月の頃のように、只前に大きく突き出るだけではないに、この写真のように垂れ下ってくる。分間近かという事が出来る。◎以上六種の「臨月腹」の写真の分譲を出来る事が出来ました。分譲を出来る事が出来ました。提供の方々に厚くお礼申し上げます。

パイプ氏の話は終り、夏の短い夜も、既に更けて、流石にこのビルの窓辺り、シーンと静まりかえっています。
「次は又、写真で行きましょう。公約——」
ワイン氏の発案を一同はO・Kして、三々伍々八人の退屈男達は車で又、流しのタクシーで、御帰館の次第と相成ったのです。

四馬孝画

女体浣腸羞恥場面図絵決定版

第一集

A5判感光紙極鮮明焼付
四枚一組 五〇〇円 略号(かん1)

第二集

A5判感光紙極鮮明焼付
四枚一組 五〇〇円 略号(かん2)

始めての浣腸絵画として分譲を試みました「女体浣腸羞恥場面」(か6)は、大好評裡に多数の皆様の御注文を得ましたので、引き続き「女体浣腸羞恥場面」の分譲を開始、これも又、分譲をはじめて日の浅いのに拘らず、申込殺到の有様にて大いに意を強くしております。目下分譲中であり下さい。表紙裏に詳細広告してあります。

以上の二点は、いづれも浣腸責をテーマとした嗜虐的なもので、縄などをを用いて女体を拘束するのとに主眼を置いております。その後マニヤの方の要望で、縄などを一切用いない納得ずくの浣腸図を求め、声が上がり、ここに四馬氏を煩わし、完成しました。

即ち、花恥しき乙女が、美容のため、或は便秘の治療、食当りの浣腸、果てはプレイの一種として等の理由で、恥しいながら、諦め

て、やむにやまれず浣腸を施され、ドの漂うロマンチックな甘いム。従って、ここに展開される二集八葉の浣腸図は、すべて縄や鎖などをを用いず、手足は自由のままに差恥にのたう美しい姿態が望まれます。今までの「浣腸責」とは胸の奥底に迫ることでしょう。

【第一集】 四枚一組

一、保健室の女学生

体操の最中に急に腹痛を訴えた美しい女学生、早速保健室に同伴されて、保健医の手によって三十Cの浣腸器でグリセリンの浣腸を施される。セーラー服のスカートをまくり上げてズロースをずらし、真白なお尻を医師の目の前につき出して受ける浣腸……。

二、オシメカバーと浣腸
保健婦のおばさんが手にした太

い浣腸器から、情容赦もなく浣腸液を注入されたお嬢さんは、ぶっくりと可愛いお臍をのぞかせておむつを当てられ、ピンクの美しいカバーを穿かせられるのであった。恥しげに、便意を耐えているお嬢さんの可憐な表情……。

三、便秘の新妻と浣腸

もう一週間も用便に行かないという二十才の新妻、ベッドにうつ伏せになって、信賴する夫から施されるグリセリン浣腸。真紅のパンツをずり下げて、肉づきのよい真白な臀部をつき出して、懸命に力んでいる美しい顔。夫は挿入便器を今まさに排泄しようとする新妻のお尻へ当てて……。

四、セーラー服と若き医師

面長の大人びた顔立の美しい女学生の患者とたった二人きりで診察室の中で、エネマシリンジによる浣腸を実施する青年医師。消化不良による軽い腹痛であったが、彼はこの美貌の女学生に対したが、浣腸をやってみたくて仕方がなかった。ワクワクする胸を押さえてシリンジの嘴管を注入するのであった。

【第二集】 四枚一組

一、お友達にされる浣腸

外出先から帰るなり、急に腹痛を訴えるBGのお友達を自分の

部屋に連れ込んで、パンティを膝頭まで脱がせて、二〇CCの浣腸器で浣腸する短大生。シユミーズを胸までまくりあげて、浣腸の羞恥と腹痛を戦う美しくもいたましい嗜虐的なポーズと表情……。

二、秘結は美容の敵

舞台を終った美しい踊子、美容のために毎晩行う浣腸を、今日もアパートの近くの診療所の医師に施してもらったのであった。踊りできたえたムチムチとした肉づきのよいお尻をすっきりむき出しにして、医師の前に差し出せば、太いエネマの嘴管が迫ってくる……。

三、病院での浣腸

「さあ、お浣腸をしましょうね」看護婦の制服がよく似合う年若い看護婦が手に五〇CCの大きな浣腸器を持って近寄ってきた。覚悟していたことながら、自分が浣腸されると思うと、羞恥と驚きとで顔が真赤になった。それでも、スカートを下し、ズロースをめくって、ベッドの黒革の上で白いお尻をむき出しにするのだった。

四、若妻エネマの浣腸

原因不明の発熱で寝ていた新妻が恥かしそうに腹痛を訴えるので、よく聞けば便秘というのだ。早速愛用のエネマシリンジが持ち出された。洗面器になみなみと作られた石鹼液がどくどくと妻の腹の中へ注入されてゆくのだ……。

代理部分讓品案内

股間縛法悦境裸身

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(ぬこ)

モデル 絹川 文代

禪女女血斗場面写真

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号(らは)

モデル 絹川文代、大塚啓子

吊り打ち責め

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(やり)

モデル 関谷富佐子

相撲禪の女

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号(そい)

モデル 東浦ひかる

浣腸実施中

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かみ)

モデル 東浦ひかる

強制空気浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かく)

モデル 東浦ひかる

百C Cの浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かな)

モデル 東浦ひかる

浣腸責の極

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かむ)

モデル 東浦ひかる

大の字逆さ吊り

大中判 三枚一組 四〇〇円
略号(つり)

モデル 梨花悠紀子

立木宙縛り

大中判 三枚一組 四〇〇円
略号(くた)

モデル 梨花悠紀子

凄惨、乳房責

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(とい)

モデル 梨花悠紀子

妊婦の緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(にむ)

モデル 永田 節子

全裸の仕置

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(すお)

モデル 東浦ひかる

血紅女体自害

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(ひち)

モデル 大塚 啓子

女体切腹マンダラ

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(あま)

悲愴女体自決

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(ひい)

モデル 大塚 啓子

哀艶女体割腹

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(かつ)

モデル 梨花悠紀子

凄惨血紅女体立腹

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(ひさ)

モデル 大塚 啓子

バンド着用フオート

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(めい)

モデル 梨花悠紀子

バンド着用の縛り

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(めい)

モデル 梨花悠紀子

バンド着用の縛り

大手札 四枚一組 三〇〇円
略号(めは)

モデル 梨花悠紀子

女性の六尺褌

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(ろく)

モデル 大塚 啓子

ゴム・マニヤ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(こむ)

モデル 梨花悠紀子

メンス・バンド

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号(めす)

モデル 梨花悠紀子

ゴムカバー着縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かは)

モデル 大塚 啓子

脱がされたバンド

大手札 二枚一組 二五〇円
略号(めに)

モデル 梨花悠紀子

アテゴムの猿ぐつわ

大手札 二枚一組 二五〇円
略号(めほ)

モデル 梨花悠紀子

変態強盗侵入

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(こと)

モデル 絹川 文代

和洋争斗場面

大手札 六枚一組 五〇〇円
略号(らり)

モデル 田中芳代 外

裸女争斗場面

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(らし)

モデル 田中芳代 外

〔新版分譲品案内〕

○女体争斗場面十二態

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円
略号「おん」

モデル 春日ルミ、愛川悦子

○おムツの股間しぼり

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「むく」 東浦ひかる

○強烈責め、被虐の果て

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「りお」 梨花悠紀子

○豊満乳房いじめ

大手札 二枚一組 二五〇円
略号「とお」 大塚 啓子

○強制浣腸三態

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「きか」 絹川 文代

○激痛！逆エビ責め

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「きえ」 大塚 啓子

○美貌の裸身に縄目

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「きん」 絹川 文代

○腰元、吊り責め

大手札 二枚一組 二五〇円
略号「こり」 村井知可子

○腰元間諜の拷問

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こく」 村井知可子

○ゴムぐるみ人形

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こみ」 東浦ひかる

○ゴム包みの束縛

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こは」 東浦ひかる

○ゴムと女体のアップ

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こあ」 東浦ひかる

○パリスバンド前開き

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おい」 東浦ひかる

○パリスバンドの縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おは」 東浦ひかる

○パリス携帯用白バンド

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おか」 東浦ひかる

○サカエ軽便型バンド

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おた」 東浦ひかる

○パリスSSバンド

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おこ」 東浦ひかる

○バビアバンド(大型替ゴム)

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おし」 東浦ひかる

○サカエバンド(百合)

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おえ」 東浦ひかる

○珍品鼻責鼻料理

大手札 六枚一組 六〇〇円
略号「はか」 大塚 啓子

○女体格斗場面写真

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号「めと」 絹川文代、大塚啓子

○禪美と禪縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「ふし」 桜井 葉子

○浣腸器嘴管挿入

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「しか」 梨花悠紀子

○浣腸後便器使用

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「まる」 梨花悠紀子

○浣腸後おしめ使用

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「しめ」 梨花悠紀子

○浣腸排便強要

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はへ」 桜井 葉子

○後手吊り足挙げ縛り

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「うら」 東浦ひかる

○二つ折りエビ責め

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「うり」 東浦ひかる

○足挙げ椅子責め

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「うる」 東浦ひかる

○尻に喰い込む黒フン

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「とし」 東浦ひかる

○股に喰い込む黒フン

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「とひ」 東浦ひかる

○責め衣緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「せめ」 大塚 啓子

○踊り子緊縛

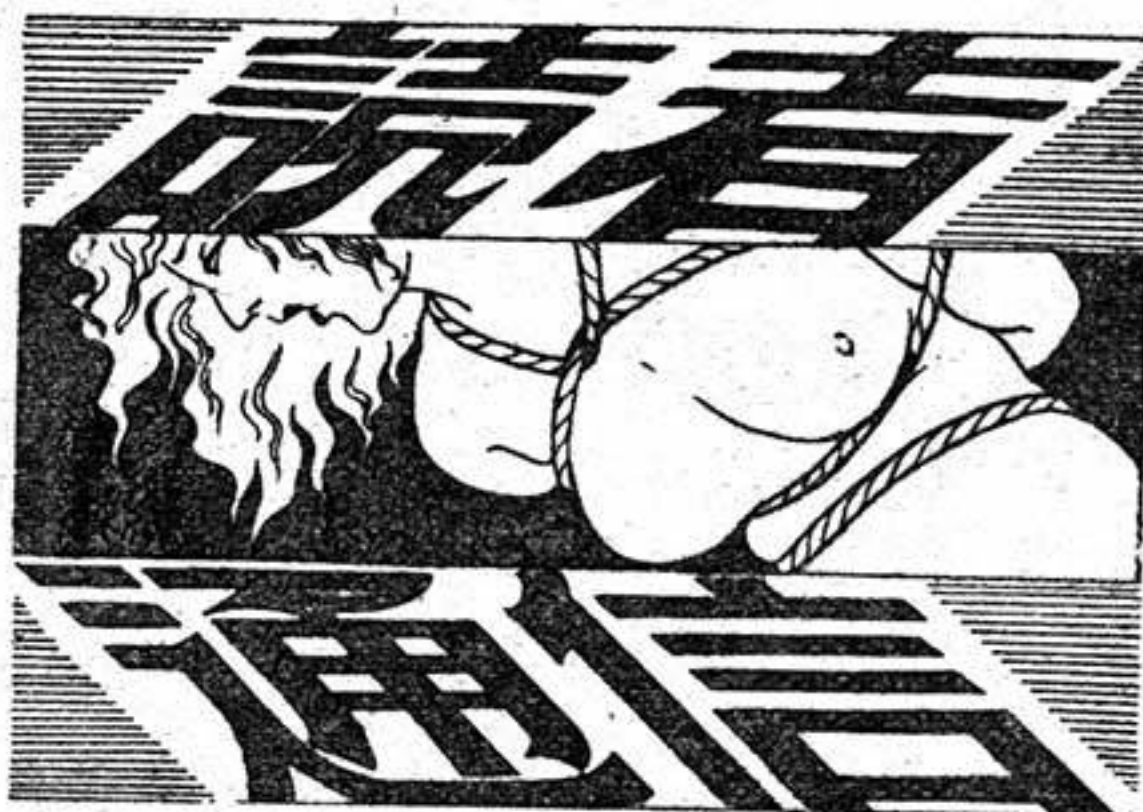
大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「りこ」 絹川 文代

○猪吊りの乙女

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「いの」 梨花悠紀子

○足拳開股責

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「あけ」 梨花悠紀子



本郷綾子様、大西良子様、佐藤良子様、そして全国のゴムマニヤの皆様、私は常に生ゴムのプリプリするおしめを愛用しております。一人寂しい夜にはゴムのおしめカバーをつけゴムのレインコートを着け、手術用のゴム手袋をはめ、ゴムの乳首をくわえ、こっそり楽しんでます。しかし同好の女性にゴム製品を一つ一つ着けて貰えたら、どんなにか楽しいことだろうと思います。私は精力は強い方で美貌も普通以上と任じております。

す。美しい同好の女性にゴムのおしめカバーをつけ、ゴムのレインコートを着せることを想像するだけでも胸がわくわくします。ゴムなくても何の人生かと思えます。近頃では野球やテニスのボール、バレーのボール等皆ゴムで出来ておればこそ公然とゴムを楽しめるためにこの種のスポーツは盛んになるのだと考えたりしています。同好のゴムマニヤの方とお医者ごっこを思いきり愛撫してみたいと思います。当方三十才の独身です。本郷、佐藤、大西、そして全国のゴムマニヤの女性の方々、結婚又は一時的プレーを目的としても結構です。次号で御返事下さい。必ず御意思に添いたいと思います。△吉沢春夫▽

厳暑の砌、愛読者の皆様御変わりありませんか読者通信の欄に初めて投書致します。北九州市に住む三十六才の男性です。どうぞよろしく。昭和二十七年から奇クを愛読しておりますから今年で丁度十一年目になります。現在百数十冊の奇クが手許にあります。さてあまり唐突ですが、九州の女性の方で腹切りに興味をお持ちの勇婦が

この通信欄に現れてくれぬのが残念で仕方がありません。どなたがおられましたら、結婚を前提の文通交際をお願いします。北九、福岡、山口、両県下の腹部に自信のある方、なるべく和服を好み戦前派の方を希みます。なぜならば話題が豊富なるがゆえ、私も戦前派で切腹犠牲者(末遂)の一人です。私の腹部には左脇から右脇腹まで、長さ二十八センチと二十二センチの切疵が二筋あります。私と同じ苦しみ悩みを持った女性の方と、これから末永くはげまし、なぐさめ合ってこの息づまるような社会の交流を生き抜こうではありませんか。僅か乍らこれから先の蓄えもあります。三十五才迄の子供のない肥満性の方、どうぞ交信して下さい。お便りお待ちしております。現代女白虎隊の如き女性ばかりのハラキリ会なるものありとこの欄で拝見しましたが、当九州もそれに負けず劣らぬ九州女子の魂をお持ちの方が多勢おられる事と存じます。どうでしょう、北九州の中心地である小倉区で奇ク同好会の結成を致しませんか、私の姉も非常に興味を持ち是非決行したいものと大乗気です。数奇咲様、芹沢

伊保様是非お便り下さい。お待ちしております。 (北九州市八田島直人▽)

○ 何年前か羽村京子さん他二三の女性の方が盛んに浣腸手記を発表しておられた頃で、もっと厚い楽しいものであった頃から愛読しておりました。一時、浣腸記事が載せられなくなった頃は、手にしておりませんでした。所が久方ぶりに今年八月号を入手して案外に浣腸の記事が多くなった事を知り、今後に期待しております。小生は、ふとした事が動機で二十年以上も浣腸を愛して来ましたが、殆んどが一人のプレーで、結婚後、子供が二人もできながら忘れることができない次第です。家内は全然浣腸に気がないので、彼女等の不在の折に独りで楽しんでおります。小生がマニヤになりましたキツカケは、ここに書くとは分長いのになりますので、又何かの折りに詳しく発表したいと思っております。実は今は亡くなられた美しい奥さんに手引きされ、皆様も一寸想っても見られないかも知れないようなプレーを二人で楽しみました。が、それもたった二カ月の短いもので、すぐお別れするように

なりました。けれども、今でも鮮明に思い出せるくらい強烈な記憶として残っております。ところで、読者通信の中に栗田宮登世子さんのお便りがありましたけれども栗田宮さんのように同好者がチームを組んでプレイするなど、本当に羨しいと思わずにはおられません、と同時に小生の教えられた又、実際にその奥さんと小生とが行ったプレイなど、教えてあげられたら、どんなに良いかと想わずにはおれません。然し読者通信で発表できるように表現するのは、何かもどかしい感もします。それ故、できる事なら、栗田宮さんと文通できるものなら、小生の知っていることもお教えしたり、又何かと小生にも参考になるようなこともお教え願えるかと思ひますので、是非文通の労を取って戴けないものかと思ひます。なお、後日小生の拙文も発表させて戴きたいと思っております。(東京の浣腸マニヤ)

○ 永い年月、皆様のいつに変わらぬ御努力に深く感謝しながら、はじめてお便りする者です。はじめて貴誌を手にした六年前も、新刊号を手にする今も変わらぬ喜びに身ぶ

るいする想いです。新しい雑誌を手にする度に味う、あの身ぶるいするような感激は、果して何に由来するものでしょうか。いつに変わらぬ魅力に私は只々、自分の人生に対して生甲斐を感じる次第です。ジュラルミン製大型トランクの中に、ぎっしりと詰め込まれた貴誌は、この年月いつも私と一緒にありました。引越しの度に苦勞しましたが、とても手放なせるものではありません。今では私の最も大切な財産の一つとなっていて、と書こうと志しましたが、生活の環境、様式、転居、出張と様々な事から実現できずにおりました。が、やっと生活のゆとりもできましたので筆をとった次第です。これからは分譲写真も漸次集めてゆきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。そして、いついつまでも変わらぬ貴誌の繁栄と又同志の諸兄姉の御健康とを祈ります。同好の方々に對して、深甚の親愛の情を抱くと共に、私もいつかは貴誌と同志のお役に立ちたいと念願しております。(神奈川八小川ノボル)

○ 妊婦写真「にふ」「には」只今

手致しました。私は以前からの妊婦ファンで秘かに胸の中に燃え上るものをしまっておりましたが、この私の秘かな夢が実現するなどは、ほんとうに夢にも考えませんでした。自分一人だけだと思っていた、この趣向が多く同類のファンを持つていたということは、全くの驚きでした。正直申し上げて、原版の傷が気になります。ですが、実に素晴らしい写真です。なんで、もっと早くお願いしなかったかと悔んでおります。モデルの方の勇氣と編集部の方の決断御努力に改めて敬意を表します。お陰で今宵また、七色に輝く別世界に身体を横たえることができました。児玉さんは、ほんとうに素晴らしい妊婦腹の持主です。ぴんと張りきってふくらんだお腹を見てみると、私は、もうたまらなくなってきました。どうか、引き続き妊婦物の分譲品を発表して下さい。う、お願い致します。(東京八柿田弘)

○ 本誌九月号の通信欄にて貴女のお便りを拝見し、失礼とは存じましたが、ペンをとりました。私もかねてより貴女のような方とお会いして、共にプレイを楽しみたい

雪崎京人提供

女相撲力闘図

B5判 感光紙焼付

(二五種×一八種の大判)

四枚一組 一〇〇〇円

略号 「す4」

女相撲ファンの愛読者の方々のために、雪崎京人氏が特に提供されました豊富な美女二人による女相撲の力闘図であります。誌上公開が許されませんので、御希望の方に焼増いたします。いずれも筋肉の躍動する迫力に満ちた傑作ばかりであります。

組んだ時、投げを打った時、倒れた時など、すべて極めて大胆なポーズばかりを選んであります。B5判の大型複製による迫力のある女相撲をお楽しみ下さい。

○ と思っております。今迄の通信欄に出されている方々は皆遠方の方ばかりで、近くにおられないものかと思っております。小生も同じ福島区に在住しているサラリーマンです。一度お会いしてお互いに心ゆくまで語り合いたいと思ひますので是非お返事下さい。(大阪市福島区八永井信行)

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接の訪問並に代金引換はお断りします。

○御注文品は注文書到着と同時に発送申し上げます。但し品切の分は暫時御猶予願います。

○御送金は、現金書留（封筒は一枚三円にて局で売っています。小為替、定額小為替（小額のときは御便利です）振替（用紙は郵便局にあります）切手代用（十円、二十円、三十円、四十円などの切手で、絶対紙にはりつけないで送り下さい）等を御利用願います。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号。フォトの類はすべて略号をお書き下さい。品名をお書きになると間違いが起り易いので、必ず略号のみ、お書き願います。

○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担させて頂きます。但し速達並に書留それに外国便は、実費御負担下さい。

○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りになられたい郵便局名（特定局でも結構）とお名前（仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備し

た方がよい）とを当方へ御連絡下さい。その御指定の局に局留としてお送りします。別に局からは通知がありませんから、局へ出向かれて、お名前をいってお受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間を過ぎると差出人へ返戻されます。

○御注文の宛先は大阪阿倍野郵便局私書函第十四号、天星社です。（今度郵便局からの通達で、私書番号を明記するよう依頼されましたので右の通りお願いします）

○尚、御注文の際、若し代品として第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一、分譲中止、品切などのとき、迅速に処理できて助かります。

○分譲品の新しいものは、毎月号の誌上で「新版案内」として発表しております。又、古くなりましてものは漸次打ち切りにします。

○御注文の宛先は必ず楷書で、はつきりとお書き願います。肩書きがございましたら、それも忘れなくお書き添え願います。

○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故に御安心下さい。封筒は用済後は漸次焼却しております。

○金額にして五千円以上のフォトをまとめて御注文の際は、金額に添じて優秀フォトのサービス品を贈呈させていただきます。

貴社のグラビアやフォトはとてもありアルだし、完全に魅せられていつもながら、編集部の皆様方の御努力には敬服しております。扱て、私は異常な「禪」愛好者です。キリキリ締め上げる時、人生の快楽と喜びを感じ、日々の活動の原動力が生まれます。貴社には優秀なモデルの方々がおられ、意を強くしています。特に女性の禪フォトには、自分に大きな希望を与えて下さいまして深く感謝致しております。唯、少々不満を申し上げますと、禪の位置が高く、縦帯の幅も広いようです。狭い程よろしく見た眼がいかによく締まっているように見えますから——。女性モデルの方（特に肉感的な足の太いモデルさんに限ります）によって、リバイバルブームの昨今、時代捕物風に仕立てて、八方から（捕縄（梯子）六尺棒四刺股（戸板等の責め道具を使って捕縛する）という構図を苦悶する表情など）とらえて戴きたいものです。着衣は長襦袢（真赤）乱れた日本髪、脇差し、禪（サラシ）のタレをひるがえして、胸をただけ帯広裸という乱れた姿から、太腿の奥から「ふんどし」の真白い縦帯がのぞくという

無惨な女捕物の妖しい修羅模様です。いずれの場面も、あくまでも「禪」を主にしてピントを合わせて下さい。それがために常に右脚か左脚が上っていないければなりません。亦は大きく両股を割っているか、台か樽の上に片脚をのせているかです。一人の女主人公（女賊か弁天小僧の役柄）に対して大勢の捕方（この写真の場合は画面に出なくてよろしいですが）がありとあらゆる攻道具を駆使しての大乱闘場面を折り込んで戴ければ、大勢がよってたかって痛めつけるとか、緊縛することによって加虐ということにもっともらしさが加えられ、苦悶する表情などとなえられれば一層迫力が出るものと思います。同封の写真（五枚）は私の変装写真ですが、何れも「弁天小僧」を演じたものです。この写真にて、着衣小道具、ポーズ等おわかり願えると存じます。「入れ墨」は肌へおかに黒墨で書きました。全くお恥かしい作品でお笑いにならない様願います。捕縄攻めの場合には、もっとたくさん（十本位）の縄を使用して、首にも締められ、がんじがらめになつて、大きく口をゆがめている表情をとり入れて下さい。六尺棒、刺

股、ツモク、梯子等のため場面も「首じめ」を主体にお願い致します。(白禪堂菅本生)

○ 奇クのファンです。先月号、即ち九月号を手にして本当に感謝に堪えません。編集部の皆様、そして大西良子様有難うございました。貴女の記事を通信サロンで読み、早速販売しているという神戸三宮そごう百貨店四階ベビー用品売場へ小生も大人用ゴムカバーを買求めに行きました。エスカレーターで四階に上り丁度中央附近、ベビー用品売場に行き、ベビー用おしめやカバーケース前へ来てドキリと私の目に焼付いたのは、そのケース前の大きな柱に色々と商品が揃ってあり、そこに黄色の大きな総ゴム製のおしめカバー大人用が押ピンで取付けられ「身体障害、不自由の方々の為に大人用ゴムカバー」とビラが下っているではありませんか。本当に私がほしかった、探し求めていたゴムカバーだけに、飛びつく思いで買いました。その前のベビー用おしめカバーケースに大人用と書いて事実三百五十円で五六枚重ねていました。私は品切れになったら困るので一度に七枚を買いました。女

店員さんは、そのゴムカバーを広げたりホックの工合をたしかめたりして、いじり乍ら色々私の間に答えてくれました。「ずい分多くの人が買いに来られるがしばらくは在庫もある、神経系の病気の人が、身体不自由病の人、産後カバーとして、湿布帯の代用に、便器の使いにくい人等がご使用になるとの事、病院関係で大量に依頼されて買いに来られる様子です。男女の別はなく共用です。以上」最初は、表面に粉が付いておりませんが充分水洗いして、二度目の使用からはゴムがキュッキュッと鳴り、歩く度に音を立て、ムチムチヌメヌメと腰全体を包んでくれる上質総ゴム製品です。ビニール製のゴワゴワしたもの等と比較にならないものです。今後毎月五枚ずつ購入するつもりです。どうぞ同好の皆様と交換会をしませんか、近在の方々は是非お試し下さい。本当に夢心地です。奇クに感謝し大にゴムファンの方々奇クに御投稿下さい。(神戸水木通HH生)

○ 奇ク愛読者の浣腸マニヤ、ゴムマニヤの皆様、今日は。奇ク、毎号手にすると第一に拝見するのが

三条春彦画

極彩色印刷

時代物責絵巻

画帖

詳細解説付 八枚 一組 三〇〇円 略号「時代」

通信欄の浣腸マニヤのゴムマニヤの方のお便りです。九月号のNS生様のように、想像され願われる方、又、自分一人さびしく楽しまれ、よいパートナーとプレイを願っている方(僕もその一人)が多いように見受けられますね。八月号の栗田宮登世子、貴女が羨しく思います。僕も貴女の仲間入りさせて下さい。僕は二十四才です。NS生様他の方に僕の人工便の仕用方をお知らせします。先ず道具として「氷のう」をあと、うどん、豆腐、コンニャクなどです。豆腐はこなごな、うどんはそのまま、又は少し切る。コンニャクは手で小さくちぎり(糸コンニャクでもよし)を「氷のう」に入れます。色々好みの浣腸をするのです。匂のない便、オシメ、オシメカバーをし楽しめる本物と同じ感覚が味わえ、すばらしいでしょう。女性には羨ましい。いつでもゴムの付きのものが使用できるから。大西良子様、貴方はすてきな方ですね。いつもヌメヌメムチムチとゴムのタッチが味わえますから。男性には女性用品は入手困難で、それでいつも、オムツカバーを使用しています。時々勤め先にもしてゆきますが、ゴムのタッチはすばらしいが、音が気になりますね。僕もパンツのかわりに貴方と同じバンドがほしくなりませんか。大西様、一枚ゆづって下さいませんか。又、栗田宮登世子様、大西良子様、一度お会いして下さいませんか。大阪、神戸でも行きますから、そして色々お話し聞かせて下さるだけでも結構です。いつの月でも毎週水曜日なら結構です。時間と解りやすい場所、二人の合図を指定して下さい。(名古屋八古田文夫V)

○ 私は妻によって眠っていた先天的なマゾの心を開眼させられ、日夜妻によって奴隷としての一年生から丸六ヶ年の間を奉仕させられ

ました。最初は世間態をはばかった妻も二年三年と過ぎると人目もさして気にしなくなり、すべての支配、命令は勿論、私の外交的な友交社交は一切禁じ、肉親にも会う事を制限したので。毎夜行く私の奉仕も浅ましさを加え、昼間妻に顔を見られると思わず目を伏せる位、恥しい浅ましい行為をさせられていた状態でしたので、命令通り、全くの孤独にされてしまいました。そして月日のたった今日、家の名義、土地の権利、その他一切を自分名義に変更し、表札迄も私の名を消し自分の名に書き変えさしました。思えば計画的な妻の行動でした。子供をつくるどころか、夜の生活はマゾの本性を見抜いた妻に只奉仕するのみで、妻は着々と奴隷にすべて準備をしていた丈の事でした。妻のいい分では只世間態に夫婦と見られるために、家の外では平凡な夫婦に見せかけてはいるが、いつまでも解らずにいるものではないので、一旦夫婦の縁を切って別れようというのです。私は一旦離婚した上で改めて話をするという妻のいう事に反対もできず、出来ない立場にまでされてしまったので、その日迄と思ひ、妻の表札に変わってしま

った自分の家を出て生家に帰りましたが、周囲よりの攻撃に耐えられなくなり、又妻のもとに行くこと待っていたとばかり、奴隷として家に入れてくれました。朝早くから夜おそくまで雑役に追われるようになつて近所の噂も耳に入りしました。それは女の思うつぽにはまった私を笑う話ばかり、子供達でさえ庭の干場で妻のはでな下着等を干す時は笑いはやすのです。妻はそれが面白いのか肌着は、わざと人目につくところへ干すように命ずるのです。夫婦でなくなった解放感と申しましようか、妻は前夜、私の口に押しこんで苦しからせた赤いパンティを干し終るのを見守っているのです。そうして昼も夜も人前でも、妻は奴隷として私を出発させたのです。私自身も毎日が楽しく、又夜の浅ましい奉仕も苦痛を感じなくなり、妻にも喜ばれる位になった六年目に身内の者達の理解？のない手によって連れもどされ、さして遠くもない妻のもと足遠くなり、孤独感にさいなまれ悩み続けて参りました。そしてはからずも奇偶を通じて奴隷募集された佐川様を知り、土地を離れた大阪で収容されたらとパッと目の前が明るくなりました

原画そのままの鮮烈なニアンス

四馬孝画 “凄絶、妊婦の切腹”

A5判感光紙極鮮明焼付 四枚一組 五〇〇円、略号「せつ4」

“妊婦と切腹” 全く濃艶きわまりないエロチシズムと凄絶なサジズムとが、渾然一体となつて迫ってくる素晴らしい重量感。原画そのままの迫力が、ぐっと胸にくる得難い傑作。発表以来申込殺到！この機会を逃すと、千載に悔を残します。分譲中にどうぞ！

一、雨、夜、妊婦自刃

横なぐりの雨が降りしきる祠の前で、うら若き町家の女、雨の中にじっと見守る一人の武士の前で、ぶっくりと膨らんで、はちきれそうになった腹部に、脇差を思いきり突き刺す。切り裂かれた臍下。縁の上に流れ落ちる血汐。美しい妊婦の男まさりの覚悟の切腹――。

二、妊んだ腰元切腹

美男の小姓と通じて妊んだ美貌の腰元、見届けるお局の前で白足袋、白装束の上半身を肌ぬぎとなり、雪よりも白い妊娠腹をさらけ出す。短刀にて大きな腹の左脇臍下から右脇腹へかけて、真一文字にきりきりと、したたかに切りさばく。溢れ出る夥しい血汐の中に、青黒い腸が

傷口からのぞいている。

三、身籠った側女

殿の突然の急死のため、気も動転した側女が、身籠って今にも産気づきそうな腹部を、白鞘の守刀で切り裂き、愛寵を蒙った殿のあとを追う覚悟の自決。白装束、白足袋姿、上半身から下腹へかけて、衣服をぬぎ去り膨満した腹部にぐざりと刺す短刀、皮膚がはじけて、溢れでる血汐と臓器――。

三、産み月女の切腹

暗夜の邸内、東屋の前で豊満な肉体の若妻が大刀の柄を地面に支えて、臍下を一突き悲壮な切腹。産み月の巨大な腹部からは、血汐が滝のように地面へ流れる。長襦袢を僅かに腰に巻いたままの裸体姿。

梨花悠紀子逆吊り写真特集

大判印刷画紙焼付 各集五枚一組 一〇〇〇円

吊り責めが一番好きだと言う
梨花悠紀子ならでは、強烈き
わまりない「逆吊り責め」の特
写です。

第一集 略号(さか)

両足首括り逆吊り

第二集 略号(させ)

逆吊りの女体折檻

第三集 略号(さと)

手足逆宙吊り

た。何卒女性の奴隷としてのみしか生きられない哀れな私をどうか採用して下さいませ。幸にして採用されましたら凡ゆる事をさせられた過去を生かして奈津子様に満足される様奉仕致します。私は黒人奴隷が終生奴隷として認められ？ているのを、うらやましく考えます。鞭打たれ犬以下の彼等を平気で売買する美しい貴婦人の絵を見てさえ血も逆流する位悩まされます。生れた時から訓練させられた一部の奴隷は白人女性の肌を美しくする為舌で奉仕させられるという話も聞いています。幸にして奴隷として採用して下さいませ、私も負けないよう奉仕致します。苦しい、辛い、情ない、恥しい等を強引にしいられ、それを忍ぶ、又

それにあまんじるのが奴隷に過せられた宿命で女性にどんな事をされても反抗心を抱く事はできません。例えば命令が不可能と思う時でも行わねばならないのです。奈津子様お一人の幸福の為に十人の奴隷百人の奴隷の犠牲も必要と考えます。その一人としてどうか心から奈津子様の奴隷になれる私を、一日も早く大阪の奴隷部屋に呼んで下さる事を信じて千秋の思いでお待ち致しております。(高知県 角真佐夫)

九月号発売と同時に入手。読者通信のトップに掲載された私の願望も空しく「花と蛇」がまたも休載になっているので失望しながら頁を繰っていったところ、最後に

至って、私は、夢を見ているのではないかと自分の目を疑うほどの感激にふるえました。数カ月ほど前に貴誌にお便りした美処女羞恥責悦虐絵巻「美しき嗜虐の生贄」の構想が私の切願したとおりに、寸分たがわず堂々と実現しているではありませんか。しかも四馬氏の麗筆によって——。絶世の美貌と、ヴィナスにも比すべき豊麗な肉体に恵まれた慎しなみ深い深窓の令嬢を、淫虐あくなき女達によって羞恥責めにするという構想は、私の十数年来抱きつづけてきた空想であり切なる願望でした。しかしその責め場面が、私自身どん欲にすぎはしないか、という危険を抱えていただけに、これはあくまでも私の空想の世界にのみ許される甘美な愉悦であって、到底、実現は不可能であろうとすっかり諦めておりました。それがいま全く夢のとおりに実現したのですから、私の喜びと感激は筆舌に尽くせません。それに最近の貴誌は臨月近い妊婦を取扱ってきたというこれも私の喜びの一つです。今月号巻頭絵に、遂にこの種のものに四馬氏が麗筆をとったことによつてこの傾向が如実に察知されます。今後の貴誌に寄せる私の期

待は更に倍加されるのみです。ただ折角の企画ではありますが、今回の妊婦浣腸二題ではまだまだ不満です。第一に妊婦が拘束されていないということです。浣腸責めはそれを強制するところに責めの意義があり、拘束のあるところに哀願と、どうにもならない羞恥があるからです。次に、今回の妊婦の容貌は二人とも難があります。九月号のみに限定してみますと、顔はエフ付きの荷物がよく、肉体と構図はクリップの惨酷がよいと思います。しかし膨れ上った懐妊のお腹の描写はさすがに四馬氏と感嘆させられました。責められる妊婦が「花と蛇」の主人公である静子令夫人(妊娠九カ月位)であり、責め場もある筋書どおりにしたらどんなに素晴らしいかと思うのは私だけでしょうか。やがて川田の子を宿し臨月近くなった静子令夫人が、葉桜組のズベ公達によつて辱かしめられるというようなことは夢でしょうか。いずれにせよ私の夢を実現して下さいました貴誌に衷心より厚くお礼を申述べさせていただきます。(東京・佐土良志)

私は今年二十五才の未婚の女

性。只今或る商店の住込女中をしていいます。元々肥えており、現在体重十七貫ほどございます。特に乳房と腹部が大きく、手足は普通です。店の若主人は一昨年大学を出たばかりの長身の美男子で独身です。去年の暮、主人の部屋を掃除して御誌を発見、それ以来主人が毎月買い求める度、部屋からさがし出して毎月楽しみながら見ております。先日、夜おそく、自分の部屋でお腹を出して鏡にうつしてしまいました。最近特に皮下脂肪がふえてきたようで、丁度妊娠七カ月ぐらいの地腹なのです。別に妊娠するような覚えはございませんが、気にして鏡にうつして見ました。その時、急に若主人が入ってきて、鏡にうつしていたお腹を見られてしまいました。若主人は、大きなお腹をしているな、妊娠しているの？と聞かれました。私は恥しさのため、顔が真赤になつてしまいました。そして秘かにお慕いしている若主人に、自分のお腹を見られ、涙が出る程うれしくなり夢のような気持ちでした。そんなことがなつてから、若主人は時々私のお腹を出させて、もっと息を吸ってふくらませて大きくしろ、などいわれます。そのうち、

私は自分でも妊娠しているような気持ちになり、丸くふくれたお腹を人に見られたくなり、見られるとうれしくなり、わざとスカートをはち切れる程大きく前に突出して見せることが、うれしくてたまりません。息をいっぱい吸って腹を突き出していると、最近一段とお腹が出てきたような気がします。若主人にそのことをいいますと、もっと大きくなれ、とたのしそうに撫でまわします。私は若主人には一緒に居られない身分ですから、若主人の赤ちゃんを妊娠することはできません。せめて臨月腹ぐらゐまで、妊娠しないで自分のお腹が大きくなれば若主人もどんなに嬉ぶか分りません。私は現在七カ月ぐらいの地腹ですが、決して妊娠はしておりません。臨月のヌードを見て私も自分のお腹と比較して早くなんとか大きくなりたいと思いますので、分譲の写真、安原さゆりさんの臨月腹全部と児玉昌子さんの妊娠写真、それに桜井葉子さんの写真を送り下さん。(仙台市八下川安子)

初めてお便りします。KKはいつ見ても心がワクワクする読物や告白でいっぱいですね。それにい

依然、好調の注文続く妊婦フォト

貴重文献

妊婦緊縛秘蔵写真

分譲中

ここに分譲いたします妊婦写真は、読者有志の提供になる二十才の美貌の若妻をモデルとしたものであります。本誌上に広告以来圧倒的なお申込が未だにあとを断ちません。膨満した便々たる腹部は正に妊婦マニヤ垂涎のものであります。緊縛マニヤにとっても、決して見逃すことの出来ない逸品といつて過言ではありません。是非一見をおすすめいたします。

○妊婦の股間縛 (九カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号 (にふ)

○妊婦の股間縛 (六カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (にと)

○妊娠八カ月の股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号 (には)

○妊娠八カ月の縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号 (にあ)

○妊娠五カ月の緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (にこ)

○妊娠前のスード縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (まさ)

○妊娠初期の

緊縛とヌード

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (ぬる)

○分娩後縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (につ)

○分娩後股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (にて)

つも読者通信で、皆様の活やくを拝見させていただいています。さい近はテレビや映画などにも、SやM的な物がよく出るようになってきました。しかしそれも助け舟が出るとかんたんに縄がほどけてしまう。ギッチリと結んである物ならば、10秒や20秒などという短時間でとけないものだと思うのですが。このような所をもう少し考えて撮っしほしいと思います。今度は僕の事です、僕はM60%、S40%ぐらいの男で色が白いので会社ではよく「白チャン」などといわれます。どなたか女性の方で「白チャン」をペット代りにして下さる方はいませんか。ただし体中にきずを作ったりする事はいやです。又は円地文子「男の銘柄」のように、S、Mを交互に行うのも、一考かと思えます。けれど、二十才から特に三十前後の女性の方でS、Mに興味のある方、少々経験があれば御指導下さい。僕は二十一才です。どうぞあなたの氣持を心にしまっておかず、すぐ手紙を書いて下さい。一度お会いしてみましよう、そうしてたがいに秘密は守りあっていきましよう。

(東京都豊島区八姉小路勝)

KK拝見しました。私は切腹、緊縛、まして浣腸などには興味なくいうなれば死刑(勿論若く美しい女性の)マニヤです。私の希望を申しますと、1、美人モデル嬢の絞首台上に立っている姿、引きづりあげられる姿。又トリックを用いてぶら下っている姿など。く「こう」を見ましてもロープや指が喉に食いこんでいないのでつまりません。2、諸嬢の首を斬るわけにはいきませんから、ギロチンに首をつっこんでいるところ、首斬台や穴の上に首をさしの上でいるところ。3、ハリツケ、火あぶり、股裂きをふくめての無残絵。物語(犯人の経歴、裁判経過などは不必要、処刑場面ズバリ)以上ひとつ「女死刑囚特集号」でも出していただけませんか。古今東西、事実の有無を問わず。打首マニヤが二、三顔を出してきたようですが、それだけではものたりません。(黒田寿)

大塚嬢の鼻料理以来の鼻責め特製写真、まことに美事なものでございました。小生の生き甲斐これに過ぎたるはございません。四馬先生その他編集部の方々の新たな御構想によって、ゾクゾクと今

辻村隆 緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 四〇〇円 モデル 大塚啓子 略号(むら)

豊富なアイデアを駆使して強烈な縛りを敢行することで定評のあるベテラン辻村隆が、全裸のモデル大塚啓子を用いて、厳しい逆エビ責めを施したときにその指導ぶりを記録した十数枚の連続フオトの中から強烈なもののみ四枚を選び出しました。

目を作ってゆく。縄尻を咽喉にまわして、髪を引っ掴んで仰向かせようとする辻村隆。痛さに呻めき喘ぐ大塚啓子の全裸の曲りよう。

三、両足首の縄は徐々に締めつけられて、まるで全身がんじがらめの大塚啓子、踏みつける辻村隆。

四、逆エビ縛りが完成して、一本棒のように荷造りされた大塚啓子の足首を持ち上げて、逆さに引き上げる辻村隆の快心作。

後の華鼻変形、グッドデザインを発表される事を期待する次第です。だって御誌には梨花、絹川両嬢の如き強力なスタッフを揃えていられる事でもあり、又、新たなスター諸嬢をして絢爛たる万葉の鼻を咲かせる才能と慈悲心を持つていらっしゃる事と思っていま

皆様今日は、お元気ですか。最近のKK誌の充実振りは特に素晴らしく、この種の雑誌では他誌にくらべ一段と知的で崇高なまでの品位を感じます。これも偏に編集

月経帯(バン)フォト

モデル 大塚 啓子

○ダイアナ・デラック

ス・バンド(黒色)

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(たい)

○ローズ・パリス・ソ

フト・ネット・バンド

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(たね)

○ローズ・パリス・バ

ンド

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(たろ)

○ローズ・パリス・バ

ンド・バンロン・フ

ラワー

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(たう)

○着脱・ダイヤナ・デ

ラックス・バンド(黒)

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(たか)

○鑑賞・ダイヤナ・デ

ラックス・バンド(黒)

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(たあ)

部の方々のご努力の賜物と感謝致しております。特に八月号巻頭の遠藤保様の「奇クの読者になるまで」を読みまして、遠藤様の実に真面目な精神生活の偉大さに胸をうたれました。私はかつて本誌上に浣腸の女王、花村恵美子様達が華々しく活躍なされていらっしやった頃からの奇クの大ファンで浣腸器にとりつかれた男です。さて読者の三十才位までの独身女性エネママニアの方にお呼びかけ致しますが、エネママニア同志結婚致しませんか。私は大阪市内で呉服店を経営する二十八才の独身男性です。私大ですが大学は出ており経済的にもまず中程度恵まれた方です。私の身長は一メートル七十体重は十六貫、色白でどちらかといえはやさ男の類ですが体は健康です。人間の性格は揺籃期に、その大部分が形成せられると申しますが、私も幼児期胃腸が弱く、よく病院で泣いて嫌がるのを看護婦さんに押さえつけられ「坊や、一寸の間だから辛抱するのよ」と優しく浣腸された経験を数度か持っております。小学校に進み、羞恥心も出来た頃無理にパンツを脱がされ、羞ずかしさに真赤に頬を染めながら看護婦さんの手で、あの

太い直腸管を挿入され腸洗滌をされた思い出も有ります。そんな関係でいまだに薬局の陳列の前を通る時など、あの浣腸器の嘴管の先太りの奇妙な曲線が目に入る時、ドキンと胸の高鳴りを覚えます。パートナーが無いので一人悶々とプレイを楽しんでおります。同傾向の方と結婚出来ればどんなに楽しい家庭が築かれるかと夢見ております。知人のすすめで今までに幾度か見合もし、暫らくおつきあいでしてその折に触れ、冗談まじりに浣腸の話をはんの一寸だけ出してみて相手の反応を調べましたが、おおむね無関心か「キタナイ」の一語に悲しくも終わってしまいました。私の場合、どちらかといえは、責めとかお仕置の形で縛ったり、つるし上げたり浣腸よりもあくまでも医療上の浣腸という形に魅力を感じ心身共に興奮を覚えます。何故ならば真白い画用紙の上にアリを這わせれば、たとえ一匹の小さなアリでも同様に黒い紙の上を這わすよりも、その存在がはっきりと強烈に見えますね。同様に「浣腸」という行為も、人間の体の中の一汚ない人に見られて恥ずかしい物を無理に出させる行為です。いわば一番残酷な行為

です。それが病気をなおす、お腹痛をなおすというやさしい目的の上に置かれて施される故、そこに限らない、ちょうどあのグリセリンのドロツとした甘い、身悶えするほどやるせない美しいそして強烈な味わいがある物だと私流に分析します。現在私はガラス製二〇cc、三〇cc、五〇cc、一〇〇ccエネマシリンジ、ガートルー一〇〇cc、二〇〇ccそれに自作自演の浣腸場面の八ミリ映画も持っております。つたない私見ですが、どうか私の意見に賛同せられた女性の方で真面目にご交際下さる方はお便り下さい。(大阪市八町田茂雄)

○ 八月号を読んで井内氏の書かれた鎌倉の思い出と堀氏の妄執は、今までのない傑作だと思います。妄執で勝った者が敗者に与える屈辱的仕打ち、女性の本格的な闘争が実によく書かれてあり、また特に私の好きだったのは井内氏のもので女の禪記事で、これだけ迫力のあったものは未だかつて前例がないといったのもよい位感動させられました。前袋に手をかけられ押え込まれてゆるんでしまう禪、海中ではぎとれてしまった禪、砂ま

みれの闘争は全く目にみえるようであり、また最初の輝をしめこんだ後前袋を叩いてみる仕種も全く輝ファンでなければ書けない傑作であったと思います。それにしてももう少し挿画が立派にならないものか、奇クの挿画は他誌に比べて数段見おとりがする気がしてなりません。グラビヤにあれだけのものを掲載し得る奇クですからもっと迫力のあるものが欲しいと思います。女性の輝姿の分譲品に私の希望をのべさせていたくださるば登場する女性のうち関谷さんが最適であり、是非とも相撲帯をしめ込んでもらって仕切り中腰の構え転倒したところ等この人の髪をみだした汗ばんだ力作を希望してやまないものです。奇クの発展を祈ります（江田島町八玉利生）

高田章子様、本日発売の九月号に、貴方の読者通信拝見、矢も楯もたまず、早速お便り申し上げます。小生これで二回目の投稿です。七月号に掲載頂きましたので小生に関する事柄は、今回は省略させて頂きます。プレイの相手をお探しの様子、小生で良ければ是非一度お願い致します。連絡先は先回の投稿の節、編集部には連絡

済ですので、お問合せ願えれば誠に幸甚に存じます。八月の一日から四日まで暑中休暇がありますので、その間に会い出来れば好都合ですが、それまでに連絡不能の場合は、十月号発売の八月二十四日の土曜日、または三十一日の午後六時、阪急梅田駅構内の喫茶にてお待ち致しております。貴女はサングラスをかけ、左手に週刊誌をお持ち下さい。私の方からお探がしして、「今何時ですか？」と何げなく声をかけますから、なおもしご都合悪い場合は、次号の読者通信欄に、適当な連絡方法をお知らせ下さい。プレイの写真も期待しております。お会いしてプレイ出来る日を、一日千秋の想いでお待ち申し上げます。（西宮市八中野義広）

奇クファンの皆様お元気ですか。私は二十一歳の青年ですが、四年程前に書店で、奇クを発見して以来、毎号毎号むさぼる様に熟読、特に本欄のマニアの方々の熱心なお手紙を楽しく拝見しています。が、同好の方々が心ゆくまでプレイを楽しまれている様子が手に取る様に想像でき、全くうらやましい次第です。私もぜひ同好の女

M写真・シリーズ

決定版ノ 十種類

足の味覚 略号（そは）
大手札 三枚一組 三〇〇円
絹川文代、杉 早夫

犬の生態 略号（そろ）
大手札 三枚一組 三〇〇円
絹川文代、杉 早夫

長靴は悶ゆ 略号（そに）
大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

灰皿の男 略号（そほ）
大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

股責の地獄 略号（まそ）
大手札 四枚一組 五〇〇円
絹川文代、高田 一

足舐の構図 略号（そへ）
大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、小沼正三

縛りの過程 略号（そと）
大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

使役の凌辱 略号（そち）
大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

なぶり者 略号（そり）
大手札 五枚一組 五〇〇円
絹川文代、高田 一

おいしい足 略号（そめ）
大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、小沼正三

性の方々と交際して見たいと思いい、ここに拙文をしたためた次第ですが、私が今悩んでいるのは自分サドなのか、マゾなのかという事です。美しいマゾ女性の方を乳房責や浣腹責や足などでやさしく責めている夢を見たかと思うと、美しきサド女性の方にムチでピシピシ打れたり浣腸責や、馬責などでヒイヒイと責められている夢を見たりといったぐあいです。本欄のマニアの方々は、私はサド、私はマゾとはっきり区別され

ていますが、数多い読者の中には私の様に両面を持った方々も案外おられるのではないのでしょうか。私の場合サド40%、マゾ60%位の様な気もしますが、現在の私は一度同好の女性の方々とプレイをして見たいという気持ちで一杯です。全国のマゾ・サド女性の方々にぜひお手紙下さい。秘密を厳守して紳士的な交際をしましょう。（横浜 山本明）

私は東京渋谷のある小さなバー

のやとわれマダムです。年令は三十才になります。ちょうど昨年の今頃、年来の持病だった慢性の痔核を思いきって手術し、すでに恥しさと痛さを経験してから、アヌスそれも同性への関心が異常なまでに強くなり、若い女性が私と同じような痛さを味わうことに強烈な興味を抱くようになりました。ちょうどそんな折某映画の大部屋女優というK子がアルバイトとして私のお店に来ました。大柄の色の白い美しい子で、お客にも大分もてていました。そのK子が四月頃から何となく体の具合が悪いので何か大義そうなのです。私が問いただしますと、はじめは中々いみませんでした、ついに痔が痛

浣腸画

四馬孝画

女学生の浣腸

A5判感光紙極鮮明焼付
二枚一組 三〇〇円略号 (せか?)

浣腸マニヤ多年の念願であった「女学生の浣腸」の絵画化がここに完成しました。花恥しきセーラー服の乙女が、黒レザーの処置台の上に、真白い尻を高々と掲げて仰臥させられ、医師と看護婦の二人から浣腸される光景。診察室の一隅で学校帰り

くて仕方がないということ。色々聞いてみると、たしかに外痔のようです。私は入院した時先生から聞かされた痔をはっておくとおそろしいことを大げさに話し、とうとう病院に行くことを説得しました。翌日つきそいということでした。K子をつれ、私の入院した専門医に参りました。大体年配の人の多い中で、若いK子のグラマーな体は待合室の中で好奇の目を集めました。やがて順番が来て呼び込まれ、一通り問診のあった後、先生が「では診察しますから、先に浣腸して下さい」というと、K子は一瞬ビクッとふるえ、しきりにいやがって帰ろうというのです。やっとなだめ、ベットにねかせ、

の制服の女高生、スカートの裾を看護婦にまくり上げられ、若い医師の手によってガラス製浣腸器によって、グリセリン浣腸をされる光景。いずれも羞恥にたえいりそうになりながらも、未知の浣腸に胸をおどらせる乙女の姿態が美しい。

私も手伝ってK子は浣腸されました。浣腸洗滌のあと、触診と肛門鏡検査で、内痔はなく注射で癒すことに決ったのです。(東京都新宿八沼田洋子)

通信欄に勇気を得て、奇誌愛読五年目にして初めてお便りを差上げます。私は二十三才のMの青年ですが、いつも夢に描いていることを思いきって発表します。私は女性に奴隷にされて思いきりいじめられたい、征服されたいと願っています。今までの様なチャンスに恵まれていませんでした。一度でもいいから、美しい女性や中年のマダム、未亡人、あらゆる層の女性から心ゆくまでいじめてもらいたいです。女王様の馬と

草責、画鋏責、ムチ責、その他あらゆる責めを喜んでお受けします。尚、女王様がお一人で心もとなく思われるのでしたら、親しいお友達(勿論女性の方)とご一緒でも結構です。私は一七三センチ、六八キロ、学生時代にラグビーをやっていましたから、相当タフなつもりです。次号に素晴らしい女王様が出現することを期待してペンをおきます。(名古屋市西区八奴隷男・三沢弘)

私の読者通信に投稿した記事に付いて新宮明夫さん始め多数の皆様が八月号にて、ご意見をのべて頂いて有がとうございました。こんなに多くの方が私と同様「女の生首」マニヤであり、ほんとうに意を強くしました。八月号グラフィックに掲載された新宮明夫さんの力作「打首の処刑」を拝見してドキッ!としました。KKに投稿された勇気と決断に敬服してしまいました。大いに私たちマニアの目を楽しませて頂きました。私も同様の写真をたくさん秘蔵しておりますが、未だに投稿する勇気がありません。私の写した写真を二、三紹介しますと、すすきヶ原にさらされた首、山中の荒れ寺の

「今月の新版フォト」

血紅使用腸露出女体切腹シリーズ

大手札印画紙焼付 十二枚一組 一〇〇〇円 略号(せい12)

【モデル 大塚啓子】
【白鞘短刀使用】

左脇腹へぐざりと鋭い短刀の刃先を突き刺し、忽ちにじみ出る血汐のワンカッへから初まり最後に、咽喉元をかき切り、左乳房の下を一抉りして絶命するに至るまでの過程を、十二枚の

梨花悠紀子 血紅切腹絶命ポーズ

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円 略号(せん)

下腹を脇差にて、真一文字にかっさばけば、傷口から一すじ二すじとたらたら流れる血汐、若痛にゆがむ表情、やがて思うままに切り果てた上、下腹を血まみれにして、仰向けに倒れる

裏にさらされた生首、ダンボール箱につめられた生首等、何れも妻をモデルして写したものです。野外のさらし首はさらし台のみ写しておき後から暗室にて引き伸ばしの際、モニタージュで作るので

連続組写真として、完成しました。臍下から右脇腹へかけて深々と切つてゆけば、腸が傷口からはみ出て外に露わとなった光景も描きました。最近とみに濃艶さを増した大塚さんの好演技と美しいプロポーションによって、見事な女体切腹シリーズをなしております。

女体。傷口を上にして、今や自虐の恍惚境の中に全身をゆだねて、静かに絶命してゆく可憐な姿態。切腹と絶命の二様を味える迫力ある作。

す。室内で写す時は黒バックの前に妻を坐らせ、首から下を黒布で覆い、妻の首にあわせた板を首にはめます。(二枚の板で造る)その板の下に柱になるものを立てる。そうして首だけ出た板の上へ

髪の毛をうまく載せる(ショートカットの髪ならカモデ毛等利用)そうして首の明るさに露出を合わせ、シャッターを切れば女のさらし首の写真が出来上がります。こんな事は写真をやられる方ならどなたもご存じだと思いますが、気の付いた儘に書き伸べてみました。新宮明夫さん、お互に写真でも交換できましたら、どんなにか素晴らしいでしょう。同好の志であつても遠く離れていてはどうにもなりません、貴方がいわれる様に協同プロでも作りプレーが出来たらと思います。野外で貴方たち夫婦と、私夫婦との二組で、貴方により私の妻が肌にくい込むように荒縄に縛られ、引き坐らせられ、貴方が大刀をふりかぶり私の妻のか細い白い首を今にも切り落とされんとする。妻は私の顔をうらめしそうに眺める……。エイト、気合いもろとも妻の首は貴方の打ち下ろす刀に、前に掘られた首穴へ、血煙り上げて落ちとゆく。今度は私が貴方の奥さんの美しい首を同じ様にしてバツサと切り落とす。二つ並んだ首の無い女の死体。やがて私たちは二つの女の首をさらし台の上にさらす。長い髪を口にくわえ、美しい二つ

の女の首が……夕日に映えて美しい。とんだ空想をして申しわけありません。またギリチンで、また鋸挽きでほんとうに協同でお互にプレーをしてそれを写真にとったら、どんなにか生き甲斐を感じ、どれだけ楽しく人生をエンジョイ出来ることか、では同好の志新宮明夫さん大いに人生を楽しみましょう。(岐阜八水野弘)

初めてお便りさせていただきました。僕は名古屋に住むM男子です。二年程前からKK誌を愛読させていたいております。僕は二十一才の社会人で、身長一六七センチ、体重五四キロです。僕は前から女性からおもちゃにされたいという気持ちでいっぱいです。馬乗りになりムチで打たれたり、尻の下で顔を圧迫されたり、ハイヒールでふんずけられたり、またどんな恥かしめを受けてもかまいません。一度でいいから、このような目にあつてみたいと思っています。どなたか、このような僕をいじめてみたいと思われる女性の方、名乗り出て下さい。すぐにでもお手紙下さい。住所は編集部の方へお聞き下さい。教えていただけると幸いです。(名古屋市八B

男V

読者の皆様お元気ですか。小学生藤山秀緒、中康弘通、渋谷四郎氏らのファンで女性切腹に深い憧れを感じる二十八才の独身の青年です。特に軍装スタイルの割腹などつきぬ欲があります。はじめは奇クで見た時は興奮に胸が高鳴り同好の方々がおられる事を知り、以来熱烈なマニアとなりました。小生女装してプレイをしてみたいと思っています。このように女性化への憧憬が強い性格です。W的な一面があるのでしよう。また絵が少し出来ますので、ひとりでポーズを想像して書いてたりします。それにしても福岡にはマニアがいなくて淋しいかぎりです。女性で切腹マニアの方ぜひお知り合いになりたいと思っています。遠近問わずお手紙下さい。詳細はそれからにします。切腹をはなれたおつき合いです。結構です。お待ちしております。(福岡市八上崎健太郎V)

始めて御手紙さし上げます。私は、読者諸兄姉とくらべると、かなり先輩で十何年になるかと思ひます。是迄の感想を述べますと、

女学生ものがなくて、さびしくて仕方がありません。私は黒いブロースをはいたシュミーズ姿の女学生を責めるのに憧れを持っています。パンティでなく昔からある黒いブロースです。グラビヤでも読みのでも結構ですが、企画願えないでしようか、これはかなり同好の方が多くに思ひます。二カ月前ですが、本屋に寄った所二人の女高生がKK誌を見ていて「こんな風に縛られたら痛いべな(米沢弁です)」と言っているのを聞いて、何だか胸がキュツとなってきました。始めての便りなので、この辺でやめますが、貴誌の発展を祈ります。(米沢H・Y生V)

私は愛読者の一人です。貴社の御努力に敬意を表します。私の最も好きなものは、女、ヌード、スポーツ(特に相撲)そして女性に羞恥を与える事等であります。これらの総合したものが結局女相撲となります。特に襦(時代おくれの下着)の中で最も特殊な相撲まわしを近代的な豊満な若い女性の肉体に強く締込ませるといふ事実は、男性の象徴的なものと女性美とを結合させて、強烈なセック

スを暗示させ剛と柔、WILD(ワイルド)とGRACE(グレイス)の巧みな結合であり、そのアンバランスは芸術的な不思議な美を構成いたします。このテーマは貴社のみなし得る企画であると存じ分譲品の相撲襦(東浦ひかる)を入手し観賞させて頂きました。大へん貴重な数少ない珍品と存じます。重ねて此の種の企画を発表させて頂きたくお願ひするものです。さて右、分譲写真につき一寸批判させて頂きます。惜しいかな相撲まわしの締め方がやや間違っている為、その効果がややマイナスであると考えます。相撲まわしの美は、一、前袋、二、横襦(ヨコミ

ツ)三、背後の結目と立みつの三点に、集約されます。右写真の前袋はマワシを四つ折りのまま前にあてている点、横ミツをハラマキの様に上の方に締めている点、結び目を背後で横ミツ全部に通していない点が間違っています。今後の撮影の御参考までに、次に正しい美しい締め方をくわしく説明します。(図解は略す)以上の通り締めれば完全であり、最も美しい形となります。全体に写真でみれば横ミツの中が広すぎる感があります。少し折り変えて巾をせまくされればよいと思います。此の次に相撲襦の撮影をされる際には、ぜひ以上の様に正確にお締め下さ

絵画 妊婦の媚態

四馬孝・画

略号「にん3」

A5判感光紙極鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

一、診察を受ける妊婦
産み月近くなった若き妊婦、全裸となって医師の前に立って全身の精密な触診を受ける羞らみのポーズ。

二、シャワーを浴びる

大きな腹部、大きな臀部、全裸となって立ったまま、シャワ

一を浴びる臨月の妊婦の見事な姿態。

三、入浴を終えて

久方ぶりの入浴にさっぱりしたグラマーの妊婦、大きなお腹をかかえて、全裸で脱衣場の鏡に美しい全身を写しているポーズ。

妊婦新作フォト

京都市在住の一読者の方の御好意により妊婦のヌードと妊婦の全裸緊縛写真の提供を得ましたので、ここに分譲写真として発表いたしました。マニヤの方々の御気に召しコレクシヨンの一端に加えていただければ幸いです。臨月腹と御比較検討下さい。

妊婦ヌード (九カ月)

大手札 三枚一組 三〇〇円

安原さゆり 略号(やま)

妊娠九カ月の便々たる大きな

い。そうすれば一そう美しいものとなりましょう。御使用のマワシは全体にやや広すぎると存じます。おそろく大学の選手用？高校生用のものが巾が女性用として最もよくないかと思ひます。小生愛用の観賞用のマワシは、高校生用のマワシを芯にして、化繊黒サテンで袋状に縫製したものを着ています。スベリが良く女性の白い肌に最も良くマッチします。本当の黒シユスの力士用マワシは高価で何十万円もしますが、この黒サテンのマワシは非常に安く出来ますから。但し黒化繊のサテンはつやのある

お腹をつき出して、全裸の腹部をあからさまにさらけ出した若妻の大胆なポーズ。一見して、その腹部の巨大さにマニヤの血を躍らすこと、必至の貴重な文献、妊婦ヌード。

妊婦しばり (九カ月)

大手札 三枚一組 三〇〇円

安原さゆり 略号(やむ)

全裸ですつくと立った妊婦を側面からキャッチしたので、見事な膨らみを見せた妊娠九カ月の丸い腹部が、ぷっくりとつき出て、いささか垂れ気味となり産み月の近いことを如実に示している。

方が美しいです。今後この女性相撲マワシの写真を分譲品に本誌グラビアにぜひ種類多く御企画下さい。(女性相撲ファン)

○ 小生東京の私立大学にかよっております学生です。四年ほど前、古本屋の店頭で貴誌の存在を知り以後、キカイ有るたびに愛読させていただき現在にいたりしました。いつも本誌のすばらしさに感動しています。私が今いる寮でもK・K誌を読んでいる人を見かけます。私ほど切実に読んでいる人は少ないようです。四年前、始めてK

・K誌を手にとり取っていろいろズツと持ちつづけてきた一つの願望があるのです。一度流腸マニアの若い美しい女の人と友達になってみたいと思うのです。私にはS的な性格が有るらしく、内気で小心なゆえに、なおいっそうそのあこがれがせんざいして悶々たる毎日です。そしてきたのです。僕は未だ女の人の肌にあざわった事も無いのです。加虐趣味というのは女性恐怖症の一種の変型だと思ひます。僕はS・Mプレイは、あくまでもプレイなのだからS・M両方が楽しめねばかちが無いと思うのです。一方的なSなぞ考えただけでゾツとします。だからK・K誌にのつて読む読み物の中でも、一番好きなのが、夫婦のプレイをあつかった物です。かあいらしい新妻が、はじらいながら愛する夫から流腸をうけ、便意に悶え、おムツをあてがわれ、涙ぐんではいせつするような文章は何度読んでも、うっとりします。そのような女の人がほんとうにこの世に存在するとしたら何と素晴らしいことでしょう。そのような人がいるとしたら僕はそばにいてだけでも満足出来ると思うのです。文通だけでもけっこうです。かならず御返事はさしあげま

す。もし、僕の下さる人がいらしたら、当出版社にお問いあわせ下さい。僕の住所を連絡して下さい。尚、僕の大好きな花坂道子さんに登場ねがって、もちろんサディズムの華やかなムードでもりあげて下さい。(東京八室井 亜砂治)

○ 高田章子様九月号で貴女の記事を拝見しました。一度御会したいと思ひます。私はまだプレイ経験はありませんが奇巧は二年前から愛読しています。頭の中では色々想像をしています。頭の中だけでは色々ば九月の月水金の六時頃国鉄福島駅の桜島方面の改札口に来て下さい。目印に週刊紙にハンケチをまいて持っていて下さい。私は目印に左手に靴べらを持っています。(大阪市東区八坂本忠男)

○ 盛夏の候となり貴誌益々御発展をお祝い申し上げます。先般は珍しい資料を、お送り願ひ有難う御座いました。風俗研究の面で思い切った新生面を開く点で貴誌の御努力に敬意を表します。特にこの方面の学問はヨーロッパでは歴史も古く、芸術家学者により開拓

され、又現在も日本より遙かに研究も進み、資料も多いのですが、其の点日本での貴誌の使命と責任は重大です。大いに頑張って暑気を飛ばして頂きたく存じ上げます
(新潟県中頸城郡八新井生)

○ 前川様お便り嬉しく拝見いたしました。私のささやかなイメージが御意に叶ったようで満足に思っております。御指摘の通りまとまった読物にまとめるのが本意であります。何分仕事、家庭等の事情があり、腰を据えて書けないのです。もし貴方の方でこれらを骨子として新しい物語にまとめていただいても結構です。小生としても大にこの際の協力を惜しみません。「武士道残酷物語」はノーカットだったように思います。貴兄の口惜しさは充分に御察しいたします。正に羊頭狗肉とはこのことでしょう。生首マニア、無惨絵マニア、裸女血斗マニアにとつてはこのところ少し誌面が沈滞しているようです。同じ無惨絵でも切腹の図も結構ですがもう少すパンチ力のあるものを願いたいものです

ね。九月号の滝れい子の女白浪の切腹図もよろしかったですが、今度は「大奥裸女血斗の果て」にあったような、相手のふんどし一つの御守殿の尻に打ちまたがって腹をかっさばく、これ又ふんどし姿もりりしい若い御守殿の図を是非共実現して欲しいものです。それから和風サロメの図も久しく待望しているものです。相手の女の生首を髪を引擱んで高く揚げ、勝名乗りをあけている赤ふんどしもありらしい裸の乙女、反り血は玉の肌を花を咲かせたように、みだれた黒髪をとめている白鉢巻、丈なすみどりの黒髪等、正に凄艶な一幅の画像を求めています。前川氏も求めておられる、ふんどし一つで渡り合った末力斗空しく首をかき落される御守殿の姿を、死斗をつづけるふんどし一本の裸の奥女達山をなして累々と斃れ伏すふんどし一つ一つの裸女の屍等を背景に是非お願いします。前川様、もし絵心をお持ちなれば、是非描いて欲しく思っています。(女斗彦)

○ 炎暑三伏の候となりました。貴

次号(十一月号)は九月二十五日に発売いたします。

社には愈々御清栄御慶び甲上げます。さて小生長らく御無沙汰致しておりますが、貴誌は毎月欠かさず愛読致しております。最近号に於ては、久方振り滝れい子先生の麗筆になります「ヘッドロック責め」諸岡堅雄氏の読物「当代女傑武勇伝」マゾフォトに於ては絹川女王様の「馬乗り責め」等胸躍る氣勢で拝見させていただきました。之を小生なりに評させていただきます。きますと滝先生のマゾ画に於てはサド女性のむっちりした太腿の間に首をはさまれているマゾ男を仰向に転がし正面からのヘッドロックをかけている場面にしていただいたら一層迫力あるものが出来ると思います。又マゾフォトに於ても絹川女王様はいつもマゾ男を四つん這いにして背中馬乗りを楽しんでおられますが、次回はもう一歩前進され思い切ってマゾ男を仰向けに転がすか又は仰向にそり反らせて、その胸の上に馬乗りになられて大いに優越感を味わってもらいたいです。又諸岡堅雄氏の読物もなかなか迫力があり小生等渴望する女性像がたくみに書かれており本当に小生等もこの様な女性にめぐり会いたい切りのプレイしていただけだと、つくづく感

じた次第です。今や夏場たけなわの候です。軽装にてサドマゾプレイをするには絶好の季節となりましたが、貴社に於かれましてはこの季節中に分譲フォト(マゾ)を大量に作成下さいまして我々マゾファンの渴望にお答え下さいます様伏してお願ひ申し上げます。サド女性モデルには自他共に許す女王絹川絹代嬢、豊満なボリュームの持主大塚啓子嬢、艶麗春日ルミ女史をわずらわしていただきブラジャー、パンティー姿、又はその上にガウン又はシミーズ姿、ブラジャーに黒タイツ、又は両肩口のあたりに君臨して思いのままに責めている場面、つまり女性の「馬乗り跨がり」のフォト集を分譲形式にて大量に作成していただき一冊を貴誌近刊号に掲載して下さいませんか。又マゾ画廊として滝れい子先生、春川ナミオ先生をわずらわしてのサド女のイメージはあくまで豊満な肢体のグラマー美女、マゾ男は体力の女性より劣れる者(身分も)であり仰向にされてその胸、両肩口に馬乗りに跨って思うままに責めさいなみ屈辱を与えていたものを分譲形式にて作成下さい。(米子八見上伏男)

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持つ」

○自分はこのような人に言えぬ変わった趣向を持つてゐるという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのような奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思う」

○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御自分の生活のこと、社会一

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるのとえ、どうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△（映画、雑誌）通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ち

三、体験

「私はこんな変わった体験をした」

○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄惨な体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変わった体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けられた事柄を、この際再び追体験して下さい。

○以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の「特集号」に一括掲載したいと思ひます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
◎締切日、毎月三十日

ちになった事項を通信下さるようお待ちしております。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポート・マニヤ通信△

新聞記事等で関心をお待ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。
◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

☆本誌御購読の葉☆

一月分（1冊）二五〇円△送共△
三月分（3冊）七〇〇円△送共△
半年分（6冊）一三〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価二〇〇円

十月号

（第十七巻第十号）
（通刊第一八二号）

昭和三十八年九月二十日 印刷

昭和三十八年十月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二

発行所 天 星 社

（振替口座大阪五〇〇四二番）

（昭和三年四月三日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上でお申込み下さい。只今、目録作成中ですの出来次第、誌上で広告いたします。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫してありますから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。